恋ヶ窪南遺跡発掘調査概報

I

—都営国分寺第8都営住宅建設に伴なう調査—

1987年3月
国分寺市遺跡調査会

集石土坑群（3・4・5・7号土坑）

3号土坑の断面

5号土坑の礫と炭化材の出土状態

序

国分寺市内には，全国でも有数な規模をほこる武蔵国分寺跡をはじめ，先土器・縄文時代の遺跡が数多く確認されています。なかでも，多摩川の支流武蔵野台地の裾部を流下する野川の源流に位置する市南東部には，ほとんどの遺跡が集中しており，このことは，名水百選「真姿の池湧水群」でも知られている豊富な湧水を臨む高台という地理的環境が，数千年の昔から先人の生活を育くむ結果を与えたといえます。

本調査地は，こうした地域の一角，恋ケ窪南遺跡と呼ばれる地域にあたり，都営住宅建て替えに伴う広範囲の埋蔵文化財調査が実施され，本報告書にまとめあげられたことは，誠に喜ばしい限りであります。特に，北側には古くから知られた恋ケ窪遺跡，南側には武蔵国分寺に関連した遺跡という場所にありながら，遺跡の概要が不明であったことなどから，今回の調査で得た貴重な資料は，今後の研究に大きく寄与すると思われます。

この調査実施にあたりましては，文化庁，東京都教育委員会，国分寺市文化財保護審議会の皆様をはじめ，調査会の団長・役員の方々にご指導をいただきながら進めてまいりました。また，調査研究に対しまして，東京都多摩南部住宅建設事務所の関係者並びに地元市民各位の深い理解と暖かいご協力がありましたことについて，紙面をお借りして厚くお礼申し上げます。

また，こうしたご協力によってこれまでに得た貴重な資料は，より多くの人に公開・活用していきたいと考えております。

終りに，本報告書が当市における古代文化を伝える貴重な資料として，すでに刊行された諸報告書とあわせて広く活用されることを願ってやみません。

昭和62年3月31日

国分寺市教育委員会教育長
（旧恋ケ窪遺跡調査会会長）
興　津　精　二

例　　言

1. 本書は，東京都国分寺市泉町１丁目に所在する都営国分寺住宅第８号住宅の建設に伴なう発掘調査報告書である。

2. 本調査は，東京都多摩南部住宅建設事務所から59年に国分寺市恋ケ窪遺跡調査会に委託された。また昭和61年度から調査会組織が改正され，継続して国分寺市遺跡調査会に委託されたものである。

3. 発掘調査は，昭和59年４月１日から60年10月31日，二次調査は61年３月26日から４月９日まで行い，報告書作成は60年11月１日から62年３月31日まで行った。

4. 発掘調査は，恋ケ窪遺跡調査会永峯光一団長のもと広瀬昭弘，実川順一が専従した。

5. 本書の執筆は，国分寺市遺跡調査会滝口宏団長と前恋ケ窪遺跡調査会永峯団長の指導のもとに調査員の協議により分担を決めた。第Ⅰ章１広瀬，２実川，第Ⅱ章１実川，２矢口孝悦，第Ⅲ章１町田勝則，２実川，矢口誠一（中期集石土坑），萩谷千明，加納金幸（遺構），町田（早期縄文土器），中山紫野（中期縄文土器），小菅将夫（石器），３上村昌男，なお編集は実川が行った。

6. 自然科学部門では次の方々から御教示を得た。

炭化材の樹種同定・千野裕道氏（東京都埋蔵文化財センター），昆虫鑑定・那須高悌氏（大阪自然史博物館），人骨鑑定・三島弘幸氏（日本大学歯学部）。

7. 集石土坑の移築と土坑断面刻ぎ取りは國學院大学青木豊・内川隆氏にお願いした。

8. 発掘から報告書作成の過程で次の方々から御教示，御協力を賜った。（敬称略）

安孫子昭二・安蒜政雄・麻生優・麻生敏隆・荒井幹夫・井口直司・市毛熙・岡本勇・岡本東三・岡村道雄・置田雅昭・小野昭・織笠昭・小田静夫・岡崎完樹・石川日出志・大谷猛・加藤定男・加藤稔・鎌田俊昭・川崎義雄・河内公夫・上条朝宏・可見通宏・小林達雄・小林重義・ＣＴキーリ・熊野正也・小出輝雄・斎藤基生・下川達彌・清水康守・柴田稔・白石浩之・鈴木忠司・鈴木敏弘・関孝一・瀬川裕市郎・佐藤攻・坂上寛一・佐藤和平・下津弘・鈴木一郎・竹内健・竹尾進・館野孝・田中和之・田中英司・戸沢充則・戸田哲也・土肥孝・中山清隆・中村由克・新里康・長崎潤一・羽鳥謙三・早川泉・樋口昇一・星龍象・堀口万吉・村松為・武笠多恵子・森山哲和・森本智子・横山裕平・新幹線赤羽地区遺跡調査会・神奈川県埋蔵文化財センター・東京都埋蔵文化財センター・富士見市考古館・武蔵台遺跡調査会

9. 発掘ならびに整理参加者（敬称略）

芦沢敦生・安藤良成・飯島耕輔・池田明隆・磯貝千恵・井手雅之・稲垣希翁・稲葉秀彰・今井雅文・江原慎二・大隈啓介・小川順・奥津輝久・尾崎勝人・風間玉枝・片岡康夫・木村伸吾・国藤俊一・毛塚了・小関功一・小林正喜・後藤靖彦・斎藤剛仁・坂本静泰・佐藤美光・

佐野満代・沢口伸二・渋谷浩章・島崎恵美子・島崎正・下沢敦・城田峯利・志和村章・鈴木親志・関美男・相馬生奈子・高洲恵三・高谷敏彦・高野隆史・竹内明城・武原孝泰・田中祥介・徳永俊夫・得丸尚人・中村昭夫・永井純子・永井誠・西澤徹・西田洵子・西山昌彦・野住滋人・羽鳥伸二・原雅喜・福島史隆・福島祥介・藤井章元・星野利浩・本荘玲子・本橋恒樹・本橋照代・森川康子・森本章・山懸素子・山根妙子・吉浜正雄・吉原誠・渡辺かおる

遺跡調査会構成員

会　長	星野亮勝	国分寺市文化財保護審議会委員長
副会長	滝口　宏	東京都文化財保護審議会会長
理　事	永峯光一	東京都文化財保護審議会委員
〃	坂詰秀一	〃
〃	大川　清	国士舘大学教授
〃	永井佳雄	東京都教育庁社会教育部文化課副主幹
〃	本多良雄	国分寺市長
〃	内野孝治	国分寺市教育委員会委員長
〃	興津精二	国分寺市教育委員会教育長
〃	坂本喜市	国分寺市社会教育委員会議長
〃	佐藤敏也	国分寺市文化財保護審議会委員
〃	松井新一	
〃	吉田　格	
〃	藤間恭助	
〃	山田　弘	国分寺市教育委員会社会教育部長
監　事	浅見正平	国分寺市社会教育委員
〃	高津喜三雄	東京都教育庁社会教育部文化課埋蔵文化財係長
事務局長	関口信良	国分寺市教育委員会文化財課長
事務局員	田倉武市	国分寺市教育委員会文化財課庶務係長
〃	鈴木　晃	国分寺市教育委員会文化財課庶務係員

調査団

調査団長	滝口　宏	東京都文化財保護審議会会長
主任調査員	有吉重蔵	国分寺市教育委員会文化財課文化財保護係長
調査員	福田信夫	国分寺市教育委員会文化財課文化財保護係員
〃	広瀬昭弘	〃
〃	上村昌男	〃
〃	実川順一	
〃	三木　弘	

本 文 目 次

序　文

例　言

Ⅰ　調査経過

1.　調査に至る経偉……1

2.　調査方法と経過……1

Ⅱ　遺跡概観

1.　調査地区の位置・立地……3

2.　層序……5

Ⅲ　遺跡各説

1.　先土器時代……6

2.　縄文時代……8

a　縄文土器の分類……11

b　早期末葉の遺構と遺物

4号住居址……11

5号住居址……17

6号住居址……20

7号住居址……23

8号住居址……24

9号住居址……27

10号住居址……29

11号住居址……31

12号住居址……33

13号住居址……34

14号住居址……34

15号住居址……35

16号住居址……35

17号住居址……36

57号土坑……36

18号住居址……45

19号住居址……46

20 号住居址 …… 48
56 号土坑 …… 48
21 号住居址 …… 54
12 号土坑 …… 55
22 号住居址 …… 57
37 号土坑 …… 58
23 号住居址 …… 60
36 号土坑 …… 60
24 号住居址 …… 63
13，14 号土坑 …… 66
26 号土坑 …… 66
27，28 号土坑 …… 66
15，16，18 号土坑 …… 71
17 号土坑 …… 71
20 号土坑 …… 74
21 号土坑 …… 74
22 号土坑 …… 74
23 号土坑 …… 76
24 号土坑 …… 76
29，30 号土坑 …… 76
35 号土坑 …… 78
38 号土坑 …… 80
39 号土坑 …… 80
31，32，33，34 号土坑 …… 80
42，43 号土坑 …… 83
44，45 号土坑 …… 83
46 号土坑 …… 83
48 号土坑 …… 85
47 号土坑 …… 85
49 号土坑 …… 86
50，51 号土坑 …… 86
52 号土坑 …… 88
53，54 号土坑 …… 88

55 号土坑 …… 90
58 号土坑 …… 90
19 号土坑 …… 90
25 号土坑 …… 91
c　早期末葉の遺構外出土土器
第 1 群…… 92
第 2 群…… 92
第 3 群…… 92
第 4 群…… 94
第 5 群…… 102
第 6 群…… 104
d　中期初頭の遺構と遺物
1 号住居址…… 106
2 号住居址…… 112
3 号住居址…… 115
1 号土坑…… 121
2 号土坑…… 122
3 号土坑…… 123
4 号土坑…… 125
5 号土坑…… 126
7 号土坑…… 128
8 号土坑…… 130
9 号土坑…… 130
6 号土坑…… 132
10 号土坑 …… 132
11 号土坑 …… 134
e　中期初頭の遺構外出土土器
第 7 群…… 136
第 8 群…… 141
第 9 群…… 141
f　遺構外出土の石器
石鏃…… 142
石匙…… 144

スクレイパー……144
楔形石器……144
磨製石斧……144
打製石斧……144
礫器……146
スタンプ形石器……148
敲石……148
磨石……148
石皿……152
石剣……154
棒状礫……154
石核……154
剥片……154
まとめ
a 縄文時代早期末葉の遺構……156
b 縄文時代中期初頭の遺構……156
c 縄文時代早期末葉の土器……157
d 縄文時代中期初頭の土器……159
e 縄文時代の石器……160
3. 奈良時代の遺物……161
引用、参考文献……162
あとがき

挿 図 目 次

第１図　調査グリッド図……2
第２図　調査範囲と発掘深度……2
第３図　遺跡の位置（国土地理院「立川・吉祥寺」　１／25000）……3
第４図　遺跡の範囲と調査地点（１／5000）……4
第５図　層位……5
第６図　先土器時代の遺物……7
第７図　検出遺構……8
第８図　遺物分布（土器，上・早期末葉，下・中期初頭）……9
第９図　遺物分布（上・石器，下・礫）……10
第10図　４号住居址（１／60）……12
第11図　４号住居址の遺物出土状態（１／60）……13
第12図　４号住居址の出土土器(1)（１／６）……13
第13図　４号住居址の出土土器(2)（１／２）……15
第14図　４号住居址の出土石器（１／３）……16
第15図　５号住居址（１／60）……17
第16図　５号住居址の遺物出土状態（１／60）……18
第17図　５号住居址の出土土器（１／２）・石器（１／３）……19
第18図　６号住居址（１／60）……20
第19図　６号住居址の遺物出土状態（１／60）……21
第20図　６号住居址の出土土器（１／２）・石器（１／３）……22
第21図　７号住居址（１／60）……23
第22図　７号住居址の遺物出土状態（１／60）……23
第23図　７号住居址の出土土器（１／２）……24
第24図　８号住居址（１／60）……25
第25図　８号住居址の遺物出土状態（１／60）……26
第26図　８号住居址の出土土器（１／２）・石器（１／３）……26
第27図　９号住居址（１／60）……27
第28図　９号住居址の遺物出土状態（１／60）……28
第29図　９号住居址の出土土器（１／２）・石器（１／３）……28
第30図　10号住居址（１／60）……29
第31図　10号居住址の遺物出土状態（１／60）……30
第32図　10号住居址の出土土器（１／２）・石器（１／３）……30
第33図　11号住居址（１／60）……32

第34図　11号居住址の遺物出土状態（1／60）……32
第35図　11号住居址の出土土器（1／2）・石器（1／3）……33
第36図　2・12～17号住居址・57号土坑（1／60）……37
第37図　12～17号居住址の遺物出土状態（1／60）……38
第38図　2・12～17号居住址の断面図（1／60）……39
第39図　12～14号居住址の出土土器（1／2）・石器（1／3）……41
第40図　12～14号居住址の出土石器(2)　土坑（1／60）……42
第41図　16．17号居住址の出土土器（1／2）・石器（1／3）……43
第42図　18号居住址（1／60）……45
第43図　19．20居住址，56号土坑の出土石器（1／3）……47
第44図　18～20号居住址，56号土坑の断面図（1／60）……49
第45図　18～20号居住址，56号土坑の遺物出土状態（1／60）……50
第46図　18号居住址の出土土器（1／2）・石器（1／3）……51
第47図　19（上）・20（下）号居住址の出土土器（1／2）・石器（1／3）……52
第48図　21号居住址・12号土坑（1／60）……54
第49図　21号居住址の遺物出土状態（1／60）……55
第50図　21号居住址の出土土器（1／2）・石器（1／3）……56
第51図　22号居住址・37号土坑（1／60）……57
第52図　22号居住址・37号土坑の遺物出土状態（1／60）……58
第53図　22号居住址の出土土器（1／2）・22号居住址・37号土坑の出土土器(1)（1／2）……59
第54図　23号居住址・36号土坑（1／60）……60
第55図　23号居住址・36号土坑の遺物出土状態（1／60）……61
第56図　23号居住址出土の出土土器（1／4）……61
第57図　23号居住址の出土土器（1／2）・23号居住址・36号土坑の出土石器（1／3）……62
第58図　24号居住址（1／60）……63
第59図　24号居住址の遺物出土状態（1／60）……64
第60図　24号居住址の出土土器（1／60）……64
第61図　24号居住址の出土土器（1／2）・石器（1／3）……65
第62図　13・14・26・27・28号土坑（1／40）……67
第63図　13・14・26・27・28号土坑の遺物出土状態（1／40）……68
第64図　13・14・26・27・28号土坑の出土土器（1／2）・13号土坑の出土土器（1／3）……70
第65図　15・16・18号土坑（上），17号土坑（下）（1／40）……72
第66図　16号土坑の出土土器（上），17号土坑の出土土器（下）（1／2）……73
第67図　20～24号土坑（上），29・30号土坑（下）（1／40）……75
第68図　22（上）・29（下）号土坑の出土土器（1／2）……77

第69図　35号土坑（1／40）……78
第70図　35号土坑出土土器（1／2）・石器（1／3）……79
第71図　38・39・31～34号土坑（1／40）……81
第72図　38（上）・39（下）号土坑出土土器（1／2）……82
第73図　42～46号土坑（1／40）……84
第74図　43号土坑の出土土器（1／2）……85
第75図　47（上）・48（下）号土坑（1／40）・47・48号土坑の出土土器（1／2）……86
第76図　49～52号土坑（1／60）……87
第77図　53～55・58・19・25号土坑（1／40）……89
第78図　遺構外の出土土器（1／2）……93
第79図　遺構外の出土土器(2)　（1／2）……95
第80図　遺構外の出土土器(3)　（1／2）……97
第81図　遺構外の出土土器(4)　（1／2）……99
第82図　遺構外の出土土器(5)　（1／2）……101
第83図　遺構外の出土土器(6)　（1／2）……103
第84図　遺構外の出土土器(7)　（1／2）……105
第85図　1号居住址（1／60）……106
第86図　1号居住址の遺物出土状態（1／60）……107
第87図　1号居住址の出土土器（1／4）……107
第88図　1号居住址の出土土器・石器(1)（1／3）……109
第89図　1号居住址の出土石器(2)（1／3）……111
第90図　2号居住址の遺物出土状態（1／60）……113
第91図　2号居住址の出土土器・石器（1／3）……114
第92図　3号居住址（1／60）……115
第93図　3号居住址の遺物出土状態（1／60）……116
第94図　3号居住址の出土土器(1)（1／4）……116
第95図　3号居住址の出土土器(2)・石器（1／3）……118
第96図　1（上）・2（下）号土坑（1／30）……121
第97図　1・2号土坑の出土土器（1／3）……122
第98図　3（上）・4（下）号土坑（1／30）……124
第99図　3・4号土坑の出土土器・石器（1／3）……125
第100図　5号土坑（1／30）……127
第101図　5号土坑の出土土器（1／3）……128
第102図　7（上）・8（下）・9（下）号土坑（1／30）……130
第103図　7号土坑土坑の出土土器（1／4・1／3）・石器（1／3）……131

第104図　6（上）・10（下）号土坑（1／30）……133
第105図　11号土坑（1／30）……134
第106図　11号土坑の出土土器（1／3）……135
第107図　遺構外の出土土器(1)（1／3）……137
第108図　遺構外の出土土器(2)（1／3）……139
第109図　遺構外の出土石器(1)（1／3）……143
第110図　遺構外の出土石器(2)（1／3）……145
第111図　遺構外の出土石器(3)（1／3）……147
第112図　遺構外の出土石器(4)（1／3）……149
第113図　遺構外の出土石器(5)（1／3）……150
第114図　遺構外の出土石器(6)（1／3）……151
第115図　遺構外の出土石器(7)（1／3）……153
第116図　遺構外の出土石器(8)（1／3）……155
第117図　奈良時代の骨蔵器（1／　）……161

図　版　目　次

巻頭図版　集石土坑群（3・4・5・7号土坑），3号土坑の断面，5号土坑の礫と炭化材出土状態

図版 1　遺跡全景，調査区上空より窓ケ窪遺跡を望む

図版 2　E～I－6グリッドの遺物出土状態，H～I－4～5グリッドの礫群

図版 3　上・4号住居址の遺物出土状態，中・4号住居址，下・4号住居址の炉

図版 4　上・5号住居址の遺物出土状態，中・5号住居址，下・5号住居址の炉

図版 5　6号住居址，6号住居址の炉，8号住居址の遺物出土状態，8号住居址，10号住居址の遺物出土状態，10号住居址

図版 6　2・12・13号住居址，12・14号住居址

図版 7　18～20号住居址，19号住居址の小石分布状態，19号住居址の小石垂直分布状態，20号住居址の小石分布状態，19号住居址の炉

図版 8　11号住居址の遺物出土状態，11号住居址，21号住居址の遺物出土状態，21号住居址，22号住居址の遺物出土状態，22号住居址

図版 9　23号住居址の遺物出土状態，23号住居址，24号住居址の遺物出土状態，24号住居址，12号土坑，15・17・18号土坑

図版 10　16号土坑の遺物出土状態，15・16号土坑，25・26号土坑，27号土坑，20・30号土坑，31・34号土坑

図版 11　35号土坑の遺物出土状態，36号土坑，37号土坑，38号土坑，52・53号土坑，54号土坑

図版 12　上・1号住居址の遺物出土状態，中・1号住居址，下・1号住居址の炉

図版 13　3号住居址，3号住居址の遺物出土状態，11号土坑断面，11号土坑の礫分布状態，3号住居址・11号土坑

図版 14　2号土坑，2号土坑断面，3～5・7号土坑，3号土坑断面

図版 15　4号土坑断面，5号土坑断面，7号土坑断面，5号土坑の炭化材出土状態，10号土坑，10号土坑断面

図版 16　6号土坑，6号土坑の炭化材出土状態，6号土坑の炭化材断面，6号土坑の完掘断面，9号土坑，9号土坑断面

図版 17　4号住居址の出土土器（1）（1／2）

図版 18　4号住居址の出土土器（2）（1／2）

図版 19　5号住居址の出土土器（1／2）

図版 20　6号住居址の出土土器（1／2），7号住居址の出土土器（1／2）

図版 21　8号住居址の出土土器（1／2），9号住居址の出土土器（1／2）

図版 22　10号住居址の　土土器（1／2），11号住居址の出土土器（1／2）
図版 23　13～14号住居址の出土土器（1／2）
図版 24　16（上）・17号住居址の出土土器（1／2），18号住居址の出土土器（1／2）
図版 25　19号住居址の出土土器（1／2），20号住居址の出土土器（1／2）
図版 26　21号住居址の出土土器（1／2）
図版 27　23号住居址の出土土器（1／2）
図版 28　24号住居址の出土土器（1／2）
図版 29　13号土坑の出土土器（1／2），14号土坑の出土土器（1）（1／2）
図版 30　14号土坑の出土土器（2）（1／2）
図版 31　16号土坑の出土土器（1／2）
図版 32　17号土坑の出土土器（1／2），22号土坑の出土土器（1／2）
図版 33　35号土坑の出土土器（1／2）
図版 34　遺構外の出土土器（1）（1／2）
図版 35　遺構外の出土土器（2）（1／2）
図版 36　遺構外の出土土器（3）（1／2）
図版 37　遺構外の出土土器（4）（1／2）
図版 38　遺構外の出土土器（5）（1／2）
図版 39　遺構外の出土土器（6）（1／2）
図版 40　38（上）・43（中）・48（下）号土坑の出土土器（1／2），1号住居址の出土土器（1）上（1／6），下（1／3）
図版 41　1号住居址の出土土器（2）（1／3），2号住居址の出土土器（1／3）
図版 42　3号住居址の出土土器（1）上（1／3），下（1／6）
図版 43　3号住居址の出土土器（2）（1／3）
図版 44　4（上）・7（下）号土坑の出土土器（1／3），遺構外の出土土器（1）（1／3）
図版 45　遺構外の出土土器（2）（1／3）
図版 46　遺構外の出土土器（3）（1／3）
図版 47　先土器時代の石器（2／3）・遺構内出土の小形石器（2／3）・4～10号住居址の出土石器（1／3）
図版 48　12～17号住居址の出土石器（1／3）
図版 49　18～24号・37号土坑の出土石器（1／3）
図版 50　1～3号住居址の出土石器（1／3）
図版 51　1～11号土坑の出土石器（1／3）
図版 52　遺構外の出土石器（1）（2／3）・遺構外の出土石器（2）（1／3）

図版 53　遺構外の出土石器（3）（1／3）
図版 54　遺構外の出土石器（4）（1／3）
図版 55　遺構外の出土石器（5）（1／3）
図版 56　集石移築作業と断面剝ぎ取り作業

Ⅰ 調 査 経 過

1. 調査に至る経緯

東京都住宅局は老朽化した都営住宅の建替えを進めており，国分寺市においても南町三丁目団地の建替え工事に伴い昭和56年より57年にかけて花沢東遺跡の発掘調査を実施した。花沢東遺跡の報告書作成作業中の昭和58年11月，東京都多摩南部住宅建設事務所より泉町一丁目第八都営住宅建替え工事における埋蔵文化財の調査についての照会と発掘届が提出された。

国分寺市教育委員会では当該地が周知の遺跡内(国分寺市№3恋ヶ窪南遺跡)にあり，周辺域の調査結果から事前調査が必要であると判断し，都住宅局と協議を進めることとなった。市教委では当時恋ヶ窪遺跡調査会で花沢東遺跡の調査に充てていた体制を引き続いて恋ヶ窪南遺跡の調査に振り向けることとし，調査方法，調査期間，所要経費等の積算を行い都住宅局と協議を重ね合意に達した。当初，昭和59年4月1日より調査に着手する予定であったが，細部調整，調査に伴う諸準備等を4月から5月にかけて行い現地調査は6月1日より開始となった。

現地調査終了後報告書作成作業中の昭和61年4月，組織改正により恋ヶ窪遺跡調査会・武蔵国分寺遺跡調査会が一本化され国分寺市遺跡調査会が発足した。事業はそのまま国分寺市遺跡調査会に継承されることとなった。

2. 調査方法と経過

発掘調査は昭和59年4月から準備を行ない，6月1日から調査を開始した。調査は当初の方法は，調査対象区約4,000㎡に4ｍ幅のトレンチを5本設定し，遺構を確認する予定であったが，電柱の移築が遅れることと，表面採集の遺物分布により，対象区全面を調査することになった。Ⅰ層の表土層は，木造家屋の基礎，電柱の撤去や舗装道路と共に重機(パワーシャベル)により削除した。表土層削除は電柱の移築に併ない8月上旬まで行なった。それに合わせて調査区北側から遺構，遺物の確認をはじめた。

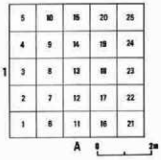
遺構の分布は調査区の北側と東側に集中し，中ほどから南東部にかけては部分的にまとまっていた。遺構に合わせて遺物の分布も同じような出土状況である。

集石土抗はインサルパック法による集石の移築と土抗断面剝ぎ取りを60年5月3日から7日にかけて行なった。

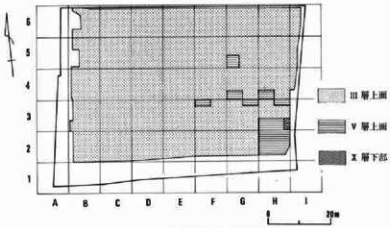
また先土器時代の確認は8月中旬から新設道路部分と，縄文時代の遺構内から出土した部分を中心にグリッドを設定してⅣ層下部まで掘り下げ，一部H－3グリッドは攪乱部を利用Ⅹ層上面まで確認したが，ローム層中では確認し得なかった。

現場の作業は，調査員2名，調査補助員3名，作業員30名の体制で実施することにした。

調査区の設定および調査方法は，事前協議により以下の原則に従って臨んだ。



第１図　調査グリッド図



第２図　調査範囲と発掘深度

発掘調査は当初トレンチによる調査であったが，上記の事によりグリッド法（第１・２図）に変えた。大グリッドは10ｍを単位とし東西にＸ軸Ａ～Ｉ，南北にＹ軸１～６と番号をつけ各区はＸ・Ｙ区で呼称する。また大グリッド内をさらに２ｍを単位として小グリッドを25に区分した。

Ⅱ層の縄文時代の遺構・遺物は調査対象区全面を調査し，Ⅲ層以下の先土器時代については，新設道路範囲を主に行ない出土状況によってはそれにとどまらない。

遺物の出土位置は全て記録する。遺物の取り上げは，大グリッドごとに図面を作成する。集石，完形に近い遺物は別に実測を行う。遺構，遺物の実測は10分の１の平面図・断面図を作成する。

集石土坑は，２つの記録方法をとった。１は土坑内平面的に掘り下げ，集石から炭化材へと平面分布を段階をおって記録する。２の１の行程に合わせて土坑より東西１ｍを拡張して半截し，集石，炭化材，焼土，土坑の掘り方の形状，焼け具合などを記録する。

また集石土坑内の礫の表面は磁北に合わせて矢印を記入する。

Ⅱ 遺 跡 概 観

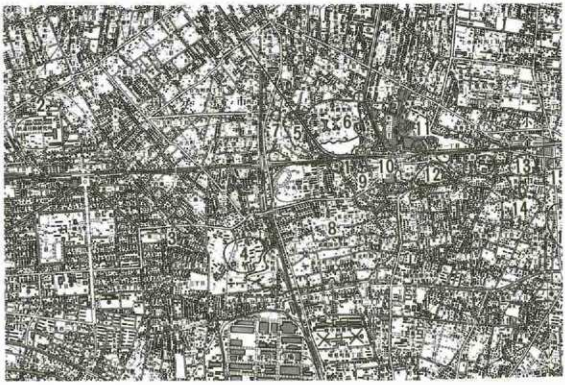
1. 調査地区の位置、立地

武蔵野台地は，多摩川，入間川，荒川に囲まれ，青梅付近から東方に広がる隆起扇状地と呼ばれている。台地の東縁には，台地の中心部に谷頭をもっている樹枝状の開析谷が多くみられる。また西縁には，このような開析谷はみられず，概して平坦な台地面が広く連なっている。

武蔵野台地の西縁には，武蔵野面と立川段丘とを区別する国分寺崖線が存在し，その崖線直下には立川段丘を浅く掘り込んだ野川が流れている。野川は国分寺市恋ヶ窪付近に水源を発し，湧水を集めて野川を形成していき世田谷付近で仙川と合流し，二子玉川園付近で多摩川に流入する延長20kmほどの川であり，多摩川の名残り川と呼ばれている。

野川の上流域の段丘崖線には崖線の凹地（ノッチまたはハケ）が多く，遺跡の多くはこの凹地を取り囲むように立地している。

本遺跡は，国分寺市泉町1丁目の武蔵野台地上に存在する。国分寺崖線を北西方向に切り込んだ恋ヶ窪谷（開析谷）を700m程入った西側の舌状台地に位置し，標高は74mである。遺跡の中心部は国鉄の中央線によって分断されているが，中央線の北側にも縄文時代の遺構が確認されていることからしてかなりの広がりをもっていると思われる。



第3図　遺跡の位置（国土地理院　立川・吉祥寺）1／25,000）

第4図　遺跡の範囲と調査地点

この恋ケ窪谷は日立中央研究所構内に10数ケ所の湧水があり，これを集めて野川の水源となっている。この谷を囲んで，北側には恋ケ窪遺跡，羽根沢（日立中央研究所構内）遺跡，東側には花沢西遺跡が在る。

2．層　　序

恋ケ窪南遺跡は武蔵野面に位置し，本台地面の基層は武蔵野礫層である。第５図はＨ３グリッドの深掘りのセクションであり，これを本遺跡の基本層序としてみていくことにしたい。

第Ⅰ層　（表土層）黒色のサクサクした耕作土層である。層厚は30～35cmである。

第Ⅱａ層　（黒色土層）スコリアを多く含み，顆粒状のボソボソした土層である。層厚は15cm前後で薄い。奈良・平安時代の遺物を含む。

第Ⅱb_1層　（黒褐色土層）赤色スコリアを少々含み，締まりと粘性が強い。20cm程の層厚をもつ。主に縄文時代の遺構・遺物が確認される。

第Ⅱb_2層　（褐色土層）ⅡからⅢ層に移行する漸移層である。層厚は15～20cmと薄いが，本遺跡では縄文時代早期末葉の遺構が本層で確認できた。

第Ⅲ層　（黄褐色軟質ローム層）いわゆるソフトロームと呼ばれる。上部に赤色スコリアを多く含む。15～25cm程の層厚をもつ。第Ⅳ層との境界は激しい凹凸を示す。先土器時代の遺物は本層以下に出土する。

第Ⅳａ層　（黄褐色硬質ローム層）本層以下が立川ローム層のハードロームである。色調は全体に赤黒色の感じを持ち，赤色スコリア粒子を含む。層厚は40cmと薄い。

第Ⅳｂ層　（明黄褐色ローム層）第Ⅳａ層より色調が明るいが，大粒の黒色スコリアを多量に含む。60～65cmの層厚をもつ。

第Ⅴ層　（暗褐色ローム層）立川ローム層第Ⅰ黒色帯（ＢＢⅠ）にあたる。粘性に富み微細なスコリアを含む。30cm程の層厚。

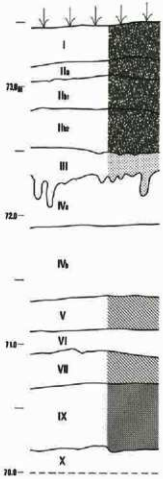
第Ⅵ層　（明黄褐色ローム層）色調は明るく，パミスを多く含む。始良丹沢火山灰（ＡＴ）を含む層準である。層厚は15cm前後。

第Ⅶ層　（暗褐色ローム層）第Ⅱ黒色帯上部（ＢＢⅡａ）にあたる。粘性に富み，パミスを若干含む。20～25cmの層厚である。

第Ⅷ層　（黄褐色ローム層）本遺跡は層としては存在せず，10cm大のブロック状で点在する。色調は明るく粘性に富む。

第Ⅸ層　（黒褐色ローム層）第Ⅱ黒色帯下部（ＢＢⅡｂ）に相当する。第Ⅶ層に比べて非常に黒く粘度も強い。層厚は50～60cmの厚さをもつ。

第Ⅹ層　（黄褐色ローム層）粘性に富み，赤色，黒色スコリアを若干含む。



第５図　層位

Ⅲ 遺 跡 各 説

恋ケ窪南遺跡は，本調査以外にも調査区西側にあたる鉄道学園の構内や，中央線を狭んだ北側からも縄文時代および奈良・平安時代の遺構・遺物が確認され，本遺跡は開析谷に突出する台地部分全面に広がりをもって立地している。

今回の調査で発見された遺構・遺物は，先土器時代・縄文時代早期末葉・中期初頭を中心とする草創期から後期初頭と奈良・平安時代である。

先土器時代はナイフ形石器，錐器，細石刃，剥片などが，縄文時代の住居址や包含層から断片的に発見されたが，ローム層中からは確認し得なかった。

縄文時代で発見された遺構は，住居址24軒，土坑類58基，礫群2ケ所である。その内訳は，

早期末・住居址21軒，土坑15基（炉穴1基)。

中期初頭・住居址3軒，集石土坑11基，礫群2ケ所。

その他明期不明の土坑32基を数える。

出土した土器は，草創期から後期初頭にいたる時期が出土し，草創期から9群に大別した。

奈良平安時代では，須恵器薬壺形骨蔵器，女瓦片，須恵器杯などである。

1. 先土器時代

本遺跡から8点の先土器時代に属する石器が出土し，すべて住居址の覆土ないしはⅡ層下部のⅡb_1，Ⅱb_2から発見されたため，発見された部分を中心にグリットを設定し，第Ⅰ黒色帯（Ⅴ層）までローム包含部を追及したが確認することはできなかった。しかし石器の形態からある程度の時期推定は可能であり，周辺遺跡での先土器時代文化層にあわせて考察してみたい。

出土石器（第6図）

ナイフ形石器（1～3）

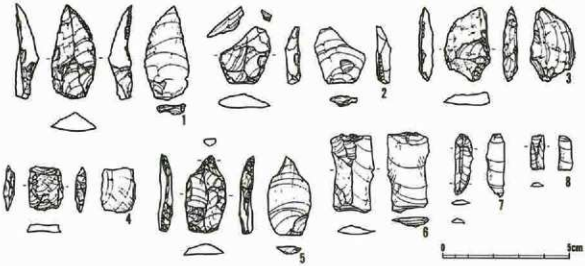
1は寸ずまり縦長剥片を素材とし，打面を残し一側辺と基部に調整加工を施した石器。石材は黒曜石であり，3.8 gの重さである。2は胴部から先端を破損しているが，1同様のナイフ形石器である。しかし，基部の調整はスクレイパーの刃部ともみられる。黒曜石を石材とし1.2 gである。3は横長で寸ずまりの剥片を素材としている。剥片の打面，打瘤を除去し面を生かし正面に加工を施してナイフ形石器としている。この石器も黒曜石を石材とした3.0 gである。

台形様石器（4）

縦長剥片を素材とし，打面と先端を除去し細かい加工を施した石器である。調整は裏面側より急角度に施されている。黒曜石製の1.0 gである。

錐 器（5）

縦長剥片の周辺を調整し剥片の先端を断面三角形状に微細な加工を施している。黒曜石を石材とし2.2 gである。



第６図　先土器時代の遺物

剝　片（６～８）

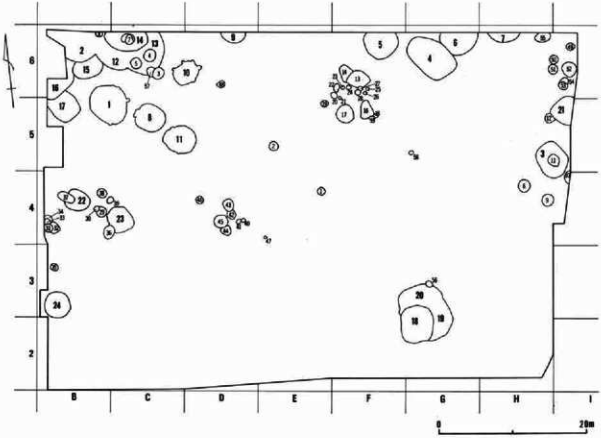
３点ともに黒曜石を石材とした縦長剝片である。６は先端部を欠損している。重量は2.0ｇである。７，８は細石刃様を呈している。特に７は右側辺に微細な調整状の剝離痕が認められる。重さは0.3ｇである。８は剝辺の上下両端を折断している。0.2ｇの重さである。

以上８点の石器は大きく１～６までと，７，８に分離することができる。前者は先土器時代の第Ⅱｂ期後半で，層位からいえばソフトローム下部からハードローム上部に相当する時期に，後者は第Ⅲ期に含まれ，ソフトローム層下部に相当する石器と考えられる。

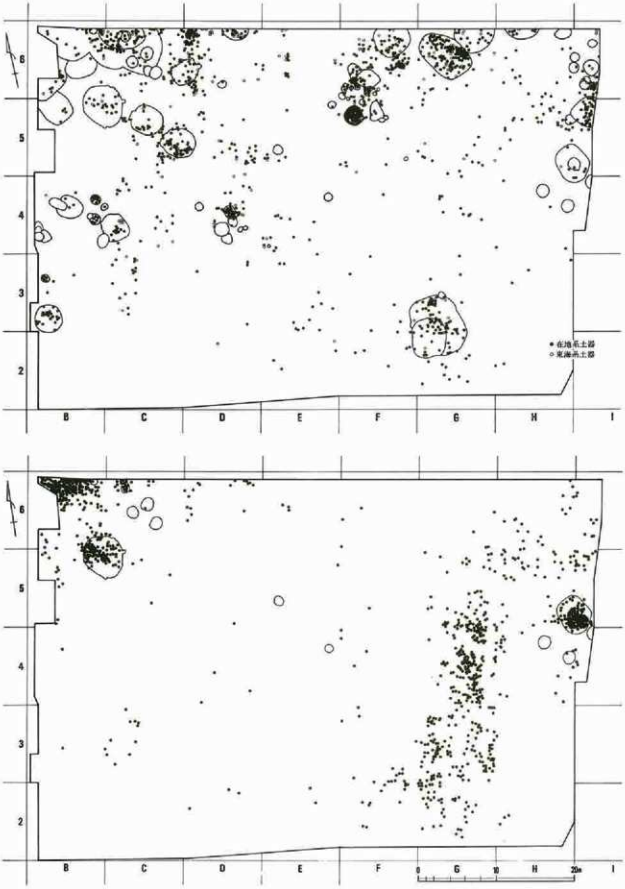
2. 縄文時代

今回の調査で確認された遺構は住居址24軒（うち早期末葉の住居址21軒，中期初頭の住居址3軒），炉穴1基，土坑46基，集石土坑11基で，大きく4つの遺構集中区域が，調査区のほぼ4隅に存在し，その立地に何らかの制約があったことを伺うことができる。

次に，縄文時代の遺物に概観することにする。早期末葉の土器は東海系のものと在地系のものに分けられ，遺構内に多く出土するほか，遺構外の調査区域内にまんべんなく散在する。中期の土器は主に五領台式の土器で住居址とその周辺部にみられるほか，調査区西部に多く出土し，東部からの出土は少ない。石器は，調査区中央部からの出土が少ないが，調査区域内に散在している。礫についてであるが，この分布は中期の住居址と集石土坑群の周辺に集中する傾向を持ち，早期末葉の遺構とその周辺から出土する礫は比較的少ない。この様な遺物分布，特に中期初頭の遺構とその周辺部から出土する多量の散礫とは密接な関係があったことを示唆していよう。



第7図　検出遺構



第８図　遺物分布（土器上・早期末葉、下・中器初頭）

第9図　遺物分布（上・石器、下・礫）

a　縄文土器の分類

恋ケ窪南遺跡より出土した縄文土器は，草創期後半から後期初頭に至るまで幅広く位置付けることができるが，本書では，これらの土器を第１群より第９群までに大別し，各々施文手法等・技術的な特徴に基づき類別を加える。ただし，類については以後の文中に委ねるものとする。

第１群　多縄文系土器群

第２群　撚糸文系土器群

第３群　条痕文系土器群・前半

第４群　条痕文系土器群・後半

第５群　東海地方の土器群

第６群　竹管文系土器群

第７群　五領ケ台式土器

第８群　加曽利Ｅ式土器

第９群　称名寺式土器

b　早期末葉の遺構と遺物

４号住居址（第10図）

〈位置〉Ｇ６グリッドに位置する。

〈形状〉住居址中央部・西部・北部を攪乱に切られている。長径7.0m，短形4.5mの楕円形を呈する住居址で，長径の方向は北西から南東に向かっている。壁面は明瞭であり，壁高は15cmである。床面は平坦であり，貼床・周溝は認められない。

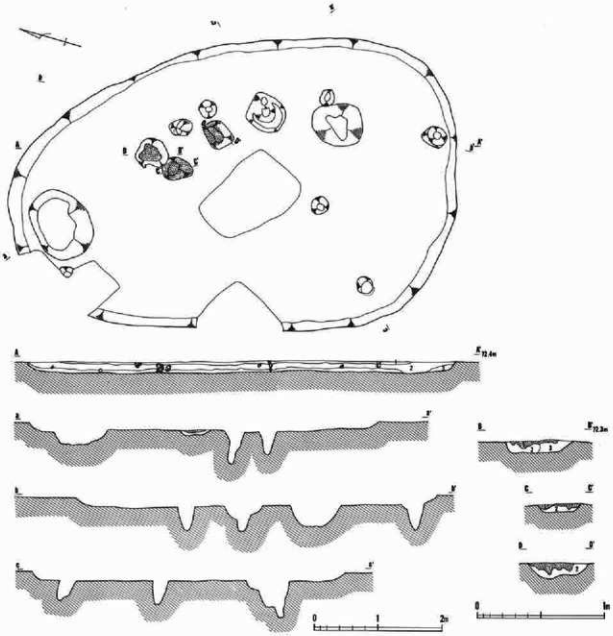
〈覆土〉３層に分類した。１層は赤色スコリアの細粒がわずかに見られる以外，内包物はほとんど観られない黒褐色土層で，しまりやや悪くパサパサした感じを持ち，粘性はんとんどみられない。２層は赤色スコリアを含むほか，炭化物がわずかに認められる黒褐色土層で，しまりがあり，粘性はほとんど見られない。３層は住居の壁際にわずかに見られる土層で，赤色スコリアが顕著に見られるほか，ロームブロックを層の下部に含み，土層の色は暗褐色となる。しまりが有り，粘性はほとんど見られない。

〈炉〉遺構中心部より北東に３基の炉が偏在して分布する。それぞれ１号炉（Ｂ－Ｂ′），２号炉（Ｃ－Ｃ′），３号炉（Ｄ－Ｄ′）とする。なお１号炉，２号炉は切り合うが，１号炉が新しいものであると思われる。１号炉は50×40(cm)の不整楕円形の炉で深さは10cmである。焼土は上層である１層に主に含まれる。２号炉は規模46×35(cm)の楕円形の炉で深さは６cmである。焼土は１，２層に若干含まれ，２層にはロームブロックが混入する。３号炉は50×40(cm)の不整楕円形の炉で，深さは10cmである。焼土粒・炭化物は上層である１層に含まれ，２層にほとんど含まれない。

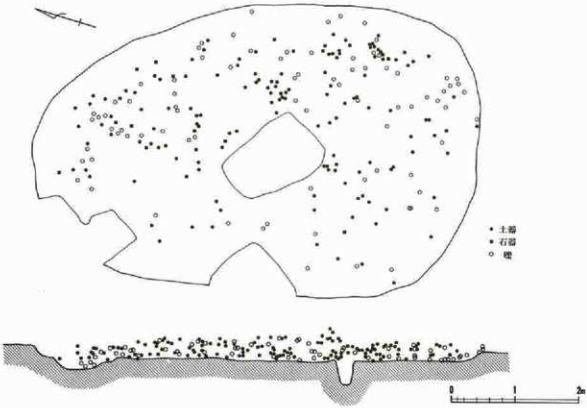
〈柱穴〉柱穴は８本確認され，深さは床面から55cmのものが１本，40cm前後のものが７本である。うち１本は径70cmの大きなピットの底面に径20cmのピットを掘り込んだ状態を呈する。

〈住居内土坑〉径80～90cmの大きなピットが２基確認された。土坑内の覆土や確認面から土器や礫が出土した。時期は遺物から繩文早期末葉と考えられるが，この土坑が住居のものであるか，あるいは住居の貯蔵穴であるかは不明である。

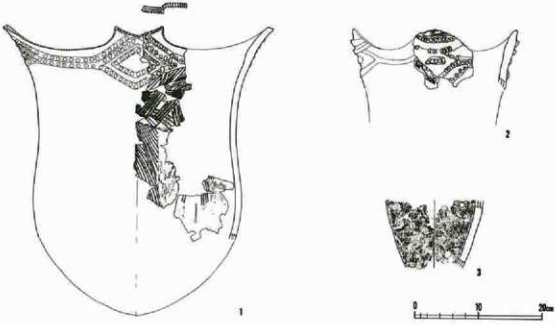
〈出土遺物〉土器片142点，石器15点，礫98点が出土した。



第10図　４号住居址（1/60）



第11図　4号住居址の遺物出土状態（1/40）

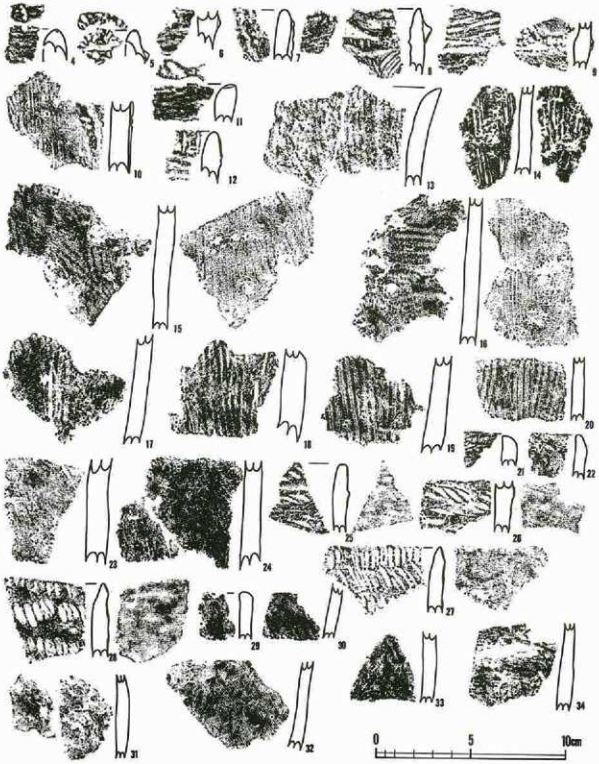


第12図　4号住居址の出土土器（1/6）

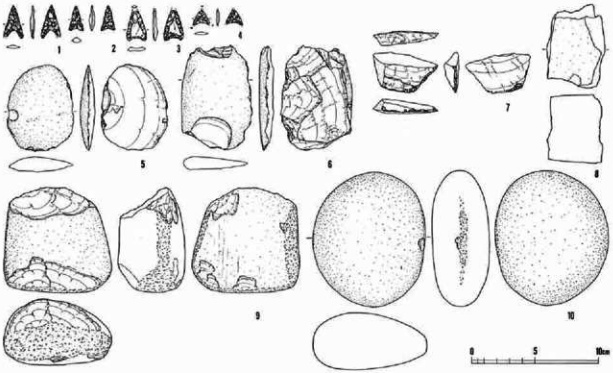
＜遺物出土状態＞（第11図）全体的に散漫な分布を示すが，住居址東側に遺物が集中する傾向を見せる。遺物の垂直分布をみると，床面直上から，確認面上まで遺物は均等に分布する様に見える。特に，住居址東部の遺物集中部分の遺物残存度は良好で，床面直上，２層からの遺物出土が多い。

土器（第12図１～３，13図４～32）

１，２，５～10は隆帯文の土器。大形破片１・２は図上復元した。１は大きな波状口縁を呈し波頂部は魚尾状，口唇上には棒状工具による押圧刻目が施される。口縁には隆帯が貼付され，波頂部直下にて菱形文を構成する。もちろん隆帯上には刺突状の押圧が加えられ，隆帯は２に比べ非常に低いもので刻目も浅く弱い。胴部には条痕を二種施し，上位には太目の，下位には細かなものを配する。内面には一律に中太の条痕を斜位に施している。胎土中には繊維を多く混じ，若干赤色の粒子を混入する。２は大波状口縁にて，やはり１同様の押圧刻目，隆帯は口縁に沿って鉢巻状に二条，以下これに連結するもの一条，さらに分枝されたＶ字状のもの二条が加わり，菱形文を構成している。隆帯上には，深く強い押圧が施され，上二条は押圧刻目風に，以下三条は刺突列点風になる。内面は横方向の条痕を残し，胎土中には多量の繊維を混じる。５は小さな波状を呈し，口唇上に押圧刻目，以下に同刻目を施す横位の隆帯を持つ土器。色調は黒褐色にて，胎土中に多量の繊維を混じる。６は１と同一個体かと思われるが，少破片ゆえ判然としない。７は右下方向に隆帯を貼付し，隆帯上には押圧刻目，口唇には不明瞭ではあるが，撚糸圧痕ないし少さな貝殻背圧痕が施されている。焼成良く，胎土中には繊維と白色の粒子を含む。８，９は口縁に山形・鋸歯状に隆帯を貼付するもので，隆帯上には浅い刻目が施されている。以下には，条痕を施し，８は格子目となるのであろうか。胎土中には多量の繊維と白色の粒子を含む。10はやはり押圧刻目を施す隆帯をもつ土器。隆帯は大きな波状を構成するのであろうが明らかでない。11～20は条痕の土器。胎土は11～14全て隆帯文の土器と類似している。11は口唇上に棒状工具による押圧刻目が施され，条痕は横位方向。12は縦位の沈線が施される。13は波状を呈し，波頂部僅かに外反する。条痕は縦位。15，16は同一個体。第４群５類Ｅに属し，胎土はザラザラとしている。17～20は同類Ｄ。いずれも太目の条にて縦位。胎土中には繊維と白色の粒子を含む。３，23，24は無文の土器。３，24は同一個体縦位の条痕を研磨したもので，胎土中には多量の繊維を混じ，第４群５類Ｅに属する。23は同類Ｄであろう。25～27は入海Ⅱ式相当の土器。25，26はおそらく同一個体であろうが，口唇直下に一条の隆帯を巡らし，これを下位より刻み込むように右下方向への刻目を施す。従来Ⅱ式に見られる波状隆帯はすでに消失し，以下のモチーフは器面を刻むような刻目のみ施される。ただし，口唇直下は一条の刻目帯が，そして口唇上には斜位の刻目が施されている。胎土中にはほとんど繊維を混ぜず，石英粒子・雲母等を含みザラザラしている。 27も同類と思われるが，器面に施される刻目のみからすれば，28に近いのかも知れない。焼成非常に良好で，赤褐色。胎土中



第13図　4号住居址の出土土器（½）



第14図　4号住居址の出土石器（⅓）

には若干の繊維と石英粒子を多量に含む。刻みは深く鋭利な工具を予想させるものである。28は石山式相当の土器。器面には口唇直下に一条，以下緩やかな波状モチーフとしての刻目帯二条が施される。胎土にはほとんど繊維を混ぜず，堅く締まっている。第4群5類Fの胎土と非常に近似している。29～34は天神山式相当の土器。いずれも無文部である。29は石英粒子多く，褐色を呈する。30～34は灰褐色を呈し，35号土坑出土土器（第70図8）と類似のものである。

石器（第14図）

石鏃4点，打製石斧3点，磨石2点，石皿1点，剝片類5点の合計15点出土している。1～4は，全て凹基の三角形の石鏃であるが，抉りの深いもの（1），浅いもの（3），小形で巾広のもの（4）とバラエティーに富む。石質は黒曜石の4以外はすべてチャートである。重量は，1から順に，0.8g，0.7g，1.2g，0.3gである。5～7は打製石斧と考えられるものである。5，6ともに，素材の剝片に両側縁に加工したのみの小形の例であり，7は刃部片であろう。石質と重量は，5．砂岩，42.2g，6．粘板岩，71.1g，7．頁岩，15.1gである。8は，閃緑岩製の石皿片である。表，裏に多少の磨滅痕が観察される。重量は，246gである。9，10は，閃緑岩製の磨石である。9は，表，裏面に磨滅痕が，周縁には細かな敲打が著しく見られ，また，被熱し赤化している。重量は，582gである。10は，両側縁に多少の敲打痕を有する。重量は，625gである。尚，3と10は，床面直上から出土している。

5号住居址（第15図）

〈位置〉Ｆ６グリッドに位置する。

＜形状＞住居址は遺構の約2/3を発掘した。規模は，径4.5ｍの円形であると推測され，壁高は15cmである。床面は平担。

〈覆土〉住居址の覆土は２層に分類される。１層は赤色スコリアを少量，炭化物を散量，漸移層であるⅡｂ層の土をブロック状に含む茶褐色土層で，しまり良好で，粘性は若干認められる。２層は赤色スコリアを含むほか，ロームブロックを含む明褐色土層で，しまりはやや良好で粘性がみられる。

＜炉＞住居址中央に位置すると推測され，規模は78×56(cm)の楕円形で，深さは10cmである。土層は３層に分類されるが，総じて焼土の検出は少なかった。

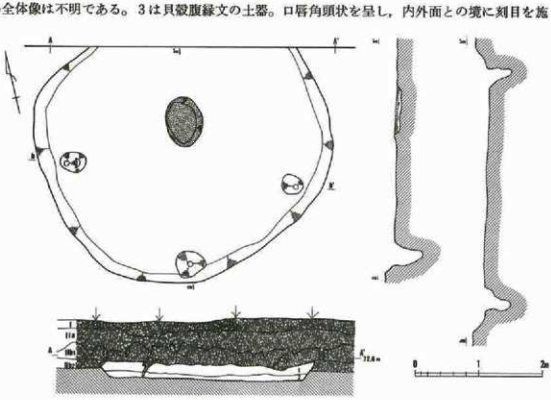
＜柱穴＞柱穴は３本のみ確認された。深さは確認面からいずれも40cm前後である。

＜出土遺物＞土器片45点，石器６点，礫87点が出土している。

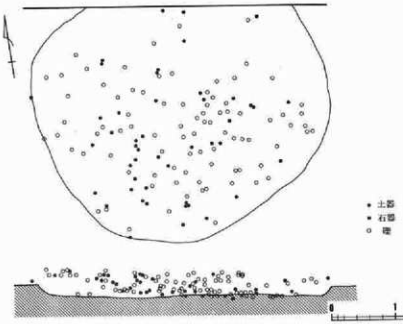
＜遺物出土状態＞（第16図）遺物の分布状態は散漫で，住居址北側の遺物は少ない。垂直分布を見ると，遺物は確認面から床面直上までみられるが，住居址西側の床面に遺物が少ない。

土器（第17図１～19）

１，２は隆帯文の土器。１は隆帯を鋸歯状に配するもので，隆帯上及び口縁よりこれを画する部位に刺突状の押圧刻目を施す。13号土坑出土土器（第64図１～３）と近似する同類土器である。胎土中には多くの繊維と白色の粒子を混入する。２も同様の土器であるが，小破片のため全体像は不明である。３は貝殻腹縁文の土器。口唇角頭状を呈し，内外面との境に刻目を施



第15図　５号住居址（1/60）

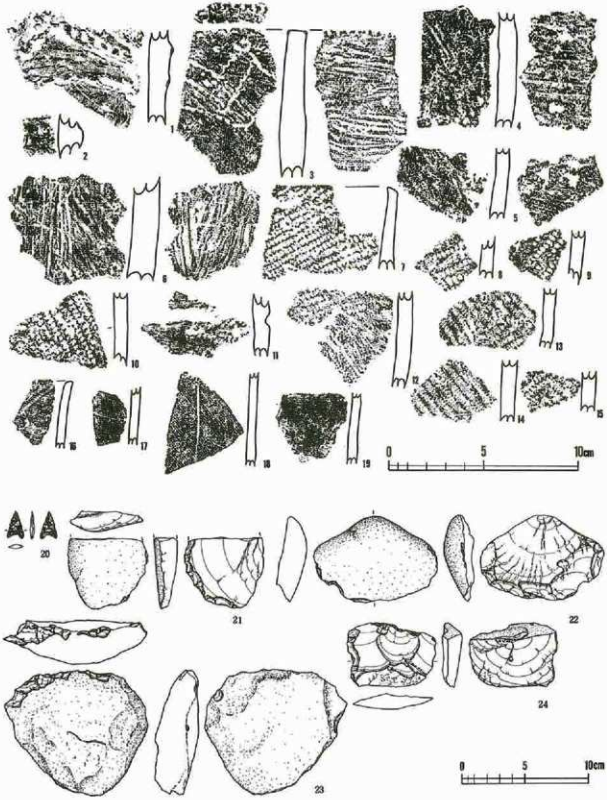


第16図　5号住居址の遺物出土状態（1/20）

し，器面には地に横位ないし右下方向への条痕を施し，内面ではこれを明瞭に留める。外面には三段に連なる山形文が配される。胎土中には繊維を余り混ぜず，ザラザラした感じである。4，5は同類の胴下部破片。6は条痕の土器。内外面とも条の太い縦位の条痕を施すもので，胎土中には繊維を混じ，非常に軽い土器である。所属時期を本遺跡一連の土器群とは異にすると思われる，色調は黄褐色。7～15は縄文を施す土器。7は口縁部破片にて口唇外削ぎ状で，口唇部器面はＬＲの原体を施す。胎土中には多量の繊維と白色の粒子を含む。8～12はこれと同一個体。13～15は非常に密な節で，一見絡条体圧痕と見間違う原体を用い，これを羽状に重ねるもの。胎土中にはやはり多量の繊維を混じ，同じ黒褐色の前者に比してまっ黒といった感じを受ける。16～19は天神山式相当の土器。16は口縁部破片で，口唇には撚糸ないし小さな貝殻背圧痕と思われる押捺が施されるもの。口縁には波状文モチーフが施される。23号住居址出土土器（第56図１）と同じモチーフである。17～19は胴部破片，18には縦位の沈線が一条認められる。

石器（第17図20～24）

石鏃，打製石斧，礫器，加工痕のある剥片各１点，剥・破片２点の合計６点が出土している。20はチャート製で凹基の三角形鏃であり，重量は，0.7gである。21は，砂岩製で打製石斧の刃部片である。裏面の刃部から片側縁のみに粗く加工され，製作途上で欠損したと考えられる。重量は，66.3ｇである。22は，横長剥片の裏面に荒い加工で，刃部を作り出した石器であり，重量は，157.2gと軽いが，礫器の小形のものとも考えられる。石質はホルンフェルスである。23は，安山岩製の両刃の礫器である。素材の礫の一側辺をあまり加工することなく利用している。重量は，441gである。24は，ホルンフェルスの剥片である。重量は56.2ｇである。尚，１，３，４は，床面直上から出土している。



第17図　5号住居址の出土土器（½）・石器（⅓）

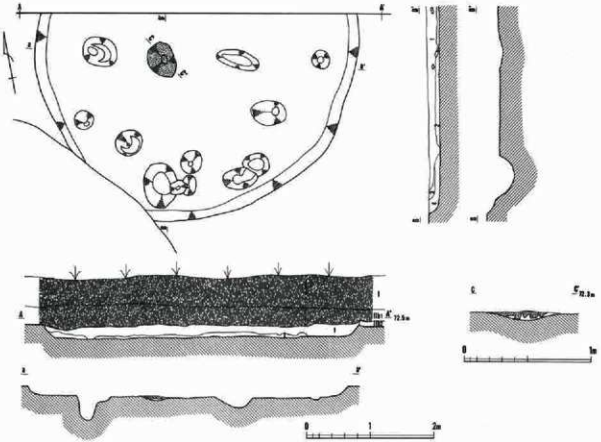
6号住居址（第18図）

〈位置〉Ｇ６グリッドに位置する。

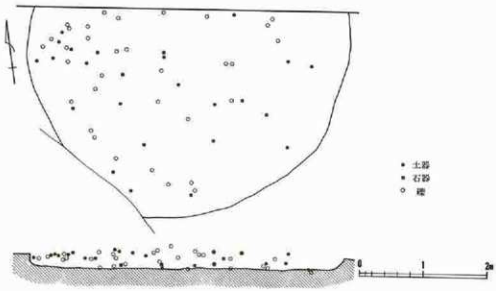
〈形状〉遺構は，４号住居址に切られることが，確認面上で判断されている。住居址の北側は今回の調査区域外のため未発掘であり，平面形の詳細は不明だが，円形若しくは楕円形を呈するものと思われる。規模は東西5.1m，壁面は明瞭で，壁高は15cm。床面は平坦で，貼床，周溝は認められない。

〈覆土〉土層は４層に分類される。１層は赤色スコリア・焼土粒子と若干含む茶褐色土層で，しまり良好で，粘性は認められない。２層は赤色スコリアが微量みられる褐色土層で，しまりは１層より更に良好で，粘性はほとんどみられない。１，２層が遺構内全体に広がりを見せるのに対し，３層は広がりが限定され，４層は壁際の一部に広がる。３層は混入物がほとんど見出せず，赤色スコリアがわずかにみられる程度である暗褐色土で，しまり良好で，粘性はほとんどみられない。４層は赤色スコリア，ソフトロームの混入が多い明褐色で，しまりはやや悪く，粘性はほとんどみられない。

〈炉〉遺構中心部よりやや西に１基が確認された。規模は55×42(cm)の楕円形で深さは７cmである。焼土は主として上層に含まれ，層中に全体的に散らばる。



第18図　６号住居址（1/60）



第19図　6号住居址の遺物出土状態（1/60）

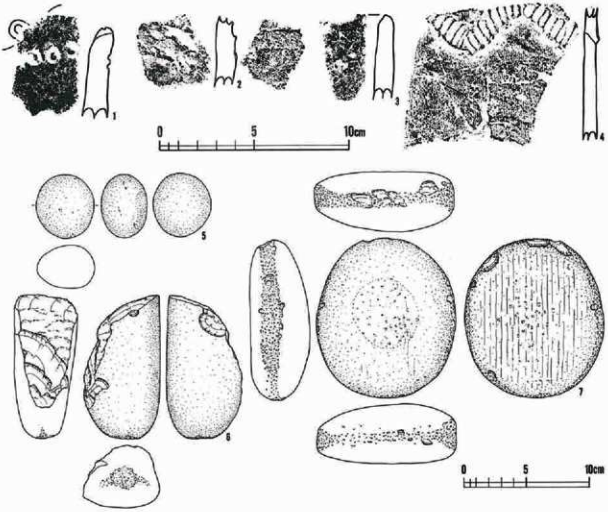
〈柱穴〉ピットは12基確認されたが，うち2基は，柱穴とは考えにくい。住居址南側に，ピット6基が集中し，住居の構造と関係があったと考えられよう。深さは深いもので65cm，浅いもので10cmである。

〈出土遺物〉土器片21点，石器4点，礫34点が出土した。

〈遺物出土状態〉（第19図）遺物は散漫に分布するが，やや住居址の西半部からの遺物の出土が多い。垂直分布は，石器は床面直上・2層に含まれるものが大部分であるが，土器は1層上部，Ⅱb層に含まれるものが顕著である。なお炉の直上から磨石が出土している。

土器（第20図1～4）

1は刺突文を施す土器。小波状口縁にて器面は良好に研磨され，以後円形竹管状工具による刺突文を口縁及び口唇部に押捺する。果して同じ刺突文が，波頂部にも加えられていたものか，憶測を許すところではないが，少なくとも波底部には施されていたらしい。胎土中には多量の繊維を混じ，焼成良好・非常に堅緻である。2は隆帯文を持つ土器で，ほとんど繊維を混じない。隆帯は緩やかな波状（？）を呈し，押捺が加えられるが，以後の研磨によって刻目は潰れている。胎土中には黒色の輝石を多量に含み，第4群5類Fの土器と良く似た性状を示している。3は無文の土器で，口唇は内外面に施される撫でにより尖っている。胎土は同群4類Eと同質と思われ砂っぽい感じを受ける。4は入海Ⅱ式に相当する土器。低い隆帯を波状に巡らし，まるでこれを器面に押し付けるかのように押捺する。内外面とも良好に研磨され，胎土中には繊維をほとんど混ぜず，代って石英粒子を多量に含んでいる。



第20図　6号住居址の出土土器（½）・石器（⅓）

石器（第20図5～7）

敲石1点，磨石2点，剥片1点の合計4点が出土している。

5は，小形で球形をした砂岩製の磨石である。重量は111.3gである。6は，細長い閃緑岩の礫の一端を使用した敲石であり，上半部を欠損する。重量は，480gである。7は，閃緑岩の扁平な円礫を用いた磨石である。表裏面に磨滅痕が著しく見られ，中央には，細かな敲打痕を，また，全周縁にも著しい敲打が観察される。重量は，978gである。尚，5，6は，床面直上から出土している。

7号住居址（第21図）

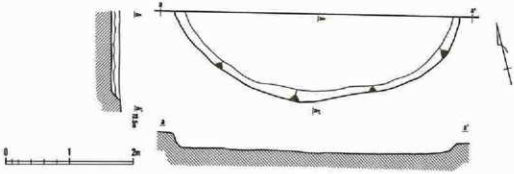
〈位置〉Ｈ６グリッドに位置する。

〈形状〉遺構の約3/4程は調査区域外であるため住居址の詳しい形状，規模は不明である。形状は楕円形若しくは円形であると推測でき，東西の径は５ｍ前後と推測されよう。壁面は明瞭で，壁高は10cm。床面は平坦で，貼床，周溝，炉址，柱穴・ピットは認められなかった。

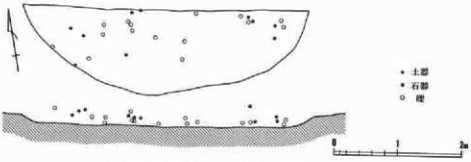
〈覆土〉上下２層に分類される。１層はⅡａ層より明るい黒褐色土層であるが，基本的にはⅡａ層の土壌と同じである。赤色スコリアを少量含むほか，炭化物を微量含まれる。または若干，粘性も認められる。２層は，ロームブロック，ローム粒子を多量含む茶褐色土層で，赤色スコリアを少量，炭化物は微量含む。しまりは若干認められ，粘性に富んでいる。

〈出土遺物〉土器片９点，石器は礫岩の砕片１点（重量は0.9ｇ），礫15点が出土している。

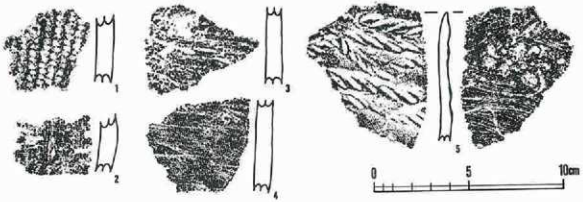
＜遺物出土状態＞（第22図）遺構の発掘区域が狭く，遺物数は少ないが，遺物は東側と西側に集中する傾向がみられる。垂直分布をみると土器・石器は覆土の上層・確認面上に浮いた状態で出土し，礫は覆土下層・床面直上に出土する傾向を見せる。



第21図　7号住居址（1/60）



第22図　7号住居址の遺物出土状態（1/60）



第23図　7号住居址の出土土器（½）

土器（第23図１～５）

１は縄文の施される土器。単節ＬＲの原体を転がし，内面は丁寧に撫でられる。胎土中には多量の繊維を混じるが他の混入物は見当たらない，赤褐色。２～４は無文部。２，３とも外面研磨され，胎土中には多量の繊維と白色の粒子を混入する。３は第４群５類Ｄと同質で内外とも良好に研磨される。焼成良好にて褐色を呈する。４は器面良好に研磨され，５と胎土を同じくする，同群であろうか。５は入海Ⅰ式に相当すると考えられる土器。緩やかな波状を呈するようで，断面半円形の底平な隆帯を五条巡らし，上位より第三条目，すなわち二条目と四条目の施文空間を波状文によって充填させる。波状文は，他の隆帯に比べいっそう低く，隆帯上に施される刻目も，むしろ器面への刺突のようである。第一条では左下がりに，他は全て右下がりに施されている。内面は横位の条痕と指頭による圧痕を留める。胎土中には繊維・白色粒子・石英粒子等を混入している。非常に堅緻。

８号住居址（第24図）

〈位置〉Ｃ５，Ｃ６グリッドに位置する。

〈形状〉住居址は３か所攪乱を受けている。規模4.0×4.0（m）の円形を呈し，壁高は確認面から５㎝と低く，壁面の立ちあがりは不明瞭である。床面は平坦であり，貼床・周溝は認められない。

〈覆土〉２層に分類される。１層は，赤色スコリアを少量，炭化物を若干含む暗褐色土層で，部分的に褐色土が混入する。２層は，赤色スコリアを多量，炭化物を微量含む褐色土層で，ソフトロームを部分的に含むため，もやもやとしている。しまり良好で，粘性は若干認められる。る。

〈炉〉住居址のほぼ中央に位置し，規模は78×58㎝で，深さは８㎝の楕円形で，焼土は少なかったが，主に上層に含まれている。

<柱穴>９基確認され，うち３本は床面からの深さは50～35cmで，主柱穴ではないかと考えられる。残る６基は深さ10～20程である。

〈出土遺物〉土器片14点，石器４点，礫177点が出土している。

〈遺物出土状態〉（第25図）遺物は礫が多く，土器・石器は少ない。平面分布は全体的に散漫な分布を見せるが，住居址中央部に集中する傾向がみられる。垂直分布は，確認面からの壁高が低かったため，確認面上に浮いた状態を見せる。床面直上の遺物は少ない。

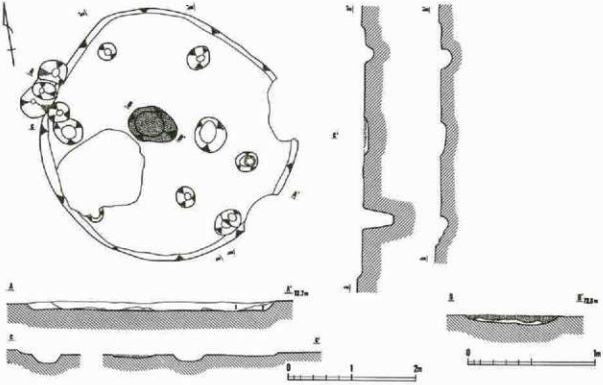
土器（第26図１～６）

１，２は，口唇に棒状工具による刻みが施されている土器で，胎土中には繊維の混入が認められる。器面に成形時の指頭圧痕と，これを覆う右下方向への弱い条痕が看取される。３～６は条痕の施される土器。３～５は胎土中に繊維を混じ，緻密で焼成良好。６は第４群５類Ｃに類似するもので，条痕は乱れて施されている。内面には横方向の条痕を留め，胎土中には，ほとんど繊維を混じていない。色調は明るい茶褐色。

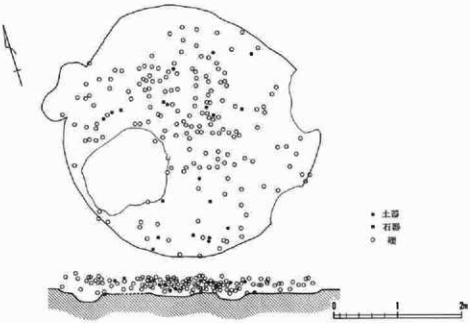
石器（第26図７）

磨石，石核各１点，剥片２点の合計４点が出土している。

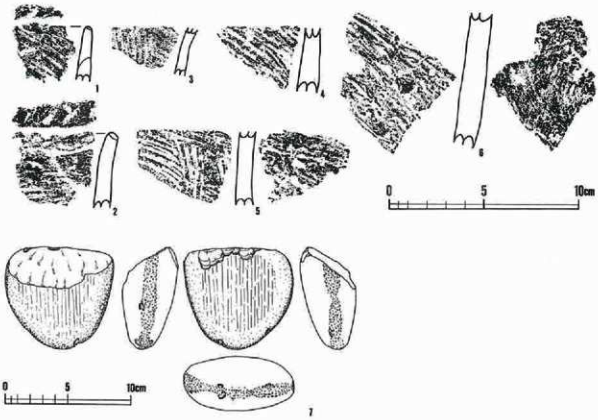
７は，扁平な閃緑岩の礫を用いた磨石で，表裏両面に著しい磨滅痕，周縁には細かな敲打痕が観察される。また欠損ののちも，磨石として用いられ，その縁辺を打ち切る様な作業にも使用している。被熱しており，重量は394ｇである。



第24図　８号住居址（1/60）



第25図　8号住居址の遺物出土状態（1/40）



第26図　8号住居址の出土土器（1/2）・石器（1/3）

9号住居址（第27図）

〈位置〉Ｄ６グリッドに位置する。

〈形状〉遺構全体の約2/3が調査区域外であったため，住居址の平面形・規模は不明であるが，平面形は円形若しくは楕円形であったと推定される。残存部の東西の長さは3.3ｍであった。壁高は４㎝で壁面の立ち上がりは明瞭ではない。炉址・貼床・周溝は認められなかった。

〈覆土〉２層に分類した。１層は，赤色スコリア・炭化物・焼土粒子・ローム粒子を若干含む黒褐色土層でしまりが悪く，粘性が認められる。２層は，赤色スコリア・焼土粒子・ローム粒子を若干，炭化物粒子をごく微量含む暗褐色土層で，しまり良く，粘性が認められる。

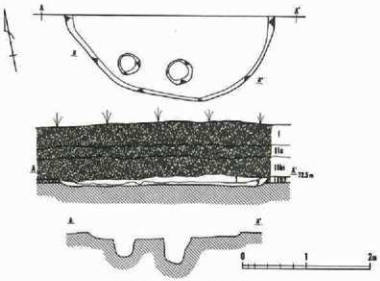
〈柱穴〉２基確認され，床面からの深さはそれぞれ40，30㎝である。尚，深さ30㎝のピットから，磨石１点，剥片１点が出土した。

〈出土遺物〉土器片21点，石器２点，礫68点が出土している。

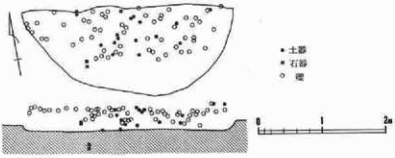
＜遺跡出土状態＞（第28図）平面的には散漫に分布する。垂直分布を見ると，土器２点が床面直上に，石器２点は柱穴から出土したほかの遺物は，おおむねⅡｂ層から出土している。

土器（第29図１～５）

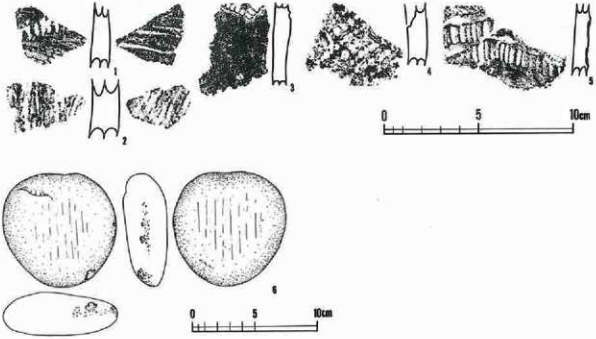
１は絡条体圧痕文を持つ土器，口縁部破片で器面条痕・研磨後大き目の絡条体を押捺する。小破片であるため全体の構図を窺うことはできないが，下位にもこれの一部と思われる痕跡が認められ，おそらくは山形二段に亘るものと思われる。胎土中には繊維をほとんど混ぜず第４群５類Ｆと良く似た性状を示している。２は表裏に条痕を持つ土器。胎土中にはほとんど繊維を混入せず，白色粒子を多く含む。焼成は良好。３は貝殻腹縁文の施される土器。器面は良好に研磨され，腹縁文は連なり山形文を構成している。焼成良好で胎土中には繊維をほとんど混じていない，堅緻。４は縄文・条痕の土器。原体は大き目な節にてLR，以後研磨され内面には横方向の条痕を留めている。５は入海Ⅱ式相当の土器。現存では低隆帯を二条巡らし，押引き



第27図　9号住居址（1/60）



第28図　9号住居址の遺物出土状態（1/60）



第29図　9号住居址の出土土器（1/2）・石器（1/3）

状に押捺し，隆帯の上位には同様の手法による列点状の刻目が認められる。胎土中には繊維を混じ，石英粒子を多量に含有する。焼成良好にして堅緻。

石器（第29図6）

磨石と剥片各1点の合計2点が出土している。6は，扁平な閃緑岩の礫を用いた磨石で，表裏両面に多少の磨滅痕と，側縁の一部に敲打痕が観察される。柱穴の底部から出土しており，重量は，413gである。

10号住居址（第30図）

〈位置〉Ｃ６・Ｄ６グリッドに位置する。

〈形状〉規模 3.4 × 3.0 ㎝であり，五角形に近い平面形を呈するが，壁高は５㎝と低く，立ち上がりが不明瞭なため，住居址の実際の平面形は若干変化するものと思われる。床面はほぼ平坦で，貼床・周溝は認められなかった。

＜覆土＞２層に分けられるが，下層である２層は部分的なもので，ソフトロームが盛り上がったものと考えられる。１層は，赤色スコリアを多量，ローム粒子を少量，炭化物を若干含む暗褐色土層で，しまり悪く，粘性は認められない。

〈炉〉住居址のほぼ中央に位置し，規模は50×40（㎝）の楕円形で，深さは７㎝である。焼土粒子は，主として下層に含まれる。

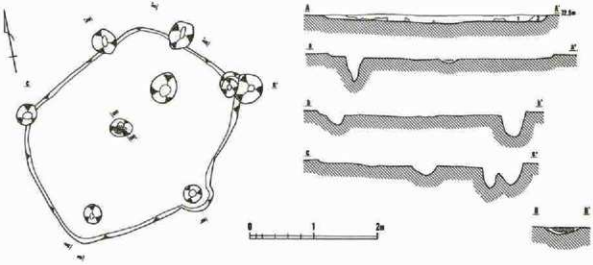
〈柱穴〉８基のピットが確認され，深いものは床面からの深さ30㎝前後のもので３基，残るピットは，深さ５～20㎝である。

〈出土遺物〉土器片20点，石器６点，礫62点が出土した。

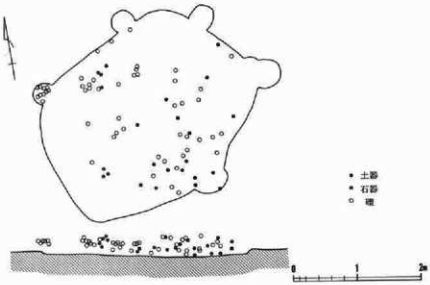
〈遺物出土状態〉（第31図）平面分布を見ると，遺物は散漫な分布を見せるが，炉の上面や住居址壁面付近の遺物はほとんど見られない。一部の柱穴上面に礫が密集した状態で出土。垂直分布を見ると，床面直上の遺物は少なく，確認面からの壁高が低いため，遺物の多くは，確認面上に浮いた状態で出土している。

土器（第32図１～９）

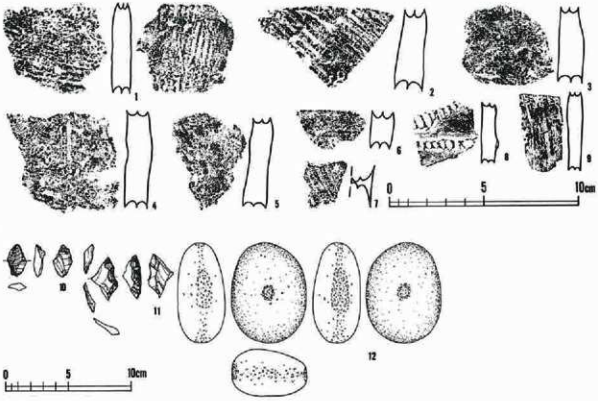
１は表裏に条痕を持つ土器。外面では右下方向に施され，以後撫でられている。内面は縦位方向に施され明瞭である。胎土中には繊維・石英粒子を多く含む。２は外面に右下方向の条痕を施す。条痕は大き目の条にて，以後撫でられている。胎土中には余り繊維を混ぜず，白色粒



第30図　10号住居址（1/60）



第31図　10号住居址の遺物出土状態（1/40）



第32図　10号住居址の出土土器（1/2）・石器（1/3）

子を若干含む。焼成良く堅緻。3～6は同一個体と思われる無文部。いずれも胴部破片で内外とも良好に研磨される。胎土中の繊維量は少な目で，2と同質である。ともに第4群5類に属する。7は赤褐色を呈し，条痕を施した後研磨される。胎土中には，若干量の繊維と多量の白色粒子を含む。8は入海Ⅰ式相当の土器。内外面とも良好に研磨されており，器面は断面三角形の隆帯を二条張付け，隆帯上は深く断面V字形の刻み目が施される。胎土中に繊維をほとんど混ぜず，石英粒子を多量に含む。焼成良く非常に堅緻である。9は器面の内外とも良好に研磨される土器で，外面には縦位の沈線様の痕跡が認められる。内面には指頭による押圧痕を留め，胎土中には繊維をほとんど混入せず，石英粒子を多量に含む。胎土は天神山式相当の土器と近似している。

石器（第32図10～12）

楔形石器，スクレイパー，磨石各1点と，剥・砕片3点の合計6点が出土している。

10は，黒曜石製の楔形石器である。上下からの剥離が表裏両面を覆い，使用頻度の高かかったものらしい。重量は1.9gである。11は，チャートの剥片の側縁に細かな二次加工を施したスクレイパーである。欠損が著しく，全体の形状は不明である。重量は，4.2gである。12は，閃緑岩の扁平な礫を用い，表裏面の中央に凹石状の敲打痕を有する磨石である。明確な磨滅痕は見られないが，全周縁に敲打痕が観察される。

11号住居址（第33図）

〈位置〉C5グリッドに位置する。

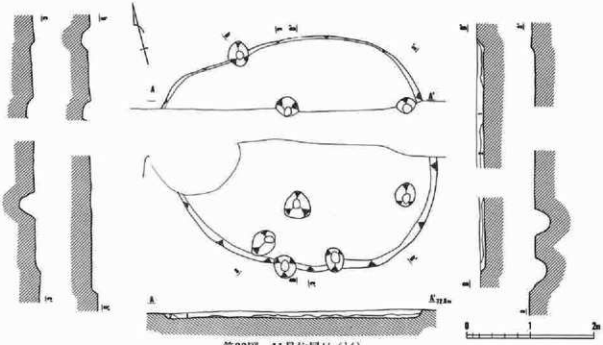
〈形状〉遺構は下水溝により東西を横断する様に切られ，また時期の違う土坑による攪乱を受けている。規模は4.5×3.6（m）で東西に長い楕円形というよりは，むしろ卵形に近い平面形を呈し，壁高は5cmと低く，壁面の立ち上がりはさほど明瞭とはいえない。床面は平坦で，貼床・周溝は認められず，炉址も検出できなかったが，これは下水溝を設置する際に破壊されたものであるかもしれない。

〈覆土〉2層に分類される。1層は，赤色スコリアを少量，炭化物をごく微量含む暗褐色土層で，しまり良好で，粘性は認められない。2層は，赤色スコリアを若干，炭化物・青色スコリアをごく微量含む褐色土で，ロームがブロック状に含まれる。しまり良好で，粘性は認められない。

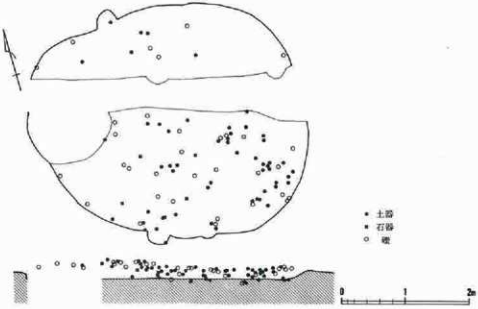
〈柱穴〉ピットは8基確認されたが，いずれも浅いもので，床面からの深さは10～20cmにとどまる。住居址南側にピットが4基集まっているが，住居址の構造に関係があるものと思われる。

〈出土遺物〉土器片60点，石器4点，礫34点が出土している。

〈遺物出土状態〉（第34図）遺物は，攪乱の影響を受けないと考えられる住居址東南部に遺物は集中している。また，垂直分布を見ると，住居址南部の遺物残存状態は良好で，床面直上の遺物が多いようである。



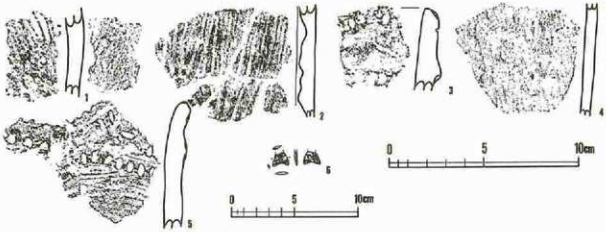
第33図　11号住居址（1/60）



第34図　11号住居址の遺物出土状態（1/60）

土器　（第35図1～5）

1，2は条痕の施される土器胴部破片。胎土中には繊維と白色粒子を含み，1は第4群5類Cに，2は同類Aに属する。3は隆帯文を持つ土器。内外面ともに良好に撫でられ，口縁には一条の隆帯を横位に貼り付ける。隆帯上には，棒状工具によると思われる押圧刺突状文が施され，同工具による押圧刻目状文が口唇外面に加えられる。胎土中には多量の繊維を混じ，白色粒子をも含んでいる。焼成良好，赤褐色。4は内外とも良好に研磨され，各所に指頭圧痕を残す。胎土中にはほとんど繊維を混ぜず，石英粒子を多量に含有する。焼成良く褐色。10号住居址出土の9同様第5群5類の土器に相当すると考えられる。



第35図　11号住居址の出土土器（½）・石器（⅓）

石器（第35図6）

石鏃1点，剝片3点，の合計4点が出土している。6は，黒曜石製の凹基の小形三角形石鏃である。先端部を欠損しており，全体形は不明である。重量は，0.3gである。

12号住居址（第36，38図）

〈位置〉B6，C6グリッドに位置する。

〈形状〉住居址の約2/3を発掘した。残る1/3は今回の調査区域外であるため未発掘である。住居址全体の平面形は円形若しくは楕円形であると推定され，規模は東西約6mと推定される。確認面からの壁高は9cmで壁面の立ちあがりは明瞭であったが，床面の高さは，縄文時代中期の住居址である2号住居址，縄文時代早期の住居址である13号住居址と同じであった。また，この住居址は2，13号住居址と切り合うほか，14号住居址とも切りあう。これら住居址の新旧関係は，12，13号住居址の新旧関係は確認面，覆土の切り合いからは不明であるものの，2号住居址よりは古く，14号住居址より新しい時期のものであることは覆土の切り合いから判っている。12号住居址の床面は平坦であり，床面から炉址・貼床・周溝は認められない。

〈覆土〉覆土は2層に分類され，それぞれ3，4とする。3層は少量の赤色スコリアとわずかなローム細粒を含む暗褐色土層。4層は多量の赤色スコリアを含むほか，ロームと混じり合いもやもやしている褐色土層。

〈柱穴〉12，13号住居址からは，合計11基のピットが確認されているものの，両住居址の新旧関係等の関わりあいが不明であるため，どのピットがどの住居址の所在であるか明確に示せない。床面からの深さは40cmのものが1基あるほかは10～30cmとバラつきが見られる。

〈出土遺物〉土器片20点，礫34点が出土した。

〈遺物出土状態〉（第37図）平面分布の全体的な傾向は遺物の分布が住居址の西側に偏っていることが見られ，両住居址の新旧関係を判定する材料になり得よう。垂直分布を見ると，床面直上の遺物は無く，遺物の多くは覆土上部あるいは確認面上に浮いた状態で出土している。

11，21号住居址の新旧関係は，出土した土器・石器の新旧関係によって明らかになるだろう。

13号住居址（第36，38図）

〈位置〉Ｃ６グリッドに位置する。

〈形状〉住居址は約3/4以上を発掘したものの，残る1/4程度は今回の調査区域外であるため，未発掘である。住居址は長径約６ｍ，短径５ｍ程度の南北に長い卵形或いは楕円形の平面形を呈していたと推測される。遺構は12号住居址と切り合うほか，14号住居址，57号土抗と切り合う。遺構の新旧関係は12号住居址，57号土坑とは不明であるが，覆土の切り合いから14号住居址より新しい時期の住居址であることが判っている。壁高は６㎝で，壁面の立ち上がりは不明瞭である。床面はほぼ平坦で，炉址が１基確認されたが，周溝・貼床は認められない。

〈覆土〉２層に分類され，それぞれ５，６とする。５層は赤色スコリアを含む以外，他の土壌の混入のみられない暗褐色土層である。６層はローム及び14号住居址の覆土と混じり合い，斑点状を呈する褐色土層である。12号住居址と13号住居址の覆土の性質には明らかに違いが見られたものの，土層セクシ ョンをとった位置が良好でなかったため，住居址の切り合いは明確に判断できなかった。また住居址南東部に３号土抗，攪乱がみられる。

〈炉〉住居址の北部に位置。位置が北に偏っているため，炉址の北半分は調査区域外で未発掘である。規模は東西50㎝で，床面からの深さは20㎝である。焼土は主に上層である７層に含まれるものの，焼土粒子は少なく，炭化物もほとんど見られない。

〈柱穴〉12号住居址柱穴欄参照。

〈出土遺物〉土器片24点，礫34点が出土した。

〈遺物出土状態〉住居址中央部より北西，特に北壁近くに集中する傾向を見せる。床面直上の遺物は無く，覆土及び確認面上に浮いた状態で遺物は出土している。

14号住居址（第36，38図）

〈位置〉Ｃ６グリッドに位置する。

〈形状〉住居址は全体の2/3を発掘したが，残る1/3は今回の調査区域外であるため，未発掘である。住居址の上面は12，13号住居址に削りとられ，住居址中央部には７号土抗のほか大小の土坑による攪乱がみられる。規模は東西6.0ｍ，南北は約４ｍと推定される楕円形を呈する住居址で，11，21号住居址の床面からの壁高は３㎝で，わずかに11，21号住居址の床面から凹んだ状態を呈する。床面は平坦で炉址で貼床・周溝は認められない。

〈覆土〉住居址の上面は，12，13号住居址に破壊されているため，確認された覆土は１層のみで，９層とする。覆土は赤色スコリアを微量含み，ロームブロックを含む褐色土層である。

〈柱穴〉この住居址のピットと考えられるものは２基で，床面からの深さはそれぞれ20㎝，30㎝である。

〈出土遺物〉土器片なし，石器（石鏃）１点，礫２点が出土した。

〈遺物出土状態〉（第37図）遺構の大半が破壊されているため，遺物の残存状態は悪い。遺物

は床面直上のものは無かったが，それに準ずる様なものである。

15号住居址（第36，38図）

〈位置〉Ｂ６グリッドに位置

〈形状〉遺構は２，12号住居址に切られることが確認面で判断されている。遺構南部の約半分近くが，２，12号住居址に切られている状態を呈するため，詳細な平面形・規模は不明であるものの，楕円形または円形であったと推定され，東西4.2mに及ぶ。確認面からの壁高は15cmで明瞭な立ちあがりを見せる。床面は平坦で炉址・貼床・周溝は認められない。また，16号住居址とも切り合うが，土層セクションから16号住居址が古く，当住居址が新しい時期のものであることがわかっている。

〈柱穴〉住居址内から，ピットは６基確認され，うち１基は床面からの深さ55cmを数えるが，残る５基は床面からの深さが10～30cm程度である。

〈時期〉切り合う遺構関係から縄文時代早期末葉のものと考えられる。

〈遺物〉なし

〈覆土〉４層に分類される。10層は黒色土層で下部に多量の赤色スコリア，少量のローム粒子を含み，しまりが良く粘性は認められない。11層は赤色スコリアを少量含み，ところどころにローム粒子が固まって見られる褐色土層でしまり良く粘性は認められない。12層は住居址床面上に広がる黄褐色土層で，11層より若干多く赤色スコリアを含むほか，層下部に多量のローム粒子が含まれるほか，少量の黒色土粒子が認められる。しまりは良好で粘性は認められない。13層はピットの覆土にあたり少量の赤色スコリア・黒色土を含む。

16号住居址（第36，38図）

〈位置〉Ｂ６グリッドに位置する。

〈形状〉遺構は北部の一部および西部が調査区域外で未発掘であること，また，遺構北部が15号住居址に切られているため，遺構全体の平面形，規模共に不明である。壁高は10cmで壁面の立ち上がりは明瞭ではない。この住居址は15号住居址，17号住居址と切り合うが，覆土の土層セクションから，15号住居址よりも古く，17号住居址よりも新しい時期の遺構であると考えられる。床面はほぼ平坦であり，この遺構が切る17号住居址の床面より10cm低い。炉址・貼床・（中黒）周溝は認められない。

＜覆土＞３層に分類され，それぞれ14，15，16とする。14層はⅡｂ層である。15層は赤色スコリア，ローム粒子を微量含むほか，焼土や炭化物の粒子をごく微量含む茶褐色土層。16層は赤色スコリア・ローム粒子を含む明褐色土層。３層とも，しまり良好で，粘性が認められる。

〈柱穴〉今回調査した区域内からは４基のピットが確認された。床面からの深さはいずれも30cm前後である。

〈出土遺物〉土器14点，石器２点，礫９点が出土している。

〈遺物出土状態〉（第37図）遺物は床面直上に礫が１点見られるほかの全ての遺物は確認面上に浮いた状態で出土する。遺物は遺構東部に散漫な状態で分布するが，遺構西部からは遺物はみられない。なお，この遺構から出土した石皿片（約1/3残存）は，約30m離れたＥ６グリッド出土の石皿片（約2/3残存）と接合して，完形を呈している。

17号住居址（第36，38図）

〈位置〉Ｂ５，Ｂ６グリッドに位置する。

〈形状〉遺構はその南部を16号住居址に切られている。平面形は長方形に近い不整長円形である。長径の方向は〈北西－南東〉で規模は5.0×3.8（m）と推定される。確認面からの壁高は20cmで，壁面の立ち上がりは明瞭である。床面はほぼ平坦であり，炉址・周溝・貼床は認められない。

〈覆土〉２層に分類され，それぞれ17，18とする。17層は赤色スコリア，ローム粒子を微量含み，焼土・炭化物粒子をごく微量含む茶褐色土層。18層は赤色スコリア，ローム粒子が含まれる明褐色土層。17，18の２層ともにしまりが良好で粘性が認められる。

〈柱穴〉住居址内から２基のピットが確認され，床面からの深さはそれぞれ15，20cmである。２基ともに壁に沿う様に掘り込まれている。

〈出土遺物〉土器片７点，石器３点，礫６点が出土した。

〈遺物出土状態〉（第37図）遺物は住居址の東半分から出土しており，垂直分布を見ると確認面上に浮いた状態の遺物が多いが，16号住居址に比べ床面直上，あるいは覆土中の遺物が多いのが特徴である。これは遺構の残存状態と関係があるかもしれない。

57号土坑（第36，38図）

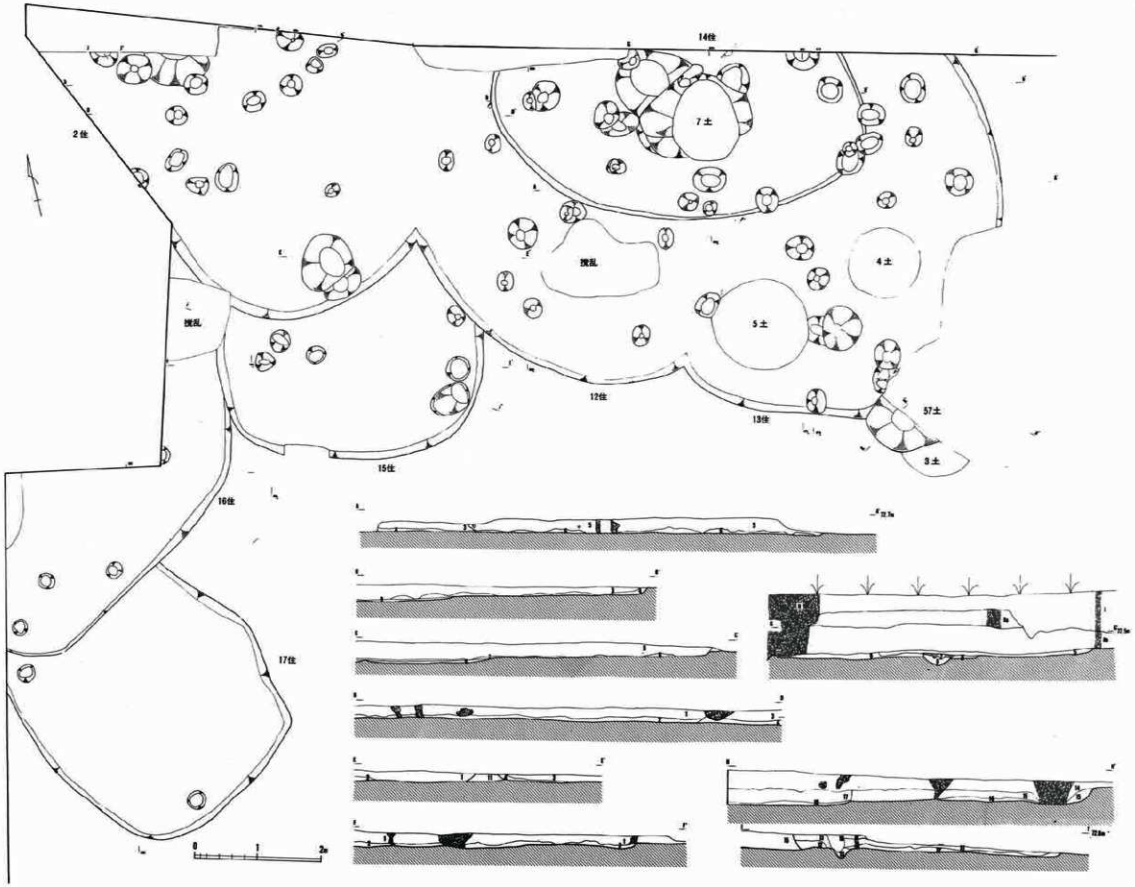
〈位置〉Ｃ６グリッドに位置する。

〈形状〉遺構の大部分が３号土坑，攪乱による破壊を受けているため，規模は不明である。また，確認面からの深さは55cmである。遺物の出土はない。また，この土坑は13号住居址と切り合うが，時期そして他の遺構との新旧関係は不明である。

〈覆土〉４層に分類される。１層は赤色スコリアを少量含む以外，他の土の混入のみられない暗褐色土層で，しまり悪く，粘性もみられない。２層は１層より赤色スコリアを多量含むほか褐色土層の小ブロックが混入する１層の亜層である。３層は赤色スコリアを含む褐色土層で，しまり悪く，粘性は認められない。４層はほぼ地山に近い層であり，しまりが悪く，粘性が若干認められる層である。

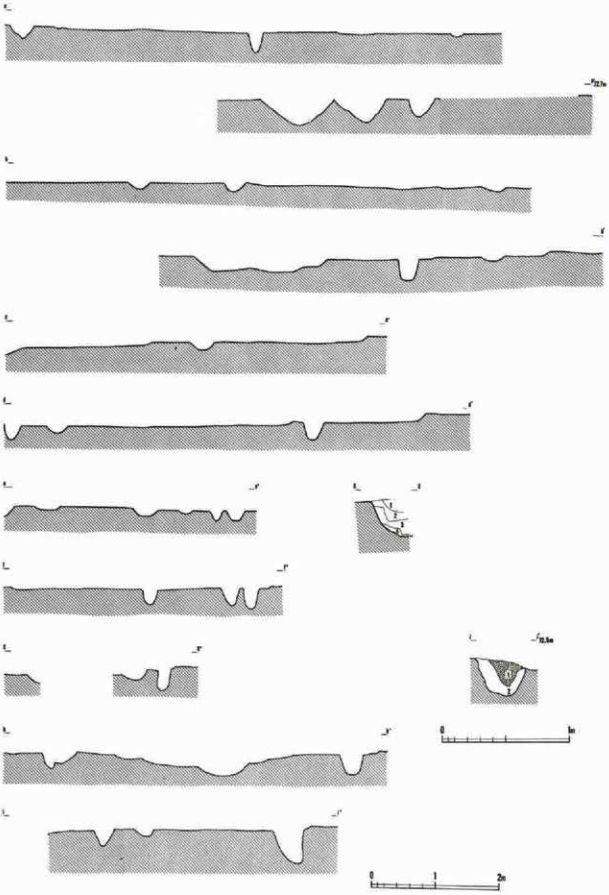
12，13，14号住居址出土の土器（第39図１～11）

１，２は隆帯文の土器。１は緩やかな波状を呈し，隆帯は極めて高いものが口縁に沿って横位に三段巡り，隆帯上及び口唇上には棒状工具による押圧が加えられる。第一条目と口唇間には，半截竹管状工具による刺突文が施されている。内面は横位の条痕を留め，胎土中には多量



第36図　2・12～17号住居址（1/60）

第37図　12～17号住居址の遺物出土状態（1/80）



第38図　2・12～17号住居址の断面図（1/60）

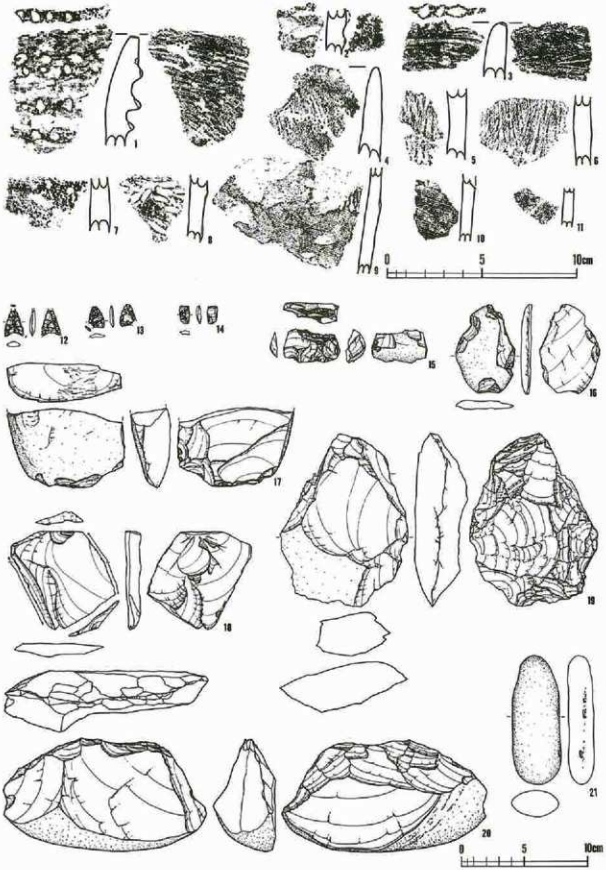
の繊維を混入する。2も同様の土器。3～6は条痕の土器。3は棒状工具による押圧刻目が施され，条痕は横位方向になされる。胎土は非常に緻密で，白色の粒子を多く含んでいる。別群の可能性もあろうか。4は第4群5類Eに属すると考えられるもので，口唇は指による押圧により尖り，以下縦位の条痕が施される。胎土中には繊維と白色粒子を含んでいる。5，6は同類Cに類似するが判然としない。7は同類Fの胴部破片にて，若干量の繊維と白色粒子を含む。8は入海Ⅱ式相当の土器。隆帯は三条認められ，第二条目は波状に隆帯上は棒状工具による長めの刻目が，むしろ擦り付けるように加えられる。胎土中には，ほとんど繊維を混じていない。9～11も入海式相当の土器。9，10は同一個体。隆帯上には断面V字状の鋭い刻目が施される。器面は良好に研磨され，極細の沈線による条線が施される。胎土中には繊維を混入する他，石英粒子を多く含む。焼成良好で堅緻。11は黄褐色を呈し，大粒の石英を含む。

12．13．14号住居址出土の石器（第39図12～21，40図）

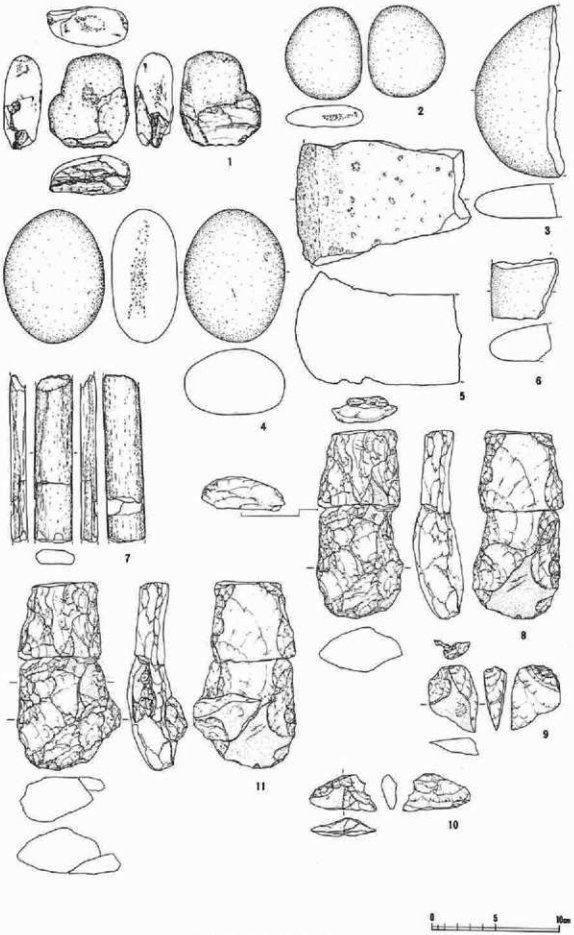
石鏃2点，打製石斧5点，磨石2点，石皿3点，石剣2点，楔形石器，礫器，敲石，棒状礫石核各1点，剝・砕片12点の合計30点が出土している。

12，13は，チャート製の石鏃である。12は，先端の欠損した凹基の三角形鏃である。重量は1.1gである。13は，先端と基部を欠損する平基の三角形鏃であるが，先端は欠損ののち，再加工を施している。重量は，0.8gである。14は，黒曜石製の楔形石器で，左側面に切断面を持ち表裏を作業中の剝離面に覆われ，使用頻度が高かったものである。重量は，0.4gである。15は，珪質がかった粘板岩の小形の礫を用いた石核である。自然面を打面とし，上下両端から石鏃の素材となるような小形の剝片を剝離したものと考えられる。重量は，17.1gである。16は，打製石斧の作出剝片に加工を施した剝片であり，小形の打製石斧の未整品とも考えられるものである。石質は頁岩，重量は28.4gである。17，19は，大形の打製石斧である。17は，刃部のみの欠損品である。石質は頁岩，重量は215gである。19は，ホルンフェルスの大形剝片を，粗く西洋梨形に調整加工したものである。重量は，534gである。18は，ホルンフェルスの薄い剝片の縁辺に使用痕の観察されるものである。重量は，67.4gである。20は，ホルンフェルスの礫を荒割した鋭い縁辺に加工を施した両刃の礫器である。重量は，681gである。21は，側面に多少敲打痕が観察される砂岩の棒状礫である。重量は，119.6gである。

（第40図）1は，砂岩の礫を用い，下端を中心に使用頻度の高かったと考えられる敲石である。また，下端のみでなく，全周に敲打痕が見られ，表面中央には，凹石状の敲打痕が観察される。重量は，209gである。2・4は，磨石である。2は，扁平な閃緑岩の小形礫を用いたもので，下端に多少敲打痕が観察される。被熱しており，重量は，108.6gである。4は，砂岩の多少厚みのある礫を用いており，表裏面に磨滅痕が観察され，また，側面に多少の敲打痕の見られるものである。重量は，614gである。3，5，6は，欠損した石皿である。3は閃緑岩の扁平な礫を用いた小形のものである。重量は，352gである。5は，多孔質の溶岩を用いた大形の



第39図　12～14号住居址の出土土器（½）・石器（⅓）



第40図　12～14号住居址の出土石器（1/3）

もので，明確に作業用の凹みが作り出されている。重量は，1540 gである。6は，閃緑岩の扁平礫を用いたものの欠損品である。重量は，109.9 gである。7は，緑色片岩を，側面を中心に，ほぼ全面磨き上げて，断面が丸みのある長方形を呈する様に仕上げた石剣である。全体に被熱しており，12号住居址内覆土中出土の2例が接合している。重量は，合せて104.6 gである。8は，長細い安山岩の礫を素材とする比較的大形の打製石斧の接合例である。中央部欠損ののち，刃部側を再加工し，その際に作出剥片（10）が，剥離されている。また，接合しないものの，同一個体で，上部の折れ面の延長上にあたると考えられる胴部片も出土しているので，初めは，より長大な打製石斧であったと考えられる。そしてまた，初期の作出剥片（9）が接合する（11）。この接合例は，すべて21号住居址覆土中より出土しているが，素材の礫から，荒割り段階，欠損，再生という一連の製作過程の資料が存在することから，素材からのすべての製作過程が一時的に行なわれたものと考えられる。重量は，8の上半が155 g，下半が287 g，9が30 g，10が10 gで，合計（11）は487 gである。

16号住居址出土の土器（第41図1～3）

1は外面丁寧に研磨して内面に条痕を留める土器。胎土中にはほとんど繊維を混ぜず堅緻である。第4群5類Fに属する。2は器面に横位の条痕を施すもので19号住居址出土土器（第47図3）と非常に良く似ている。あるいは同一個体の可能性もあろうか。3は入海Ⅱ式相当の土器。小波状を呈し，口縁に沿って隆帯を巡らすもので隆帯は三条，第一条は緩やかな波状に，第二・第三条は波頂部直下にて菱形を構成する。隆帯には棒状工具による短い押引き状の押圧が加えられ，第一条では左下がりに，他では右下がりとなる。同様の要素は，口唇部にも施され，焼成良好にて胎土中には繊維をほとんど混じていない。

17号住居址出土の土器（第41図4・5）

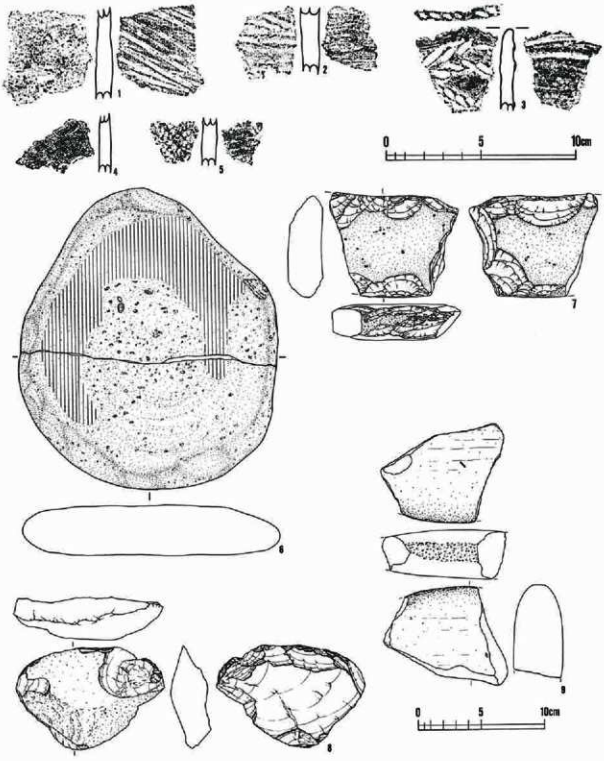
4は所属時期不明の土器で，胎土中には繊維を混じることなく別群・中期の可能性も危まれるもの。小破片のため判別不能である。5は縄文の施される土器。縄文はRLと判読されるが，不明瞭である。胎土中には繊維及び白色粒子を含む。焼成良好で非常に堅緻。

16号住居址出土の石器（第41図6・7）

抉入磨石，石皿砕片各一点が出土している。6は扁平な閃緑岩を用いた石皿である。表面上には磨滅痕が観察されるが，上半部はE2グリッド出土であり，約30 mの距離を持って接合している。重量は下半のみで1471 g，全体で3127 gである。7は扁平な閃緑岩の礫を素材とし，側辺の抉入部が粗く加工された抉入磨石である。上下両側辺には，敲打によるつぶれや剥離痕が顕著に観察され，左側の欠損部も，上部からの力で欠損している。重量は330 gである。

17号住居址出土の石器（第41図8・9）

礫器，石皿，砕片各1点の合計3点が出土している。8は砂岩の厚手の剥片を用い，裏面に集中して加工を施した礫器である。礫を素材としていないが，素材の形状，加工のあり方から，



第41図　16・17号住居址の出土土器（½）・石器（⅓）

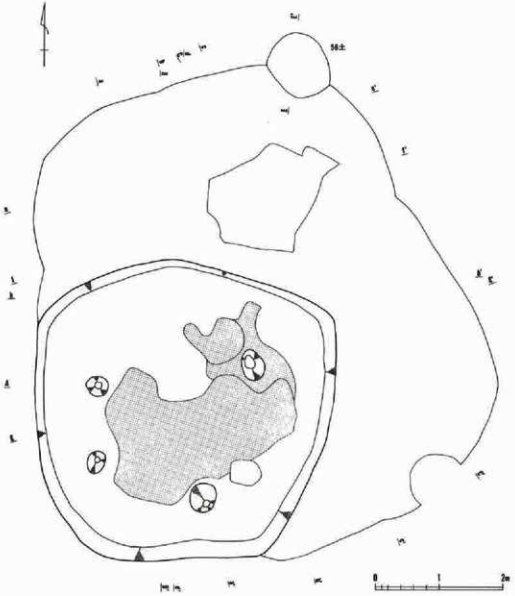
打製石斧等の未整品とは異質のものと考えられる。重量は 318 g である。9 は閃緑岩の扁平な礫を用いた石皿の一部である。表裏面に磨滅痕が，側面には細かな敲打痕が観察される。重量は 390 g である。

18号住居址（第42，44図）

〈位置〉Ｆ２，Ｆ３，Ｇ２，Ｇ３グリッドに位置する。

〈形状〉当住居址は19号住居址，20号住居址と切り合うが，土層の切り合から，当住居址が最も新しいものと判断された。全体的な規模は4.8×4.6（m）程度のやや方形に近い不整円形を呈していたと推測され，確認面からの壁面が35cmで，壁面の立ち上がりは明瞭である。床面はほぼ平坦であり，床面から，貼床が３か所確認されたが，炉址・周溝は認められない。

〈覆土〉５層に分類した。１層は土層色が単一で，他の土層の影響を余り受けたと考えにくい暗褐色土層で，焼土粒・炭化物が若干含まれる。２層は赤色スコリア，ローム粒子，ロームブロックを多量に含むほか，下部から炭化物が若干みられる褐色土層。３層は赤色スコリア，ロ



第42図　18号住居址（1/60）

ームブロックを含む明褐色土層。4層は赤色スコリアをところによりかなり多量に含むほか，ロームが多量に混入し，もやもやしている茶褐色土層で，住居址のほぼ全体に広がりを持つ。5層は，赤色スコリア等の混入物が目立たず，ロームブロックの混入が目立つ黄褐色土層。

〈貼床〉この住居址の範囲内から，貼床はローム貼床3箇所，小石貼床1箇所確認された。ただし，小石貼床は構成する小礫が床面にへばりつく様な状態を呈し，垂直分布を見てもレベル差はほとんどみられない，これは，18号住居構築時に上面に浮いた小礫を飛ばしたか，或いは浮いた小礫を踏み固めたものと考えられる。

ローム貼床はA_1，A_2，B_1に分類した。A_1，A_2というのは，貼床の性質はほぼ同じだが，場所が離れているため，便宜的に分けたものである。貼床Aはロームを主体とする構成物がすき間なく貼られ，表面は黒色化し，かなり凹凸がみられる。貼床B_1は後述する19号住居址の床の貼床B_2と同様の性質を持つ。貼床から掘り方までの厚さは1～2㎝で，19号住居址の床面との標高差は見られなかった。

〈柱穴〉この住居址のものと考えられるピットは4基確認された。床面からの深さは50㎝，30㎝，20㎝前後のものが2基である。

〈出土遺物〉土器片23点，石器6点，礫35点が出土した。

〈遺物出土状態〉（第45図）18，19，20号住居址の住居の切り合いは，土層セクション のほか，床面，遺物の出土状態から判断した。18号住居址の遺物分布は平面的，垂直的にも散漫であった。特に，19号住居址との切り合う壁面付近の遺物は少ない。柱穴内から何点かの小礫が出土している。

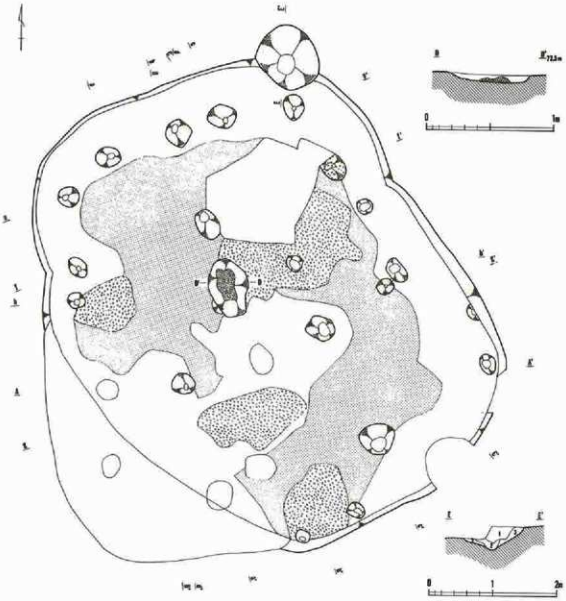
19号住居址（第43，44図）

〈位置〉住居址残存部分はＦ３，Ｇ２，Ｇ３グリッドに位置する。

〈形状〉下水溝により，住居址東壁の一部，また他の攪乱により住居址北東部が破壊されている。規模は7.3×5.9（m）で，長径の方向は北西－南東の隅丸方形に近い形を呈していたと推測される。確認面からの壁高は30㎝であり，壁面の立ち上がりは明瞭である。この住居址は18号住居址，20号住居址と切り合うが，土層から20号住居址よりも新しく，18号住居址よりも古い時期の遺構であると判断した。床面はほぼ平坦で，炉址1基のほか，ローム貼床2箇所，小礫貼床4か所が確認されたが，周溝は確認されなかった。

＜覆土＞a～dと4層に分類した。a層は，ロームブロックを含む褐色土層である。b層は赤色スコリアを多量含み，ローム細粒・炭化物を若干含む暗褐色土層。c層はロームと混じり合い，明褐色を呈する。d層は赤色スコリア，ローム細粒を含む明褐色土層。なお，19号住居の覆土はいずれもしまりが悪く，粘性もほとんど認められない。

〈炉〉住居址の北西に偏って位置するが，18号住居址の床面A_2，B_1の下に炉が検出され，また，炉址の硬化面下から14号住居址の柱穴が確認されたため，19号住居址の炉址であると判



第43図　19・20号住居址・56号土坑（1/60）

断した。焼土は主として2層に含まれるが，硬化しておらずしまり，粘性は共に認められない。特に2層はほとんどが焼土粒子で，砂粒も多量に含む。炉址からは，多量の小礫が認められるが，これは小礫貼床にかかる所に炉を設置したためであろう。

〈貼床〉ローム貼床が二か所（それぞれB_2，Cとする），小礫貼床が4か所（それぞれ小石1，2，3，4とする）が確認された。

ローム貼床B_2は，18号住居址の貼床B_1と性質が同様である。ロームを主体とする貼床構成物は，ややすき間を持って貼られ，構成物の単位も2～3㎝四方と小さくなる。表面の凹凸は小さく，滑らかで，黒色化しているものの，12号住居址の貼床Aほどでない。貼床Cになると，貼床構成物のすき間は大きくなり，地山の比率の方が高くなる。構成物単位も小さくなり，厚さも薄くなる。

小石1は，18号住居のところでも触れたが，踏み固められ，小礫はほとんどレベル差を持っ

て出土しない。一部コンクリートの様に硬化した部分も認められる。貼床の厚さは1㎝。小石2は，小石1の様に硬化した部分は認められず，垂直分布においていくぶんレベル差を持つものの，平面分布においてはあまりすき間を作っていない。小石3は，貼床中心部に小礫が集中する傾向がみられるが，小石2程，小礫はレベル差を持たず確認された。小石4は，1～3に比べ，小礫の水平・垂直分布共に疎らになるが，地山が硬化した部分が認められる。

小石2の上面，13号住居址の壁際で，小礫が床面より浮いた状態で検出されたが，12号住居址の壁際には検出されていない。これは，12号住居址構築時に削り取られた為と考えられる。

〈柱穴〉この住居址のものと確認されたピットは12基であった。うち深いものは2基で，それぞれ床面からの深さは80㎝，40㎝である。残る10基は10～30㎝の深さである。

〈出土遺物〉土器片25点，石器5点，礫54点。廃礫と考えられる小礫35点，柱穴内出土小礫36点である。

〈遺物分布〉（第45図）水平・垂直分布共に散漫に分布するが，18号住居址に比べ，当住居址は床面直上の遺物が多い。

20号住居址（第43，44図）

〈位置〉住居址残存部分はF3，G3グリッドに位置する。

〈形状〉平面形は，住居址が，18，19号住居址によってかなりの部分が破壊されており，平面形・規模共に不明である。壁高は確認面から20㎝で，明瞭な立ち上がりを見せる。そのほか，遺構は56号土抗と切り合うが，確認面で当住居址が新しい時期のものであると判断している。床面は平坦で，炉址・貼床・周溝は認められない。

＜覆土＞い，ろの2層に分類した。い層は赤色スコリア，ロームブロックを若干含む暗褐色土層。ろ層は赤色スコリア，ソフトロームを含みもやもやした状態の明褐色土層。い，ろ層共にしまり若干悪く，粘性はほとんど認められない。また，20号住居址の覆土は19号住居址の覆土に比べ，明るい色の土層であり，明瞭に区別できた。

〈出土遺物〉土器片14点，石器3点，礫30点が出土した。

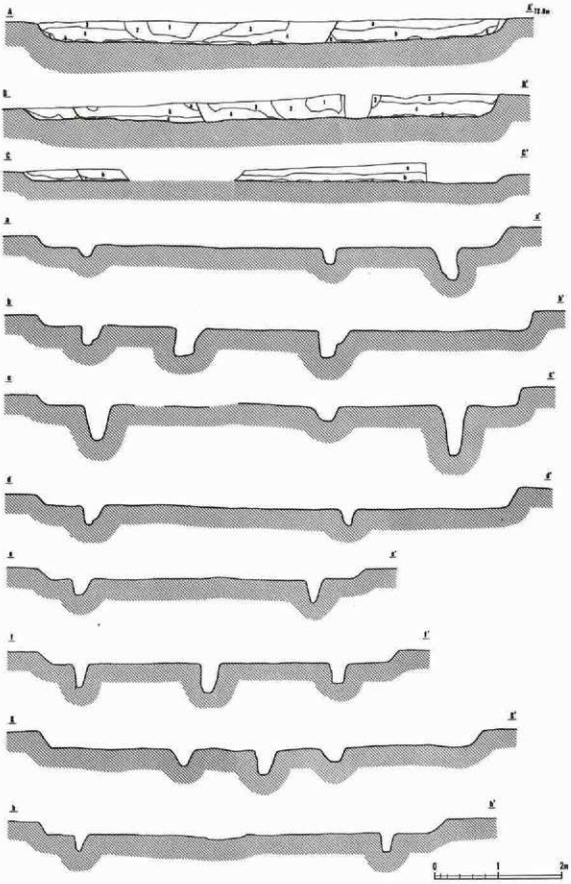
〈遺物分布〉（第45図）遺物とした礫，石器，土器は散漫な分布状態を示す。

〈小礫の廃棄〉20号住居址は，遺構の残存状態が悪く，北部のほんのわずかな部分しか残されていないが，そのわずかな部分から，確認面から床面までの20㎝のレベル差を持つ647点もの小礫が出土した。これらの小礫は覆土と混ざり合っていた為，いずれも廃礫と考えられ，1～2㎝立方程度の小礫が大部分であった。またこれは19号住の中からは検出されていない為，本来はもっと広範囲に分布していたものが，19号住を構築した際に除去されたのであろう。

56号土抗

〈位置〉G3グリッドに位置する。

〈形状〉規模100×95（㎝）の円形を呈する土抗で確認面からの深さは40㎝。確認面で，20号



第44図　18～20号住居址・56号土坑の断面図（1/60）

第45図　18～20号住居址・56号土坑の遺物出土状態（1/60）

住居址によって切られていると判断されている。遺物は覆土中から礫２点が出土した。

〈覆土〉３層に分類される。１層は赤色スコリア・黒色土粒を微量含む暗褐色土層で，粘性が若干認められる。２層は，黒色土粒を若干含む暗褐色土層でしまり良好で粘性はみられない。３層は，ローム粒子を多量含む明褐色土層で，しまり良好で，粘性が若干認められる。

〈時期〉不明。

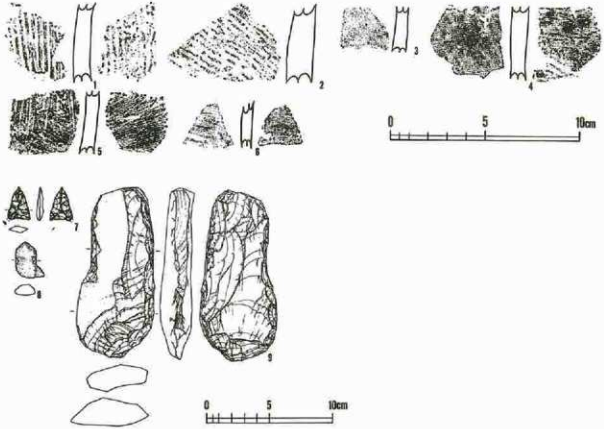
18号住居址の出土土器（第46図１～６）

１は表裏面に条痕の施される土器で，繊維の混入量は少なく堅緻である。色調は黒褐色を呈する。２は表面のみ右下方向への条痕が認められ，胎土中に石英粒子を多く含んでいる。褐色

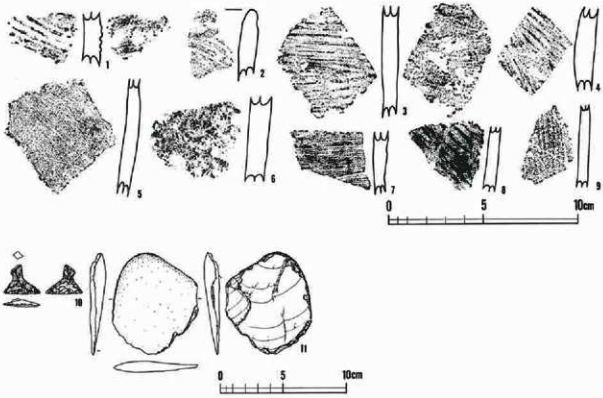
で，胎土は第４群５類Ｅに近似している。３は無文部で，同類Ｄと同質の胎土・焼成を示す。４は貝殻腹縁文の施される土器。腹縁を押捺し，これを山形ないし菱形に構成する。器面は内外とも良く研磨されており，胎土中には繊維をほとんど混じない。非常に堅緻，赤褐色。５は４と同類の土器胴部破片。６は内外面に横方向の条痕を留めるが，第５群５類に属すると考えられる土器。胎土中には繊維をほとんど混ぜず，石英粒子を多量に含んでいる。

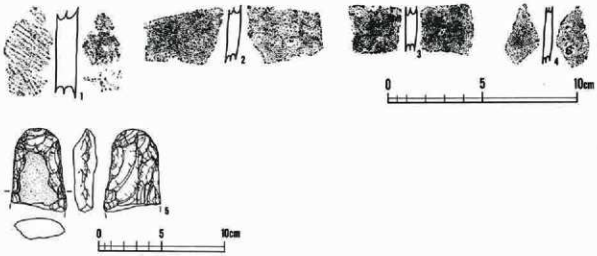
18号住居址出土の石器（第46図７～９）

石鏃，打製石斧，用途不明の石器各１点，剝・砕片３点の合計６点が出土している。



第46図　18号住居址の出土土器（½）・石器（⅓）





第47図　19(上)・20(下)号住居址の出土土器（½）・石器（⅓）

7は，チャート製の多少抉りの浅い平基の三角形石鏃で，先端が細く突出するという形状的特徴を持っている。重量は，1.8gである。8は，この地域にはあまり見られない軽石を素材とする石器であり，表面には磨痕らしいものが観察される。重量は，1.4gである。9は，頁石の縦長剥片を用い，胴部の多少括れる短冊形の打製石斧である。刃部付近の表裏面には，使用によると考えられる縦方向の線状痕が観察される。重量は，235gである。

19号住居址の出土土器（第47図上1～9）

1は口縁に右下方向への深い条痕を持つ土器。胎土中には余り繊維を混ぜず，堅緻である。2は小さな波状を呈し，口唇直下に指頭圧痕そして斜位の条痕が施される土器。胎土中には繊維及び赤色の粒子を多量に含有する，黒褐色。3は2と性状を同じくするもので，同一個体の可能性もある。4は条痕を有する胴部破片で第4群5類Fに属する。焼成良好で繊維はほとんど混入されない。5，6は4と同類に属すと考えられる無文胴部破片である。5は少々薄手で第5群に近い顔付きをしているが判然としない。7～9は薄手で繊維の混入はほとんどなく第5群5類と考えられる土器である。いずれも研磨以前の条痕を僅かに留めていることが特徴で，胎土中には多量の石英粒子を含んでいる。

19号住居址の出土石器（第47図10～11）

石匙，スクレイパー，石核，剥片各1点の合計4点が出土している。

10は，チャートの剥片を用い，入念に加工を施した小形の横形石匙である。重量は，2.3gである。11は，頁岩の薄い剥片のほぼ全周に裏面に向って細かい加工を施したスクレイパーである。重量は，61.4gである。

20号住居址出土の土器（第47図下1～4）

1は条痕の土器。右下方向への条痕にて内面は撫でられている。胎土中には繊維を多量に混入する他，石英・黒輝の粒子を含む。第4群5類Aに属する。2～4は無文部破片。薄手で繊維をほとんど混ぜず，石英粒子を多量に含む。天神山式に相当するものであろう。

20号住居址出土の石器（第47図5）

打製石斧1点，剥・砕片2点が出土している。5は，ホルンフェルスの剥片を素材とし，入念に加工した短冊形打製石斧の胴上半部である。重量は，62.7gである。

21号住居址（第48図）

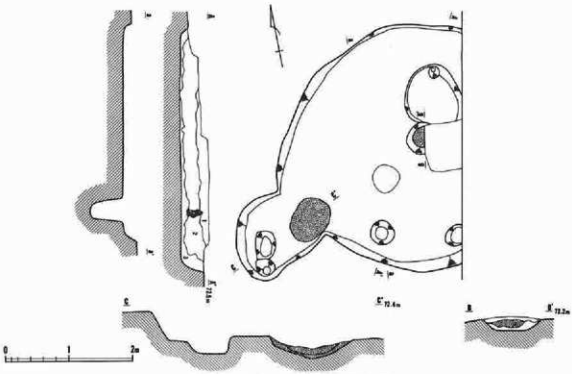
〈位置〉Ｈ５，Ｉ５，１６グリッドに位置する。

〈形状〉遺構はその1/3が今回の調査区域外であったため，詳しい平面形は不明だが，円形，或いは楕円形であったと考えられる。そのほか，遺構は下水溝，電信柱に攪乱されている。規模は南北3.9mであった。壁面は25cmで，明瞭な立ちあがりを見せる。床面は平坦で，貼床・周溝は認められない。

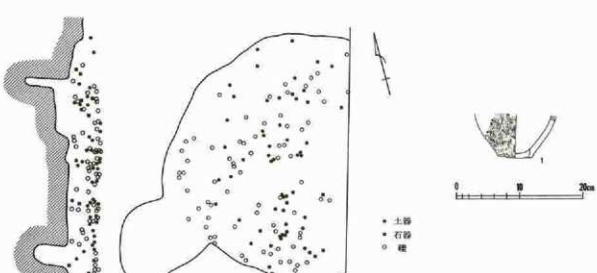
〈覆土〉３層に分けられる。１層は，赤色スコリア・ローム粒子を微量含む暗褐色土層で，しまり良く，粘性がある。２層は赤色スコリアを若干，ローム粒子・炭化物・焼土粒子を微量含む茶褐色土層で，しまり悪く粘性は１層よりやや弱い。３層は赤色スコリア・ローム粒子を含み，炭化物粒子・焼土粒子を微量含む黄褐色土層で，しまり悪く，粘性がみられる。

〈炉〉住居址のほぼ中央に位置すると思われる。炉は攪乱により破壊され，正確な規模は不明であるが，南北は50cmであり，深さは８cmである。焼土は主として２層に含まれ，しまりは非常に良好である。

〈柱穴〉住居址内から３基のピットが確認されたが，うち１基は床面からの深さが５cmで，柱穴とは考えにくい。またあるものは，径80cm，深さ20cmのピットに深さ40cmのピットを掘った様な状態を呈する。また最後のピットは径40cm，深さ45cmである。



第48図　21号住居址・12号土坑（1/60）



第49図　21号住居址の遺物出土状態（1/60）

〈出土遺物〉土器片50点（うち30点が縄文時代早期末，20点は中期のものである），石器4点，礫92点が出土した。

〈遺物出土状態〉（第49図）平面の遺物分布をみると，遺物は攪乱の影響を受けていない範囲内に散漫な分布を見せる。垂直分布を見ると床面直上の遺物は見られないが，住居址の中央部から北部にかけて，上下の広がりを感じるが，南部は確認面の遺物は多いものの，覆土中の遺物少ない様にである。縄文時代早期末葉の土器は下部に，中期の土器は上部から出土している。

12号土坑（第48図）

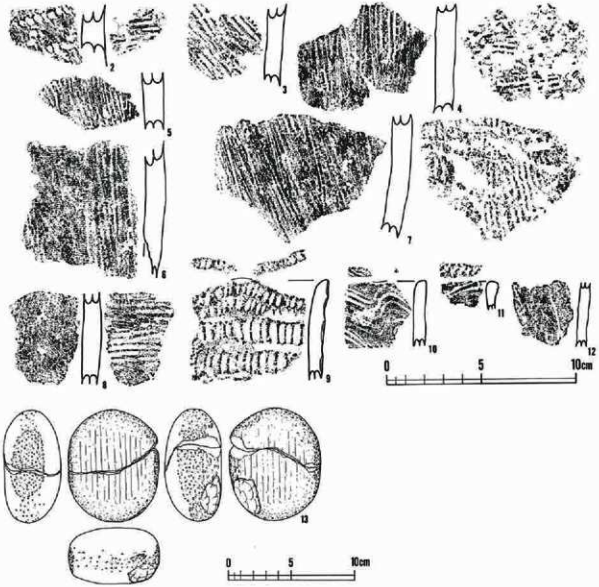
〈位置〉H5，I5グリッドに位置する炉穴である。

＜構造＞2.0×1.2ｍの楕円形を呈し，長径の方向は（北東一南西）である。深さは35cmでその他遺構内に深さ15cmの小ピットが2基検出された。

〈覆土〉2層に分類される。1層は焼土層で，ロームが焼土に変質したもので，しまりが特に良好でガリガリしており，粘性は認められなかった。2層は焼土粒を微量含むローム層で，しまり，粘性がともに認められた。この炉穴は，21号住居址と切り合うが，その切り合い関係は，確認面で，炉穴が16号住居に切られている状態を呈し，21号住居が新しい時期の遺構であることが確認されている。

21号住居址の出土土器（第49図1，50図2～12）

1は無文の土器底部。底部は円形の粘土盤を胴部に接合し，撫でにより癒着させている。癒着部は若干肥厚し，恰も粘土帯を張付けたかのように見える。類似する粘土帯貼付のものとは製作法を異にしている。2は絡条体圧痕文を持つ土器。器面を撫で絡条体を菱形状に押捺す



第50図　21号住居址の出土土器（½）・石器（⅓）

る。内面は横方向に条痕を施し，胎土中には多量の繊維と白色粒子を含有する。3～7は条痕の土器。3は第4群5類Dに属する破片と思われ，胎土中には非常に多くの繊維を混入する，色調は黒褐色。4～7は同類Aに属するもので，全て同一個体，赤褐色及び黒褐色。8は無文。外面は良好に研磨され内面には横方向の条痕を留める。胎土中には小量の繊維と輝石の粒子を含み，第4群5類Eに属すると思われる。9は入海Ⅱ式相当の土器。小波状口縁で口唇下に二条の列点状刻目帯と二条の隆帯を巡らす。隆帯は低平で棒状工具による刻目状の押捺が加えられ，これと上位の刻目帯とは施文具を異にし，内面では指頭による押圧痕を残している。胎土中にほとんど繊維を混ぜず，石英粒子を多く含有する。10～12は天神山式相当の土器。10は緩やかな波状を呈する口縁で，器面には波状文モチーフが施されるもの。口唇上には9同様

刻目が施され，胎土中にはやはりほとんど繊維を混ぜず，石英粒子・金雲母等，小石を多量に含んでいる。11は若干肥厚する口唇部をもち，口唇上には貝殻背圧痕を，器面には波状文モチーフを施す土器。胎土中には繊維をほとんど混ぜず，石英粒子・金雲母等を含有する。焼成良好にて非常に薄手。12は同類の胴部破片。どちらかと言えば10に胎土は近似する。

21号住居址出土の石器（第50図13）

磨石，打製石斧各2点，剥片4点出土しており，磨石，打製石斧は接合資料である。

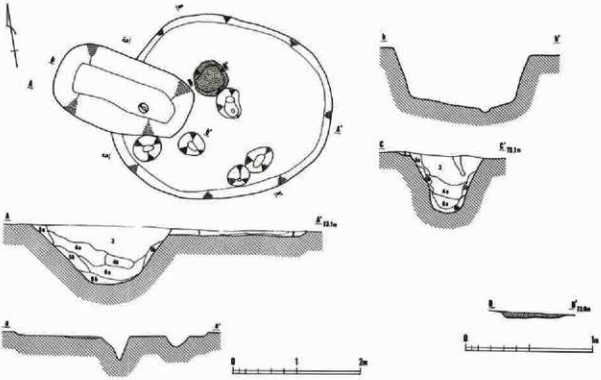
13は，閃緑岩の円礫を用い，表裏面に著しい磨滅痕が観察され，左右側面を中心に全周に，細かな敲打痕が見られる磨石である。下半は床面直上，上半は覆土中より出土し，3.2 mの距離を持って接合している。重量は，上半が193 g，合わせて448 gである。

22号住居址（第51図）

〈位置〉B4グリッドに位置する。

〈形状〉遺構の規模は3.5×2.9（m）で，南北に長い卵形の住居址で，壁高は10cmで，壁面の立ち上がりは不明瞭であった。床面はほぼ平坦で貼床・周溝は認められない。住居址南部を37号土抗に切られている。

〈炉〉住居址中央からやや東に偏って位置し，規模は55×55（cm）とほぼ円形を呈し，深さは4cmである。焼土は残存状態が悪く，わずかな焼土粒がみられるのみである。



第51図　22号住居址・37号土坑（1/60）

〈柱穴〉5基確認され，うち1基は床面からの深さが40cmで，深さ15cmのピットの底面をさらに掘りくぼめた様子をみせる。残るピットの深さは20～25cmである。

〈出土遺物〉土器片3点，石器2点（うち1点は黒曜石の砕片），礫15点が出土している。

〈遺物分布〉（第52図）遺物数が少ない。遺物は遺構内に疎らに散らばる。

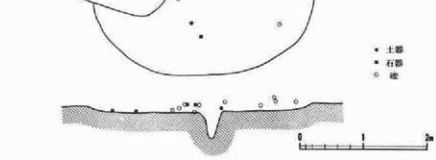
37号土坑（第51図）

〈位置〉B4グリッドに位置する。

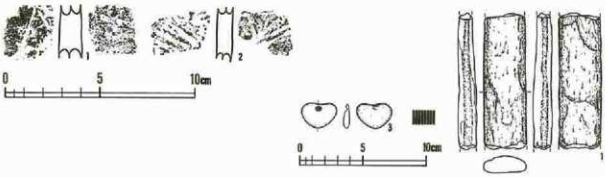
〈形状〉長さ1.9m，幅1.0mの長方形を呈し，確認面から60cmの深さを持つ平底の土坑である。土坑の基底部に径20cm，深さ5cmの小さなピットが見られる。土坑は住居址を切っている。

〈遺物〉遺物は3層上部の，22住の床面と同じ高さから，石剣が出土している。

〈覆土〉住居址の土層は1，2層，土坑の土層は3～6層に分類した。一層は，赤色スコリアを若干含み，ローム・ブロックを含みまだらになる暗褐色土層で，炭化物がわずかに含まれる。しまり悪く，粘性はみられない。2層は，赤色スコリアを若干含むほか，ローム土の含有が1層より明るくみえるが，土質は1層とほとんど変わらず，同一土層と考えてもよい。3層は赤色スコリアを多量含む暗茶褐色土層でしまり良好だが粘性はみられない。4層はa，bに分類した，a層は赤色スコリアを多量に含み，ローム粒がほとんどみられないのに対し，b層は赤色スコリア・ローム細粒がかなり大量に含まれる点で異なる。a，b両層とも茶褐色土層であり，しまりやや悪く，粘性はほとんどみられない。5層もa，bに分類した。a，b層とも褐色土で赤色スコリアが若干含まれるが，b層はローム粒子，黒色土粒を多量に含むがa層にはほとんど含まれていない。a層はしまりがあり，粘性はほとんどみられないのに対し，b層はしまりがやや悪く，粘性が若干認められる。b層もa，bに分類した。a，bに共通なの



第52図　22号住居址・37号土坑の遺物出土状態（1/40）



第53図　22号住居址の出土土器（½）・22号住居址・37号土坑の出土石器（½）

は，土層の色が褐色で，粘性が若干認められる点である。a層は，これもかなり大量の赤色スコリアを含み，ロームブロックが混入する層でしまりやや悪い。b層はa層に比べてやや少ない赤色スコリアが含まれ，ローム粒を若干含み，しまりが良い層である。ここで土坑の土層をa，bに分類したが，亜層であるとは考えにくく，別の層であると考えた方が良い。

22号住居址の出土土器（第53図1，2）

1は棒状工具により沈線文を施す土器。胎土中には繊維及び白色粒子を含み堅緻である。沈線は格子目を構成するものであろうか，一見鋸歯状にも見えるが小破片のため明らかでない。2は表裏に条痕を施す土器。繊維・白色粒子を混入し，焼成良好にて堅緻。第4群5類Cに属するものであろう。

22号住居址の出土石器（第53図3）

玉，砥片各1点が出土している。3は，粘板岩の扁平な小形の礫をそのまま用い，表面からのみ穿孔し，貫通していない未整品段階の玉である。また裏面の穿孔すべき部分に，多少穿痕が見られる。重量は，3.4 g である。

37号土坑の出土石器（第53図1）

土坑覆土中，22号住居址にかかる部分より石剣が1点出土している。1は，断面長楕円に両側面を中心に研磨された石剣の胴部である。遺構外出土の石剣の先端（第155図5）と同一個体であると考えられる。石質は石墨片岩，重量は88.7 g である。

23号住居址（第54図）

〈位置〉Ｂ４，Ｃ４グリッドに位置する。

〈形状〉遺構は長さ3.6m，幅3.0mの方形に似た不整円形で，確認面からの壁高が２cmと低いため，壁面の立ちあがりが不明瞭である。床面はほぼ平坦であったが，炉址・貼床・周溝は認められなかった。

〈柱穴〉住居址内から６基のピットが確認されたが，深いものは住居址北部の２基であり，床面からの深さはそれぞれ，60cm，50cmであった。残る４基のピットは深さが15～25cmであった。

〈出土遺物〉土器片15点，石器７点，礫18点が出土した。

〈遺物出土状態〉（第55図）遺物の平面分布状態は散漫な分布状態を見せる。垂直分布に目を移すと，石器，特に石皿の様な大型の石器に床面直上のものが１点しかなかったのが目立った。

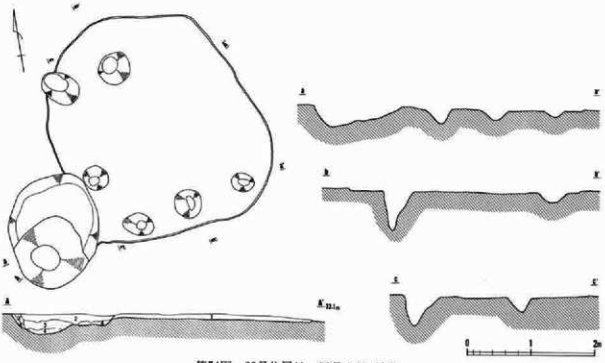
36号土坑（第54図）

〈位置〉Ｃ４グリッドに位置する。

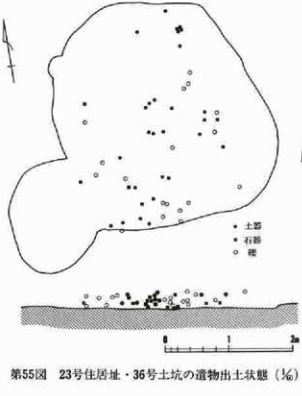
〈構造〉23号住居址と切り合ったが，土層セクションの切り合いから，当土坑が新しい時期のものであると判断した。土坑の規模は1.9×1.4（m）の楕円形で，土坑北部にテラスを持ち，土坑南部に落ち込む断面形を呈し，確認面からの深さは30cmであった。

〈遺物〉土坑の確認面上に石鏃が１点出土した。

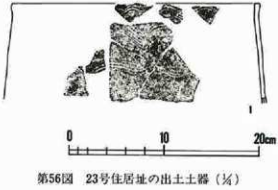
〈覆土〉住居址は確認面からの壁高が２cmと低く，１層のみである。２～４層は36号土坑の土



第54図　23号住居址・36号土坑（1/40）



第55図　23号住居址・36号土坑の遺物出土状態（1/60）

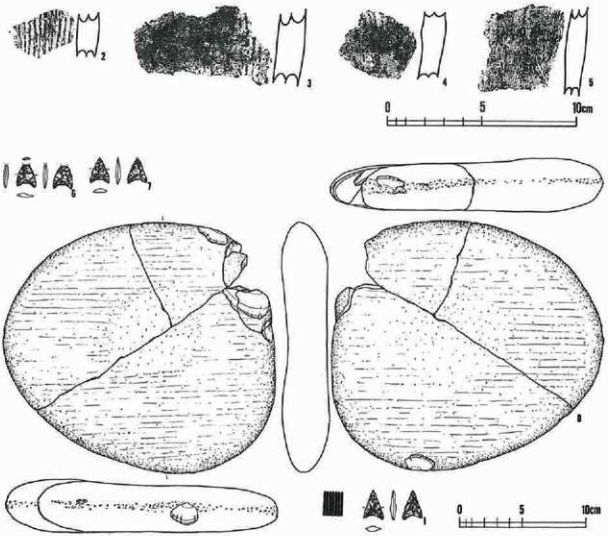


第56図　23号住居址の出土土器（1/4）

層である。1層は住居址全体に広がる暗褐色土層で，ローム細粒を含んだマーブル状の土塊が住居址中央部にみられるのが特徴で，しまり良好で粘性はほとんどみられない。2層は赤色スコリアローム粒子共に少量含み，ところどころに小さなロームブロックを含む暗褐色土層で，しまりは良好だが，粘性はみられない。3層は，赤色スコリアを散量含む，ローム粒はみられないが，ロームブロックが散在する暗褐色土層で，しまり良好で粘性のみられない層である。3′層は3層の亜層で，赤色スコリアを多量に含むほか，ローム粒子が散在しロームブロックがみられない点が3層との差異である。4層は，赤色スコリアを微量，ローム粒子を若干含む。下部にロームブロックがみられる褐色土層でしまりは良好で，粘性は下部に若干認められたが，上部からは認められなかった。

23号住居址出土の土器（第56図，57図2～5）

1は天神山式相当の土器。本址確認面に散在して出土したもので，図上復元を試みた。口縁やや内傾する器形で，波状文モチーフを二条ないし三条施す。口唇上には磨滅により判然としないが，貝殻背圧痕が施されているようである。同工具であれば，口縁部文様も貝殻と言う事になろうか。胎土中には繊維をほとんど混ぜず，石英粒子・金雲母等を多く含有する。焼成良好にて非常に堅緻，薄手（4㎜）である。2は第2群撚糸文の土器。遺構外出土のもの（第78図5）と同一個体であろう。胎土中には石英粒子を含んでいる。3，4は条痕の土器。いずれも第4群5類Eに属するもので，胎土中に白色・赤色の粒子及び石英粒子を含む。繊維



第57図　23号住居址の出土土器(½)・23号住居址・36号土坑の出土石器（½）

は若干量である。5は無文部。3，4と類似の胎土を示し灰褐色を呈する。

23号住居址出土の石器（第57図6～8）

石鏃2点，石皿とその破片10点，剥片1点の合計13点が出土している。

6，7は，チャート製で，裏面中央に素材の剥離面を残す凹基の三角形石鏃である。重量は6は先端を欠損するが，0.8g。7は，0.7gである。8は，遺構外の一点をふくめ，5点が接合する石皿である。閃緑岩の扁平の礫を素材とし，表裏両面に磨滅痕が観察され，使用のために中央部が凹んでおり，使用頻度が高かったものと考えられる。周辺にも，敲打痕がみられ，その様な敲打の作業中に欠損したと考えられる。重量は合計で2643gである。尚，7と8は，床面直上から出土している。

36号土坑出土の石器（第57図1）

チャートの剥片を素材とする凹基の三角形石鏃が1点出土している。重量は，1.1gである。

24号住居址（第58図）

〈位置〉Ｂ３，Ｂ２グリッドに位置する。

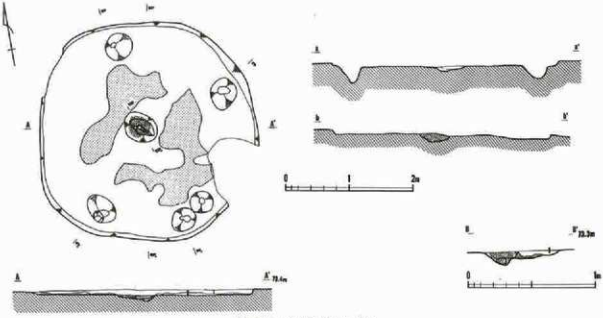
〈形状〉遺構南西部，北東部に攪乱がみられるが，規模3.4×3.4（m）の円形を呈する住居址である。確認面からの壁高は７㎝で，壁面の立ちあがりはあまり明瞭でない。床面はほぼ平坦で，周溝は確められなかったものの，炉址をとり囲む様に地山のソフトロームが硬化した（ローム貼床ではないかと思われる）部分が２箇所，住居址床面のかなり広い部分にみられた。＜覆土＞１，２層と分類したが，同一土層と考えても良く，赤色スコリア・ロームブロック等の混入物が漸移的に変わるものと考えられる。１，２層とも暗褐色土層で，黒色土の細粒を含み，壁際にロームブロックが混入する。

〈炉〉住居址のほぼ中央に位置し，平面形は55×43（㎝）の楕円形を呈し，深さは10㎝である。土層は３層に分類され，焼土粒子は主に２，３層に含まれるが，特に２層においては焼土粒子がブロックとなって検出されている。

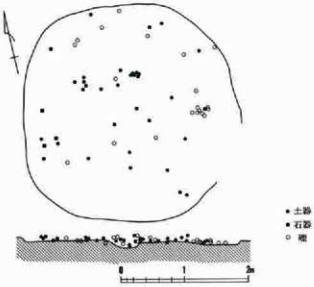
〈柱穴〉住居址内からピットは５基確認された。うち４基は床面からの深さが20～30㎝で，最も深いものでも，40㎝であった。

〈出土遺物〉土器片23点，石器12点，礫20点が出土した。

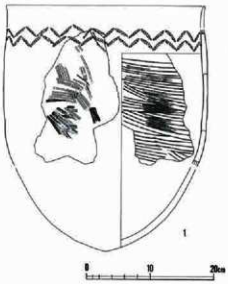
〈遺物出土状態〉（第59図）平面的に見ると炉の北側付近に土器が，住居址東部に礫が密に出土しているものの，遺物は全体的には散漫に分布している。垂直分布をみると，住居址覆土下部から床面床上にかけての遺物の出土が目立ち，また，確認面から床面までの高さが10㎝未満だったことを考慮すると，遺物の大半はこの住居址のものであると考えて良いだろう。



第58図　24号住居址（1/80）



第59図　24号住居址の遺物出土状態（1/40）



第60図　24号住居址の出土土器（1/6）

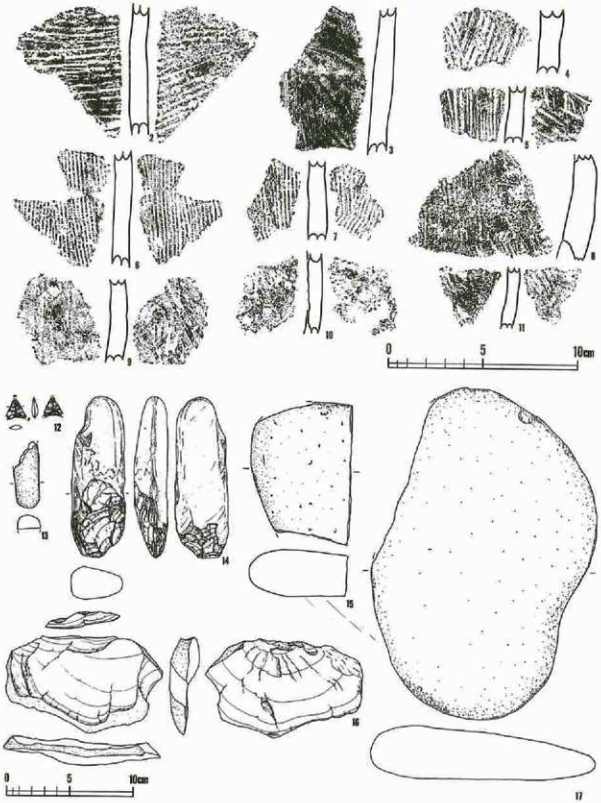
土器（第60図1，第61図2～11）

1は貝殻腹縁文の土器，胴部破片であるが図上復元を試みた。若干胴部に膨らみを持つ器形で，上位に施される腹縁文は長さ2.4cmの腹縁弧で下方に開き，連なり山形文を構成している。器外面では右下方向に，内面では横方向に条痕を施し，特に外面では中太及び細目の二種を上下に使い分け，以後軽く磨きを加えている。胎土中には繊維をほとんど混ぜず，白色の粒子を多く含んでいる。

石器（第61図12～17）

石鏃，部分磨製石斧，棒状礫各1点，石皿3点，剝・砕片6点の合計12点が出土している。

12は，チャートの剝片を用い平面を三角形で多少基部を凹ませる様に加工を施した石鏃である。重量は，15.9gである。14は，凝灰岩の棒状の礫を素材とし，刃部を中心に加工を施したのち，表面刃部左側を中心に部分的に研磨している。胴部は，礫をそのままで用いているが，左側面には敲打によるつぶれが見られる。重量は，188.6gである。15，17は，閃緑岩の扁平な礫を用いた石皿である。15は，細粒の石質を用いているが，表裏両面を利用したと考えられる。重量は，608gで，417gの同一個体の石皿も出土している。17は，磨滅痕や敲打痕があまり見られない比較的大形のもので，重量は，2600gである。16は，ホルンフェルスの横長剝片で，打製石斧等の素材として剝取されたものと考えられる。また，表面の剝離面には，同様な剝片が接合する。重量は，151.4gである。尚，13～16は床面直上から出土している。



第61図　24号住居址の出土土器（½）・石器（⅓）

13，14号土坑（第62図）

〈位置〉Ｆ６グリッドに位置する。

〈形状〉13号土抗は長径3.2m，短径2.4mの楕円形の土坑と推定され，長径の方向は東西である。深さは35cmの土坑で，土坑内に深さそれぞれ60，70cmの柱穴状のピットが検出された。13号土坑は規模２.５×１.７（ｍ）の不定形の土坑と推定され，深さは25cmである。この土坑も深さそれぞれ50，60cmの柱穴状のピットが検出された。13号土坑と14号土坑の新旧関係は，土層セクション図から，14号土坑が新しい土坑であると考えられる。

〈覆土〉13号土坑の土層は，１～３に，14号土坑の土層を４～６とし，それぞれ土層分析をする事にする。１層は赤色スコリアをかなり多量に含む暗褐色土層で，しまりやや悪く，粘性はほとんど無し。２層は赤色スコリアを多量，黒色スコリアを若干，ロームがブロック状に混入する褐色土層でしまり悪く，粘性は無い。３層は赤色スコリアを多量，黒色スコリアを微量含む明褐色土層でしまり悪く，粘性は無い。４層は赤色スコリアを少量含み，ローム粒子，ロームブロックを若干含む暗茶褐色土で，しまり良好，粘性はほとんど無い。５層は赤色スコリアを多量，炭化物，焼土粒を微量含み，ローム粒，ロームブロックが若干含まれる茶褐色土層であり，しまりはやや良く，粘性のある土層である。６層は赤色スコリアを若干含み，ローム粒，ロームブロックを多量に含む褐色土層で，しまりはほとんどなく，粘性が若干みられる土層である。

〈出土遺物〉13号土坑の出土遺物は土器片７点，石器（石鏃）１点，礫３点であり，14号土坑の出土遺物は土器片24点，石器はチャートの剥片を用いた石鏃（第64図８番として掲載されているもの）１点が，礫は11点が出土している。

〈遺物の分布〉（第63図）

13，14号土坑とも遺物は確認面上，或いは第１層である１，４層からほとんどの遺物が出土し，坑底面直上の遺物はみられなかった。また，14号土抗の南部に土器が密集して出土しているが，これは早期尖底土器の一個体である。

26号土坑（第62図）

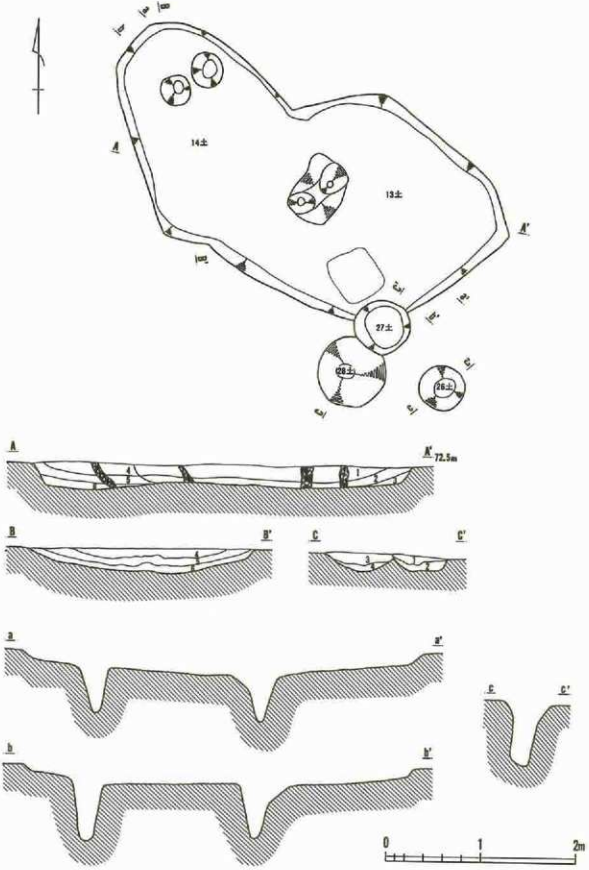
〈位置〉Ｆ６グリッドに位置する。

〈形状〉規模50×50（cm）の円形を呈し，確認面からの深さは68cmで，柱穴状の掘り込みを見せる。遺物は出土していない。

27，28号土坑（第62図）

〈位置〉Ｆ６グリッドに位置する。

〈形状〉27号土抗は規模75×70（cm）で，深さは20cm。28号土抗は規模60×60（cm）の円形を呈し深さは20cm。両土坑の新旧関係は覆土の堆積状態から27号土坑が新しい時期の遺構であ

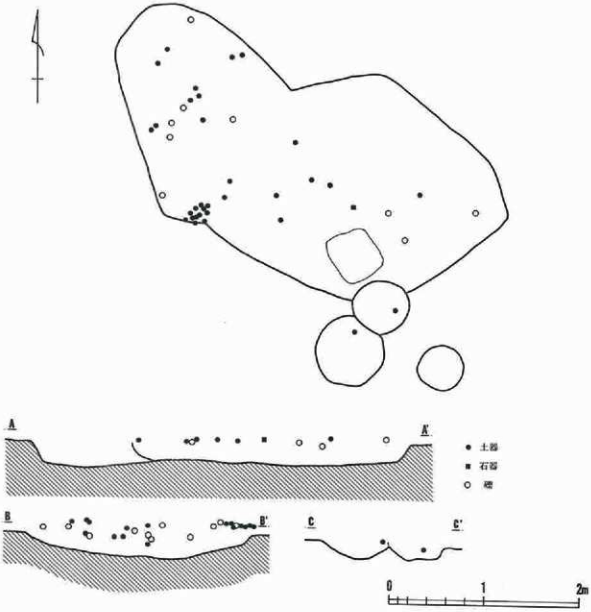


第62図　13・14・26・27・28号土坑（1/40）

る。また，28号土坑は13号土坑とも切り合う。これも覆土の堆積状態から28号土坑が新しい時期の遺構であることがわかっている。

〈覆土〉28号土坑の覆土を1，2，27号土坑の覆土を3，4層とする。1層は赤色スコリアを微量，ローム粒子を少量含む暗褐色土層で粘性は認められない。2層は赤色スコリアを微量含む明褐色土層で粘性が若干認められる。3層は赤色スコリアを少量，ローム粒子を若干量含む暗褐色土層で粘性は認められない。4層はローム粒子を多量に含む暗褐色土層で粘性が若干認められる。1～4層共にしまりは良好である。

〈遺物〉27号土坑からは縄文時代早期末葉の東海系の土器片1点が，56号土坑からは無文の土器片1点がそれぞれ出土している。



第63図　13・14・27・28号土坑の遺物出土状態（1/40）

13号土坑出土の土器（第64図上１～７）

１～３は隆帯を持つ土器。いずれも口縁に二段にめぐる粘土帯を貼り付け，棒状工具により押圧を加えるもの。１，２は別にもう一段隆帯を持つと考えられるが，剝落ないし欠損により判然としない。器面は内外とも条痕を施すが，１，３などは外面良好な研磨により消されている。胎土中には繊維を混じるが他の混入物は認められない。４は１～３と同類の胴部破片。５，６は無文部。器面に条痕を施し，その後研磨されたもので，胎土中にはやはり繊維のみ顕著に認められる。７は入海Ⅰ式ないしⅡ式に相当する土器。薄手で焼成良好，胎土中にはほとんど繊維を混じていない。

13号土坑出土の石器（第64図上８）

チャートの剝片を用いた不定形の石鏃が１点出土している。素材剝片の裏面が石器の表面にあたる。不定形なため未整品とも考えられよう。重量は，1.5ｇである。

14号土坑出土の土器（第64図中１～６）

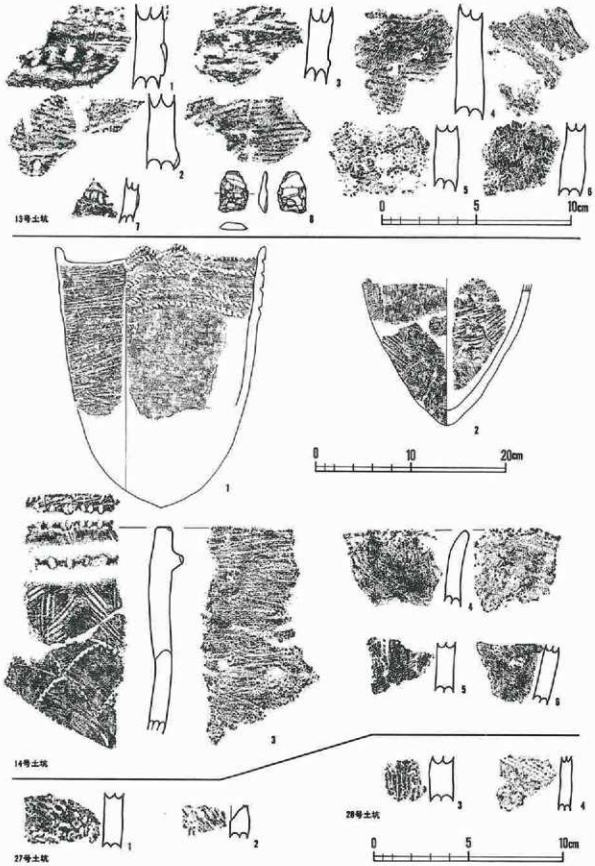
１は石山式相当の土器。口縁に四条に亘る列点文を持ち，口唇上にも同様の工具による押圧刻目が施される。工具はおそらく半截竹管状のものと推定されるが明らかでない。器面は良好に研磨され，内面は横位の浅い条痕を留めている。胎土中には石英及び輝石の微粒子を含有する。３の土器に非常に似たものである点から在地で製作された可能性もあろう。２は条痕土器尖底部。条痕は器の内外に施され，外面では主に縦位に，内面では不規則に認められる。胎土中には多量の繊維を混じている。３は貝殻腹縁文の土器。口唇に断面三角形の隆帯を一条巡らし，直下に格子目状の条痕文，さらに菱形を構成する貝殻腹縁文を施す。口唇上部には斜めの条線及び外面に隆帯上に施すものと同様の押圧刻目を加える。器面は研磨されているが，内面ではやはり横位の条痕を留める。胎土中には白色・石英の粒子を多量に含み，焼成良好にて非常に堅緻である。第４群５類Ｆに属する。４は無文の土器口縁部破片。緩やかな波状を呈し，内外とも良く撫でられている。胎土中には繊維・白色の粒子を含み，ザラザラした感じを持つ。第４群５類Ｅに属しようか。５は条痕の土器。胎土中に多量の繊維を含み同群５類Ｄに属すると思われる。黒褐色。６は無文部。前記３と同類と考えられる土器である。

27 号土坑の出土土器（第 64 図下１～２）

１・２は第４群５類Ｆの土器。いずれも器面は良く研磨され，胎土中には繊維をほとんど混ぜず，白色粒子・石英粒子を多く含んでいる，赤褐色。

28 号土坑の出土土器（第 64 図下３～４）

３は条痕の土器，胴部破片。条痕は細めの条で，以後研磨される。胎土中の繊維は微量で白色の粒子を若干量混入する。黄褐色。４は天神山式に相当する土器。器面は良好に研磨され，波状を呈するであろうモチーフが認められる。黄褐色で，胎土中にはほとんど繊維を混ぜず，白色粒子及び石英粒子等混入する。焼成良く堅緻である。



第64図　13・14・27・28号土坑の出土土器(1/2)・(1/6)・13号土坑の出土石器(1/3)

15，16，18号土坑（第65図上）

〈位置〉Ｆ５グリッドに位置する。

＜形状＞16号土坑は70×60（cm）の規模を持ち，確認面からの深さは13cmである。18号土坑は規模60×45（cm）の楕円形を呈し，確認面からの深さは15cm。16号土坑と18号土坑は互いに切り合い南京豆状の平面形を呈する。両土坑の新旧関係は不明。15号土坑は規模250×180（cm）の不定形を呈する土坑で，確認面からの深さは10cmで，平坦な坑底面である。また土坑南部には，深さ115cmの土坑内ピットが見られる。この土坑内ピットがこの土坑のものであるか不明である。15号土坑は16，18号土坑と切り合うが，平面プランから16号土坑が新しい時期のものであることがわかっている。

〈覆土〉15号土坑の覆土は３層に分類される。１層は赤色スコリアを多量含む茶褐色土層で，しまり悪く，粘性は認められない。２層は赤色スコリアを多量含む明茶褐色土層で，しまり若干悪く，粘性はほとんど認められない。３層は赤色スコリアを多量含む明茶褐色土層で，しまり悪く，粘性が認められる。

〈遺物〉16号土坑からは礫２点が出土した。15号土坑からは礫８点，条痕文の土器２点が確認面上あるいは覆土上部から出土した。18号土坑出土の遺物はない。

17号土坑（第65図下）

〈位置〉Ｆ５グリッドに位置する。

〈形状〉規模250×230（cm）である。土坑の掘り込みは住居址に近く，抗底面はほぼ平坦であり，柱穴状のピットが４基確認されている。土坑の深さは16cm，土坑内ピットの深さは坑底面からそれぞれ110cm，95cm，80cm，７cmである。貼床・炉などは認められなかったが，小型の住居址であるかもしれない。

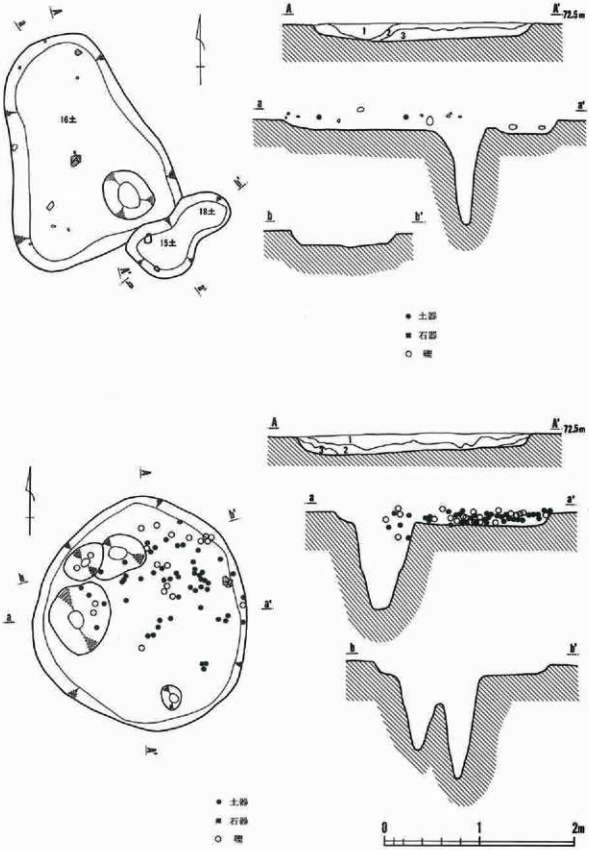
〈覆土〉３層に分類される。１層は赤色スコリアを少量含む茶褐色土層でしまり良好で，粘性はほとんど認められない。２層は１層の亜層で，赤色スコリアを多量含む。３層は赤色スコリアを少量含む明茶褐色土層でしまり良く粘性が若干認められる。

〈出土遺物〉土器片53点，石器なし，礫33点が出土している。

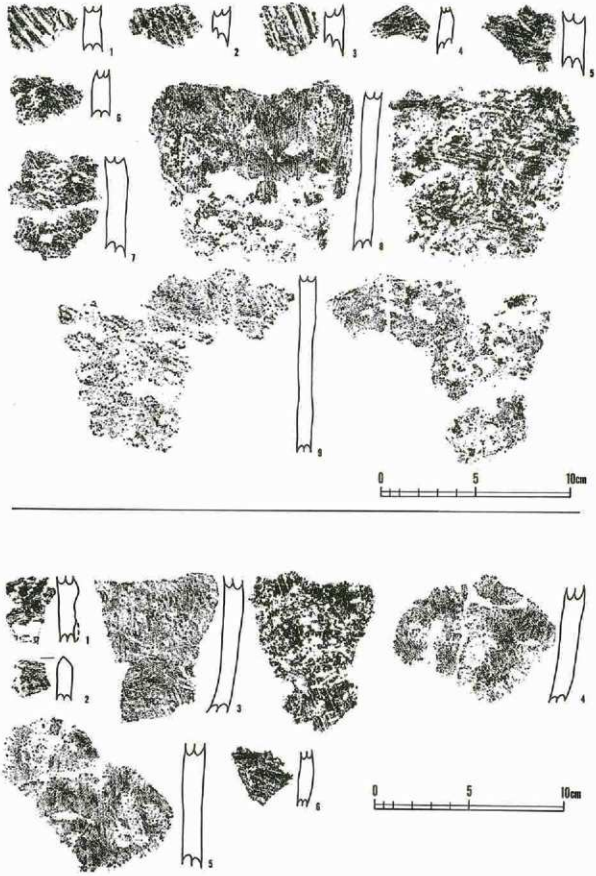
〈遺物出土状態〉遺物は遺構北西部に集中して出土する。遺物は確認面から覆土中にほぼ均等な垂直の広がりを見せる。坑底面直上の遺物も多い。

16号土坑出土の出土土器（第66図上１～９）

１～５は第４群５類Ｄに属する条痕の土器。胎土中には非常に多くの繊維を混じ，他の混入物はほとんど認められない。６～９は上記同類と考えられる胴部の破片で，やはり多量の繊維を混じている。特に底部付近では，これの抜けたような痕跡が著しい。



第65図　15・16・18(上)・17(下)号土坑（1/40）



第66図　16(上)・17(下)号土坑の出土土器（1/4）

17号土坑出土の土器（第66図下1～6）

1は貝殻腹縁文の土器。腹縁文は器面を隆帯様に若干盛り上がらせた所に押捺され，おそらくは上下二条と思われるが下段は剝落してしまっている。胎土中には多量の繊維が認められる他，石英粒子等を含む。第4群1類・第79図2の土器と同一個体の可能性あり。

2は無文の口縁部破片。緩やかな小波状を呈し，口唇は外削状となる。内外面とも良好に研磨され，胎土中には多量の繊維を混入する。3は器面に刷毛目様の条痕を施す土器。内面は条の広い条痕を縦方向に施し，以後良く研磨されている。胎土中には繊維を少量と白色の粒子を多量含み，ザラザラしている。第4群5類Eに属するものであろうか。4・5は無文の土器。器面は良好に研磨され条痕を留めない。胎土中に混入される繊維は稀少で，白色の粒子・石英粒子を若干含み，やはりザラザラしている。同群6類に属しよう。6は天神山式相当の土器。器面は良好に研磨され，胎土中にはほとんど繊維を混ぜず，石英粒子を多量に含有する。

20号土坑（第67図上）

〈位置〉E6，F5，F6グリッドに位置する。

〈形状〉規模90×88（cm）のほぼ円形を呈する土坑の坑底部に，深さそれぞれ120cm，45cmの柱穴址の柱穴状のピットが並んで掘られている様な状態で確認された。

〈覆土〉6層に分類される。1層は赤色スコリア，炭化物粒子を微量含む暗褐色土層で，処々に小さなロームブロックが見られる。しまり良く粘性はほとんど認められない。2層は赤色スコリアを微量含む褐色土層で，しまり若干悪く，粘性ほとんどなし。3層はローム粒子を多量に含む褐色土層でしまりやや悪く，粘性が若干認められる。4層は赤色スコリアを微量に含む明褐色土層でしまり良好で，粘性が認められる。5層は基本的に1層と，6層は4層とそれぞれ同様の性質の土で亜層ではないかと考えられる。

〈時期〉不明。

21号土坑（第67図上）

〈位置〉F5，F6グリッドに位置する。

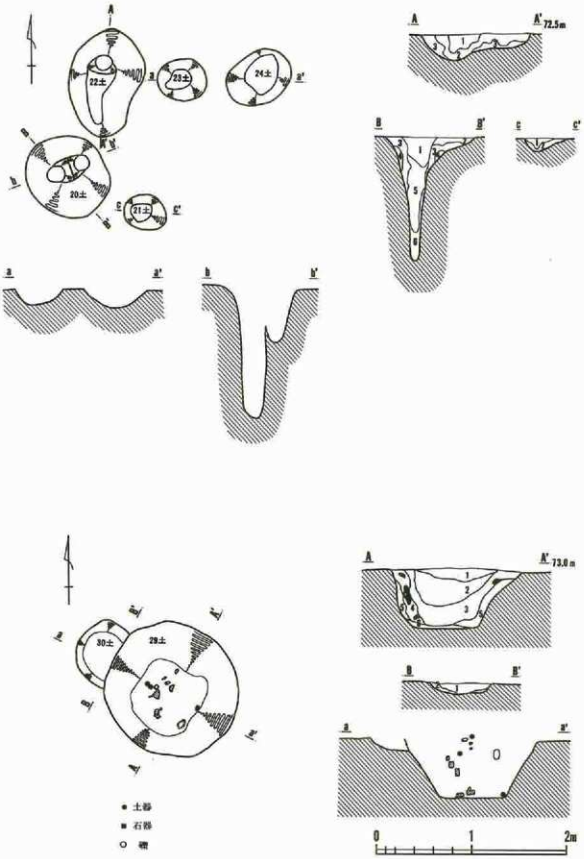
〈形状〉規模43×39（cm）の潰れた円形を呈し，確認面からの深さは15cm。土坑最深部が西側に偏るため，東側は緩やかな，西側は急な立ち上がりを見せる。

〈覆土〉2層に分類される。1層は赤色スコリア・ローム粒子を微量含む暗褐色土層で，しまり若干悪く，粘性はほとんど認められない。2層は赤色スコリアを若干量含む褐色土層で，締まり良好で粘性は若干認められる。

〈時期〉不明。

22号土坑（第67図上）

〈位置〉F6グリッドに位置する。



第67図　20～24(上)・29・30(下)号土坑（1/40）

〈形状〉規模120×80（cm）である。この土坑は楕円形を呈し，確認面からの深さ20cmの土坑を円形を呈する深さ28cmの土坑が切っている。この新旧関係は，覆土の堆積関係からも判断することができる。

＜覆土＞大きく３層に分類される。１層は赤色スコリア，ローム粒子を微量に含む暗褐色土層でしまり悪く，粘性はほとんど認められない。２層は１層との漸移層で，しまり若干悪く粘性はほとんど認められない。３層は赤色スコリアを微量含む明褐色土層で，しまりやや悪く粘性が認められる。

〈遺物〉条痕文系の土器が円形を呈する土坑部分の坑底面上３cmのレベルで出土するほか，無文の土器１点が出土する。

23号土坑（第67図）

〈位置〉Ｆ６グリッドに位置する

〈形状〉規模52×48（cm）と卵形を呈し，確認面からの深さは15cmである。

〈覆土〉２層に分けられ，少量の赤色スコリアと微量のローム粒子を含む暗褐色土層。しまり若干悪く，粘性は認められない。２層は赤色スコリアを微量に含む明褐色土層でしまり良好で，粘性が若干認められる。

〈時期〉不明。

24号土坑（第67図上）

〈位置〉Ｆ６グリッドに位置する。

＜形状＞規模67×62（cm）の卵形を呈する土坑で，確認面からの深さは17cmで緩やかに立ち上がる。

＜覆土＞２層に分けられ，１層は少量の赤色スコリアと微量のローム粒子を含む暗褐色土層。しまり若干悪く，粘性は認められない。２層は赤色スコリアを微量に含む明褐色土層でしまり良好で，粘性が若干認められる。

〈時期〉不明。

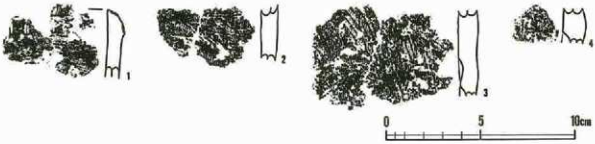
29，30号土坑（第67図下）

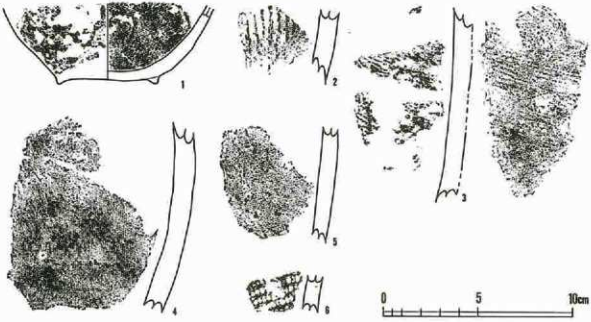
〈位置〉Ｂ４グリッドに位置する。

〈構造〉145×145（cm）の円形をなす土坑で深さは約65cmである。この土坑は30号土坑と切り合うが，セクション図から29号土坑が新しい事がわかっている。またこの土坑の坑底面は方形平底であり，踏み固められた様に硬化している，ハードローム直上のためかもしれない。

30号土坑は70×63（cm）の楕円形を呈し，確認面からの深さは13cmである。

〈覆土〉６層に分け，分析した。１層は赤色スコリアはほとんど含まず，ローム細粒，炭化物をごく微量，白色スコリアを若干含む。２層は赤色スコリア，ローム細粒，炭化物を多量に含み，ロームブロックの混入も若干みられる。３層は赤色スコリアを多量，ローム細粒を微量





第68図　22(上)・29(下) 号土坑の出土土器 (½)

に含むが，炭化物はほとんど見られない。褐色土がところどころブロック状に混入する。1～3層は基本的には同一土層であり，しまり良好で，粘性はほとんどみられない暗褐色土層であり，分類は土層に含まれる含有物によった。4層は赤色スコリアを多量に含むが，下部からはほとんどみられない褐色上層でしまりがやや悪い。5層は赤色スコリアを多量に含み，ロームと混じり合いもやもやした状態を呈する明褐色土層でしまり・粘性のある層。6層赤色スコリアはほとんどみられず，ソフトロームがブロック状に入るが混じり合っていない茶褐色土層で，しまり良く，粘性が若干みられる。

30号土坑の覆土は2層に分類され，1層は赤色スコリアを少量含む暗褐色土層で，粘性はほとんど認められない。2層は赤色スコリアを少量，ロームの細粒を多量含む明褐色土層で，粘性が認められる。1，2層ともにしまりは良好である。

〈遺物〉30号土坑からは出土しなかったが，29号土坑からは12点の遺物（土器8，礫4）が出土している。うち，土器3点は坑底面直上から出土している。

22号土坑出土の土器（第68図上1～4）

1は隆帯文の土器。口唇僅かに残存し，これによると外削状を呈し，直下に一条の隆帯を有する。両者には同様（割竹状）工具による刻目が施されている。胎土中には多量の繊維を混入する他，別の混入物は認められない。2はこれの胴部破片で器面は1同様研磨されている。2は条痕の土器。胎土は前二者と非常に近似しており，同一個体とも看取可能である。第4群4類（第80図8・9）と同類である。4は小破片のため判然としないが，第4群5類Eの条痕土器であろう。特徴である砂っぽい素地土，そして白色粒子を含有する。

29号土坑出土の土器（第68図下1～6）

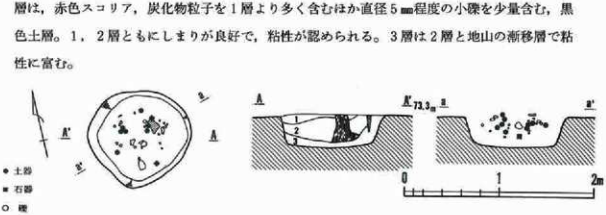
1は底部，器面は被熱により著しく発泡しているが，おそらく無文であったと思われる。内面は良好に研磨され，条痕は認められない。底部は上げ底様で，粘土紐の貼り付けにより仕上げられている。第4群6類に属すると思われる。2，3は条痕の土器。2は表裏に条痕を持つが，非常に堅い感じで，胎土中の繊維量も少ない。第4群5類Cに近似する。3は黒褐色を呈し，内外に条痕を持つ点では2に共通するが，胎土中に非常に多くの石英粒子を含んでいる。特に外面には繊維の脱痕が著しく，器面観察さえ許されない。4，5は同群5類Fに属すと考えられる胴部破片。6は縄文施文の土器。RLの原体を比較的明瞭に押捺する。胎土中に繊維を多く混入している。

35号土坑（第69図）

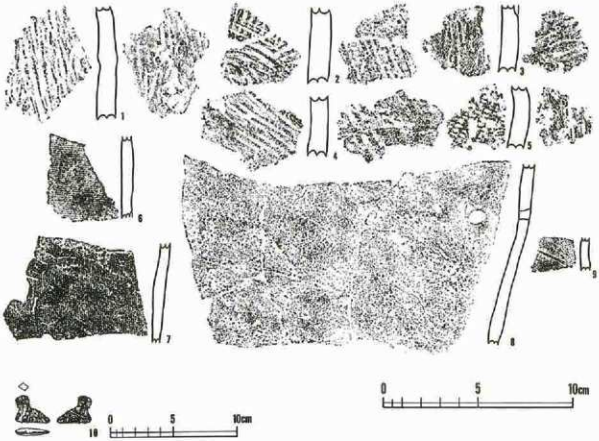
〈位置〉B3グリッドに位置する。

＜形状＞規模100×90（cm）の不整円形を呈する。確認面からの深さは深さは35cmである。坑底面は平坦でなく，二箇所に凹み部分が見られる。

〈覆土〉3層に分類される。1層は赤色スコリアを少量，炭化物を若干含む暗茶褐色土層。2層は，赤色スコリア，炭化物粒子を1層より多く含むほか直径5mm程度の小礫を少量含む，黒色土層。1，2層ともにしまりが良好で，粘性が認められる。3層は2層と地山の漸移層で粘性に富む。



第69図　35号土坑（1/40）



第70図　35号土坑の出土土器（½）・石器（⅓）

〈遺物〉土坑内から礫25点，石器（石匙）1点，土器（東海系無文・条痕文系）13点が，1，2層から出土し，3層からの遺物はない。

〈時期〉遺物から，縄文時代早期末葉の遺構と考えられる。

土器（第70図1～9）

1～4は条痕を施す土器。1は黄褐色にて繊維を混じ，第4群5類Cに属する。2～4は同類Eに属し，少量の繊維と白色粒子を含む。5は縄文の土器。外面は縄文原体LRにて，内面は縦位方向の条痕を施す。胎土中には多量の繊維を混じる。若干量の石英粒子も含む。6～8は無文の土器。同一個体と考えられ，内外とも良好に研磨されている。胎土中には，ほとんど繊維を混ぜず，石英粒子・他の微細な小石粒を含む。極めて薄手な土器である。第5群5類天神山式土器に近似している。当該型式のものであろうか。9は前記一括資料と良く似た胎土を示す天神山式相当の土器で，器面には，波状文モチーフが見受けられる。

石器（第70図10）

黒曜石の剥片を用い，表裏面に入念な加工を施した三角形の小形，横形石匙が1点出土している。重量は，2.0gである。

38号土坑（第71図）

〈位置〉Ｂ４グリッドに位置する

〈形状〉130×125（cm）のほぼ円形を呈する土坑で深さは64cm。坑底面はほぼ平底であり，ズン胴鍋状の土坑であったと考えられる。

＜覆土＞大きく４層に分類した。１層はソフトロームであるが，地山のロームとは明らかに異なる。２層は赤色スコリア・炭化物が微量に混入する黒褐色土で，しまり粘性共にみられた。３層は赤色スコリアが多量に混入する黒褐色土で，ロームブロックの混入もみられる。しまり良好で粘性に豊む。３′層の３層との違いは混入物の違いで，３′層は土坑の東側から流れ込んだ様に多量の焼土粒を含むが３層にはそれがみられない点である。４層は赤色スコリア・炭化物を微量に含む黒褐色でしまりはあるものの，粘性はない。

〈出土遺物〉土器片９点，礫12点が出土した。うち礫２点は坑底面直上の出土である。また，３，３′層からの遺物の出土はなかった。

39号土坑（第71図）

〈位置〉Ｂ４，Ｃ４グリッドに位置する。

〈形状〉規模85×70（cm）の卵形を呈し，確認面からの深さは16cm。立ち上がり面，坑底面には，凹凸がみられる。

〈覆土〉２層に分類される。１層は，少量の炭化物が混入する暗褐色土層で，しまり良好で粘性に富む。２層は地山との漸移層と考えられ，ローム粒子を多量に含む明褐色土層で，赤色スコリアを少量，炭化物を微量に含む。しまり悪く粘性認められる。

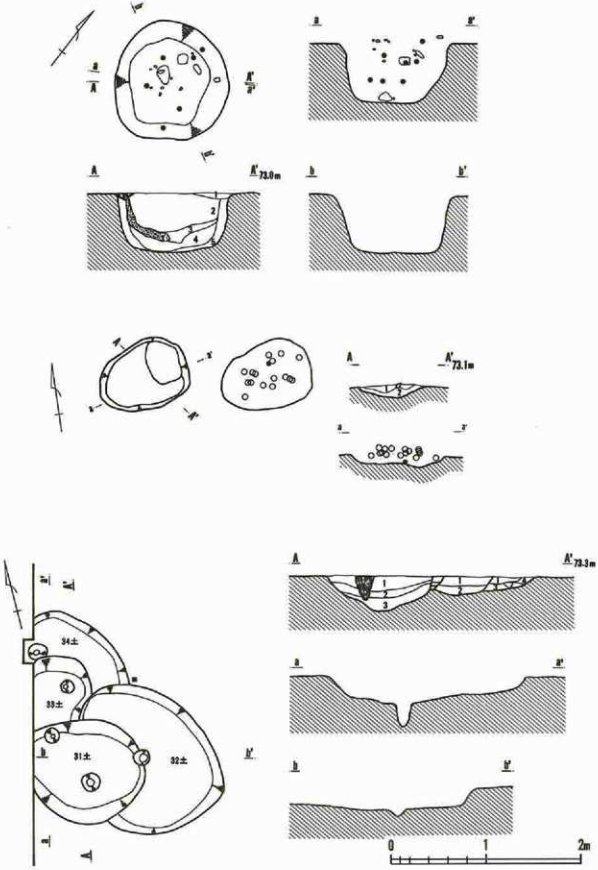
〈遺物〉礫18点，土器１点。礫は総じて，１層及び確認面上から出土した。土器は条痕文系であり，坑底面直上から出土している。

31，32，33，34号土坑（第71図）

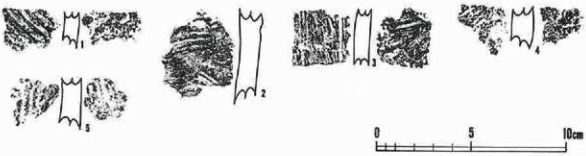
〈位置〉Ｂ４グリッドに位置する。

〈形状〉31号土坑は規模130×110（cm）の卵形を呈する土坑であると推定され，遺構の西部の一部は今回の調査区域外で未発掘である。確認面からの深さは30cmで，土坑坑底面に２基土坑内ピットが確認され，深さはそれぞれ10cm，８cmである。土坑の坑底部・立ちあがり部分には凹凸が認められる。

32号土坑は規模180×140（cm）の卵形を呈し，確認面からの深さは30cmで緩やかに立ち上がる。坑底面の中心に深さ２cmの凹み部分が見られる。33号土坑は他の遺構と切り合ったり，土坑西部が調査区域外であったため，規模・平面形ともに不明である。土坑の上端を34号土坑に切られているが，確認面からの深さは20cmである。土坑内に深さ６cmのピットが確認される。34号土坑も規模・平面形は不明である。確認面からの深さは10cm，坑底面はほぼ平坦で，深さ25



第71図　38・39・31～34号土坑（1/40）



第72図　38(上)・39(下) 号土坑の出土土器 (½)

cmの柱穴状の土坑内ピットが確認された。

〈覆土〉31号土坑覆土は3層に分類される。1層は直径1㎜程度の赤色スコリアを少量，炭化物を微量に含む暗褐色土であり，しまり，粘性共に認められる。2層は直径2㎜程度の赤色スコリアを含む茶褐色土層で，しまり，粘性は1層と同程度である。3層は直径2～5㎜の赤色スコリアを多量含む明褐色土層で，しまり良好で粘性に富む。32号土坑覆土1，2層はそれぞれ31号土坑覆土の1，2層と同様の性質を持つ。3層は2層とほぼ同様の土質で，炭化物を微量含み，土の色もいくぶん明るい土層で，しまりが非常に良好で粘性に富む。4層は31号土坑の3層と同様の土層である。33号土坑の覆土1，2層はそれぞれ31号土坑の1，2層と同様の土質，3層は32号土坑の3層と同様の土質，4層は31号土坑の3層と同様の土質である。34号土拡の覆土の1，2層はそれぞれ31号土拡の1，2層と，3層は32号土拡の3層と同様の土質である。4層は立ちあがり部分，或いは地山の崩れたローム土であり，含有物はほとんど認められず，粘性に富む。

〈遺物〉遺構内からの遺物の出土はなかった。ただし，31，34号土坑が切り合うすぐそばの遺構外の確認面上から，石鏃が出土しており，遺構と関係する可能性が高い。

＜時期＞不明。

38号土坑の出土土器（第72図1～4）

1～4は条痕の土器。1は中広の条にて右下方向に施され，内面は撫でられる。胎土中には多量の繊維と白色の粒子を含む。第4群5類D。2は胎土中に多量の繊維を混じザラザラした感じを受ける同類Eの土器である。欠損のため判然としないが上端に隆帯状の膨らみを有しており，隆帯貼付の可能性もあろうか。3は同類D，4はEに属する胴部破片である。

39号土坑の出土土器（第72図5）

5は内外面に条痕を持つ土器。条痕を施した後研磨される。胎土中の繊維混入は少量で，白色粒子を多く含む。第4群5類Cに属するものであろうか。

42，43号土坑（第73図）

〈位置〉Ｄ４グリッドに位置する。

〈形状〉42号土坑は規模140×120（cm）の不整円形を呈し，確認面からの深さは17cm，緩やかな立ちあがりを見せる。43号土坑は規模165×140（cm）の卵形を呈する土坑で，確認面からの深さは12cmである。遺構は42号土坑が43号土坑に切られていることが覆土の堆積状態から明らかになっている。

〈覆土〉42号土坑の覆土１層は若干量の赤色スコリアを含む暗褐色土で，粘性は認められない。２層はロームブロックを多量含む明褐色土層で，若干の粘性が認められる。１，２層共にしまりは良好である。

43号土坑の覆土は２層に分類され，１層は42号土坑覆土２層と同様の同質である。２層はしまり悪く，粘性が認められず，ボソボソした感じの褐色土層である。

〈遺物〉42号土坑からは６点の礫が確認面上から出土した。43号土坑からは17点の礫と３点の条痕文系の土器と１点の無文土器が１層下部および２層上部から出土している。礫は１点坑底面直上に出土しているが，残る礫は確認面上に散らばる。

〈時期〉42号土坑は不明。

44，45号土坑（第73図）

〈位置〉Ｄ４グリッドに位置する。

〈形状〉44号土坑は規模140×130（cm）の不整円形を呈し，確認面からの深さは13cmである。45号土坑は規模180×170（cm）の不整形を呈し，深さは14cmである。両土坑共に緩やかな立ちあがりで，断面形は皿形に近い。

〈覆土〉44号土坑の覆土１層は赤色スコリアを若干含む暗褐色土層で粒子が細かく，粘性はほとんど認められない。２層はロームブロックを多量含む明褐色土層で粘性が認められない。１，２層共にしまりが良好である。52号土坑の覆土１層は若干のロームブロックを含む暗褐色土層で，粒子が細かい。２層はロームブロックを多量に含む明褐色土層である。１，２層ともにしまりが良好で粘性は認められない。

〈遺物〉44号土坑からは礫が１点，45号土坑からは礫が７点出土している。

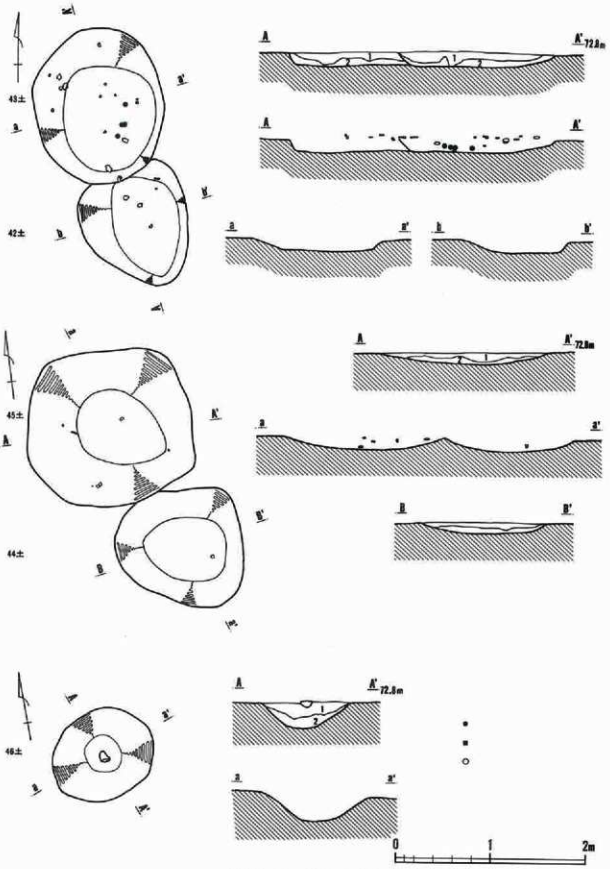
〈時期〉両土坑ともに不明。

46号土坑（第73図）

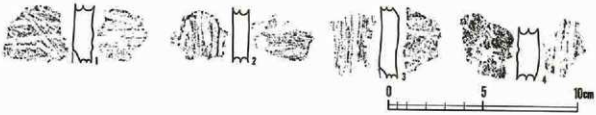
〈位置〉Ｄ４グリッド

〈形状〉規模105×103（cm）とほぼ円形を呈する土坑で，確認面からの深さは30cmである。

〈覆土〉２層に分類される。１層はローム粒子，赤色スコリア，炭化物粒子を含む暗褐色土層で，粘性が認められる。２層はロームブロックを含むほか，炭化物粒子・赤色スコリアを微



第73図　42～46号土坑（1/40）



第74図　43号土坑の出土土器（½）

量に含む明褐色土層で，粘性に豊む。1，2層共にしまりは良好である。

〈遺物〉礫1点が確認面上に浮いた状態で出土する。

〈時期〉不明。

土器（第74図1～4）

1～3は条痕の土器。1・2は棒状ないし篦状工具による条痕でかなり不規則に施されている。胎土中には多量の繊維を混入している。第4群5類Dに属する。3も同類と思われるが，工具に貝殻を用いているようである。研磨により判然としない。4は第4群5類Cに属すると思われる破片で，胎土中に繊維及び白色の粒子を混入する。

48号土坑（第75図上）

〈位置〉D6グリッドに位置する

〈形状〉不定形の土坑で規模は1.1×1.1（m）で深さ40cmである。土坑はテラスを持つ。

〈覆土〉2層に分けられる。1層は赤色スコリアを多量に含む暗褐色土層でしまりは良好だが粘性はない。2層は赤色スコリアを少量含む褐色土層で他にローム粒子，ロームブロックの混入のみられるしまりがやや悪く，粘性が若干みられる層である。

〈出土遺物〉この土坑からは土器1点の出土をみたが，遺物の出土場所，レベルが不明である。

土器（第75図1）

1は天神山式相当の土器。器は良好に研磨され，胎土中にはほとんど繊維を混じえない。石英粒子を多量に含有する。内面は剝落している。

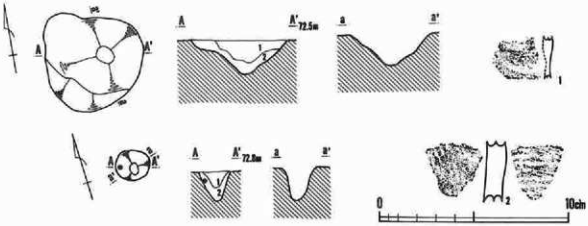
47号土坑（第75図下）

〈位置〉E4グリッドに位置する。

〈構造〉平面形は円形の土坑で規模は35×35（cm）で，深さは40cmである。

〈形状〉2層に分類した。1層は赤色スコリアを少量含む暗褐色土層で，しまりの良好な粘性のない層である。2層は赤色スコリアを少量含む明褐色土層でしまりの良好で，粘性の若干みられる土層である。

〈出土遺物〉土器が1点，覆土2層の遺構の壁際から出土。土器は縄文早期のもので，時期は早期のものと考えて良いだろう。



第75図　48(上)・47(下)土坑(1/40)・48・47号土坑の出土土器(1/2)

土器（第75図２）

２は第４群５類Ｆに属するもの。器面の条痕は，外面では良く研磨され，内面では横位方向にて留める。胎土中の繊維は少量で，白色，黒輝の粒子を含む。

49号土坑（第76図）

〈位置〉Ｉ６グリッドに位置する。

〈形状〉長径120cm，短径100cmのほぼ卵形を呈する土坑で，最深部の深さは26cmである。土坑の断面形は凸レンズ状を呈しており，他の遺構とは切り合わない。

〈覆土〉５層に分類される。１層はⅡｃ層に近い茶褐色土層，２層はその亜層と考えられる。３層は明茶褐色土，４層は褐色土，５層は明褐色土である。赤色スコリアは２，３，４層ははぼ同程度多量含み，５層には少量含まれる。１層，５層には微量の炭化物がみられる。しまりは１～４層共に認められるが，５層はロームブロックが混入し，しまりが悪い。粘性は１～３層にほとんど認められず，４，５層に認められ，地区に４層は粘性に富んでいる。

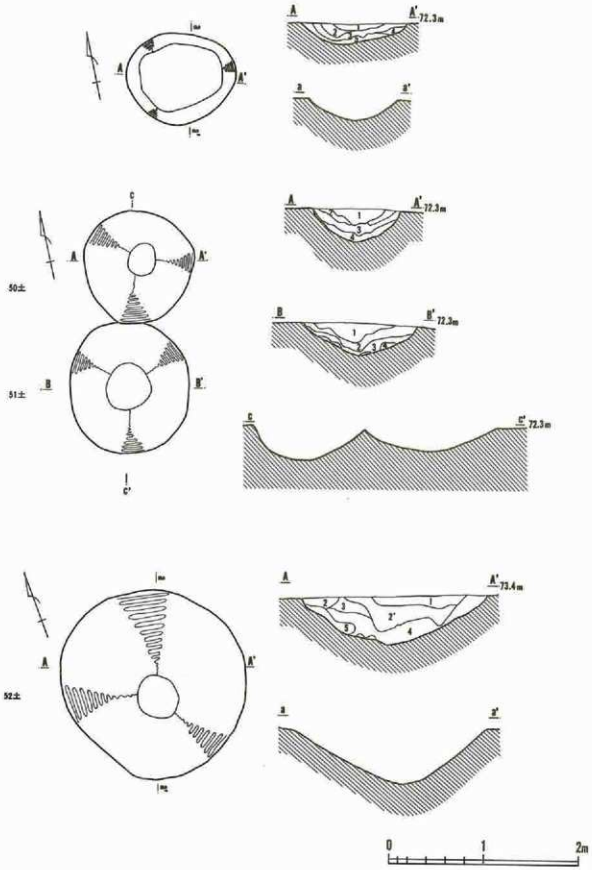
〈時期〉不明。

50，51号土坑（第76図）

〈位置〉両土坑共にＨ６，Ｉ６グリッドに位置する。

〈形状〉20号土坑は規模120×115（cm），51号土坑は140×125（cm）で，確認面からの深さは両土坑共に35cmである。土坑の断面形を見ると50号土坑が擂鉢形とやや急な立ちあがりを見せるが，51号土坑は緩やかに立ち上がる。両土坑は切り合うが時期は50号土坑が新しい時期のものである。

〈覆土〉50号土坑の一層はⅡｃ層に近い茶褐色土で赤色スコリア，炭化物を微量含む。２層は少量の赤色スコリアを含む明茶褐色土層。３層は赤色スコリアを少量，炭化物を微量含む明茶褐色土層。４層には多量のローム粒子・ブロックを含むほか赤色スコリアを少量，炭化物を微



第76図　49～52号土坑（1/40）

量含む明茶褐色土層。しまり1，3層は良好であるが2，4層は悪い。粘性1，2層にはほとんど認められず，3，4層に認められる。

51号土坑1層は炭化物を微量含む明茶褐色土層。2層は炭化物を微量含む茶褐色土層。1，2層共に赤色スコリアはほとんど見られない。3層はローム粒子・ブロックそして赤色スコリアを多く含む暗褐色土層。4層はローム粒子・ブロックを多量，赤色スコリアを少量含む褐色土層であるが，基盤の盛り上がり，或いは掘り過ぎとも考えられる。しまりは1，3層に認められ，二層には認められない。粘性が認められたのは3，4層で，4層は粘性に富む。

〈時期〉遺物の出土が認められず，両土坑共に時期の決定は出来ない。

52号土坑（第76図）

〈位置〉Ⅰ6グリッドに位置する。

〈形状〉規模204×200（cm）のほぼ円形を呈し，確認面からの深さは60cmである。他の遺構とは切り合わない。

〈覆土〉4層に分類される。1層は赤色スコリアを少量含むほか，炭化物・ローム粒子・焼土粒子を微量含む暗茶褐色土層。2層は少量の赤色スコリア，若干量のローム粒子，微量の炭化物粒子を含む茶褐色土層。3層はローム粒子・ブロック共多量に含み，少量の赤色スコリアを含む褐色土層。4層は多量のローム粒子，少量のロームブロックと赤色スコリアを含む暗褐色土層。しまりは1，4層が良好であるが，2，3層は悪い。粘性は主に3，4層にみられ，1，2層にはほとんど認められない。

＜遺物＞遺物は礫7点，土器片3点（中期五領ヶ台期相当のもの2点，早期末東海系のもの1点），黒曜石の剥片1点が確認面上・覆土1層中に散在している。

〈時期〉遺物から時期を確定するのは困難である。

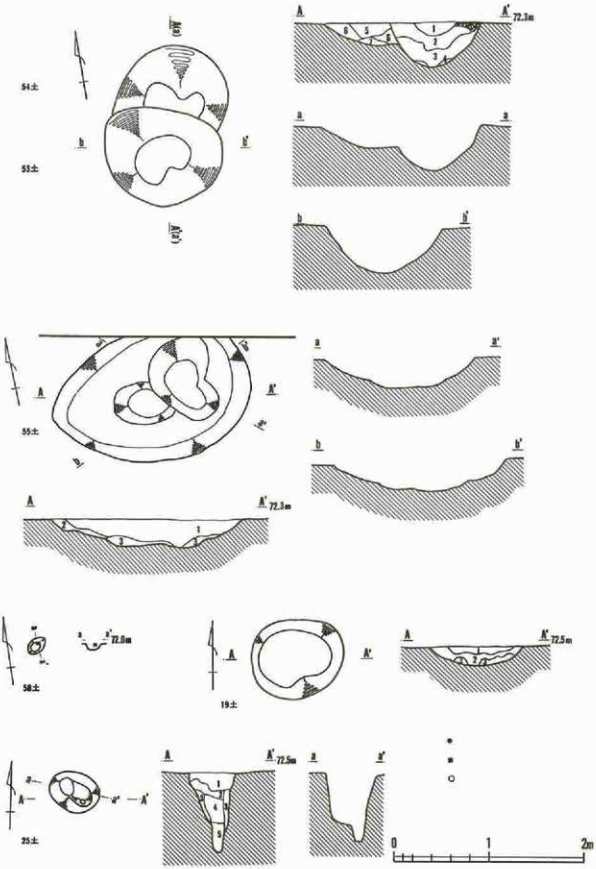
53，54号土坑（第77図）

〈位置〉Ⅰ6グリッドに位置する。

＜形状＞54号土坑は53号土坑に切られており，両土坑の規模は53号土坑170×130，径54号土坑105（cm）である。確認面からの深さは54号土坑が23cm，53号土坑が45cmである。

〈覆土〉53号土坑の覆土を1～4層，54号土坑の覆土を5～7層とする。1層は赤色スコリアを少量，炭化物・焼土粒子を微量含む暗茶褐色土層。2層は赤色スコリアを多量，ローム粒子を少々含む茶褐色土層で，54号土坑の覆土5，6層に流れ込む様な状態を呈する。これは，53号土坑を廃棄し，2層が堆積する際に立ち上がり部分が崩れたためであろう。3層は多量のローム粒子・赤色スコリアを含み，ロームブロックの混入が認められる暗褐色土層。4層は多量のローム粒子・ブロック，少量の赤色スコリアを含む褐色土層。〔53号土坑の覆土は1～3層はしまりがやや良好であり，粘性は若干認められる。4層はしまりが若干悪く，粘性に富む。〕

54号土坑覆土5層は多量の赤色スコリア，微量の炭化物を含む茶褐色土層。6層は少量の赤



第77図　53～55・58・19・25号土坑（1/6）

色スコリア，多量のローム粒子，若干のロームブロックを含む暗褐色土層。7層はローム粒子，ロームブロックを多量に含む暗褐色土層。54号土坑の覆土はいずれもしまりが良好である。粘性は6，7層に若干認められる。

＜時期＞不明。

55号土坑（第77図）

〈位置〉H6グリッドに位置する

〈形状〉長径210cm，短径145cmの楕円形を呈するが深さは確認面から30cmと浅く，土坑内にハート形と楕円形をなす凹みがみられる。この2つの凹みは土層セクションから判定して，この土坑を切った形跡がみられないので，55号土坑と同時期，あるいはそれ以前のものと考えられる。

〈覆土〉3層に分けられる。1層は赤色スコリアを少量含む以外は他の混入物のみられない暗褐色土層で地山との境界が明瞭である。しまり良く粘性なし。2層は赤色スコリアを1層よりやや多く含むほか，ロームと思われる黄色土と混じり合いもやもやしている褐色土層である。3層の2層との違いは土の色が明るく，しまり具合が良い事であり，或いは同一土層と考える事ができる。

＜遺物と時期＞不明。

58号土坑（第77図）

〈位置〉G5グリッドに位置

〈形状〉確認面で確認できなかった土坑で，先土器時代の調査の際，Ⅳ層上部にわずかに土の色の異なる部分が発見され，初めて確認されたものである。従って遺構の規模を性格に知る事は出来ないが，坑底部は長径25cm，短径17cmで深さは確認面から約60cmであったと推定される。

〈覆土〉覆土残存状態が悪く，判定不能である。

〈遺物と時期〉坑底面直上から石皿片が1点出土した。

19号土坑（第77図）

〈位置〉F5グリッドに位置する。

〈形状〉規模97×84(cm)の卵形を呈する土坑で，確認面からの深さは20cmである。土坑の断面形は擂鉢型に近い。他の遺構とは重複しない。

〈覆土〉3層に分類される。1層は赤色スコリアを微量含む暗褐色土層で粘性はほとんど認められない。2層は赤色スコリアを少量含む褐色土層で，ロームブロックがところどころに認められる。粘性は若干認められる。3層は赤色スコリアを少量含む明褐色土層で粘性が認められる。しまりは3層共に良好である。

〈遺物〉礫が3点出土した。

〈時期〉不明。

25号土坑（第77図）

〈位置〉Ｆ６グリッドに位置する。

〈形状〉規模50×35(cm)の楕円形を呈し，深さ48cmの土坑を更に40cm柱穴状に掘りくぼめている状態を見せている。遺物の出土はみられない。

＜覆土＞５層に分類される。１層は赤色スコリアを少量，ローム粒子を微量に含む暗褐色土層である。２層は赤色スコリア・ローム粒子を１層より多く含み，黒色スコリアを微量に含む暗褐色土層。３層は赤色スコリア・黒色スコリアを微量含む。また立ち上がりの地山との境界付近にはロームブロックが見られる。１～３層共にしまり良好で粘性は認められない。４層は赤色スコリア，黒色スコリアを若干量含むほか，ロームブロックを含む暗褐色土層。５層は４層とほぼ同様の土層で，ロームブロックを多量に含む。４，５層共にしまり若干悪く，粘性がやや認められる。

〈時期〉不明。

c．早期来襲の遺構外出土土器

第1群（第78図1～4）

原体を押捺する事により，文様を表現するもので，縄 RL，撚糸 L・R の圧痕を用いる。1は直上口縁にて稍内湾する器形で，口唇は内面に施される削りによって尖り気味となる。削りは右下方向へ，棒状工具により引曳されるもので，外面にはこれと逆方向，すなわち左下方向への沈線が加えられる。沈線は縄 RL の原体を押捺した後施されているが，部分的には必ずしも規則的ではない。縄文は上位より左下方向，右下方向へと重ねられ横位に一段の綾杉状を呈する。以下には，原体を違えて撚糸 L，そして R による二本一組，矢羽根状の側面圧痕を押捺する。胎土中には微量の石英・輝石の粒子を含み，非常に堅緻である。2～4は同一個体と考えられる破片で，いずれも撚糸 L・R の組み合わせによる矢羽根状のモチーフ，各々二段まで確認できる。1から推察すれば胴上部の破片であろうか。

第2群（第78図5～12）

原体を回転施文することにより器面を充填させる一群で，本遺跡からは同一個体と考えられる土器10片が出土した。原体は，R の撚糸を8～10mm程度の軸に4mm程の間隔を持って巻き付けたもので，以後これを縦位に回転させる。施文幅は横位に4～5cm幅，縦位に5cm幅となり，以後口縁屈曲部は撫でにより消去され，器面も薄らと留める程度に撫でられている。胎土中には石英・金雲母等を含む。第78図5～7は口縁部破片，他は胴部破片である。

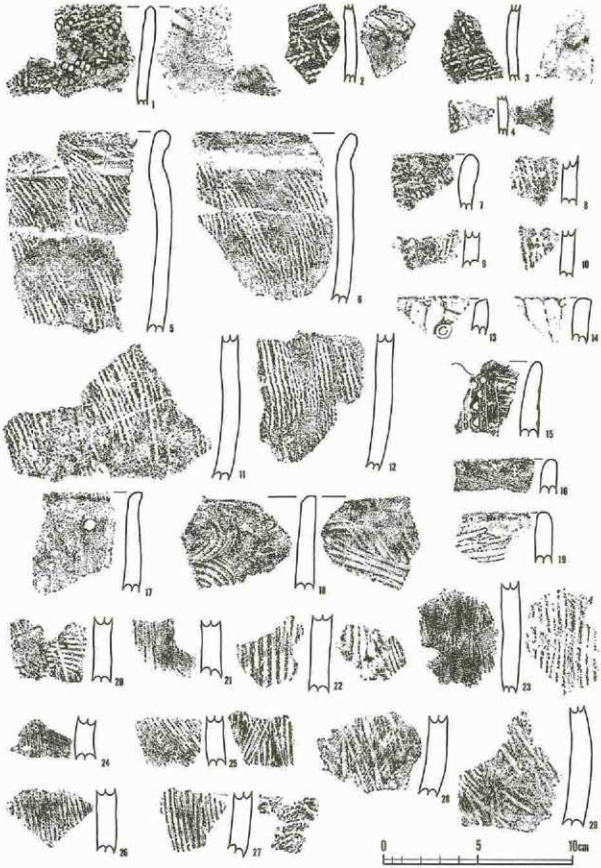
第3群（第78図13～29）

器面に条痕の施されるもので，狭義の茅山式以前と思われるものを一括する。土器に加えられる技術の特徴により四つに区分して考える。

1類　細隆起線を特徴とするもので，僅かに2点出土した（13・14）。13は口唇内削ぎ状を呈し，器面には縦に細隆起線二条，又これに連結する斜めのもの一条が認められる。14も同様の構成を採るが，口唇角頭状を呈する。両者とも非常に堅緻で胎土中には白色の粒子・微量の繊維を混じる。内外面に条痕は認められない。

2類　沈線と半截竹管状工具による刺突文を特徴とするもので一点のみ出土した（15）。資料は双頭となるようで，その片方のみ残存する。双頭を呈する波底部より文様を左右に分割し，アクセントには半截竹管状工具による交互刺突文を用いている。分割された区画文内には，沈線を充塡し，欠損にて判然としないが上方には交互刺突文が加えられているらしい。非常に堅緻で胎土中には白色の粒子・繊維を混じている。やはり条痕は認められない。

3類　無文の部位で，胎土の特徴より本群に含められるもの（16・17）。16は器面に擦痕が認められ，14の胎土と近似している。17は稍外反する口縁部で，胎土中には繊維・石英・白色粒子等を含み，器面は縦位に撫で成形されている。あるいは別群に所属するものかも知れない。



第78図　遺構外の出土土器(1)・(½)

4類　器面に条痕の施されるものを一括する（18～29）。条痕はその特徴に基づき，細別が与えられようが，本群に関しては絶体量の稀少性とその疑義により保留としておく。18は弧（又は円か）を縦位に重ねた様な文様を描くもので，施文具は貝殻による。器面は簡単に研磨されている事から考えても，明らかにひとつのモチーフであろう。内面は条痕が縦横に施され，一種格子目状の効果となり，口唇直下には横方向のなぞりが加えられている。胎土中には石英・輝石の粒子・少量の繊維を混じる。19は棒状工具による条線が施され，胎土中には繊維を混入していない。20は条痕とこれを研磨する部分を持つもので，胎土中には多くの繊維を混入する。21～24は幅広の条痕を内外面に施すもので，方向は縦位，特に内面は明瞭で深いもの，となる。繊維を混じるが硬質の感じを受ける。25～27は細い条痕を縦位に施すもので非常に堅緻，繊維を混入している。28．29は条痕が乱れて器面を覆うもので，胎土の性状は前記と同質である。

第4群（第79図～第81図）

器面に条痕の施されるもので，茅山上層式より後の土器群を一括する。従って条痕文土器群後半に相当するものである。施文具の違いをも含め技術の特徴に基づいて六つに区分する。

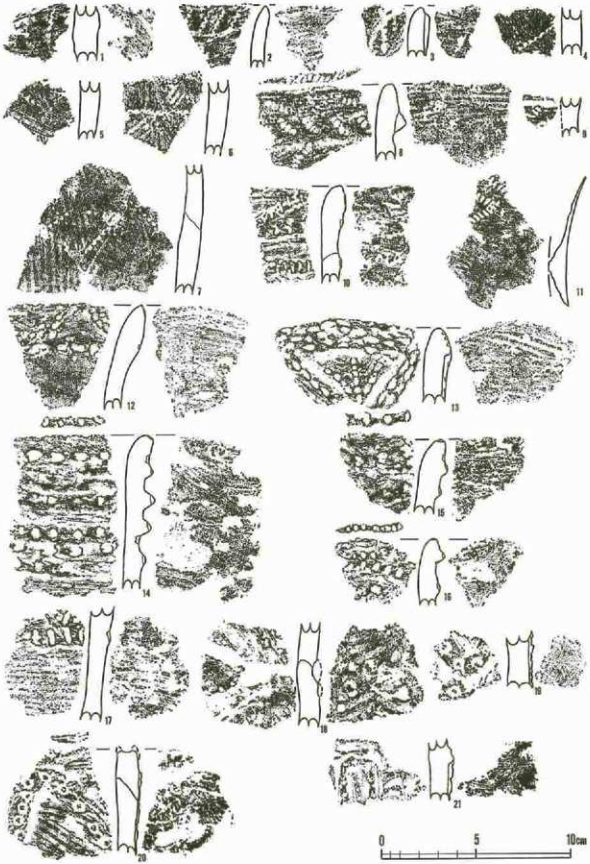
1類　貝殻腹縁文を特徴とするもの。隆帯の有無によりさらに二分して考えられる。

A器面に直接貝殻腹縁を押捺するもの（1・2・4～6）。1は長さ2㎝の貝殻腹縁文は4㎜程の節で1.5㎝の条を単位とする。口唇直下では山形に連ね，口唇及び隆帯上では右下がり斜位に，さらに隆帯直下の器体では，再度山形に押捺する。内面では薄らと横位方向斜位に列する。腹縁は1.5㎝を計測し，5㎜の間隔を置く。色調は黒褐色，胎土中に多量の繊維を混入している。4～6は器の内外に条痕を有するもので，貝殻腹縁は器面を磨いた後，施される。4・5は連なり山形文が一条，6は所謂類沈線が一条，7は不明瞭ではあるが，菱目文が認められる。内面には横位方向の条痕を留め，いずれも繊維微量で石英・白色の粒子を含む堅緻な土器である。

B器面に隆帯を貼付し，隆帯上に貝殻腹縁を押捺するもの（3）。隆帯はおそらくは口縁に沿って波状に貼付されたものであろうが，少破片ゆえ判然としない。腹縁文は隆帯を器面に刻み込むように押捺され，斜位に二条ある。胎土中には繊維・白色の粒子を含み，稍砂質な感じを受ける。色調は茶褐色。

2類　絡条体圧痕文を主文様要素とするもので，三つに区分する。

A高めの隆帯を伴い，これと器面に原体を押捺するもの（8・9）。8は口唇直下に隆帯を貼付し，撫でによりまるで折返し口縁の様に仕上げたもので，緩やかな波状を呈する。絡条体は4㎜程の節で1.5㎝の条を単位とする。口唇直下では山形に連ね，口唇及び隆帯上では右下がり斜位に，さらに隆帯直下の器体では，再度山形に押捺する。内面では薄らと横位



第79図　遺構外の出土土器(2)・(1/2)

の条痕を残し，胎土中には繊維・白色の粒子を含んでいる。同図3の胎土と類似する。9は8類似の破片で，隆帯直下に施された山形文の一部であろう。

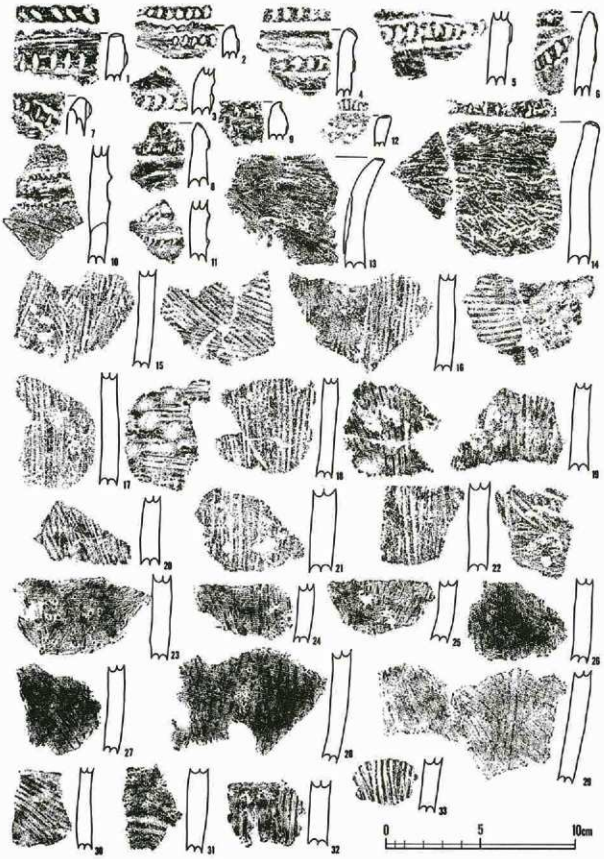
B低い隆帯とこれを押捺する絡条体圧痕文及び刺突文等の要素を持つもの（10）。10は肥厚したロ縁で山形あるいは波状に隆帯を貼付し，隆帯上は節の長い絡条体圧痕文を押捺する。隆帯は非常に低平で絡条体圧痕が器面に食い込む程である。節は長さ6㎜，間隔4㎜にて五つ観察できる。肥厚したロ縁部と胴部との境には細い棒状工具による刺突が加えられ，直下には横走する一本の隆帯と，これに加えられる同絡条体圧痕により飾られている。内面には8同様薄らと条痕を留める。胎土中には多量の繊維を混入し，茶褐色を呈する。

C器面に絡条体を直接押捺するもの（11）。11は右下方向への条痕を僅かに留め，長さ4㎜程の比較的短い節を基本とする。原体を菱目状に押捺するもので，モチーフは4号住居址出土の隆帯文土器（第12図1）と同じで，出自は大方この手に求められる。胎土は多量の繊維を混じ，以下に記する隆帯文の一群と酷似している。

3類　刺突文を主文様要素とするもの（第79図12・13）。12はロ縁部に10同様の隆帯文を貼付し，絡条体ではなしに刺突文を施したもの。隆帯はほとんど消滅し，器体との区別さえ困難なものとなり，隆帯上の刺突は浅く弱いものである。若干器厚を減じる部位，かつての肥厚したロ縁部との境界では刺突が横位に連続し，明らかに隆帯文部を画している。ロ唇上には弱いものであるが押圧刻目が加えられている。茶黒褐色を呈し，胎土中には多量に繊維を混じる。13は隆帯上及び器面に繁縟すぎる程に刺突文を施すもので，いずれも串状工具による。ロ唇直下では上・下三段に刺突され，これに連結されるような形で，貼付された隆帯上では縦位に交互刺突されている。内面では横位に条痕が施され，胎土中には多量の繊維を混じる。

4類　隆帯文を特徴とするもので以下二つに大別する（第79図14～21，第80図1～11）

A高い隆帯とこれを押圧する刻目，及び隆帯間に施される刺突文により飾られるもの（14～18）。14はロ縁に沿って断面三角形状の高い隆帯を四条巡らし，隆帯上にはロ唇部に施されると同様の棒状工具による押圧刻目が加えられている。隆帯第一条目直上及び第三条目直下には，半截竹管状工具による刺突文が施される。内面には薄く条痕を留め，胎土中には多量の繊維を混じている。15もほぼ同一個体と認定できる資料であるが，残存する隆帯の様子からすると波状を呈するように見受けられる。とすれば14の資料も緩やかな波状を呈する可能性もあろう。16は波状ロ縁波頂部破片で，現存の限りでは隆帯は二条認められる。モチーフは基本的に4号住居址出土土器（第12図2）と同じで第一条は鉢巻き状上向きに貼付され（ただし住居址出土のものは第二条で上向き），以下菱形文を構成するらしく下向きに貼付されている。胎土中には多量の繊維を混じるが，14，15に比して堅い感じを受ける。17は菱形を構成する下位の隆帯貼付部であろう。18も同様のモチーフと思われるが隆帯が剝落してしまっている。19・21



第80図　遺構外の出土土器(3)・(½)

は同一個体で隆帯は波状に巡らし，隆帯上には円形竹管文が押捺されている。地には右下方向への条痕が施され，内面では擦痕状となる。口唇は溝状に撫でられ，欠損してはいるが隆帯が貼付されていたようである。胎土中にはやはり多量の繊維を混じている。21は隆帯を逆U字状に貼付し，不明瞭ではあるが隆帯上には絡条体圧痕が加えられているようである。拓影図では隆帯右側に非常に節の大きい（長さ1㎝，幅5㎝）圧痕文が認められ同一原体である可能性もある。逆U字の隆帯上位には一条の隆帯が存在するが欠損のため判然としない。胎土中には多量の繊維を混入する。

B a 口唇上には刻目が施され，直下には一条の隆帯を貼付するもの（第80図1～5）。1は褐色を呈し，胎土中に繊維及び白色の粒子を混じるもので，第79図8の土器と性状は酷似する。2は粘土を貼付するが，口縁を一巡するのではなく尻切れ状を呈する。粘土紐上及び口唇には鋭利な篦状工具によって刻目が与えられている。胎土中には多量の繊維を混じ，色調は茶黒褐色を呈する。4は口唇外反する器形で，低い隆帯及び口唇にはやはり篦状の工具により押引き状の刻目が加えられる。褐色にて多量の繊維を混じる。3・5は口唇部こそ欠損しているが同様な個体と考えられる。

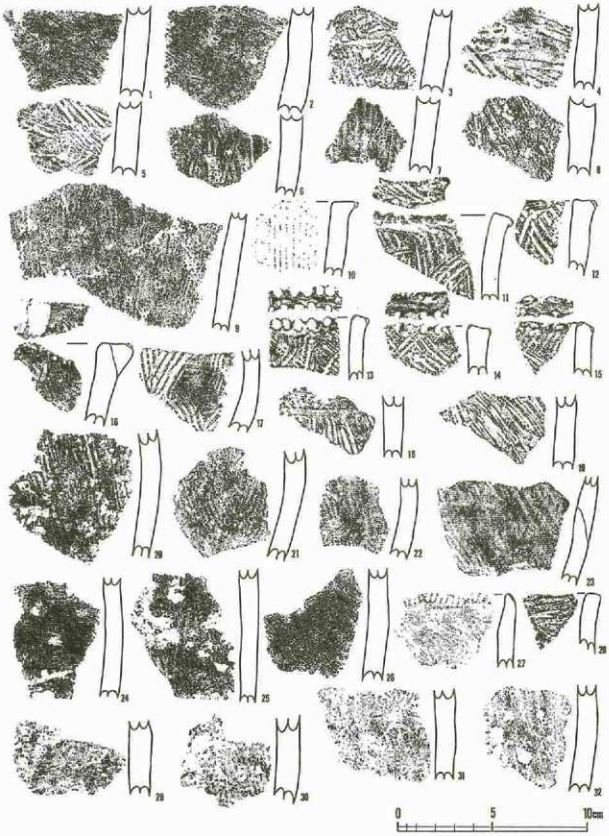
b 口唇直下の隆帯が波状を呈するもので2点出土した（6・7）。6は口唇直下に一条隆帯を持ち，以下に波状を呈するであろう隆帯を貼付したもので，隆帯上は棒状工具により押圧刻目が施される。胎土中にはほとんど繊維を混ぜず，白色の粒子を多量に含んでいる。色調は褐色。7は口唇直下に波状を呈する隆帯を貼付し，隆帯上には絡条圧痕文（？）を押捺している。胎土中には多量の繊維を混入する。

c 折返し様に肥厚した口縁を有し，口唇直下及び最大肥厚部に先割れ状工具により刻みを施したもの（8，9）。両者同一個体とも考えられるもので，胎土中には繊維を多く混じ，黒褐色を呈する。

d 小振りだが割と背高の隆帯を刻むもので，胎土中にはほとんど繊維を混入せず，輝石の微粒子を多く含んでいる（10，11）。10は二条の隆帯を持つもので，器面には篦状工具による右下がりの成形痕が残る。隆帯上は，鋭利な工具により刻まれている。11は10と同一個体と見紛う程酷似した資料であるが，隆帯上の刻目が，貝殻の腹縁様の工具による点で異なっている。焼成非常に良好で，堅緻な土器である。

5類　条痕を有するもので，技術及び胎土の性状に基づき六つに区分する（第80図12～33，第81図1～26）

A 表裏に条痕を持ち，特に指頭圧痕が認められるもので，胎土中には多量の繊維を混じ，割れ口は真黒である。稍砂質度が強く，ザラザラした感じを受けるもの（第80図15～20）。15～18は外面細い条痕が縦位に施され，内面では縦位，横位に認められる。16・17では条痕成形後



第81図　遺構外の出土土器(4)・(½)

の指頭圧痕が明瞭に観察でき，いずれも五つないし六つ押捺される。指頭は径1㎝内外を計り小振りである。胎土中には繊維の他，僅かに石英粒子などを混じている。色調は茶褐色。19，20も同じ性状であるが，色調が黒茶褐色である点異なる。内面には薄く横位の条痕が認められる。

B条痕は割と浅く，Aに比して繊維量が減少し，施成も良いもので，AとFの中間的性状を示すもの（21，22）

C太い条痕が表裏に施されたもので，胎土中には繊維・石英粒子を含むが，砂質性に欠け堅い感じを受けるもの。本群の直系の俎上には登らない一群である（23～29）。条は幅3㎝を計測し薄いが，しっかりと施される。23，24，28は褐色，25～27，29は黒褐色を呈している。

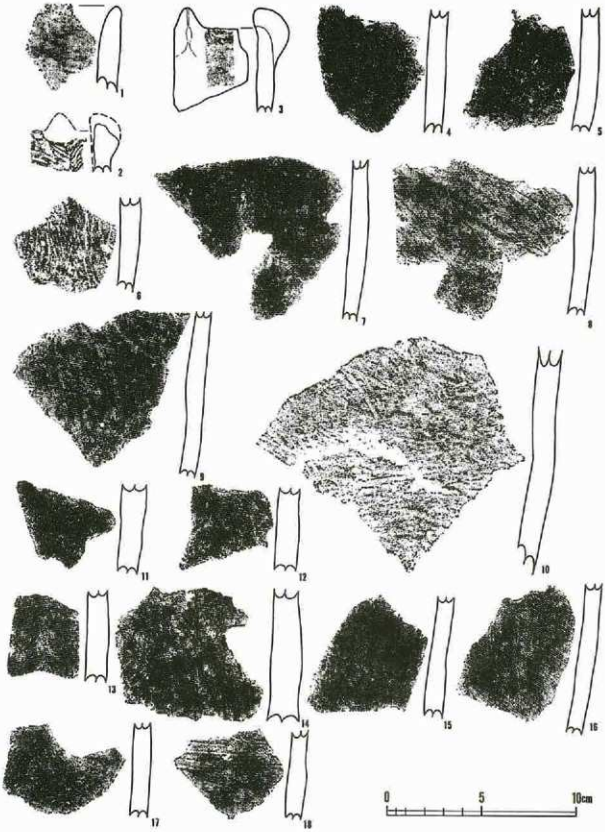
D胎土中に多量の繊維を混じ，本群4類に似た性状を示すもので，外面は条痕を留め，内面では撫でられている（12・13・30～33）。12は口唇に貝殻背圧痕文を施すもの，13にも同様に圧痕が加えられていたようであるが判然としない。器面は条痕を施した後，簡単に撫でられている。

E繊維の混入量少なく，白色・輝石の粒子を含有する胎土で砂質，内外面に条痕を有するもの（第80図14，81図1～9），14は口唇に貝殻腹縁文を押捺するもので，器面には薄らと条痕を留める。1～3は外面褐色を呈し，条痕は右下方向のもの1・2，乱れて交差するものの3がある。4～9は外面茶褐色を呈し，縦横そして交差して条痕が認められ，内面にも同じ方向をもった条痕が施されている。

F胎土中にほとんど繊維を混ぜず，器面の条痕は一般には撫でられるが，時に意識的に格子目となったり，貝殻による腹縁文が押捺されたりするもの（10～26）。器形は平口縁のもの，波状口縁のものが存在し，口唇への加飾等により細別できる。

a外面に突出した口唇を呈し，上面は撫でられ，直下に施される条痕は縦位方向となる。一点のみ出土し，胎土中には多量の白色粒子を含んでいる（10）。11，12はやはり突出，肥厚した口唇部を持つが，直下の条痕は格子目状となる。11では口唇上面では斜目の条痕が施されるが，刻目は加えられていないようである。12では同じ格子目条痕を有し，口唇上面は撫でにより断面U字状に窪み，これを特徴としている。

b口唇の突出は低く，これに棒状工具による押圧刻目を施すもので，口唇直下の条痕は格子目状となる（13～16）。13は非常に硬質な土器で，口唇が僅かに突出し，内，外に押圧刻目が施される。格子目条痕を施した後，貝殻腹縁文を押捺している（拓図右下及びこれに連なる欠損部）。14，15はいずれも格子目条痕のみ施され，15では口唇の刻目が，半截竹管状工具による押引状を呈している。16は緩やかな波状口縁を呈し，波頂部では若干肥厚し，口唇外側には，貝殻腹縁による押圧刻目が施されている。



第82図　遺構外の出土土器(5)・(1/2)

ｃａ，ｂ両者の胴部破片と考えられるもので，いずれも繊維をほとんど混ぜず，多くの白色粒子及び輝石・石英粒子等を含んでいる。器面は条痕の明瞭なもの（18・19）と，これの撫でられたもの（20～26）がある。

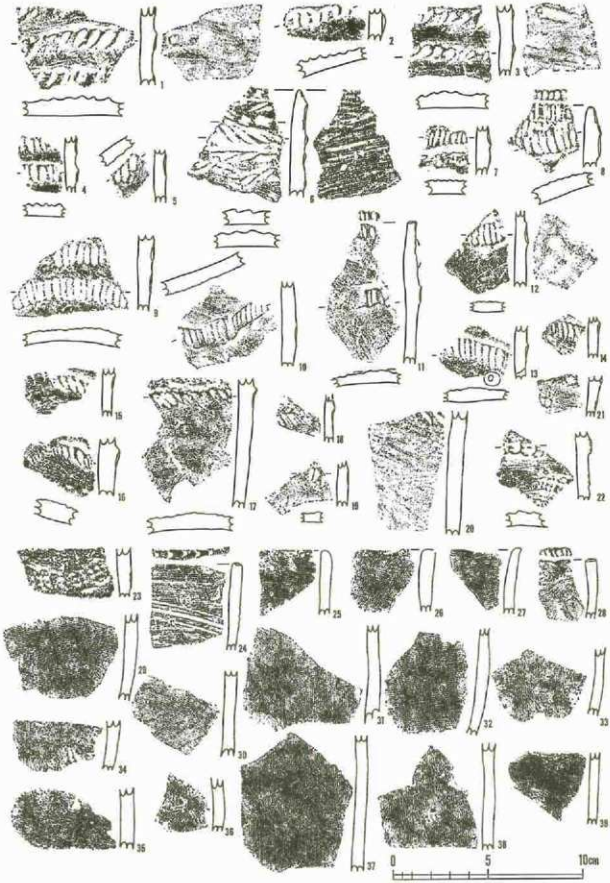
6類　本群に属すと考えられる土器，無文部を一括する。27，28は口縁部破片で，27は口唇に貝殻背圧痕が押捺されている。器面は良く撫でられ，胎土中には多量の繊維と白色粒子を含んでいる。28は口唇角頭状を呈し，多量の繊維を混じている。5類Ｄと同質である。29～32は5類Ｅと同質の無文部。第82図1，4～14は同質の無文土器。1は口唇直上し丸頭状を呈する。15～18はほとんど繊維を混ぜず，非常に硬質な土器で明るい褐色を呈する。器面は良好に研磨され，地には篦状工具による成形痕を持つ。2，3は同質の胎土で口縁に瘤状突起を貼付するもの，2では突起に対し条痕を矢羽根状に重ねている。

第5群（第83図1～39，84図40～51）

薄手で繊維を殆ど混ぜず，非常に焼成の良い土器。所謂東海系の所産と考えられる一群で，これを一括総称して群別した。以下にその施文技術による類別を与える。

1類　高い隆帯と，これを押圧する事によって生じる刻目帯により飾られた土器で，胎土中には小量の繊維と石英粒子を含んでいる（1～6）。1は粘土紐を三条貼付し，棒状工具により押圧を施すもの。押圧は器面まで達し隆帯横断面は大きな波状を呈する。焼成良く，胎土中には炭化物・石英粒子を少量混じ，明るい褐色を呈する。2～15も同様の外観であるが，3・4の押圧は，棒ではなく篦状の工具による。

2類　押引状の押圧によってキャタピラー状の低隆帯を形成するもので，胎土中には少量の繊維と石英粒子を含み，砂質度の高い土器である（7～12・21・22）。本類は工具の違いにより二別され，篦状ないし，これに類する工具を使用するもの，貝殻を使用するものとなる。。6は縦位五段の隆帯を貼付し，隆帯上は棒状工具による斜位の刻みが各段方向を違えて施される。口唇直下及び第一条から二条間には，半截竹管状工具による刺突文が充填され，さらに，四条目を波状文化する事によって，装飾を充実させている。胎土は他者に比して，非常に堅緻で焼成良好，鈍い褐色を呈する。7・8は幅広の低隆帯で，押圧は篦に似た扁平な工具による押引である。8の口唇上には刻目が施され，直下には隆帯を伴わない押引状の刻目帯が一巡する。胎土中の繊維は少量にて，石英粒子を含み，器肌はザラザラした感触を受ける。9～12は隆帯上を篦状の工具により押引くもので，隆帯は非常に低く，キャタピラー状を呈する。胎土中には繊維をほとんど混ぜず，石英粒子を多く含んでいる。9・12は褐色，10・11は黒褐色，11は口唇及び口唇直下に刻目を有し以下に波状の隆帯を二条貼付する。第二条は剝落してしまっている。



第83図　遺構外の出土土器(6)・(½)

3類　隆帯に直接押圧するのではなく，隆帯の上位または下位を刻むようにして形成される刻目帯を特徴とし，胎土中には，少量の繊維と多くの石英粒子・雲母等を含む。ただし，刻目は器面を刻するものとはならない（13～18）。14は隆帯の特徴こそ異なれど，12と非常に類似した性状を示しており，14～17などは胎土中に多量の雲母を混入し，繊維量は僅かである。一方，18では繊維及び石英粒子を多量に混じ，異質な感じさえ受ける。19は隆帯の上・下位に刻みを加え，矢羽根状の刻目帯を形成する。放射肋の顕著な貝殻を使用して押引くもので，図示した三列のみ出土した（21～23）。21，22は同一個体と思われ，繊維・雲母を混入する。色調は黒褐色を呈する。23は明るい褐色で胎土中には多量の繊維を混じる。

4類　隆帯を待たずに刻みが器面に除刻されるもので，胎土中には繊維をほとんど混ぜず，石英・黒輝の粒子等を含有する（19・20）。本類は4号住居址出土の資料（第13図28）を基準とするが，本図に提示された19・20は，肝要部を欠損しており判然とはしない。胎土の性状は，2，3類に似ており，別類の可能性もある。ここでは残存部位より推定し留めておく。

5類　貝殻ないし櫛歯状の工具により波状文を描出する類で，胎土中には繊維をほとんど混じない（24）。貝殻による波状文と口唇部に復縁による押圧が施されるもので，胎土中には繊維を混ぜず，雲母を含んでいる。

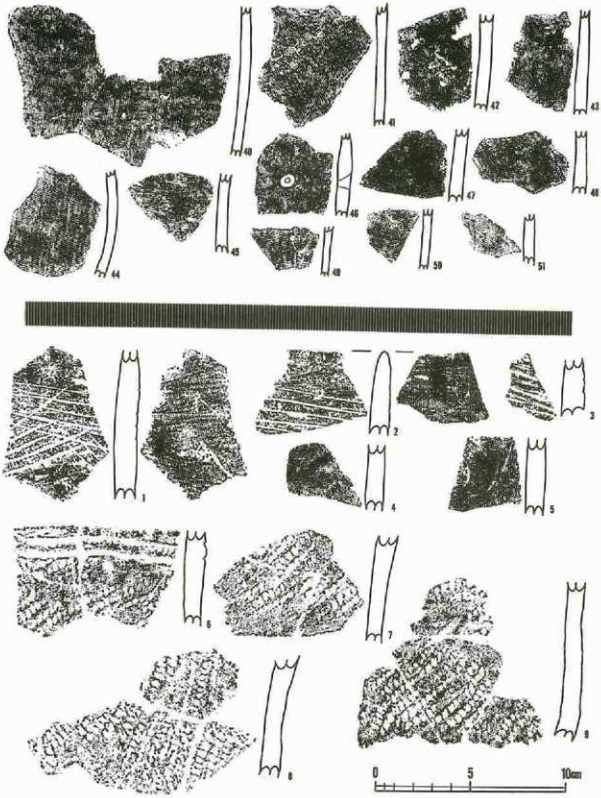
6類　無文・無文部の土器（25～51）。25～28は口縁部破片。25・26は2・3類と同質，27・28は5類に近似する。25は外削ぎ状を呈し，26・28は角頭状，29はこれの外反した形状で，口唇上には刻目が施される。これは23号住居址出土の資料（第56図1）と非常に良く似た性状を示している。29～31は1類の胴部破片。32～48は2・3類の胴部破片。46は外側よりの穿孔あり，49～51は4類の破片であるが，51を除き胎土中に多量の繊維を混じている。非常に薄手である。

第6群（第84図下，1～9）

竹管文を主文様要素とする一群で，前期後半に位置付けられるもの。本遺跡からは，1類沈線文の施されるもの（1～5）と2類爪形文の施されるもの（6～9）の二種が確認されている。

1類　5点出土し，いずれも同一個体。口唇直下に半截竹管状工具による沈線を三対横走させ，以下に同工具による鋸歯状ないし菱形状のモチーフを描くもの。

2類　23点出土し，全て同一個体。接合作業は思うに任せず拓影図のみ図示した。地に縄文原体LRの縦位回転を施し，おそらく口縁に平行するであろう爪形文を一条加えたもの。



第84図　遺構外の出土土器(7)・(½)

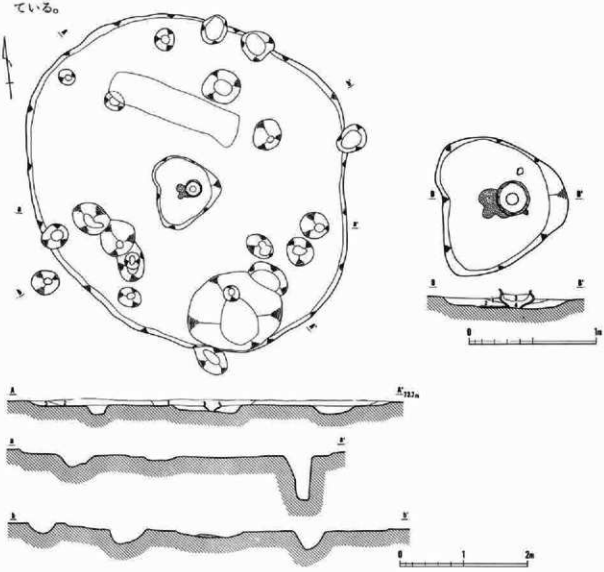
d．中期初頭の遺構と遺物

1号住居址（第85図）

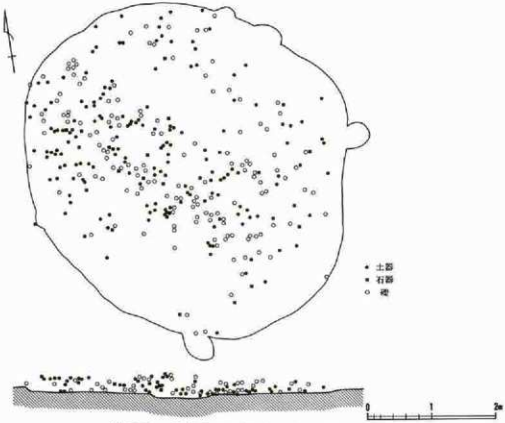
〈位置〉Ｂ５，Ｂ６，Ｃ５，Ｃ６グリッドに位置する。

〈形状〉住居址に攪乱が見られる。住居址南部に径1.5mの土坑がみられる。この土坑は縄文時代早期末の遺物が出土しており，中期初頭のこの住居址とは関係がない。住居址の規模は，5.3×5.0（m）のほぼ円形を呈する。長径の方向は南北である。壁高は確認面から５cmと低く，壁面は緩やかに立ち上がる。

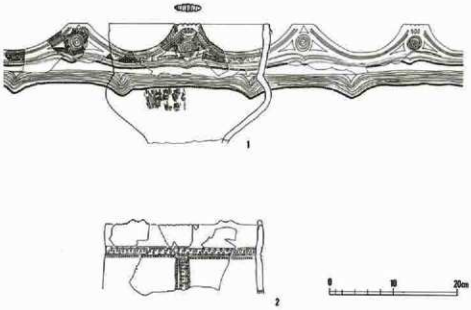
〈覆土〉覆土は３層に分類される。１層は，赤色スコリア・焼土粒・ローム細粒・炭化物を含む黒褐色土で，しまりぐあいは悪く，粘性はほとんどみられない層で，住居址の中央部に堆積している。２層は，赤色スコリアとローム粒を多量に含み，白色スコリア，炭化物は若干含む。しまりは良好で固く，粘性は弱い。３層の周辺ではソフトロームの混入が見られ，もやもやしている。



第85図　１号住居址（1/40）



第86図　1号住居址の遺物出土状態（1/60）



第87図　1号住居址の出土土器（1/4）

3層は，住居址内で部分的に見られる土層で，赤色スコリアを多量に含み，しまりはあるが，粘性はほとんどない。

<炉>住居址中央部にあり，長径160㎝，短径150㎝のハート形に近い平面形で深さは8㎝である。炉址中心部の底面には焼土がつまっている。炉体を呈する埋甕が1基確認され，埋甕内の土の上部からは炭化物と多量の焼土粒子が含まれ，下部からは焼土ブロックがみられた。

〈柱穴〉住居址内の縄文時代早期の土坑を除いて，ピットは19基確認されたが，深いものは3基で，それぞれ，70，50，40㎝であり，そのほか20㎝程度の深さのピットが2基あり，残る14基のピットは確認面や床面からの深さが10㎝前後の浅いピットであった。

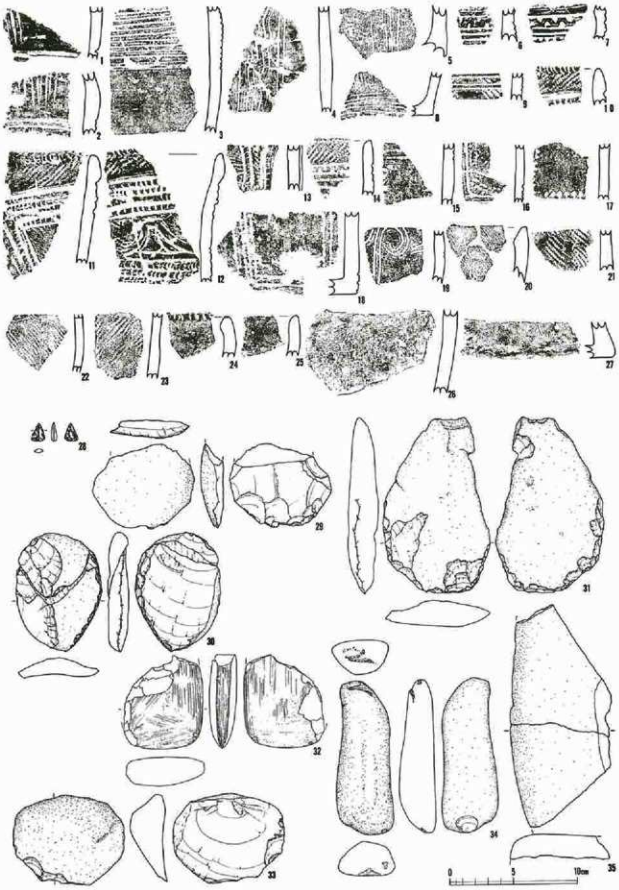
〈出土遺物〉土器片154点，石器10点，礫173点が出土した。

<遺物分布>（86図）遺物の平面分布は，炉とその周辺と北側に集中し，ピットとその周辺からの遺物は少ない。垂直分布を見ると，住居址西側は土器が確認面上，礫は床面直上あるいはそれに近い部分で出土し，遺物分布の空白部分がみられる傾向をみせるが対照的に東側は礫は確認面上に，土器は覆土中，床面直上に出土する傾向をみせる。

土器（第87・88図）

埋甕炉（87図1）に用いられた土器，四単位の波状口縁で二段の屈曲部をもち，胴部をうち欠いている。波状口縁のモチーフは二種類見られ，一方は波頂部はその下の棒状の貼付文に刻みがはいり，もう一方はその貼付文の代わりに三角形の印刻が施され，一種の玉抱き三又文を形成している。口唇直下に短沈線を施し，渦巻文の中と沈線に沿った三角形印刻文の周囲にも同様に短沈線が充塡されている。屈曲部のV字隆線の貼付文にそって沈線と押引き文がめぐり，上半には無節の縄文しが施されているが以下は無文である。胎土に小石などを混入しており，内面にはすすがかなり付着している。赤褐色を呈する。2は円筒形の胴部から緩やかに外反する口縁をもつ。平縁口縁だが，二個一対の小突起をもつ。 単位は不明である。頸部は半截竹管状工具によって施文されている。胎土は緻密で雲母片を少量含む。焼成やや良で黒褐色を呈する。住居址の東端の床面に近い覆土中から一括出土した。

（88図）1，2は口縁部に近い破片である。平行沈線によって頸部が区画されている。胎土には雲母を少量，長石・小石等を多量に含む。焼成は良好，黒味を帯びた赤褐色を呈する。3～5は同一個体の胴部である。胴上部に数条の平行沈線が横位にめぐり，縦位にも垂下するものである。5は底部である。胎土には雲母，長石を多量に含み，焼成は良好で赤褐色を呈する。6は交互刺突文がみられ，胎土が類似していることから，1と2の頸部破片の可能性もある。7と17は同一個体。7は頸部で沈線にそった三角印刻が交互突文を形成しており，以下胴部には半截竹管工具による刺突が施されている。黒褐色を呈する。8は底部。棒状工具で沈線



第88図　1号住居址の出土土器・石器（1/3）

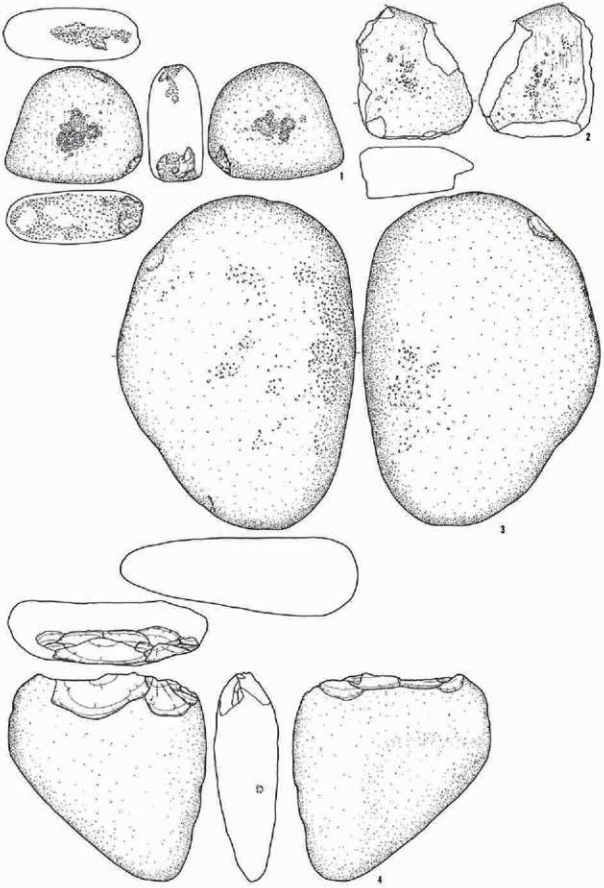
を描いている。表面は丁寧に研磨されており，胎土には小石等を含み，焼成は非常に良好である。床面直上より出土した。9は縄文ＲＬの原体を地文として平行沈線がめぐる。胎土は堅緻で，焼成良好である。10～13は同一個体である。口縁部が緩やかに外反する平縁の器形と考えられる。帯縄文下に隆線を中心として平行沈線と連続爪形文を組合わせた文様をもつ。連続爪形文は口唇にも施されている。縄文ＬＲの原体が口縁に横位に，隆線の区画内には縦位に施されている。13は胴部でＹ字状に隆線が垂下しており，その上から縄文が施されている。胎土は小石などを少量含んでいるが緻密であり，焼成は良好である。赤褐色を呈する。14，15は同一個体で，口縁には帯縄文ＬＲをもち，竹管状工具による交互刺突文や押引き文がみられる。胎土には，雲母・長石を多量に含む。焼成は良好で赤褐色を呈する。16は胴部。沈線の区画に沿って２段の刺突文が施されている。上段の刺突文は押引き文に近いものである。緻密な胎土をもち，混入物はほとんど含まない。焼成は良好。褐色を呈する。床面直上より出土している。18は底部破片。剥落は激しいが，押引き文が垂下して胴部を区画し，底部に横位にめぐる沈線と交差する。14，15の底部破片とも考えられる。19は胴部。半截竹管状工具による沈線で蒙状の文様が描かれている。胎土には，長石・石英を多量に含み，焼成は良好で灰褐色を呈する。20は口縁部。無節の縄文と結節回転文が口唇から施されている。胎土は石英・長石粒を多量に含んでおり，表裏とも丁寧に研磨されている。焼成は良好で，黒味を帯びた灰褐色を呈する。21は結節回転文が施された胴部である。緻密な胎土で混入物はほとんど含まれない。22は胴部で，縦位に整然と縄文ＬＲが施されている。胎土に小石等を含む。焼成は良好。赤褐色を呈する。23は縄文が施文された胴部で，胎土に長石，砂粒を少量含んでいる。焼成は良好で，赤褐色を呈する。24は無文の口縁部破片である。胎土に白色砂粒を多量に含む。

第82図２と同一個体と考えられる。床面直上より出土。褐色を呈する。25も無文の口縁部で，胎土は緻密で灰褐色を呈している。26は無文の胴部破片。胎土に雲母，長石を多量に含み，赤褐色を呈す。床面直上より出土した。この住居址からは，この種の無文の胴部破片が最も多く出土している。27は張り出し底をもつ無文底部。緻密な胎土で白色砂粒を多量に含む。内面は研磨されており，黒味を帯びた赤褐色を呈する。床面直上より出土した。

石器（第88図28～35，89図）

打製石斧２点，石皿および石皿片５点，石鏃，磨製石斧，スクレイパー，礫器，敲石，磨石加工痕のある剥片各１点，剥・砕片10点の合計24点が出土している。

28は，比較的厚手な平基の三角形鏃である。石質は黒曜石，重量は0.5ｇである。29は，胴部を欠損した打製石斧である。多少胴部が括れる分銅形で，石質はホルンフェルス，重量は100ｇである。31は，石斧様の形状の礫をそのまま用い，刃部に多少加工したのみの打製石斧であ



第89図　1号住居址の出土石器（1/3）

る。石質は凝灰角礫岩で，重量は304ｇである。30は，片側縁に両刃の加工を施した泥岩製のスタレイバーである。上部にＣ５―14グリッドで出土した使用痕のある剝片が，節理面で接合して，加工途上あるいは使用中に剝れたものと考えられる。重量は，下半のみで87.2ｇ，接合状態で120.8ｇである。32は，胴部上半を欠損した珪岩製の磨製石斧である。側面に製作上の敲打のあとが見られるが，全体に良く磨かれている。重量は，156.9ｇである。33は，ホルンフェルスを用いて，粗く二次加工を施した剝片である。重量は，205ｇである。34は，比較的緻密な棒状の砂岩を用いた敲石である。上下両端に多少の敲打痕を有する。重量は，220ｇである。35，２，３は，閃緑岩を用いた石皿である。35は，大形の石皿の表面部分が欠損したもので，住居址外から出土したものと接合している。重量は接合状態で355.7ｇである。２は，表裏面に，磨滅痕と多少の敲打痕を有する石皿で，被熱している。重量は520ｇである。３は，扁平な礫をそのまま用いた比較的大型の石皿で，磨滅痕はあまり見られないものの，表裏面に敲打痕が観察される。重量は，4400ｇである。１は，表裏中央に凹石様の敲打痕を有する閃緑岩の礫を用いた磨石である。表裏面面に磨滅痕が観察され，下側面には広く細かめの，上側面には粗めの敲打痕が見られる。重量は，684ｇである。４は，大形の扁平な閃緑岩の礫の一側縁に両刃の加工を施した礫器である。重量は，1816ｇである。尚，28と３は，床面直上から出土している。

２号住居址（第36，38図）

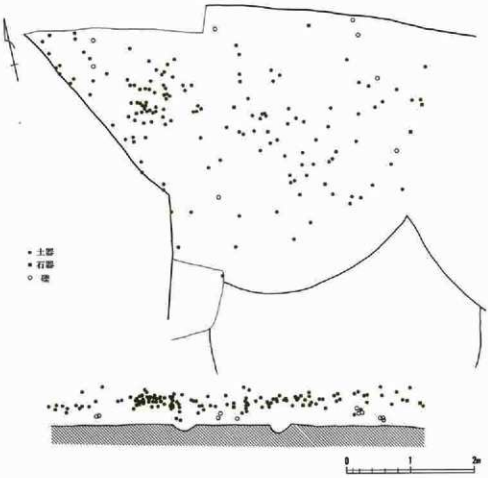
〈位置〉Ｂ６グリッドに位置する。

〈形状〉住居址はその全体の約2/3を発掘した。残る1/3は今回の調査区域外であったため，未発掘である。また，この住居址は縄文時代早期末葉の遺構である12号住居址・15号住居址と切り合うが，床面の高さが同じであるため，正確な規模や平面形は推定できない。ただし，遺物の分布状態等から東西5.0ｍと推定され，円形もしくは楕円形であると考えられる。壁高は６cmで壁面は緩やかに立ち上がる。床面はほぼ平担で，炉址が１基確認されたが，貼床や周溝は認められない。また，住居址北部，西部に攪乱を受けている。

＜覆土＞住居址の覆土は２層に分離され，１層は，赤色スコリアを少量，ロームブロックを若干含む暗褐色土層。２層は赤色スコリアが１層よりやや多く，ローム粒を多量に含み，もやもやしている褐色土層である。

＜炉＞炉は住居址の西に偏った場所に位置するが，炉址の北半分は調査区外であるため，未調査である。東西45cmで，炉の深さは床面から25cmである。焼土は主に上層に含まれ，焼土粒子・粘土ブロックを多量に含み，炭化物もみられる。

＜柱穴＞住居址のものと考えられるピットと３基確認され，３基は床面からの深さが20cm程であるほかはいずれも10cm前後である。



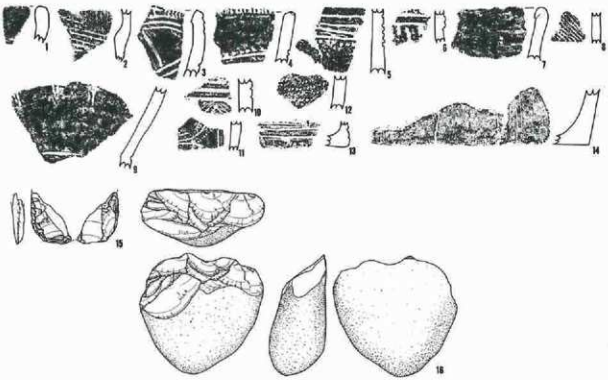
第90図　2号住居址の遺物出土状態（1/60）

〈出土遺物〉土器片154点，石器5点，礫13点が出土した。

〈遺物出土状態〉（90図）床面直上の遺物は無く，覆土中の遺物も少ない。遺物は確認面上に散漫な状態で分布するが，土器は住居址西部からの出土が目立つ。特に土器の大半は縄文時代中期の遺物であるものの，一部縄文時代早期のものも見られる。

土器（第91図）

1，2は同一個体である。摩耗が激しいため判別しにくいが，口縁は縦位に集合沈線が，頸部は横位に押引き文が施されている。雲母，長石など混入物を多く含む。焼成，保存状態はやや良好。赤褐色を呈する。3は緩やかに内湾する口縁部である。口唇に爪形文が施され，半截竹管状工具による平行沈線で弧線が描かれない。胎土は長石，砂粒を含み，焼成も良好で堅緻である。4～6は同一個体。口唇に刻みをもち，無文帯が巡る下に竹管状工具による刺突文と沈線を組み合せた文様をもつ。この他にも80点近い同一個体と思われる破片が出土したが，剥落が激しく無文の小片ばかりで，復元できえなかった。長石，小石などを多量に含み，赤褐色を呈する。7は折返し口縁をもつ無文土器。剥落がかなり激しいが，焼成は良好で，胎土



第91図　2号住居址の出土土器・石器（⅓）

中には長石を少量含み，茶褐色を呈する。8は胴部破片。Ｒしの縄文をもつ。胎土には長石を含み，焼成は良好で赤褐色を呈する。9は頸部か。一条の沈線で胴部と区画している。口縁付近はＵ字状の押引き文が巡るようである。胎土には，長石，雲母を微量含む。焼成良好で赤褐色を呈する。10は胴部で，深い沈線で区画した中をへの字状に浅い沈線文が施されている。胎土には雲母・長石を含む。焼成は良好。赤褐色を呈する。11は胴部破片である。地文に縄文を施し，半截竹管状工具による平行沈線で弧線文を描いている。胎土には雲母・長石を多量に含む。赤褐色を呈する。12も胴部破片である。ＬＲの縄文が施され，胎土には長石を含み，赤褐色を呈する。13は張り出し底をもつ底部破片。沈線が横位にめぐる。胎土には長石を多量に含み，内面も丁寧に研磨されている。焼成は良好で赤褐色を呈する。14は底部破片。縦位に沈線が数条ずつ垂下して胴部を区画している。胎土には長石，石英，雲母を多量に含む。焼成良好で厚手，赤褐色を呈する。

石器（第91図15・16）

打製石斧・礫器各1点，剥片3点の合計5点が出土している。

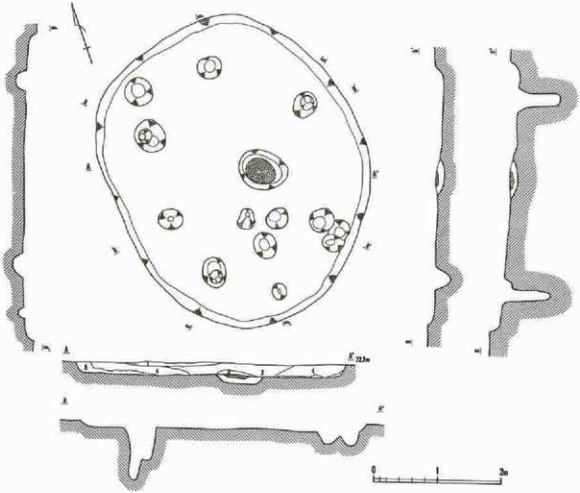
15は，ホルンフェルス製の打製石斧の刃部片である。重量は，9.4gである。16は，ホルンフェルスの礫に一方向から加工した片刃の礫器である。風化のためか刃部に明瞭な小剥離痕等が観察されないため，石核である可能性もある。重量は，455gである。

3号住居址（第92図）

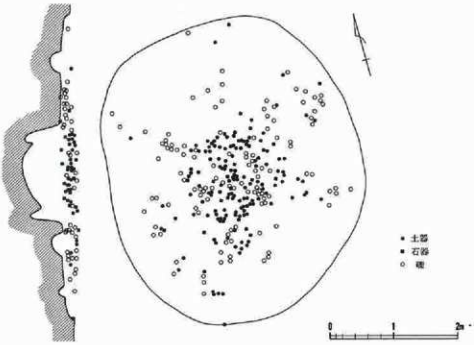
〈位置〉Ｈ４，Ｈ５，Ｉ４，Ｉ５グリッドに位置する。

〈形状〉規模は4.7×4.0（m）の歪れた円形で，長径の方向は北西から南東に向かう。壁高は15cmで，壁面は明瞭な立ち上がりをみせる。床面はほぼ平坦で，炉址が１基検出された以外，周溝，貼床は認められない。尚，当住居址の炉址下から，縄文時代中期初頭のものと考えられる集石土坑が１基確認された。

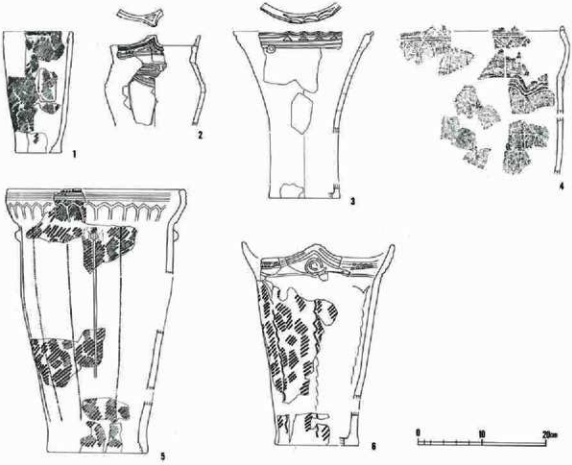
〈覆土〉５層に分類される。１層は赤色スコリア・炭化物・ローム粒子を若干含む褐色土層で，しまりはやや悪く，粘性はない。２層は炭化物を多量含む黒褐色土で，焼土粒・ローム粒子を若干含むが，赤色スコリアはほとんどみられない。しまりは良く，粘性はない。３層は炉の土層にあたる。焼土粒を多量に含み，ローム粒子は若干含むが，炭化物はほとんどみられない。しまり良く，粘性は若干認められる。４層は，赤色スコリア・ローム粒子を少量含むが，炭化物はほとんどみられない褐色土層で，しまりは良く，粘性はほとんどみられない。５層は褐色土層で，赤色スコリアを多量に含み，ロームブロックが混入してもやもやした感じがする。し



第92図　３号住居址（1/40）



第93図　3号住居址の遺物出土状態（1/40）



第94図　3号住居址の出土土器（1/4）

まり良く，粘性はみられない。

〈炉〉住居址の中央部からやや東よりに位置する。規模は80×60（cm）でほぼ楕円形を呈し，深さは20cmである。炉の土壌は住居址の覆土３層に該当する。焼土粒子など，焼成効果の及ぶ深さは20cmである。

<柱穴>住居址のものと考えられるピットと13本確認され，床面からの深さが85～60cmと深いものは４基で主柱穴と考えて良いだろう。残る９基は深さが10～30cmである。なかでも深さ85cmの柱穴は深さ50cmのピットの底面を段状に深く掘りくぼめている。

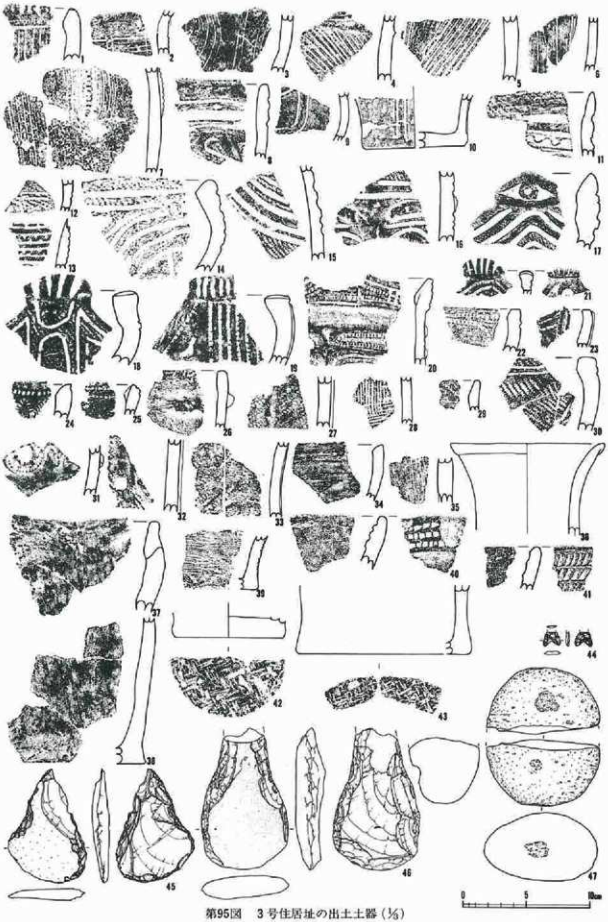
〈出土遺物〉土器片226点，石器23点，礫884点が出土している。

<遺物出土状態>土器は中ほどに集中し，礫は住居址地全体にちらばりをもっている。

土器（第94図１～６・第95図１～43）

１は折り返し口縁をもつ円筒形の深鉢である。口縁は横位にＲＬの縄文を施した後，篦状工具で沈線を引き，以下縦位に縄文を底部付近まで施文している。胎土に小石・砂粒を含み，焼成は良好で褐色を呈する。２は波状口縁をもつ小型の深鉢。外反する口縁をもち，波頂下には押引き文が三角状のモチーフをつくり，交互刺突文もみられる。頸部は無文帯がめぐる。胴上部は隆線で区画された弧線文がめぐり，胴部を沈線が垂下する。波頂部の内側にも三角形の印刻がみられる。胎土に小石・砂粒を含み，内面は入念に研磨されている。褐色を呈する。３は口縁が外反するラッパ形の深鉢である。口縁部は段をもち，連続した小突起が付けられ，表裏に三角形の印刻が，また口唇には短沈線が施されている。胴部には地文はなく，隆線が垂下している。口縁部直下に補修孔がみられる。胎土は長石・雲母片等の混入物を多量に含み，焼成は良好で，茶褐色を呈する。４は緩やかに内湾する口縁部をもつ土器。二個一対の突起がついており，口縁の沈線に沿ってＹ字形沈線文が連続して施されている。頸部はＶ字状貼付文と横位の沈線がみられ，これに接してソーメン状の沈線が垂下し，胴部を区画している。胎土は雲母片を微量に，砂粒・小石を含み，焼成は良好。褐色を呈する。住居址の中央から破片が散在して出土した。５は平縁で内湾する口縁，緩やかに膨らむ胴部，張り出し底をもつキャリパー形の深鉢である。地文に縄文を施文し，口縁部には沈線によるＹ字形沈線文が連続する。瘤状の貼付文を起点に沈線が垂下し，胴部を四単位に区画する。また，胴部に細い無節の結節回転文も縦位に施されている。胎土は小石以外の混入物はみられず，堅緻な焼成であり，赤褐色を呈する。住居址の南側一帯に破片が散布して出土した。６は四単位の緩やかに外反する波状口縁をもつ深鉢である。波頂下に中心を置く文様構成で，渦巻文が配され，波頂部に刻目をもち，また交互刺突文もみられる。胴部にはＶ字状の貼付文をもち，８単位の結節回転文が垂下する。胎土に砂粒・長石を含んでおり，焼成はやや良好で，赤褐色を呈する。

（第95図）１は口縁部破片。口唇に刻みをもち，浅く細い集合沈線が縦位に施されている。胎土は雲母を微量，長石を多量に含む。焼成，保存状態はやや良好で灰色を呈する。２は頸



第95図　3号住居址の出土土器（1/3）

部破片。隆帯のはがれた跡があり，その上下に半截竹管状工具による平行沈線がみられる。胎土は緻密で，内面は剥落している。焼成は良好で褐色を呈す。3は胴部片。半截竹管状工具で弧線を描く。胎土は緻密で焼成は良好。灰褐色を呈する。4は胴部片。隆線の区画の中に沈線が充填されている。胎土には長石，雲母片を含む。焼成は良好で赤褐色を呈する。5は胴部片。集合沈線が縦位，斜位に施されている。胎土には長石を少量含む。焼成は良好で赤褐色を呈する。6は胴部で押引き文が縦位に施されている。胎土は緻密で白色砂粒を含んでおり，赤褐色を呈する。7は胴部で刻みを施した隆線が垂下し，半截竹管状工具による集合沈線が巡る。表面は著しく被熱し剥落が激しい。胎土には小石などの混入物を多量に含む。内面を丁寧に研磨している。黒味をおびた赤褐色を呈する。8は平縁の口縁部破片。隆線二本の上下をそれぞれ沈線で区画し，その下部に釣り鉢状のモチーフを描いている。胎土には長石などの混入物を多量に含み，赤褐色を呈する。9は第94図2の土器と同一個体と思われる胴上部破片であり，平行沈線の間が隆線のように盛り上がっている。10は底部破片。平行沈線が垂下し胴部を区画している。胎土には小石などの混入がみられ，焼成は非常に良好で褐色を呈する。11・12は同一個体で外反する口縁部に縄文ＲＬを施し幅広の沈線で頸部を区画している。胴上部に貼付けた波状の細隆線の上下を交互に刺突している。12は胴部破片だが，棒状工具で沈線を描出している。胎土には長石粒，金雲母を微量に含む。焼成は非常に良好であり内面は丁寧に研磨されており，赤褐色を呈する。13は細かな無節縄文ℓを地文に半截竹管状工具によって交互刺突文が施されている。胎土には雲母，長石を含み，焼成は良好で赤褐色を呈する。14は内湾する口縁部で，地文に縄文ＲＬを口唇付近は横位に，以下を縦位に施している。幅広の単沈線で弧線が描かれ交互刺突文や印刻がみられる。胎土には小石などを含む。焼成は非常に良好で，内面も研磨されている。赤褐色を呈する。15・16は胴部破片。15は隆線で区画した周囲を沈線がめぐる。16はＶ字の貼付け部分が剥落している。共に胎土には石英，雲母を多量に含み，焼成はやや良，赤褐色を呈する。17は波状口縁で波頂部に玉抱き文を形成している。波頂部直下を中心に隆線と沈線が三角状の文様を描く。胎土には長石・雲母を多量に含み，焼成はやや良好。黒味をおびた赤褐色を呈する。18も波状口縁部。波頂部に刻みをもち∩状に沈線が描かれ，その両脇を三角形の文様が施される。胎土には雲母・長石を少量含み，焼成は良好で内面は研磨されている。黒味をおびた赤褐色を呈する。19は右側の欠損した波頂部。口縁にそって押引き文が施されている。波頂部から縦位に数条押引き文が施されており，三角形の印刻もみられる。胎土に白色砂粒，長石を含み，焼成は良好である。灰褐色を呈す。20は波頂部の欠損した外反する口縁部。波頂部直下は沈線の施文後，半截竹管状工具で刺突して，三角状の区画を形成している。胴部は楕円状の隆線の区画がつくられ，その中を同じように刺突が施されている。胎土に雲母・長石を多量に含む。焼成は良好で黒味をおびた黒褐色を呈する。

21は，波頂部の口唇に横位に沈線が地文として密に施されており，刻目と直交する。破片の左

側の口唇にのみ短沈線が施されている。口縁にそって密な押引き文が山形に二条めぐり，その下に三角形の印刻がみられる。内側にも特徴的な印刻がみられる。胎土は小石などを含んでいるが焼成は非常に良好で，赤褐色を呈する。22は波状口縁で，縄文ＬＲを地文に押引き文が施されている。胎土は緻密で長石を少量含み，灰褐色を呈する。23は，波頂部から隆線が垂下し，両側と口縁にそって押引き文が施される。胎土は長石を多量に含んでおり，焼成は良好。赤褐色を呈する。24は波状口縁部で，幅広の押引き文で文様が描かれている。胎土は小石を含み，焼成は良好で，灰褐色を呈する。25は，平縁口縁部。口唇の内側が剝落している。口唇に押引き文が施されているが浅鉢の可能性もある。胎土は緻密であり焼成も良好。灰褐色を呈する。31は，胴部。釣針状の隆線の周囲を押引き文がめぐる。胎土は長石を含んでいるが，緻密であり褐色を呈する。26は，棒状の隆線を横位に貼りつけている口縁部。地文にかすかに縄文が施されている。原体は不明。胎土は，長石を多量に含み，焼成は良好で褐色を呈する。29は，口縁部。口唇に縄文ＲＬを施している。胎土は緻密で白色砂粒を含んでおり，黒褐色を呈する。30は，口縁部地文に縄文ＲＬを施し，長石・砂粒を含む。焼成不良，赤褐色を呈す。27と32は，隆線で区画される縄文施文の胴部。27は胎土に長石・金雲母を多量に含み焼成は良好，褐色を呈する。32は小石，砂粒を含み焼成はやや良好で剝落が激しい。赤褐色を呈する。33は沈線で区画し，胎土に金雲母・長石を多量に含んでおり，赤褐色を呈する。34は無文口縁部。胎土は長石・砂粒を含み，緻密で灰褐色を呈する。28は，細密な条線が整然と引かれており，櫛歯状工具で施文されたと考えられる。胎土は金雲母・長石を大量に含み緻密で褐色を呈する。36は，無文土器で円筒形の胴部から急に外反する器形である。口縁は表に折りかえし，段を成している。胎土には砂粒を含み，焼成良好，褐色を呈する。37と41は甕形の土器。口縁部は粘土をつけ足し粗く整形している。胎土に石英・小石を含んでおり，焼成良好で，黒褐色を呈する。39は底部。40・41は浅鉢形土器。共に表は無文で内面に押引き文が施されている。胎土に小石，砂粒を含み，焼成良好な赤褐色を呈する。42・43は網代痕をもつ底部。共に胎土に小石，砂粒を含み，赤褐色を呈する。

石器（第95図44～47）

打製石斧・石皿片各３点，石鏃・磨石・石核各１点，剝片14点の合計23点が出土している。

44は，黒曜石の剝片を用いた凹基の小形三角形石鏃である。先端部を欠損するが，重量は，0.4ｇである。45は，頁岩の横長剝片を用い，基部が尖る小形で撥形の打製石斧である。刃部は斜めに片寄る刃である。重量は，69.3ｇである。46は，砂岩の横長剝片を用いた着柄部の括れる打製石斧である。表面の刃辺左側には，縦方向の線状痕が観察される。上端を欠損するが，重量は，177ｇである。47は，多孔質の礫岩を用い，表裏面に凹みを有する磨石である。半分欠損するが，重量は281ｇである。尚，46と47は，床面直上から出土している。

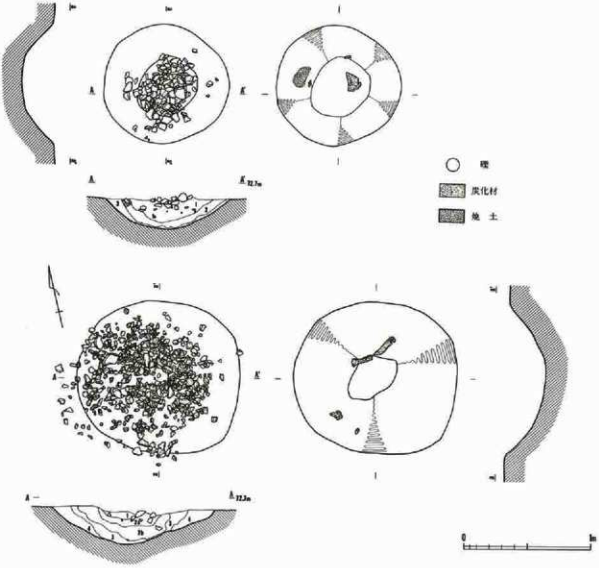
1号土坑（第96図上）

〈位置〉E 4—24グリッド。

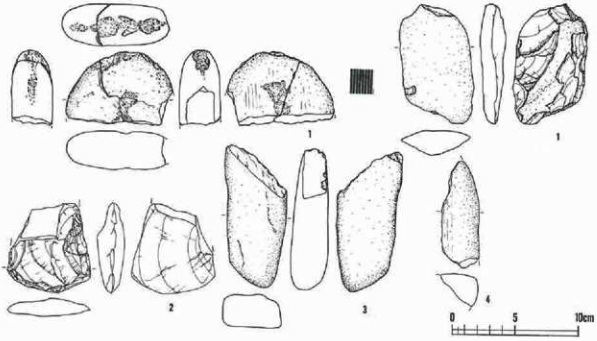
＜形状＞規模は98×95（cm）の円形を呈する集石土坑で，深さは30cm。断面形は擂鉢型である。

＜覆土＞1層は黒色土層であり粘性にとみ2～4cm大の炭化物，炭化粒子を多く含む。礫の大部分はこの層に含まれる。2層は粘性が認められ，炭化物やロームブロックを若干含む暗褐色土層である。3層はしまり良好で，粘性の認められる明褐色土層。

〈遺物〉構成礫総数490個，総重量12.8kg，平均礫重量は64.5gであり，全体の一割程度に赤化・すす・タール等の付着がみられるものがある。坑中には炭化材が2～4cm大の細片になって残存しているが，まれに15×10cm程の炭化材も残存する。石器は用礫として1点出土している。



第96図　1（上）・2（下）号土坑（1/20）



第97図　1・2号土坑の出土石器（½）

〈時期〉中期

＜所見＞いわゆる集石土坑であり，被熱した破砕礫が土坑の上面を被覆するような状態で充填されている。礫には被熱をしめすような赤化・すす・タール等の付着がみられる。土坑中には炭化物・焼土・焼土のブロックがみられるが，土坑壁面には直接被熱をうけたとみられるような硬化面は認められない。なお，礫は八割程度変色しているもののみ赤化礫とした。

石器（第97図1）

閃緑岩の扁平な円礫を用いた磨石が1点出土している。表裏面に磨滅痕が，その中央には各二ヶ所の凹石状の敲打痕が，また，周縁にも敲打痕が観察される。半欠したのち，集石用の礫として再利用されたものらしく被熱している。重量は，199.6 g である。

2号土坑（第96図下）

〈位置〉E 5－7グリッド

＜形状＞規模は 135 × 120（cm）で，円形を呈し，深さは32cm。断面は擂鉢型を呈している。

＜覆土＞1層は暗褐色土層。多量の炭化粒を含み，赤色スコリアを微量含む。粘性，しまりは共に認められない。層内の礫は被熱した破砕礫である。2 a 層は多量の炭化物粒子を含む黒褐色土層であり，赤色スコリア・焼土粒子・ローム粒子を微量含む。粘性にとみ，しまり良好である。2 b 層，2 a 層との違いは炭化物粒子が少ないことである。3層は，炭化物粒子・赤色スコリア・焼土粒子・ローム粒子を少量含む褐色土層。4層は炭化物粒子・赤色スコリア・焼土粒子・ローム粒子を微量に含む明褐色土層。

〈遺物〉構成礫総数851個，総重量46.6kg，礫平均重量54.8g。一割程度が赤化している。すす・タールの付着のみられるものもある。底部には直径約5㎝，長さ40㎝ほどの炭化材が良好な状態で残存している。石器は用礫として4点が出土している。

〈時期〉中期

〈所見〉本土坑も1号と同じように上面を被熱した破砕礫で被覆した形の集石土坑である。土坑中には，炭化材が良好な状態で残存しているが，土坑壁面には直接被熱したとみられる焼土，硬化面等は認められない。

石器（第97図2～5）

打製石斧2点，礫器・石皿片各1点が出土しており，全点被熱しており使用後，集石の用礫として再利用されている。

1，2は，ホルンフェルスを用いた打製石斧である。1は礫を素材とした短冊形のもので，刃部を欠損している。重量は，121.5gである。2は，剝片を素材とした撥形のもので，胴上半部を欠損する。重量は，94.6gである。3は，砂岩の礫を節理面で折り，その一辺に加工した礫器である。重量は，217gである。4は，被熱による風化が激しいが，表面一部に磨滅痕の観察される石皿片である。石質は閃緑岩，重量は60.5gである。

3号土坑（第98図上）

〈位置〉C6―22グリッド

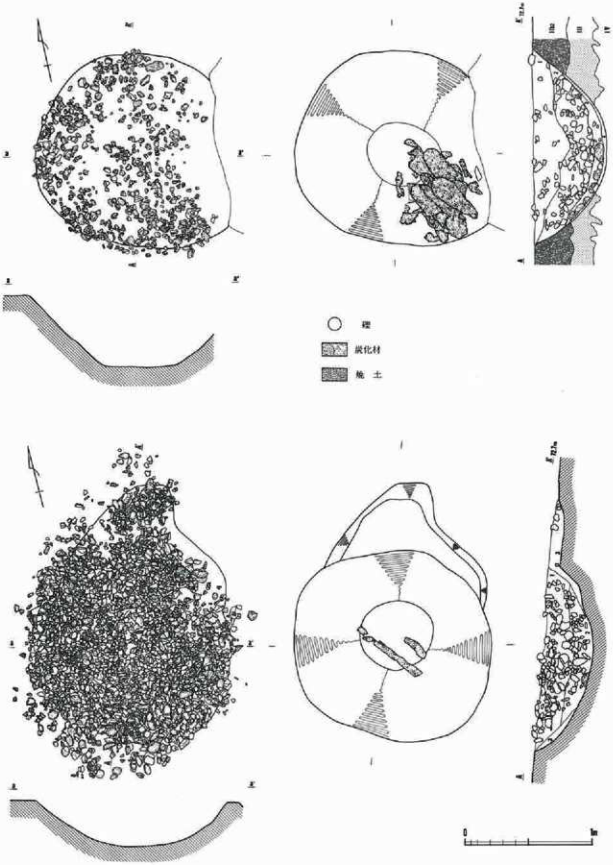
＜形状＞規模は170×165（㎝）で円形を呈し，深さは47㎝。断面形は擂鉢型を呈する。

＜覆土＞1層は暗褐色土層でしまりは良く，粘性がある。炭化物粒子・赤色スコリアを微量に含む。礫は被熱した破砕礫である。2層は，炭化物粒子を多量，焼土粒子・赤色スコリアを微量に含む黒褐色土層である。しまり・粘性は共に認められ，拳大の破砕礫を含む。3層は黒色土層であり，炭化物・焼土粒子・赤色スコリアを少量含む。層中に大形の炭化材を含み，礫は幼児の頭大のものもある。4層は赤褐色土層であり，焼土粒子を多量に含む。ボソボソとしていてしまりはない。

〈遺物〉礫の大部分は被熱作用を受けている。上層のものは赤化がみられ，下層のものには，スス・タールの付着がみられる。3層中より，長さ約65㎝，厚さ10㎝程度の炭化材が10数本検出されている。石器は用礫として6点出土している。

〈時期〉土坑中からは時期決定できるような遺物は検出されなかったが，周辺の遺物から考えて，中期五領ヶ台式期のものと見られる。

〈所見〉集石土坑であり，礫は土坑中にまんべんなく充填されている。上面には被熱の激しい破砕礫が，下部ほど破損度の軽い大形の礫が充填されている。坑内には炭化材が良好な状態で残存しており，土坑壁面にも坑内での用礫の加熱行為の結果と考えられる焼土・硬化面がみられる。本遺構は北東部の1/5程度が攪乱によって破壊されている。



第98図　3(上)・4(下)号土坑(1/20)

4号土坑（第98図下）

〈位置〉Ｃ６，13グリッド

＜形状＞規模は155×155（cm）の円形を呈するが，土坑北部に張り出し部分がみられる。深さは40cmで，断面形は擂鉢型と皿型のほぼ中間を呈している。

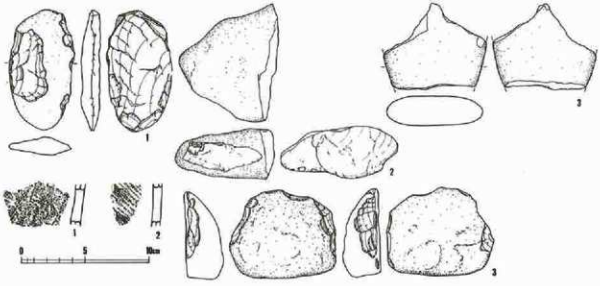
〈覆土〉１層は，暗褐色土層であり炭化粒を多量，焼土粒子・ローム粒子を微量含む。しまりは強く粘性あり，破砕礫が大部分をしめ，層中に炭化材を多く含む。２層は明褐色土層であり，炭化粒子，ローム粒子を含む。焼土はブロックで存在する。しまり良く，粘性がある。

〈遺物〉礫総個数6930個，総重量403.7kg，平均重量58.2g，上層は比較的破損度の高い小形の礫が多く，赤化しているものが一割強を占める。ススタール等の付着のみられるものは少ない。坑底部に直径約６cm，長さ60cmと20cmほどの２本の炭化材が残存する。土坑層中より中期五領ヶ台式期のものとみられる土器片が２点出土している。石器は用礫として１点出土している。

３号土坑出土の石器（第99図上１～３）

打製石斧・磨石・石核各１点，剥・砕片３点の合計６点で，全点被熱しており，集石の用礫として転用されたものである。

１は，泥岩の横長剥片を用いた被熱による風化が激しい短冊形の打製石斧である。重量は，78.8gである。２は，ホルンフェルスの礫を素材とした石核である。剥離作業中に石核調整として剥離されたものとも考えられる。重量は，295gである。３は，閃緑岩の扁平な礫を用いた磨石である。風化のため，明瞭な磨滅痕等は観察されないが，表裏面ともに使用されたと考えられる。重量は，172.2gである。



第99図　３（上）・４（下）号土坑の出土土器・石器（１／３）

〈時期〉遺構周辺の遺物からみて中期五領ヶ台式期のものと思われる。

〈所見〉本土坑も礫が満遍なく充塡されたかたちの集石土坑である。礫の大きさは拳大のものが主流をしめる。上層のものは破損度が高く，赤化したものが多い。土坑内には炭化材が良好な状態で残存しているが，土坑壁面には焼土・硬化面はみられない。

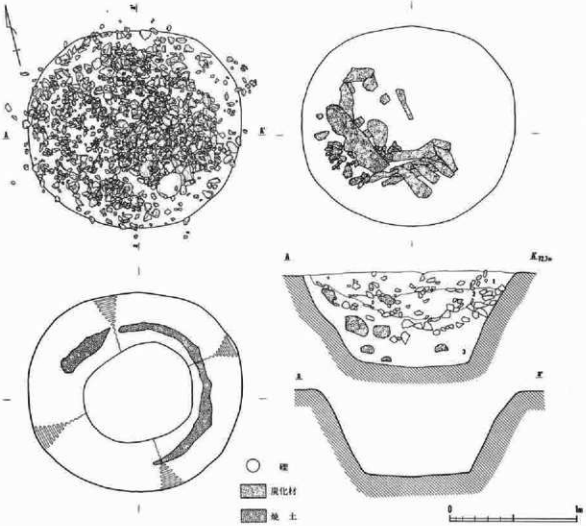
4号土坑出土の土器（第99図下1～2）

1は胴部破片。縄文RLと結節回転文がみられる。混入物はほとんどなく焼成良好である。2も無文の胴部破片である。小石・雲母を微量に含む。

4号土坑出土の石器（第99図・3）

ホルンフェルスの断面D字状の礫を，表面に加工を施した片刃の礫器が1点出土している。被熱しており，集石の用礫として再利用されたと考えられる。重量は，226gである。

5号土坑（第100図）



第100図　5号土坑（1/20）

〈位置〉C6－8グリッド

〈平面形〉円形

＜形状＞規模は150×150（cm），深さ75cm。坑底面はほぼ平坦で平面形は円形を呈する。

〈覆土〉1層は暗褐色土層であり炭化粒子，焼土粒子を若干含む。しまり，粘性はともによくない。破砕礫が大部分をしめる。2層は暗褐色土層であり，炭化粒子，焼土粒子を多量に含む。しまりは良くないが，粘性は1層に比してややある。層中に大形の炭化材が残存する。破砕礫が大部分をしめる。3層は黒褐色土層であり，炭化物を大量に含む。礫は大形のものが多くみられる。炭化材も大形のものが良好な状態で残存する。

〈遺物〉礫総数7685個，総重量484.2kg，礫平均重量63g。赤化・ススタールの付着がみられるものは少数である。平均直径9cm，長さ46cm程度の炭化材が10数本残存している。構成礫中に石皿とみられるものが完形で1点，半分以上残存しているものが数点検出されている。他に抉入磨石が1点出土している。

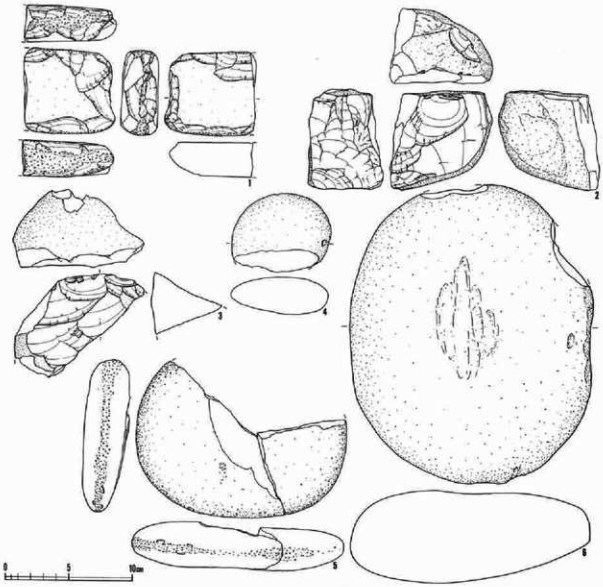
〈時期〉遺構周辺の遺物から中期五領ヶ台式期のものと思われる。

〈所見〉礫は土坑内に満遍なく充塡されており，上層に破砕礫，下部ほど破損度の低い大形の礫が使用されている。また，石皿・抉入磨石など石器の再利用とみられる用礫が本遺跡の他の集石土坑よりも多くみられる。炭化材は坑底を覆うように良好な状態で残存しており，焼土・硬化面もみられることから坑内での用礫の加熱が考えられる。

石器（第101図）

礫器・抉入磨石・磨石・石核，各1点，石皿6点，剥片2点の合計12点が出土している。石皿1点をのぞきすべて被熱して風化しており，集石の用礫として再利用されたものであろう。

3は，凝灰角礫岩の礫を素材とし，表面側にのみ加工を施した片刃の礫器である。重量は，386gである。1は，閃緑岩の扁平な礫を用いた抉入磨石である。被熱による風化で，磨滅痕，敲打痕等は不明瞭であるが，比較的使用頻度が高かったらしく，またその使用中に半欠したものと考えられる。重量は249gである。4は，閃緑岩の扁平な小形円礫を用いた磨石である。磨面痕等は不明である。重量は，164gである。2は，ホルンフェルスの礫を用い，平坦な自然面を打面とした石核である。左側面は折れた面と考えられる。重量は，465gである。5は扁平な閃緑岩の礫を用いた小形の石皿である。明瞭な磨滅痕は観察されないが，表裏面ともに使用されたと考えられる。また，全周縁には敲打痕がみられる。右半分はC6グリッドの遺構外出土であり，全体は被熱していない。重量は，左半分が618gで，合計は，837gである。6は，安山岩の扁平な礫を用いた大形の石皿である。表面中央は，使用により部分的に凹んでいる。坑底面に貼り付いた状態で出土している。重量は，4400gである。



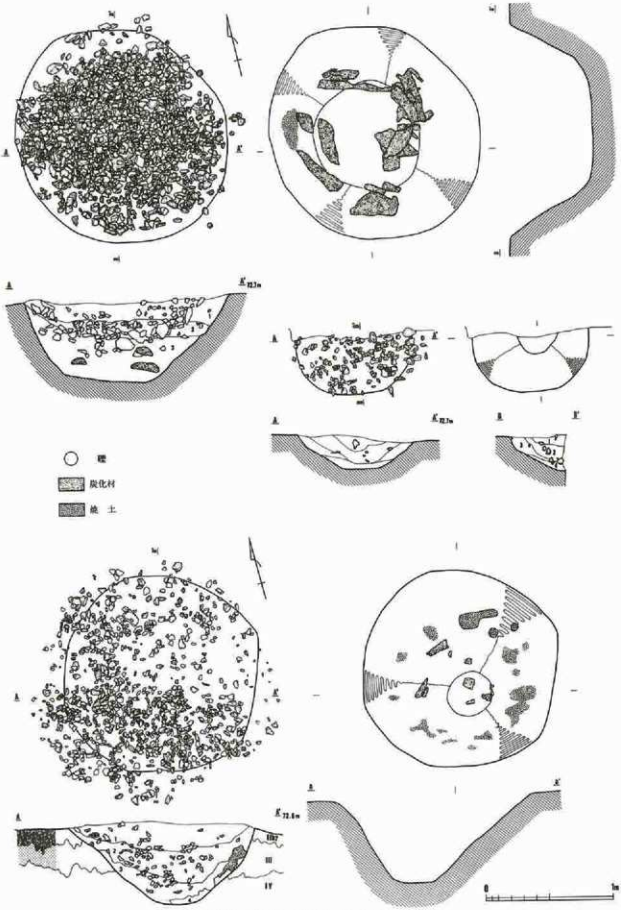
第101図　5号土坑の出土石器（⅓）

7号土坑（第102図）

〈位置〉C 6－9グリッド

＜形状＞規模は 168 × 165（cm），深さ60cm。坑底面はほぼ平坦で平面形は円形を呈する。

〈覆土〉1層は暗褐色土層。炭化粒子，焼土粒子を微量含む。礫は小形の破砕礫が多数を占める。粘性，しまりともに良い。2層は黒褐色土層であり，炭化物，焼土粒子を若干含む。礫は大形の破砕礫が多くみられる。粘性しまりともに良好。3層は黒色土層であり，炭化物・焼土粒子・ローム粒子を多量に含む。層中に平均直径10cm，長さ40cm程の炭化材が10数本残存している。



第102図　7(上)・8(中)・9(下)号土坑(1/20)

〈遺物〉礫は上部に赤化した小形の破砕礫，下部のものほど大形の破砕礫がみられ，ススタールなどの付着物が認められるものがある。炭化材の残存状態は良好である。土坑覆土中より中期五領ヶ台式期のものとみられる竹管文を施した土器片が数点出土している。石器は3点が用礫として出土している。

〈時期〉出土した土器片より中期五領ヶ台式期のものと思われる。

〈所見〉集石土坑であり，規模・構造ともに5号土坑と類似している点が多い。本遺構も，炭化材の残存状態土坑壁面の焼土・硬化面の状態から坑内での用礫の加熱が考えられる。

8号土坑（第102図）

〈位置〉B 6—25グリッド

＜形状＞土坑の半分が攪乱により破壊されている。規模は90 × 90（cm）の円形を呈するものと考えられる。深さは不明。断面形は残存部から擂鉢型であったと考えられる。

＜覆土＞1層は黒褐色土層で炭化物を多く含む。赤色スコリアを微量に含む。礫は被熱した小形の破砕礫である。2層は黒褐色土層であり，炭化物を多量に含む。赤色スコリアを微量含む。礫は被熱した小形の破砕礫である。3層は暗褐色土層であり炭化物を多量に含む。赤色スコリア焼土粒子を微量含む。礫は2層のものと同様である。4層は黒褐色土層であり，炭化粒子を若干含む。赤色スコリアを少量含む。礫は上層のものと同様である。

〈遺物〉礫は被熱した小形の破砕礫が大部分を占める。

〈時期〉確認面のレベルにより中期のものと思われる。

〈所見〉攪乱により遺構の約半分が破壊されており，本来は直径90cmほどの円形の集石土坑と思われる。礫は土坑内に満遍なく充填されているが，分布密度は疎である。層中に炭化物が1cmほどの粒状で混入している。

9号土坑（第102図）

〈位置〉H 4—23，24グリッド

＜形状＞規模は150 × 150（cm），深さ60cmで，平面形は円形，断面形は擂鉢型の土坑である。

＜覆土＞1層は暗褐色土層で炭化粒子を少量，焼土粒子は微量に含む。しまり，粘性ともに良好で，小形の破砕礫が大部分をしめる。2層は茶褐色土層で焼土粒子・炭化粒子を多く含む。礫は1層とほぼ同様である。3層は黒褐色土層であり，焼土粒子・ローム粒子を多く含む。礫は上層と同様である。層中に炭化材が存在する。4層は明褐色土層であり，焼土粒子・炭化粒子，ローム粒子を含む。しまり，粘性ともになし。

〈遺物〉礫は被熱して破砕した小形の礫が大部分を占める。ススタールなどの付着物はあまりみられない。土坑内には直径約10cm，長さ15cmほどの炭化材が数点残存している。覆土中よりチャートの剥片が1点出土している。

〈時期〉遺構周辺の遺物より中期五領ヶ台式期のものと思われる。

〈所見〉本遺構の礫は小形の破砕礫が大部分であり，土坑内に礫が満遍なく充塡されている集石土坑である。礫の分布密度は疎である。炭化材の残存状態，土坑壁面に焼土・硬化面が認められることから，坑内での用礫の加熱が考えられる。

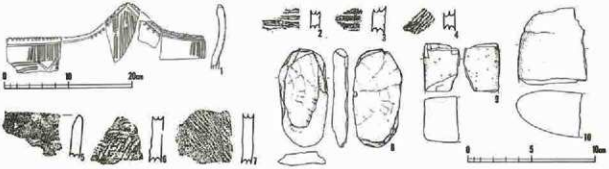
7号土坑出土の土器（103図）

1は内湾する波状口縁をもつ土器である。V字の貼付文をもつ破片以外は包含層から散在して出土した。半截竹管状工具を施文具に，口唇の刻みや平行沈線や刺突がみられる。頸部も平行沈線で区画されており，胎土に雲母・長石を多量に含んでいる。焼成は良好で，黒味をおびた赤褐色を呈する。2，3は共に半截竹管状工具による沈線がひかれている胴部破片である。1は胎土に雲母長石を多量に含み，焼成，保存状態はやや良好。赤褐色を呈する。3は雲母を胎土に含んでおり焼成は良好で，赤褐色を呈する。4，6は無節の縄文が施されている胴部破片。4の内側には炭化物が付着している。6は表面を粗雑に横位に整形した後に，無節の原体を疎らに施文している。共に赤褐色を呈し，焼成は良好。7は縦位に縄文LRと結節回転文が施された胴部で，胎土に石英・長石・雲母を含み黒褐色を呈する。5は無文の口縁部。砂粒・雲母片を含を含んだ緻密な胎土を用い，焼成はやや良好で灰褐色を呈する。

7号土坑出土の石器（103図）

打製石斧1点，石皿2点が出土しており，すべて被熱しており，集石の用礫として用いられたものである。

8は，ホルンフェルスの横長剥片を用いた打製石斧である。被熱のため剥離面等は，不明瞭である。重量は，157.8gである。9と10は，扁平な礫を用いた比較的大形石皿である。磨滅痕等は不明瞭である。重量は，9が239g，10は660gである。



第103図　7号土坑の出土土器（¼）・（⅓）・石器（⅓）

6号土坑（第104図）

〈位置〉Ｈ４—14・15・19・20グリッドの境界

＜形状＞規模は165 × 155（cm），深さ100㎝で，円形を呈し，坑底面はほぼ平坦である。

〈覆土〉１層は暗褐色土層であり焼土粒子・炭化粒子，赤色スコリアを微量に含む。礫は大部分が破砕礫であり，赤化している礫が一割程度ある。まれに焼土の付着のみられるものがある。２層は黒褐色土層であり，炭化物を多量に含み，焼土粒子を微量に含む。スス・タールの付着のみられる礫が大部分をしめる。３層は暗褐色土層であり，ローム粒子を比較的多く含む。礫は円礫を多く含む。４層は暗褐色土層であり，焼土粒子を多量に含む。礫は小形の円礫が多数をしめる。５層は黒色土層であり，炭化物を多量に含む。小形の礫が土坑底部を覆うかたちで配置されている。

〈遺物〉礫総数10595個，総重量833.5kg，平均重量78.19 であり，上部には赤化のみられるもの下部にはスス・タールなどの付着がみられるものがある。平均直径９㎝，長さ52cmほどの炭化材が約20本良好な状態で残存している。土坑覆土上より中期五領ヶ台式期のものとみられる土器片が数点出土している。石器は打製石斧１，石核１，剥片２点が出土し，全点被熱しており，集石の用礫として転用されたものである。

〈時期〉遺構周辺の遺物から中期五領ヶ台式期のものと思われる。

〈所見〉礫はいずれも被熱しており土坑内に満遍なく充塡されているが，本遺構の場合には炭化材下部の土坑底に礫が配されているのが特徴である。炭化材の残存状態と土坑壁面の焼土・硬化面の状態により土坑内での用礫の加熱が考えられる。礫は本遺跡での他の土坑に比して大形の礫が使用されている傾向が窺える。

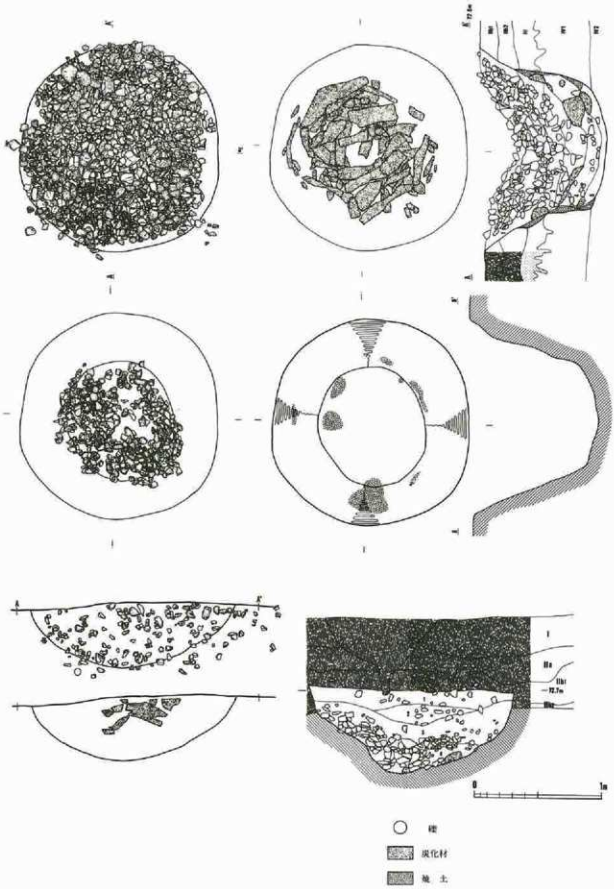
10号土坑（第104図）

〈位置〉Ｉ４・５グリッド

＜形状＞規模は遺構の２／３が調査区域外の為，不明。深さは65㎝以上である。平面形は円形を呈し，断面は擂鉢型であると推定される。

〈覆土〉１層は暗褐色土層で炭化粒子，焼土粒子，ローム粒子を若干含み，赤色スコリアを微量含む。小形の破砕礫が大部分をしめる。２層は黒褐色土層であり，粒子の混入は１層とほぼ同様であるが，炭化粒子を多量に含んでいる。礫も１層とほぼ同様である。３層は赤褐色土層であり，焼土を多量に含む。礫は中形の破砕礫であり大部分が赤化している。４層は黒色土層であり，炭化物を多量に含む。礫は拳大で赤化しているものは少ない。層中に炭化材が良好な良好な状態で存在している。

〈遺物〉礫は拳大より小さい破砕礫が大部分でいずれも被熱しており一割程度が赤化している。４層中に直径約10㎝，長さ25cmほどの炭化材が数本残存している。



第104図　6(上)・10(下)号土坑 (1/40)

〈時期〉遺構周辺の遺物により中期五領ヶ台式期のものと思われる。

〈所見〉東側2/3は調査区域外であるため1/3ほどした調査できなかったが，本来は直径165cmほどの円形の集石土坑であると思われる。規模・構造などの点で3号土坑と類似している。本遺構も炭化材の残存状態，土坑壁面の焼土・硬化面より土坑内での用礫の加熱が考えられる。

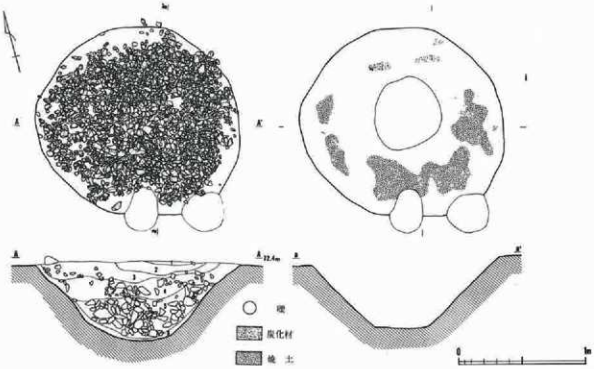
11号土坑（第105図）

〈位置〉H5—21，I5－1，3号住居址の中央部に位置する。

＜形状＞規模は160×150（cm）で楕円形を呈し，深さは65cm。断面形は擂鉢型を呈する。土坑内には攪乱が2か所あるが，これは3号住居址の柱穴であると考えられる。

〈覆土〉1層は赤褐色土層である。2層は暗褐色土層であり，ともに3号住居址の炉である。3層は暗褐色土層であり，炭化粒子，ローム粒子を多く含み，焼土粒子，赤色スコリアを若干含む。4層は暗褐色土層であり，3層より焼土粒子を多量に含む。礫は小形の破砕礫が大部分をしめる。5層は赤褐色土層であり焼土粒子を多量に含む。礫は拳大で赤化したものがみられる。6層は黒色土層であり炭化物を大量に含む。層中に炭化材が存在する。

〈遺物〉礫はゴルフボール大以下の破砕礫から，幼児の頭大までの礫まで，上部ほど小形の礫が使用されている。遺構の上面には15号住居址の遺物が被覆している。本址からは集石の用礫



第105図　11号土坑（1/20）

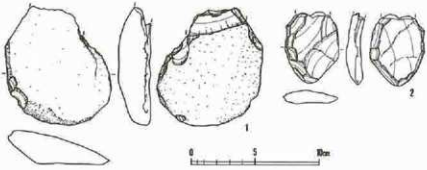
として再利用したと思われる石器が3点出土している。

〈時期〉本遺構の上面は3号住居址の炉として使用されており，中期五領ヶ台式期の住居址である3号住居址より以前あるいは直前の構築と考えられる。

〈所見〉本遺構はその上面が住居址の炉として使用されているが，土坑の壁面にみられる焼土，硬化面や炭化材の残存状態から，火床が想定でき，住居址と集石土坑は別々の施設として機能していたと考えられる。本遺構もその規模・構造から3号土坑との類似が窺える。

石器（第106図）

打製石斧2点と凝灰岩の剝片が1点出土している。1は，ホルンフェルスの扁平な礫の周辺に加工を施した打製石斧であるが，刃部の作出がなされていないので製作途上で欠損したものと考えられる。重量は，191.4gである。2は，ホルンフェルスの横長剝片を用いた小形打製石斧である。重量は，32.4gである。1・2ともに，被熱しており，集石の用礫として転用されたものであろう。



第106図　11号土坑の出土石器（⅓）

e．中期初頭の遺構外出土土器

第7群　五領ヶ台式期土器（第107・108図）

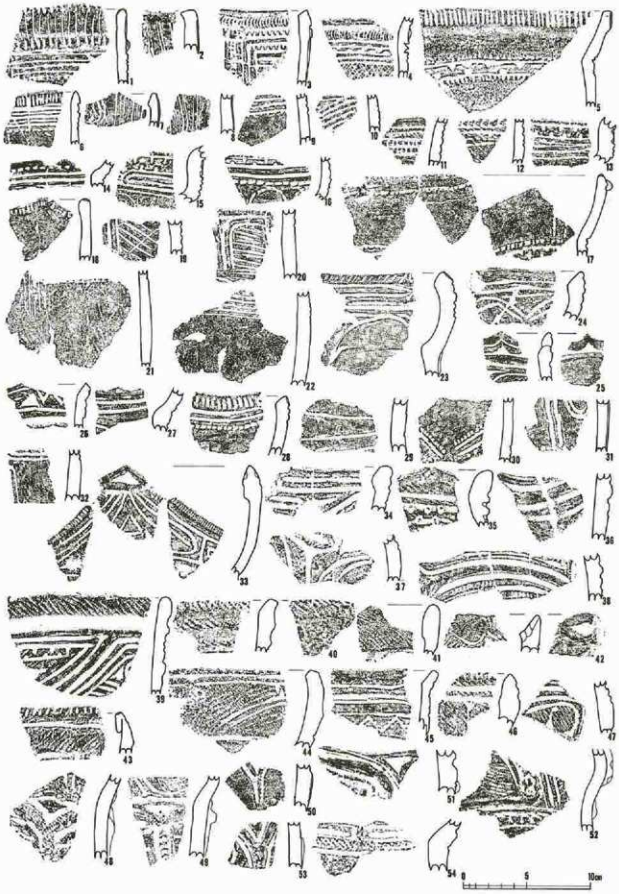
中期初頭に位置づけられる五領ヶ台式土器を一括した。遺物は主に1，2，3号住居址周辺から出土したもので，破片の資料のみであるため，施文方法，文様モチーフ等から12に分類した。なお，1～11類は深鉢を，12類は浅鉢形をまとめている。

第1類（1～22）　地文がなく半截竹管状工具による平行沈線からなる文様構成をもち，交互刺突文などがみられるもので，厚手で長石や雲母片を多く含み，赤褐色を呈するものが多い。1は口唇に刻みをもち縦位の集合沈線が施されている口縁部片。口縁部を区画する隆線上にも刻みをもち，その下位には横位に沈線を押引き文が施されている。2，7は縦位に集合沈線が施されたロ縁部である。3，4は同一個体だが，連続爪形文，交互刺突文，隆帯の貼付けと密で変化に富んだ文様を配している。5は緻密な胎土を用い，二段の屈曲をもつ器形と考えられるもので，頸部に三角印刻文が交互に施されている。褐色を呈する。6も緻密な胎土で，内面を丁寧に整形している。7もロ縁部で破片右側に隆線が垂下している。13～16は沈線にそった刺突や交互刺突をもつ頸部破片。17はゆるやかに外反する波状口縁をもつと考えられる。口縁部は断面三角形の貼付けが見られ，押引き文がめぐる。波頂部からも縦位に押引き文が施されている。赤褐色を呈する。8～12は胴部破片。19，20も胴部片だが，幅の広い平行沈線の区画内を浅い沈線で充填している。18，21は同一個体と考えられる。小突起のついたロ縁には刻みが施されている。21は胴部破片で押引き文，交互刺突文が施され，下位に結節回転文がみられる。22も胴部上半破片である。

第2類（23～33）　地文がなくロ唇に短沈線を施したり，口縁にそった沈線下に弧線文などをもつものである。23は頸部にV字の貼付文をもつ。24は内面を丁寧に研磨し，整形しているが，表面の施文は粗雑である。25～27は堅緻な焼成で三角印刻文をもつものである。29～32は胴部破片で単沈線による文様表出，沈線に沿った刺突がみられるものである。33は内湾するロ縁をもつ波頂部片。三角状のモチーフを中心に文様が施されている。三角印刻文が波頂部と，波頂直下の三角文を中心に文様が構成され，三角印刻文が波頂部の表裏やロ縁部文様帯にもみられる。

第3類（34）　2類の地文に縄文を施したもの。34は地文上に幅のある沈線で弧線文が描かれている。

第4類（35，39～42，45）　口縁に帯縄文をもつもの。35は外反する小波状を呈するロ縁部片。縄文ＲＬが施されている。竹管状工具による交互刺突文がみられる。胎土は小石・砂利を含むだけで，堅緻であり，焼成は非常に良好である。39は平縁ロ縁。縄文を施した後，指頭で横位に沈線を引いている。その下位には，隆線の区画の中に弧線文を描き，交互刺突文もみら



第107図　遺構外の出土土器(1)・(½)

れる。また三角印刻文がみられ，玉抱き文をもつものと考えられる。胎土には雲母・長石の多量に含み，焼成は良好である。40は外反する口縁部片。口縁部に指頭で二条沈線をひいた後に縄文ＲＬを施している。その下位に口縁部を区画する沈線が施されている。内側にも口唇部にのみ縄文が施文されている。41は口縁部片でつまみの左側部分が欠損している。帯縄文下に段をつけ口縁文様帯を区画している。42は波頂部に粘土をまきつけた特徴的な口縁部片。縄文ＬＲが施されている。45は外反する口縁部にのみ縄文ＲＬが施され，その中央に沈線がひかれているが，右端はわずかに波状をなしている。42と同様なつまみがつく可能性がある。口縁下には鋸歯状の文様が半截竹管状工具の刺突によって描出されている。いずれも胎土は長石粒や雲母片を含み，焼成は良好で赤褐色を呈している。

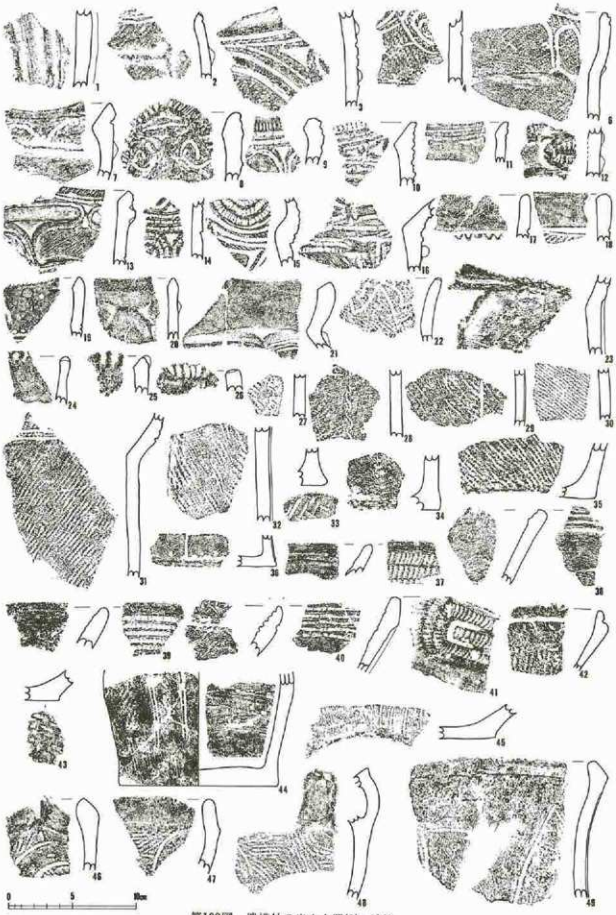
5類（43，44）　口縁部に，文様帯がなく，縄文のみが施されているもの。43は口縁の折り返し部分を明確に残している。無節の縄文ℓが施されている。44は弧線文と交互刺突文が粗雑に施されているが，文様が連続せず，縄文ＬＲが施されているのみである。

6類（46，47）　単沈線によって文様が表出されるもの。46は口縁部の沈線に沿う三角印刻文がＹ字状に垂下する。胎土に長石・小石を多量に，雲母も少量含んでいる。47は沈線で区画した中を印刻し玉抱き文のような文様をつくる。胎土に雲母・長石を含んでいる。

7類（48～54）　頸部及び胴部の区画に隆線の貼付やＹ字懸垂文がみられるもの。２～６類の土器の頸部にあたると考えられる。48は頸部に隆線がめぐる下にＹ字状の隆線が垂下する。隆線上には縄文ＬＲが施されている。49は胴部に垂下する隆線をつけた後にＶ字状隆線を貼付けている。垂下する隆線の上には縄文を押捺している。口縁部文様帯は，48，49は共に弧線が描かれている。50，53は胴部破片。50は押引き文で描かれている。砂粒を含んだ緻密な胎土である。53はＹ字状隆線に接して沈線を施文している。51は胴上部破片。幅の広い半截竹管状工具で整形された隆線が三角刻印文に沿って胴部に垂下していく。52も隆線が頸部には横位に，口縁部文様帯にかけて弧状に貼りつけており，隆線を幅広の半截竹管状工具で押引きし，平行沈線をめぐらしている。地文に無節の縄文ℓが縦位に施されている。54も隆線で区画するもので，小石，砂粒を含んだ厚手の土器である。

8類（107図36～38　108図１～４）　単沈線，隆線によって文様描出される胴部片で，主に地文に縄文が施されているものを一括した。36，38，３は弧線文が隆線で区画されている。１は断面半円形の二本の隆線が垂下しており，その外側に幅広の平行沈線が引かれている。２は胴上部破片。釣り針状の隆線が貼られ，頸部付近には密な爪形文が施されているものである。胆土に雲母・長石を多量に含んでいる。４は，単沈線で渦巻文のような文様を描いている。

9類（６～16）　押引きを多用するもので，波状口縁をもつものがほとんどである。６は幅広の角状工具で押引きして文様を表出している。頸部には貼付文がみられる。胎土に小石



第108図　遺構外の出土土器(2)・(1/3)

や砂粒を含み赤褐色を呈している。7は断面三角形の隆線で区画した口縁部に∩字状に押引き文が描かれている。胎土に長石・雲母を多量に含んでいる。8は口縁波頂部片。摩耗・剝落が激しく，中心部を欠くため不明瞭であるが，波頂部に三角形のモチーフが描かれており，口唇に施されている単沈線以外は全て押引きによって施文されている。長石・砂粒を含むが緻密な胎土を用い，赤褐色を呈する。9は三角印刻文をもち∩字状のモチーフが連続する。10は口唇に単沈線を施し，押引き文・交互刺突文・三角印刻文と密に施文されている。11は口縁に沿って，2条の押引き文が浅く施されている。12は胴部片。隆線による楕円形の区画内に，角押文が施されている。13は波状口縁部。口唇には短沈線が施されている。口縁直下の貼付文を中心に楕円区画文がつくられ，密な押引き文が施されている。貼付文直下の楕円区画内には細かな縄文LRが施されている。小石・砂粒を含んでいるが，焼成は非常に良好で赤褐色を呈する。14は胴部で密に押引き文が施されている三角印刻文もみられるもの。15は地文に縄文が施されており，円形に湾曲する部位に押引き文が渦巻状に施されている。口縁付近の部位と考えられる。16は頸部片。棒状の隆線を横位に貼付け，横位にまたは縦位に押引きが施されている。6，7，9～12，14～16の土器はいずれも胎土に砂石や長石・小石を含んだ焼成良好な土器である。

10類（17～26）　口縁部に無文帯のあるもの。17は平縁口縁のもの。口縁下に竹管状工具による交互刺突文が施されている。胎土には雲母・長石を多量に含む。18は沈線下に縄文LRが施されている。19は波状口縁部。口唇に刻みをもち，無文帯の下は沈線にそった刺突が施される。砂粒を多く含んだ緻密な胎土を用いている。20は口縁部無文帯の下にX字状の隆帯が貼られ，以下に結節回転文が施されている。胎土に長石を多量に，雲母を少量含んでおり，褐色を呈する。21は波状口縁をもち頸部が大きくくびれる。頸にあるV字状の貼付け文に沿って沈線がめぐり，二段の屈曲部をもった器形のものと考えられよう。胎土に長石を少量，雲母・砂粒を多量に含み，褐色を呈する。22・23は粗製土器。22は口縁部で口唇に刻みが施されている。胎土には長石粒・小石を多量に含んでおり整形は粗雑で剝落が激しい。23は頸部片で，Y字状懸垂文がみられる。24は口縁部で，口唇に刻目を施している。長石・小石を含んだ焼成の良好な無文土器。25，26は口縁波頂部のつまみ部分　25は右側部分が欠損している。口唇に粘土紐を貼付けて刻目と同様の効果をねらったと考えられる。26は棒状工具で刻目が施されるものである。

11類（27～36，44）縄文施文を主体とした胴部破片と底部破片を一括した。27，28は結節回転文が，29は沈線が，32は隆線が胴部を区画する。31は外反する口縁が頸部で一旦括れる胴部破片。屈曲部に特に文様の区画はなく，口縁に沈線・三角印刻文がみられる。30は無節縄文tが縦位に施されている。33は網代痕をもつ底部破片。胴部は無文である。34は所謂張りだし底を

もっている底部破片。細かな縄文ＬＲを疎らに施して地文とし，断面三角形の沈線が胴部を区画している。35は底部から胴部へ膨む器形のもの。29，31は胎土に雲母・長石を多量に含んでいるが，それ以外のものは，混入物をさほど含まない。44の底部破片は，Ⅱｂ層最上部から一括出土したものである。胴部に縦位に縄文ＲＬが施され，結節回転文を施した両側に，平行沈線が垂下しており，内面には，横位に整形痕がみられ，植物の繊維痕も付着している。胎土に小石や雲母を少量含む。黒味をおびた褐色を呈する。

12類（37～43,45）浅鉢形土器を一括した。37～39は表面は無文で内面の口縁部に文様が施されている。37は幅広の篦状工具による押引き文をもつ。胎土に小石を含み，焼成良好で赤褐色を呈する。38は口縁に二条，押引き文が施されている。砂粒を含んだ緻密な胎土を用い，かなり磨滅している。黒褐色を呈する。39は38と比べてやや幅広の施文具で押引きがされている。雲母・長石を多量に含み，赤褐色を呈している。40は剝落が激しく，焼成・保存状態は不良であるが，表面にも施文されており，口唇の刻目直下には横位に縄文ＲＬが，以下は縦位に施されており，沈線が両者を区画している。胎土には小石・雲母を多量に含む。42は波状を呈している口縁部片。表面は剝落が激しいが無文と考えられよう。内面に，⊂状に二種類の施文具をつかって連続爪形文が施されている。42は口唇部に粘土を貼って内側に屈曲した口縁をつくる。沈線が一条施され，縄文ＬＲが斜位に施されている。砂粒を含んだ緻密な胎土を用い，褐色を呈する。43は底部片で網代痕をもっている。胎土に砂粒・小石を含み，赤褐色を呈する。45は表面に篦状工具で縦位に沈線がひかれている底部片，内面は丁寧に研磨されており，焼成は非常に良好。胎土に小石・砂粒を含み，赤褐色を呈する。

第８群　加曽利Ｅ式土器（108図　46～48）

中期後葉に位置づけられるもので，Ⅱａ層から出土した。小波状を呈する口縁をもち，把手がつく。沈線で区画した中の縄文を磨り消している。

第９群　称名寺式土器（108図49）

後期初頭に位置づけられるもので，Ⅱａ層から出土した。口唇部が内接しており，沈線区画文が施されている深鉢破片である。表裏共に，丁寧に器面調整されている。焼成は非常に良好であり，灰褐色を呈する。

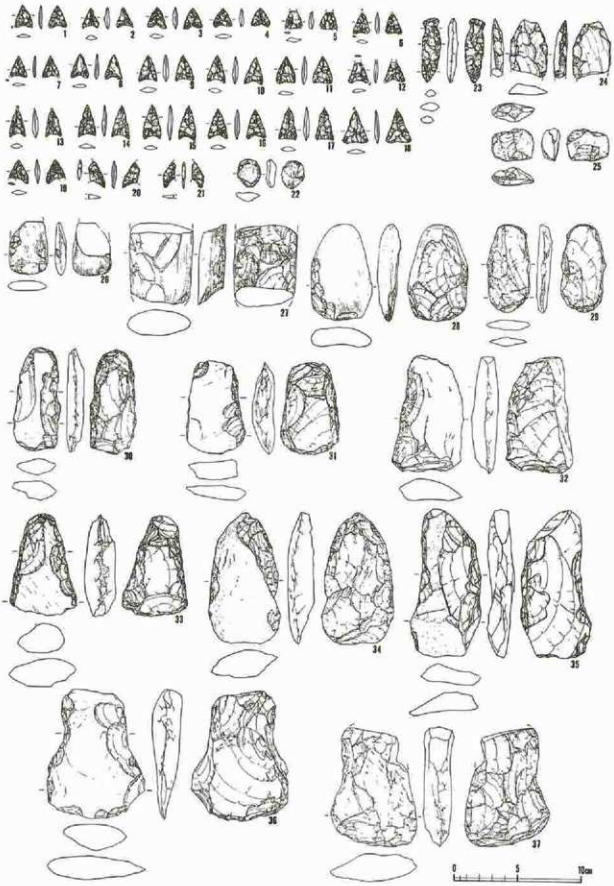
f．遺構外出土の石器

遺構外からは，総数495点の石器が出土しているが，その内訳は，石鏃22点，石匙１点，スクレイパー２点，楔形石器２点，磨製石斧３点，打製石斧53点，礫器23点，スタンプ形石器８点，敲石６点，磨石26点，石皿51点，石剣２点，棒状礫10点，石核15点，剥・砕片 271 点である。

これらのうち，礫器が比較的多く，磨石には抉入磨石など特殊なものも含まれる。また，石剣が出土している点も特筆できるかもしれない。棒状礫は，向山遺跡で注目されたもので，側面等に敲打による剥離痕等が観察されるものもあり，ここでは，一つの石器器種として扱った。早期末葉の住居址が20軒余りあり，その時期に含まれる石器も多いと思われるが，その属する時期は，分布的な特徴もないことから，明確にし得ないものが多い。

石鏃（第109図１～24）

不定形の石鏃（22）を除き，出土した石鏃は，すべて三角形鏃であり，基部が多少なりとも凹みを持つものである。そのうち，チャートを素材とする外形が丸みをもつ二等辺三角形で，凹みの浅い一群（５・６・８～11・13～16）は，小形のものから，比較的大形のものまであるが，その形状的に一つのまとまりを成している。この石鏃は，早期末葉の住居址（４・５・23号住居址等）からも同様のものが出土している（９は，早期末の14号土坑確認面より出土している）ため，早期末葉に属するものであろう。 重量は，５，６が0.6ｇ，８が0.7ｇ，13が0.8ｇ，10，14が0.9ｇ，９，16が10ｇ。11が1.1ｇ，15が1.2ｇである。また，17はチャートの剥片を用いた二等辺三角形鏃であるが，先端部付近にふくらみをもち，先端が突出し，18号住居址出土のものと同様形状を呈するものである。重量は1.2ｇである。12，18は，チャートの薄い剥片を用いた二等辺三角形で二辺が多少内湾するものである。重量は，12が0.7ｇ，18が1.3ｇである。１は，黒曜石の剥片を用い，表裏面中央を研磨した局部磨製石鏃である。重量は0.5ｇである。２は，水晶の剥片を用いたためか，比較的厚手に仕上げたものである。重量は，0.5ｇである。３は，黒曜石製の凹基の三角形鏃であるが，基部の抉りが，中央のみに限られ，鍬形鏃に近い形状を呈している。重量は，0.6ｇである。４は，比較的厚手の黒曜石製のものである。重量は，0.6ｇである。７は，黒曜石製で，薄手の比較的凹みの浅いものであり，入念に形状を整えている。重量は，0.4ｇである。19～20は，黒曜石を用い，比較的脚部の長いものである。20，21は，中央部から欠損するが，断面面には上下両端から剥離面が観察されるため，使用時における欠損と考えられよう。重量は，19が0.7ｇ，20が0.6ｇ，21が0.4ｇである。22は，チャートの厚手の剥片を用いた不定形のものであり，未整品段階であるか，スクレイパーの一種とも考えられよう。重量は３ｇである。



109図　遺構外の石器１（石鏃，石匙，スクレイパー，楔形石器，磨製石斧，打製石斧）

石匙（第109図23）

23は，B6—グリッド内，12号住居址確認面から出土している。チャートの剝片を用い，入念に加工を施した縦形のものである。重量は，5.9gである。

スクレイパー（第109図24）

比較的良質の頁岩の横長剝片を用い，両側縁に加工を施したもので，石匙とは別の使用方法のものであろう。重量は，17.9gである。

楔形石器（第109図25）

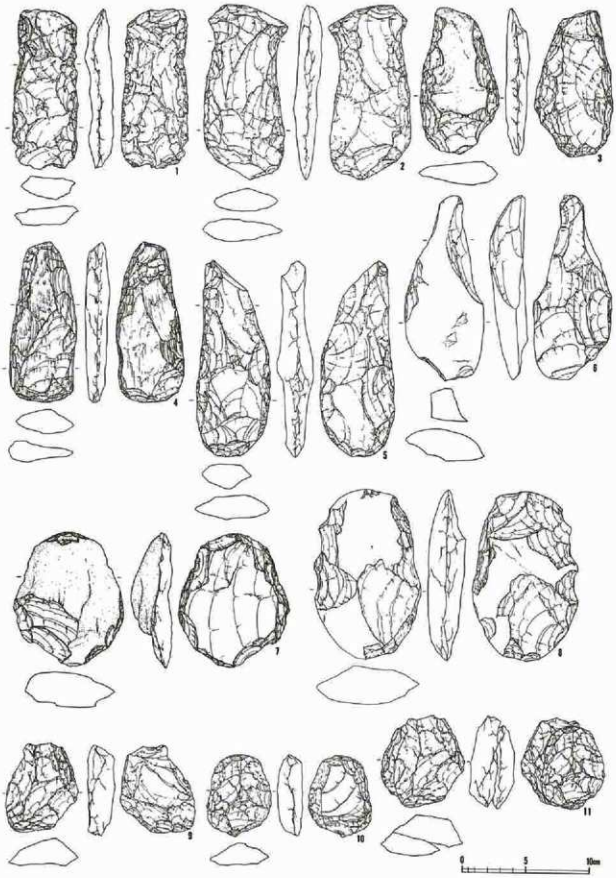
硬砂岩の剝片を用いたもので，表裏面には，使用時の剝離面が見られ，上・下端には，つぶれも観察される。重量は，3.9gである。

磨製石斧（第109図26～28）

26は，風化が著しいが，砂岩の小形礫を用い，側縁からの剝離による加工を施したのち，刃部を中心に，研磨されている。重量は，13.8gである。27は，胴部の破片であるが，凝灰岩の剝片の表裏に入念に加工を施したのち，断面が長楕円形になる様に，両側面を中心に研磨されている。重量は，93.5gである。28は，砂岩の扁平な礫を用い，刃部を中心に加工を施し，表面部を多少研磨したもので，早期に特徴的な所謂「礫器」と呼ばれるものであろう。重量は，77.3gである。

打製石斧（第109図29～37，第110図1～11）

打製石斧は，数多く出土しているが，欠損品も多い。完形のものから考えると，重量を中心に，120gまでが小形，120g～180gが中形，180g以上が大形という様に分類されよう。しかし，その中でも，形態的にいくつかに分類され得ると考えられる。しかし分銅形といわれるものは出土していない。また，接合資料も存在し，13号住居址の例を含め，その再生作業等の実体を示すものとして重要であろう。29，30は，粘板岩の横長剝片を用いた短冊形のもので，重量は，29が27g，30が48.3gと小形軽量である。31～33は，頁岩で，表裏面に自然面を残す剝片を用いて，撥形態を示すものである。重量は，31が72.3g，32が，113.2g，33は，111gと小形であり，石質の共通性とともに，まとまりを持っていると考えられる。そのうち32は側面の加工も多くのつぶれが見られる程入念であり，刃部を何度か欠損しており，使用頻度も高く，この形態の代表例であるといえよう。34，35，1，3，4は，重量が130g～160gの中形で，基本的な既形が短冊形のものである。34は，頁岩の節理面で剝された剝片を用い，丸みのある既形に仕上げたもので，使用による刃部を多少欠いている。重量は，134.6gである。35は，ホルンフェルスの横長剝片を用い，胴部側面からのみ加工が施され，一方の胴部に抉りの見られるものである。重量は，141.1gである。1は，ホルンフェルスの剝片を，表裏面に入念に加工を施し両側縁の平行する短冊形に仕上げたものであるが，胴部上半部に多少くびれを持っている。重量は，150.8gである。3は，砂岩の横長剝片を用い，刃部側が広がり，短冊

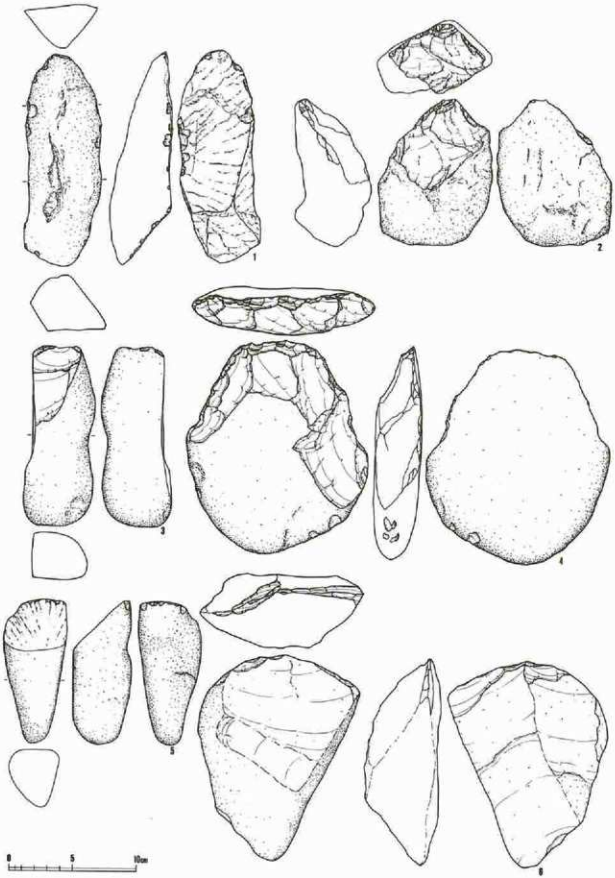


110図　遺構外出土の石器２

形と撥形の中間的な形態を示すものである。刃部右側と上端を欠損し，刃部周辺には，線状痕が観察される。重量は，153.9ｇである。4は，節理面で剥れた砂岩の剝片を用いた多少刃部側が広がるものである。重量は，141.7ｇである。36，37は，ホルンフェルスの剝片を用い，刃部が，胴部中央から大きく広がる中形の撥形のものである。重量は，36が174ｇで，37は，上部を欠損するが，181.4ｇである。2，5，6は，重量が，200ｇ以上と大形で短冊形のものである。2は，砂岩の横長剝片を用い，側縁上端に突起を持つ特徴的な形態で，刃部周辺には線状痕が，胴部上半の着柄部と考えられる部分には，多少磨耗痕が観察され，重量は235ｇである。5は，ホルンフェルスの剝片を用い，下半部の多少広がる長大なものである。着柄部と考えられる上半部は，細くかつ薄く作られている。重量は，255ｇである。6は，砂岩の剝片を用い，5と同様に，下半部の広がるものである。上半部は節理面で欠損しているものと考えられる。重量は，226ｇである。7，8は，重量が300ｇ程で，既形を長楕円形に仕上げた大形のものである。7は，ホルンフェルスの横長剝片を用い，裏面を主に加工を施したものである。重量は，280ｇである。8は，砂岩の扁平な礫と素材とし，その周縁に加工を施したものである。左側縁は鋸歯状に加工されている。重量は，381ｇである。9～11は，打製石斧の欠損後の再生過程を示めす接合例である。11の接合状態で156.4ｇであるが，上半部を欠損しており，元は，かなり大形の打製石斧であったと考えられる。上半部を欠損したのち，その厚みを減らすために，側面から二分されたものと思われる。9，10共に，その後，加工が施されたが，9は，刃部のみの加工のため未整品と考えられよう。重量は，90ｇである。10は，全周縁に加工が施され，厚手の楕円形に仕上げられたものである。重量は，66.4ｇである。

礫器（第111図1～6）

礫器は，比較的多く出土しているものの，完形のものは少ないが，棒状の礫を用いた一群は，一つのまとまりを持つものかもしれない。1，3，5は，棒状の礫を素材とし，斜めに半割し，その鋭い縁辺を用いた小形礫器である。1は，珪質頁岩を，節理面から分割した断面三角形の剝片を側縁に多少加工したのみで用いたものである。先端には，縦方向の線状痕が観察される。重量は，483ｇである。3は，ホルンフェルスの細長い礫を用い，一端に数度加撃し成形しているもので，刃部には，使用による小剝離痕が観察される。重量は，473ｇである。5は，砂岩の細長い礫を，節理面で斜めに半割しているが，分割されたもう一方と約22ｍの距離をへだてて接合し，一つの礫に復元される。使用による小剝離痕が，刃部の表裏に多く観察される。重量は，307ｇである。2は，チャートの角礫を素材とし，四角形の断面の頂点から加撃を加え，尖った刃部を作出し，細かな加工を施して仕上げている。重量は，565ｇである。4は，砂岩の扁平な礫に，一方からのみ加工を施した大形の片刃礫器である。重量は，1107ｇである。6は，ホルンフェルスの角礫の薄く尖った縁辺に細かく加工を施したものである。重量は，1101ｇである。



111図　遺構外出土の石器3

スタンプ形石器（第112図1～7）

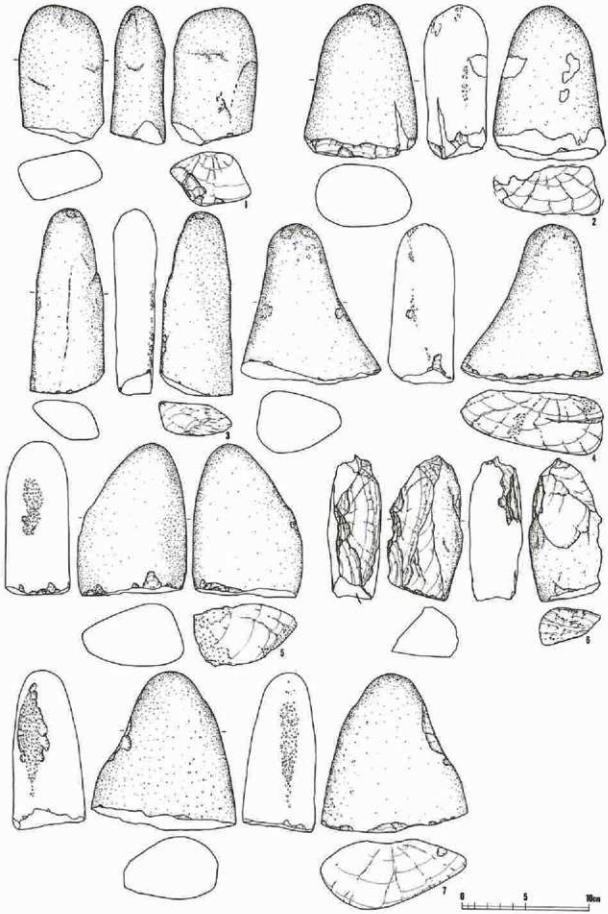
多くは閃緑岩あるいは砂岩の素材となる礫を半割し，その半割面を作業面とする石器である。点数は8点と少ないが，両側縁に顕著な加工を施さない例が多い。1・3は，砂岩の棒状礫を半割したものを，ほとんど未加工のまま用いている。1は，半割面を表面から剝離を加え調整している。重量は，447gである。3は，一撃で半割したのち，側面に多少敲打による調整を加えている。重量は，350gである。2・4・5は，閃緑岩の礫を素材とし，一撃で面割したのち，側面に多少敲打による調整が見られる程度のものである。2は，風化による剝落が著しいが，表面に使用によると考えられる作業面からの剝離痕が見られる。重量は，740gである。4は，作業面側が広がり，上半部の細くなる形状を示すもので，作業面には，潰れが，また，表面には磨滅痕が観察される。重量は，797gである。5は，半割ののち，左側面を敲打によりつぶす様に調整しているものであり，作業面には，つぶれおよび磨滅痕が顕著に観察される。重量は，795gである。6は，粘板岩の礫を粗く加工を施し，両側面から整えたものである。作業面には，多少の凹凸がみられるが，凸部には，潰れが観察される。重量は，333gである。7は，素材の閃緑岩の巾広な礫を一撃で面割したのち，両側縁を潰す様に加工を施したものである。重量は，950gと最も大きい。

敲石（第113図1，2）

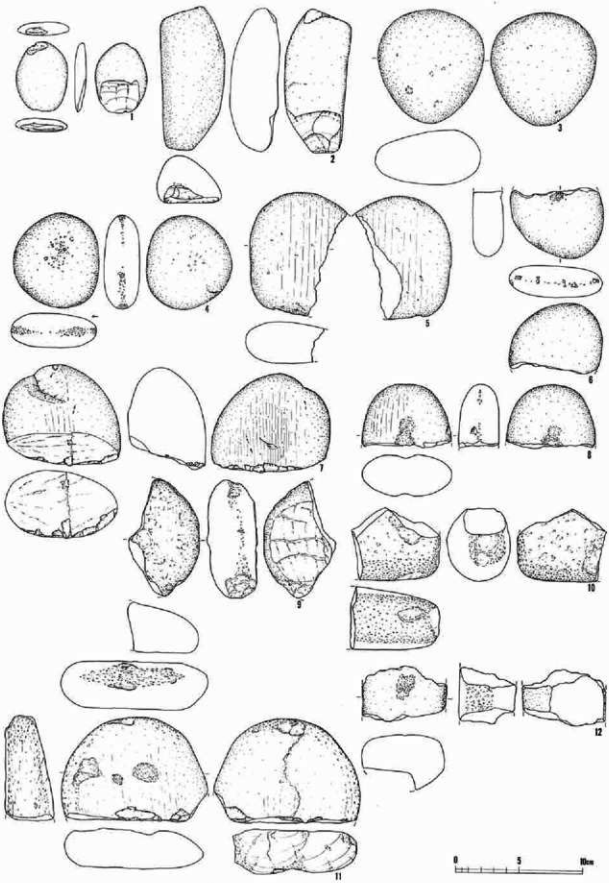
磨石と分けるために，敲打による作業にのみ使用されたもののみを敲石とした。1は，頁岩の扁平な小礫を用い，上下両端を使用したものである。重量は，30.3gである。2は，ホルンフェルスの細長い礫を用い，上下両端を使用している。重量は，294gである。

磨石（第113図3～12，第114図1～4）

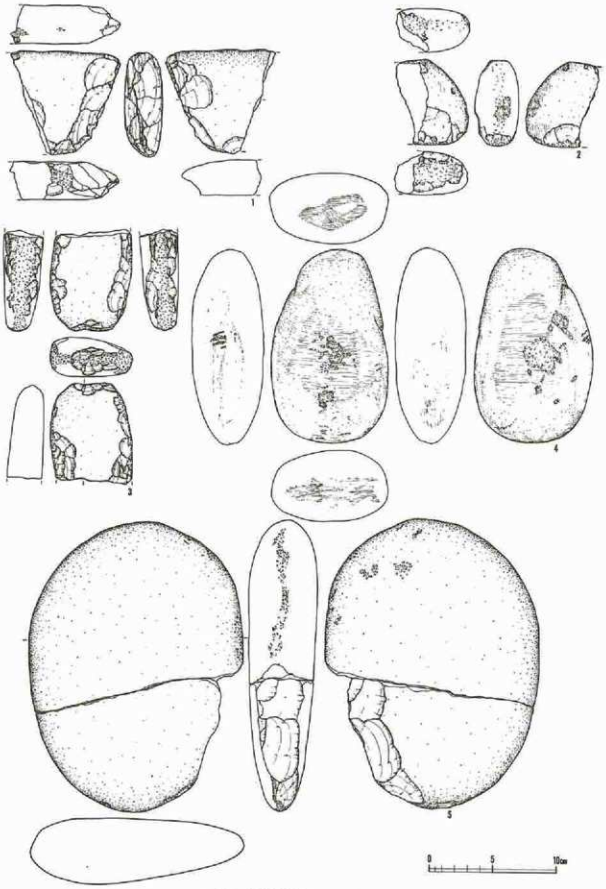
磨石は，閃緑岩や砂岩の円礫をそのまま用い，その使用痕から見ると，いくつかの作業が，一つの石器を用いて行われたことを類推させる。磨滅痕が見られる様な「磨る」作業（5，7～9・11・2～4）と，細かなつぶれとして観察される小刻みの連続的な敲打を行う作業（4・6・8～12・1～3），あるいは，凹石状の敲打の作業（6・8・9・11・12・4）等は，磨石としての一体的な作業と考えられ，ここでは，それらの使用痕を有するものを磨石として一括する。また，抉入磨石（1・2）等の特殊な例（1～4）も出土している。3，4は閃緑岩の扁平な円礫を用いたもので，明確な磨滅痕は観察されず，使用頻度が低かったと考えられる。4の周縁，表裏面には，敲打痕が観察される。重量は，3が480g，4が220gである。5は，扁平な閃緑岩の円礫を用い，表裏面に明確な磨滅痕が観察される。被熱し，全体に赤化しているが，重量は，315gである。6は，砂岩の扁平な小円礫をもちいており，表面中央部に凹石状の敲打痕が，また，周縁にも多少の敲打痕が見られるものである。被熱し，全体に赤化し欠損しているが，重量は，141.8gである。7は，砂岩の円礫を用い，表裏面に磨滅痕が見られ，裏面中央には細かな敲打痕も観察される。また，半欠したのち，その欠損面を利用して



112図　遺構外出土の石器4



113図　遺構外出土の石器 5

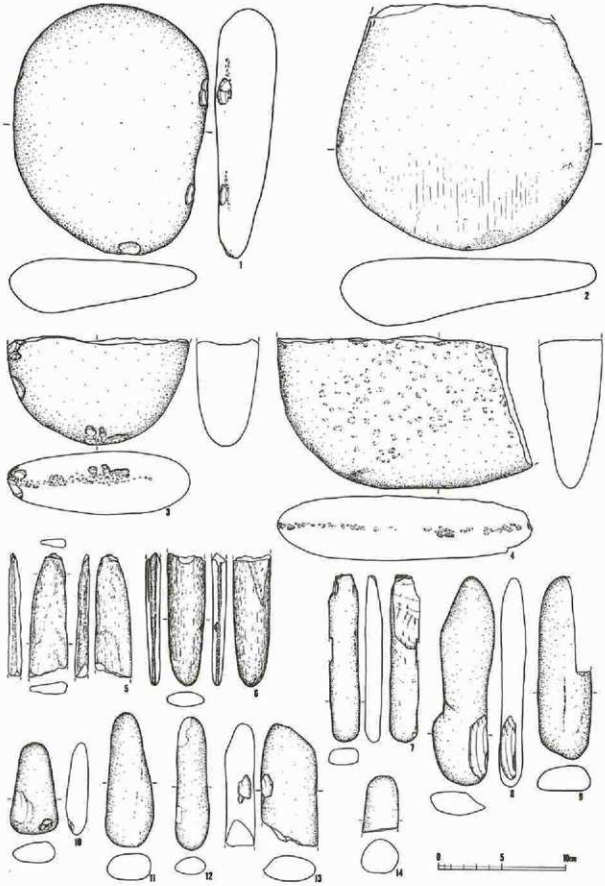


114図　遺構外出土の石器6

いるが，8号住居址例あるいは，11などに類例がある。重量は，592gである。8は，閃緑岩の扁平な楕円形礫が素材であると考えられるもので，表面には明瞭な磨滅痕が，表裏面中央は，各2ヶ所の凹みが見られる。半欠しているが，重量は，171.5gである。9は，砂岩の扁平な円礫を用い表面に磨滅痕が，周縁には，敲打痕が観察される。全体に被熱し，赤化している。重量は，230gである。10は，凝灰岩の礫を用い，下面に細かな敲打痕が広く見られる。全体に被熱し，赤化している。重量は，296gである。11は，ホルンフェルスの扁平な礫を用い，磨滅痕や，細かな敲打痕，凹石状の敲打痕等が観察され，使用頻度が高く，また，欠損面も7などと同じく利用しており，敲打によるつぶれが見られる。重量は，518gである。1・3は，扁平な閃緑岩の礫を用いた早期末葉に多く伴う抉入磨石である。この石器は，16号住居址と5号土坑のものを含め，全て半欠したもので，4点出土している。1は，側面の抉りの部分の加工も粗く，上下両面の潰れもそれほど顕著ではない。重量は，255gである。3は，素材の礫を抉入部に多少加工を施して，あまり変形させることなく，用いられたもので，上下両面の細まかな潰れは，顕著である。また，裏面には，磨痕が観察される。重量は，236gである。2は，早期に比較的多く見られる特徴的な磨石で，扁平な閃緑岩の礫を素材としており，表裏面に磨痕が見られる。上下両面の使用による細かなつぶれは，顕著である。重量は，263gである。4は，緑泥片岩の礫を用い，ほぼ全体に磨痕が観察され，またその形状・石質等から磨製石斧の未整品とも考えられる磨石で，表裏面中央に凹み状の敲打痕があることから，その未製品の転用品とも考えられよう。重量は，1305gである。

石皿（第114図5，第115図1～4）

閃緑岩の扁平で大きな礫をそのまま用いるものが多く，12号住居址に見られるような「縁」を持つものはない。完形のものは少なく，半欠したものや，石皿の破片が25点と多く出土している。5は，閃緑岩製の大形の例で，磨滅痕は見られないものの表裏面を使用していたと考えられ，また裏面及び側面には敲打痕が観察される。中央から欠損したのち，再利用したと考えられる加工も施されている。重量は，上半部が1988g，下半部が973gで，合計2916gである。1は，閃緑岩製の小形のもので，磨滅痕はみられないものの表裏面ともに使用されたと考えられる。側面には，多少敲打痕が観察される。重量は，1933gである。2は，閃緑岩製の大形のもので，表面にのみ磨滅痕が見られ，裏面の状態からも，表面のみ使用されたと考えられる。重量は，2880gである。3は，閃緑岩製の小形のもので，磨滅痕は見られないが，側面には顕著な敲打痕が観察れれる。重量は，795gである。4は，砂岩製の大形のものであるが，風化が激しく使用痕は不明瞭であるものの，側面には敲打痕が見られる。重量は，1775gである。



115図　遺構外出土の石器７

石剣（第115図5，6）

5は，石墨片岩を用い，峰のある刀の様な断面楔形に両側縁を中心に研磨している。37号土坑出土のものと同一個体で，その先端であると考えられる。重量は，40.1gである。6は，緑色片岩を用い，断面を長楕円形に，表面と側面は稜で区切られ，下端が丸くなる様に，全面を入念に研磨している。重量は，65.6gである。これらの石剣は，12号住居址の出土例等を考えると，類例はないものの，早期末葉の時期に含まれる可能性は高いと考えられる。

棒状礫（第115図7～14）

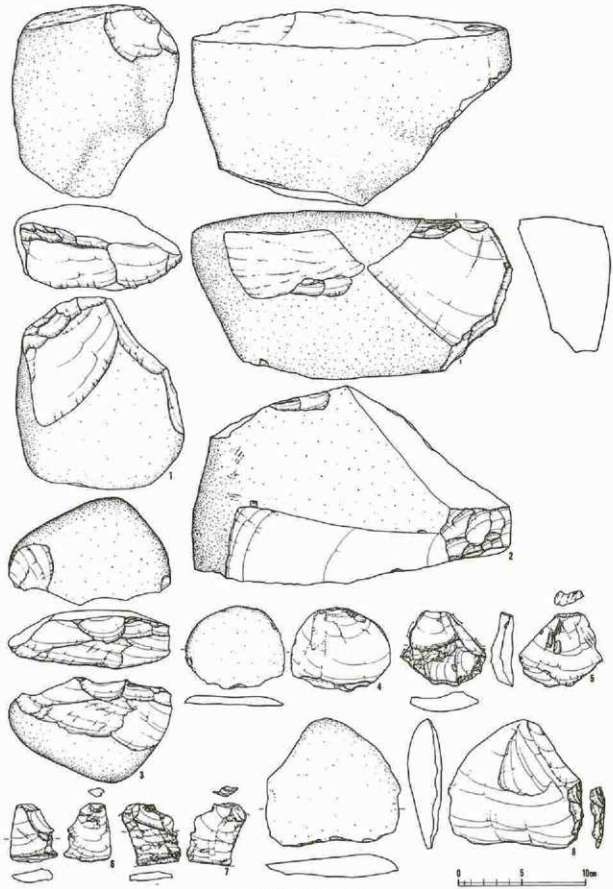
石質は一定せず，使用痕も全ての例に見られる訳ではないが，向山遺跡や本遺跡住居址の出土例等から，ある目的を持って棒状の礫が遺跡に持ちこまれたと考えられる。7は，先端から数度の剥離により加工を施しているものである。石質は頁岩，重量は12.1gである。8・13は，側面の稜から敲打による剥離痕が観察されるものである。石質は，双方ともに砂岩，重量は，8が212g，13が145.1gである。10は，風化が激しいが，下端及び側面から敲打による剥離痕が観察される。石質は砂岩，重量は63.5gである。9・11・12・14は，特に，使用痕等の見られないものである。石質は，9と12が砂岩，11がホルンフェルス，14が絹雲母片岩，重量は，9が212g，11が143.6g，12が62.9g，14が60.4gである。

石核（第116図1～3）

明確な目的を持って連続的な剥片剥離が行なわれたと考えられる例は少ない様である。1はホルンフェルスの礫を用い，自然面を打面とし，連続的に数点の剥片を剥いでいる。重量は，1638gである。2は，砂岩の大形の礫を分割したのも，自然面を打面として剥片剥離を行っているもので，石核調整と考えられる加工が裏面から施されている。重量は，6410gである。3は，ホルンフェルスの礫を用い，自然面を打面として一方から連続的に多数の剥片を剥離したと考えられるものである。重量は，315gである。

剥片（第116図4～8）

多数出土しているが，明確に石器の素材と考えられるもの，使用痕を有するもの，あるいは加工痕を有するものは少数である。4は，粘板岩の剥片で，裏面の打点付近に加工が施され，4号住居址の出土例も考えれば，打製石斧の未整品とも考えられよう。重量は，102.9gである。5は，チャートの剥片で，周縁に微細な使用痕が観察される。重量は，62.8gである。6，7は，打面を明確に残す剥片である。石質は，6が頁岩，7がチャート，重量は，6が18.3g，7が19.4gである。8は，ホルンフェルスの剥片で，裏面の一部に加工が施されるものである。重量は，305gである。



116図　遺構外出土の石器８

ま　と　め

a．縄文時代早期末葉の遺構

今回の調査で検出された遺構は，主として調査区域北部に集中する傾向にあり，そのなかで，住居址の集中する区域と土坑が集中する区域とが見られ，両者は互いに接近しているという遺構の立地上の特徴が認められる。

1．住居址　今回の調査で確認された住居址の遺構に共通する特徴は，①平面形状は円形或いは楕円形である。②確認面からの壁高が一部を除いて15cm以下と低い。③床面は平坦であり，周溝は存在しない。③炉址が検出された住居址は10軒で，そのいずれも硬化面のハッキリしない地床炉である。④柱穴の本数およびその並び方に統一された規格の様なものがない，ことが挙げられる。貼床は３軒に確認され，ローム貼は３軒に共通するが，うち１軒には小石貼床がみられる。住居址は，大きく四つの地域に分布している。調査区域の東北部に５軒，西北部に10軒，西部に３軒，東南部に３軒である。特に東南部の３軒は，確認面からの壁高が30～40cmと明瞭であり，うち２軒に貼床が認められるなど床面がしっかりしている。

2．土坑　土坑の集中する区域もまた４つに分けられるが，その４つの区域内に分布する土坑群には土坑の構造にそれぞれ共通の特徴が認められ，仮にａ～ｄ群とする。ａ群は，４，５号住居址に近接し，土坑の形状に特徴的なものが２つ見られる，１つは土坑の坑底面に住居址の柱穴状のピットが見られるもので，この土坑群から出土する遺物の大部分がこのタイプの土坑から出土する。２つ目は，深さ50cm～１ｍの柱穴状の土坑である。ｂ群は，20～24号住居址に近接するもので，平面形は円形・楕円形を呈する。特に29，38号土坑は規模も深さも同様であるほか，坑底面はほぼ平底に近い。ｃ群は，平面形が円形であるほか，断面形が凸レンズ状或いは皿状を呈する。また，確認面からの深さが20cm以下のものが目立つ。ｄ群の土坑の平面形は円形もしくは楕円形で，断面形は擂鉢型である。深さは30～50cmで，52号土坑以外からの遺物の出土はみられない。

3．まとめ　縄文時代早期末葉という一期間に遺構は造られたが，切り合いを持って存在するため，同一時期ではなく，ある程度の時間差を持っている。同一期の遺構を抽出できないが，住居址・土坑は単独では存在しておらず，住居址は調査区の四隅に，土坑は性格が同じと思われる四つの集中がみられ，明らかに領域を侵さない状態で立地する。その土地については何らかの規制があったとみられるが，それについては今後の検討を待ちたい。

b．縄文時代中期初頭の遺構

本遺跡で確認された縄文時代中期初頭，五領ヶ台期の所産と思われる遺構は住居址が３軒，焼礫を伴う土坑（所謂集石土坑，以下集石土坑と表記）が11基であり，調査区の北西部と東部に群を形成している。北西部の群は住居址２軒と集石土坑５基，東部群は住居址１軒と集石土

坑4基からなりたっている。

各遺構の構造上の差異は住居址については，埋甕炉をもつ住居址と地床炉をもつ住居址とに別けられる。集石土坑は①土坑断面が鍋底形を呈し，用礫が土坑の底部まで充塡されおり，土坑壁面に焼土・硬化面の認められるもの。②土坑の断面が擂鉢形を呈し，用礫が土坑壁面に焼土・硬化面の認められるもの。③土坑の断面が擂鉢形を呈し，用礫が土坑の底部まで充塡されており，土坑壁面に焼土・硬化面の認められないもの。④土坑の断面形が擂鉢形を呈し，用礫が土坑の上面を被覆するようなかたちで配され，土坑壁面に焼土・硬化面の認められないもの，の4つのタイプに別けることができる。集石土坑の機能・性格・用途については近年多くの論考がなされており（小薬1978，杉山1981，上田1983，谷口1986他），集石土坑の形態から機能を類推することが行われているが，明確な結論には至っていない。多くの論考では集石遺構の調理施設としての機能についての検証がなされている。本遺構で検出されいる集石土坑はすべて炭化物・炭化材・焼土を残存しており，調理施設とはいえないまでも，火と密接に関係しており用礫の加熱を中心とした行為が集石土坑において行われたことを示唆している。本遺跡の集石土坑は先にのべたように4つにわけられるが，複数のタイプの集石土坑が集まって群を形成しており，一つの目的で使用されたものとすれば集石土坑の形態差は使用方法，使用過程に起因するものと考えることができるであろう。

本遺跡では住居址，集石土坑のほかに熱を受けた礫の分布が調査区のほぼ全域にわたってみられる。しかしその集中は五領ヶ台式期の遺構の分布とほぼ重なる。このような散礫が集石遺構等の諸遺構に付随して検出された該期の事例として，北八王子西野遺跡（安孫子他1974），鬥田第Ⅳ遺跡（小野塚他1979）があげられるが，両遺跡ともに屋外焼土址，埋設土器などの遺構・遺物を伴っており祭祀的意味あいをもつ空間として，散礫と集石土坑が形成する空間を意味づけている。本遺跡の場合，散礫の分布・集石土坑群の検出された区域が調査区の北の端，東の端にあたり，屋外焼土址等の遺構が伴っていたとしても本調査では確認できなかった。いずれにしても，五領ヶ台式期の住居址との位置関係から考えるならば，該期の集落構成を研究する上での好資料となるであろう。

c．縄文時代早期末葉の土器

発掘調査より得た資料は，今を去る事・およそ3千年以上も昔，広大な武蔵野を舞台に，逞しく生きた人々の生活姿を窺い知るものばかりであったが，中でも素焼の器は食生活の上で，欠かす事のできない必需品であったと思われる。我々は，この器を縄文式土器と呼び，これを用いた時代を縄文時代と呼び習わしているが，ここ恋ケ窪南遺跡に於いては，この時代の草分け（草創期）から衰退（後期）に致る迄，幅広い時期にわたり土器が出土している。今，出土した土器一片一片の観察を終え，その成果を簡潔にまとめてみたいと思う。ただし，生活跡の復元と言った意味合いから，検出遺構と最も関連のあるであろう時期に焦点を置き，早期末葉及

び中期初頭に位置付けられる土器について言及するものである。

早期末葉と称される時期，南関東地方では実に風変りな土器が用いられていた。それは，素地土に多量の植物質繊維を混じ，器の内外面には貝殻やその他の道具類によって成形を施した，恰も蚯蚓張(ミミズ)状の外観を呈するもので，その特徴により条痕（文）の土器と呼んでいる。実際には様々な文様を持つ土器が，これに色彩りを沿えるのであって，第4群土器で試みた類別がこれに該当しよう。すなわち，貝殻腹縁・刺突・絡条体圧痕・隆帯などの文様要素の使い分けである。それらの特徴は，大部分共伴するであろう東海地方の土器との比較によって，入海Ⅰ式から天神山式期に相当する在地土器と考えられるのであるが，果していかなる様相を呈した一群であったのであろうか。現今，編年的序列の確固たる東海諸型式（上の山式―入海Ⅰ式―同Ⅱ式―石山式―天神山式）を指針とし，土器に施される技術の特徴に基づき，遺跡の時間的流れに沿って記述を行ないたいと思う。まず，最も古く位置付けられる土器は，貝殻腹縁文の施された土器（第79図1）で，下沼部遺跡（安孫子，1980）や馬背山遺跡（岡本，1959）に類例が求められ，古く上の山式に通じる可能性（安孫子，1982）もあろうが，小破片一点のみの出土であり判然とはしない。下って，入海Ⅰ式期に相当する土器として立野遺跡（加藤・高橋，1980）に代表されるような絡条体圧痕文を主体とする一群が想定されるのである（谷口，1984）が，本遺跡からはほとんど出土していない。むしろ，隆帯文を持つ土器が主体であり，北宿西遺跡（小倉，1986）や野川遺跡（安孫子他，1983）出土の資料を考慮すれば，入海Ⅰ式末からⅡ式初頭に位置する土器として呈示できよう。これには，横走する多段の隆帯を持つタイプ（第79図14，15他）と波状口縁にて隆帯が菱形状に構成されるタイプ（第12図1，2他）の二者が存在し，後者では遠く常陸伏見遺跡（小野・秋本，1980）に類例を見出すこともできる。胎土の性状分析によれば，この手の隆帯文と同質なものは第4群5類A，Bの条痕土器に限定され，その独自性を窺わせるものであるが，野川遺跡より出土した隆帯文を他の一群から抽出し，少々古く位置付けることができる（谷口，1984）のであれば，これらの隆帯文と条痕の土器をセットとするような一群を弁別し，入海Ⅰ式終末に設定することもできよう。とすれば，立野遺跡に見られるような絡条体圧痕文を主体とする一群との併行ないしは前後関係が浮彫化されてこようが，資料の少ない現在では問題提起に留めて置きたい。一方，東海地方の土器では次第に隆帯が低く，深い刻みが施される傾向に向うのであるが，これに呼応してか見慣れない低い隆帯文の土器（第80図1～7）が出土するのである。その出自・所属時期については，今後の研究に委ねる点が大きいが，少なくとも胎土・施文の特徴から入海Ⅰ式及至Ⅱ式期に該当する一群であろうと思われる。今回は一括呈示したが，おそらく幾つかに細別できよう。入海Ⅱ式期には，野川遺跡で認められた絡条体圧痕文，刺突文，隆帯文の土器は揃って出土するようになり，その変化の過程は隆帯に貝殻腹縁を押捺するもの（第79図3），低隆帯に絡条体圧痕または刺突を施すもの（同図10，12），隆帯は消失し，絡

条体圧痕のみ施されるもの（同図11）に看取することができる。憶測が許されるなら，該期での絡条体圧痕文は，器面に押捺された貝殻腹縁文や貼付された隆帯文の構図を継承するものであり，山崎北遺跡（戸田他，1983）や田中谷戸遺跡（川崎，1976），さらには打越遺跡（荒井，1983），小山田№28遺跡（安孫子，1983）に登上してくる貝殻腹縁文の土器に連がる要素ではないかと考えられるのである。以後，本遺跡には東海地方の土器が激減するのであり，僅かに石山式，天神山式の土器が貝殻腹縁文を主文様要素とする一群に伴うのである。この期の貝殻腹縁文は，隆帯文を持つタイプ（第64図中3）と持たないタイプ（第60図1他）の二者があり，これに条痕ないし格子目様の条痕を施す土器が伴ってくるのである。

両者は地域差に基づく所産と考えられ（谷口，1984），本遺跡も調査中ではあったが，国分寺№3遺跡・西の様相として報告されたのであった。今，整理作業を終え，再び評価を与えるならば，それは東西の折衷的様相と言えるのであろう。

このようにして見る恋ヶ窪南遺跡は，その中心的時期を入海Ⅱ式初頭に置くことができ，土器群の内容は在地にて展開する飾られない条痕土器をベースとし，隆帯を持つ華麗な土器，さらには器面を自由に操つる絡条体圧痕文の土器，簡素な刺突文の土器を伴出するのであって，土器に反映されたる技術は，数少ない特徴的な道具，例えば貝殻や棒状工具，時には複雑な絡条体であったりするのであり，それぞれが押捺する手法によって，実にシンプルな装飾を醸しだしているのである。このように充実した土器群の内容も，当地が野川の源頭近くに位置し門戸が南に開放され，背後には雄大な原野を控えておったためであり，以後に成立する貝殻腹縁文の土器を特徴とする一群の様相が，折衷的であることも頷けよう。この時期，北に位置する向山遺跡（井口，1986）が，正に東的な様相を呈すると言うことは，実に興味深い課題であって，これからの研究の動行に大いに期待する所である。

d．縄文時代中期初頭の土器（中期初頭）

中期初頭に位置する土器としては五領ヶ台式が当てられる。これは型式設定こそ古いが，その内容は明らかにされず，型式名のみが先行していた土器群であった。というのも，遺構の確認数の少なさ，そして，東北・中部地方をはじめとする周辺地域の土器型式の影響を強くうけ続けたことが，この時期の土器の変遷を，より複雑にしたからといえよう。しかし近年の相次ぐ報告，さらには今村啓爾，山口明等両氏をはじめとする編年研究によって，しだいに明確化されてきている。両者に観る編年論は，根本的に「型式」の概念が異なっているので単純に比較することはできないが，今村は5期区分，山口は4期に区分している。ところで，五領ヶ台Ⅰ・Ⅱ式の細分は，今村が宮の原貝塚（今村，1972）で行なったもので定説化しているが，本遺跡より出土した土器の大部分は，氏の言う五領ヶ台Ⅱb式ないしⅡc式が主体であり，本書では，Ⅰ類がⅡb式（集合沈線を多用する踊場式の影響を受けていると考えられるもの）に，それ以外がⅡc式（地文に縄文が増し，弧線文を主体とするもの）に相当してこよ

う。遺構内出土の土器では，1号住及び3号住に良好な資料が認められ，1号住では比較的古い様相の土器，とりわけ埋甕は区画の中に短沈線が充填されると言う深鉢形土器で，Ⅰ式の名残りとも理解できるものである。また86図2の土器は，神奈川池辺第4遺跡（今井，1972），東京都鬥田第Ⅳ遺跡（小野塚他，1979）に類例が求められるが，胎土のきめの細かさから推察すれば，今村氏の言う「東関東」系の土器と言うことにもなろう。また，3号住では本遺跡の五領ヶ台式期の様相を良く示してくれる資料が多く，1類（95図1～7），9類（95図19～25）等が出土している。特に9類を含めて，五領ヶ台式直後と考えられるもの（94図5～6）の存在は非常に興味深いところである。このように，断片的ではあるが五領ヶ台Ⅱ式の好資料が呈示できたことは，武蔵野台地に於ける該期土器群の研究に，またひとつ布石を投じることができたと考えている。

e．縄文時代の石器

本遺跡から出土した石器は，遺構内出土の石器はもちろん，遺構外出土のものも含めその多くが縄文時代早期末葉・中期初頭の時期に属するものといえよう。遺構外出土の石器については，その両者は，その分布による特徴も明確さを欠き，双方の時期の住居址のある位置が近接しているためもあり，分布の点からは分離しえないものである。

さて，個々の石器器種についてであるが，生産・工作用具としては，石鏃・打製石斧・礫器等の出土が目立っている。石鏃については住居址出土や他遺跡の例をふまえれば，早期末葉として捉えられる一群がある。打製石斧については，その形態から細分可能であり，撥形のいくつかのものが比較的多いようである。また13号住居址・遺構外出土の製作・欠損し再生という一連の過程を示す接合例は特筆されよう。礫器は，早期末葉の他遺跡とも同様に比較的多く出土している。調理具の石器としては，磨石・石皿が多く，それらが住居址より比較的多く出土しており，スタンプ形石器，抉入磨石等の特殊なものも含め，植物質食料への依存度の高さを物語ろう。棒状礫の出土は向山遺跡の例もふまえれば，早期末葉に多いと考えられようが，その用途については，今後の研究に期待されよう。また，石剣，玉の未成品等の精神文化に係る遺物が，早期末葉を中心に出土しており，精神文化を語るうえで比較的古期のものとして注目されよう。石器組成全体の面では，中期初頭については住居址も2軒と少ないこともあり，その全体像は不明瞭である。しかし，早期末葉については住居址も多く，石鏃，石斧，礫器，磨石，石皿，棒状礫などを中心に，石匙，楔形石器，スクレイパー，敲石，抉入磨石等を伴い，石剣，玉等の特殊な石器をも組成とするものである。その組成は，比較的均衡のとれたものと考えるが，今後の研究により明確にされよう。

奈良時代の遺物

調査地より出土した，奈良、平安時代の遺物は，重機による表土掘削作業中に偶然発見された。骨蔵器とその他表採品として女瓦片１点，須恵器の小破片か２点が出土している。

第117図図版の須恵器薬壺形骨蔵器は，口縁部が直線的に短く立ち上り，胴部上半部付近に最大径を有し，高台部分は逆台形を呈する器形であり，法量は口径11.4㎝，底径14.0㎝，器高14.3㎝を測る。焼成はきわめて良好で、内外面に自然釉が付着し，胎土中に棒状白色海錦骨針が，多量に含まれている。器面の整形は，内面から体部外面にかけてロクロによる，横ナデ体部下端，ヘラ削り，高台部分内面にヘラ削りを残しロクロによる横ナデが認められる。形態や製法より８世紀後半代で，おそらく在地の窯で生産された須恵器を骨蔵器としてもちいたと考えられる。骨蔵器内の火葬骨は，保存状態がきわめて良好で，被葬者は40歳ぐらいの男性の骨であるという鑑定の結果が出されている。

調査地周辺において，火葬骨蔵器が２カ所検出されている。一つは本調査地の谷を挟んだ，南側台地に位置する。国分寺市遺跡調査会第218次調査地において，一辺50㎝，深さ25㎝の方形土坑内より，須恵器壺が倒立した状態で埋納され出土している。今一つは第201次調査地で土師器甕を使用した骨蔵器が検出されている。またこれまでの発見例として，瓦組みの中に火葬骨を埋葬した遺構が，東元町３丁目地内，野川西側斜面地で発見されている。その他出土地不明であるが武蔵野郷土館所蔵の通称花沢谷戸と呼ばれる地域より出土した土師器甕蓋の骨蔵器。国分寺保存館所蔵，須恵器壷，蓋の骨蔵器の２例がある。

本資料を含め，４例の骨蔵器が武蔵国分寺跡，寺地外の北東地域野川最上流域の台地の縁辺部に集中して分布する。既往の調査においては，奈良，平安時代の遺構は検出されておらず，該期において遺構が，空白な地域と考えられていたが，今回の骨蔵器の発見により，当地域が武蔵国分寺の存在と背景とした，広範囲の墓域である可能性が考えられよう。

第117図　骨蔵器

引用・参考文献

ア．安孫子昭二他，1974，『北八王子西野遺跡』　東京西線及び北八王子変電所遺跡調査会

1980，『下沼部遺跡』　下沼部遺跡調査団

安孫子昭二　1982，「子母口式土器の再検討―清水柳遺跡第二群土器の検討を中心として―」　『東京考古』1

1983，「小山田№23遺跡」　『小山田遺跡群』Ⅱ　小山田遺跡調査会

1983，「東京都における縄文時代早期末・前期初頭土器集成図集」　『神奈川考古』第17号

1984，「小山田№8遺跡」　『小山田遺跡群』Ⅴ　小山田遺跡調査会

イ．井口直司他，1986，『向山遺跡』　東久留米市教育委員会

今井康博他，1973，池辺第4遺跡『港北ニュータウン地域内文化財調査報告』Ⅳ同調査団

1985，「五領ヶ台式土器の編年―その細分および東北地方との関係を中心に―」　東京大学文学部『考古学研究室研究紀要』第4号

ウ．上田典男，1983，「縄文時代焼礫集積遺構の形態的把握―関東地方の縄文時代中期を中心として―」　『物質文化』4

オ．岡本　勇，19　「三浦郡葉山町馬の背山遺跡」　『横須賀市物館研究報告』第3号

小倉均他，1986，『北宿西・北宿南遺跡発掘調査報告書』　浦和市遺跡調査会

小田静夫，1981，「縄文中期の打製石斧」　『どるめん』№10

1983，「スタンプ状石器」　『縄文文化の研究』第7巻

小野真一，秋本真澄，1981，『常陸伏見』　鹿島考古学資料刊行会

小野塚恵子他，1979，『椚田遺跡群―1978年度調査―』　八王子資料刊行会

カ．加藤恭郎，高橋健樹，1980，『立野―第一次・第二次調査報告―』　東久留米市教育委員会

川崎義雄・安孫子昭二，1976，『田中谷戸遺跡』　田中谷戸遺跡調査会

コ．小薬一夫，1979，「縄文時代における焼石遺構」　『小田原考古学研究会会報』8

1983，「縄文時代早期後半における石器群の様相―南関東地方を中心として―」『研究論集』Ⅱ　東京都埋蔵文化財センター

シ．実川順一他，1984，『花沢東遺跡』　恋ケ窪遺跡調査会

ス．杉原荘介・芹沢長介，1957，「神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚」　『明治大学文学部研究報告』　考古学第2冊

杉山博久他，1981，『東田原八幡遺跡』　東田原八幡遺跡調査団

鈴木道之助，1981，『図録石器の基礎知識』Ⅲ　柏書房

セ．芹沢長介，1957，「神奈川県大丸遺跡の研究」　『駿台史学』第７号
タ．谷井　彪，1982，「いわゆる阿玉台Ia式土器とその周辺の土器群について」『土曜考古』第６号
谷口康浩，1984，「『打越式土器』の再検討」　『東京考古』２
1986，「縄文時代「集石遺構」に関する試論―関東・中部地方における早・前・中期の事例を中心として―」　『東京考古』４
ト．戸井晴夫他，1982，『神谷原』Ⅱ　八王子市鞦田遺跡調査会
戸沢充則他，1982，『多聞寺前遺跡』Ⅰ　多聞寺前遺跡調査会
戸田哲也，1983，「山崎北遺跡・シンポジウム縄文時代早期末・前期初頭の諸問題発表要旨」　『神奈川考古』第17号
ニ．西村正衛，1951，「千葉県香取郡神里村白井雷貝塚発掘調査概報　『古代』第３号
1954，「千葉県香取郡小見川町白井雷貝塚（第２・３次調査）」　『学術研究―人文・社会・自然―」第３号
マ．松井和浩他，1981，『前田耕地』Ⅲ　前田耕地遺跡調査会
ヤ．山口　明，1978，「縄文時代中期初頭土器群の分類と編年―関東・中部地方を中心にして―」　『駿台史学』第43号
1980，「縄文時代中期初頭土器群における型式の実態」　『静岡県考古学シンポジウム４　（縄文土器の交流とその背景―特にその中期初頭の土器群をとおして―）
ヨ．吉田格・今村啓爾他，1972，『宮の原貝塚』　武蔵野美術大学考古学研究会

あ　と　が　き

昭和59年度と昭和60年度に引続いて行ったこの恋ヶ窪南遺跡の発掘調査が終ってから，1年余を経過し，ここに曲りなりにも報告書の出版に漕ぎつけることができて，喜びに堪えない。この間，調査団の諸氏には，いろいろな面で忙しい思いをさせた一方で，国分寺教育委員会や東京都住宅局の関係諸氏には，たいへんなご迷惑をかけている。深くお詫びを申し上げるところである。

さて，本遺跡は時期的にみると，早期末と中期初頭の二つに中心がある。早期末では隆帯文，貝殻腹縁文，刺突文，絡條体圧痕文など條痕文系の土器に対して，東海系の入海式，天神山式の混在している点が注目されてよいであろう。最近，関東の早期末に東海系の土器が混じる例が大変増加してきているが，本遺跡もそのよい例となるだろう。また，この時期の竪穴住居址が，切り合い関係をもつものも含めて総計22基も検出されたことは，今後，早期の集落研究によい資料を提供することになるだろう。十数基の土坑との配置関係とともに，今後の検討がまたれるところである。

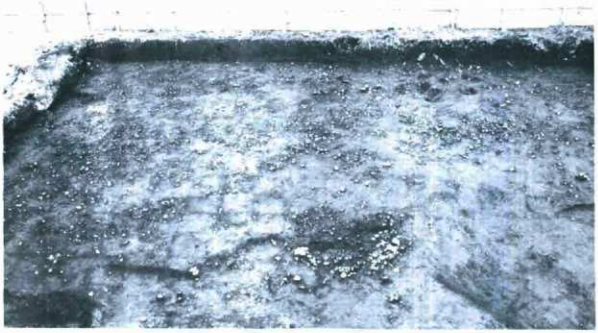
中期初頭の時期は，五領ヶ台式土器の新しい部分によって構成されている。竪穴住居址は3基で特記するような事項は見当らない。11基検出された集石土坑は，興味深い状況を示している。それらには，掘り込みの形態として，鍋底状断面のものと，摺鉢状断面のものとがある。また，拳大から人頭大の焼けた用礫が底部までぎっしりと填められているものと，そうでなくただ土坑の上面を覆うだけのものがある。掘り込みの周壁は焼けて硬化した場合と然らざる場合とがあり，後者のような状態は，用礫が土坑を充填する場合にもみられるが，普通は用礫が土坑上面を被覆しただけの形式に伴う。そして本遺跡の集石土坑には，すべて焼土，炭化物，炭化材が遺存しており，とくに著しい場合は，用礫の下に太さ10㎝，長さ60㎝ほどの炭化材が十数本も埋れていた。従って，これら集石土坑は，用礫の加熱して何かの用途に役立てようとする過程の，どこに位置づけをしたらよいのか，あるいは集石土坑の集合がどのような意味をもつのであるか，詳細にわたる分析とともに，多数例の集成と比較が望ましい。アース・オーブンなど特定の用途の推定が蓋然をもつのは，それからであるといっても過言ではない。一，二の問題を掲げて「あとがき」に代えたいと思う。　（永峯光一）

遺跡全景

調査区上空より恋ヶ窪遺跡を望む

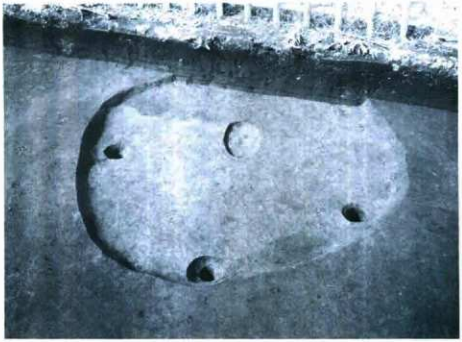
図版11

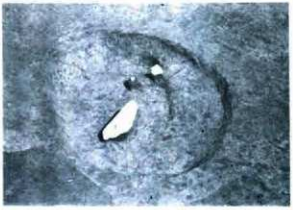
E・F・G・H・I－6グリッドの遺物出土状態



H・I－4・5グリッドの礫群

上　4号住居址の遺物出土状態
中　4号住居址
下　4号住居址の炉



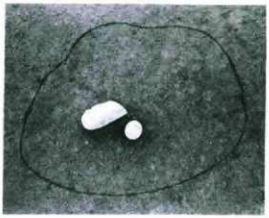


上　5号住居址の遺物出土状態

中　5号住居址

下　5号住居址の炉

6号住居址

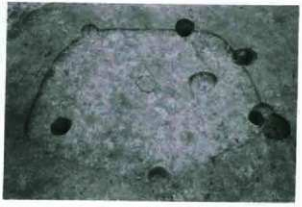


6号住居址のカマ

8号住居址の遺物出土状態

8号住居址

10号住居址の遺物出土状態



10号住居址

2・12・13号住居址

12・14号住居址

18～20号住居址

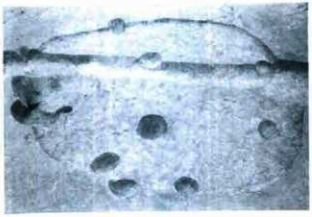
19号住居址の小石分布状態

19号住居址の小石垂直分布状態

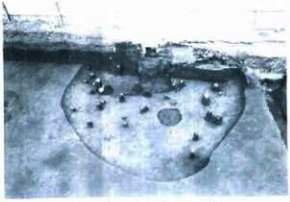
20号住居址の小石分布状態

19号住居址の炉

11号住居址の遺物出土状態

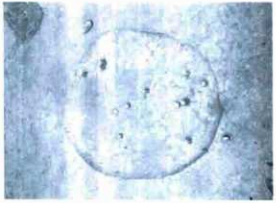


11号住居址



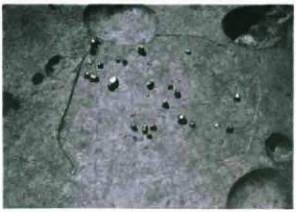
21号住居址の遺物出土状態

21号住居址



22号住居址の遺物出土状態

22号住居址



23号住居址の遺物出土状態

23号住居址

24号住居址の遺物出土状態

24号住居址

12号土坑

15・17・18号土坑

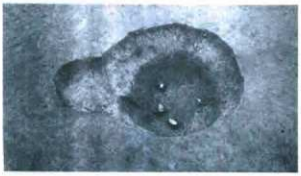
図版十

16号土坑の遺物出土状態

15～16号土坑

25・26号土坑

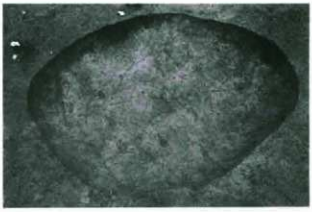
27号土坑



29・30号土坑

31～34号土坑

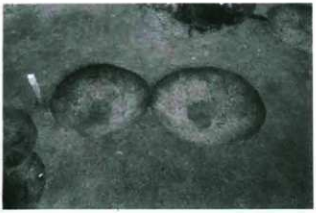
35号土坑の遺物出土状態



36号土坑

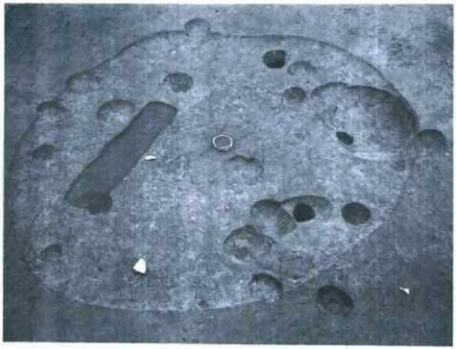
37号土坑

38号土坑



52・53土坑

54号土坑



上　1号住居址の遺物出土状態

中　1号住居址

下　1号住居址の炉

3号住居址

3号住居址の遺物出土状態

11号土坑断面

11号土坑の礫分布状態

3号住居址、11号土坑

2号土坑

2号土坑断面

3～5・7号土坑

3号土坑断面

4号土坑断面

5号土坑断面

7号土坑断面

5号土坑の炭化材出土状態

10号土坑

10号土坑断面

6号土坑

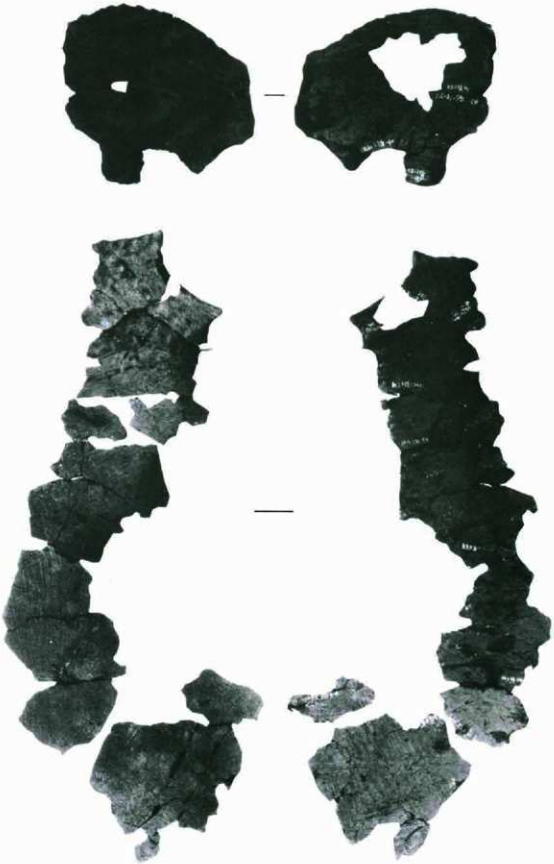
6号土坑の炭化材出土状態

6号土坑の炭化材断面

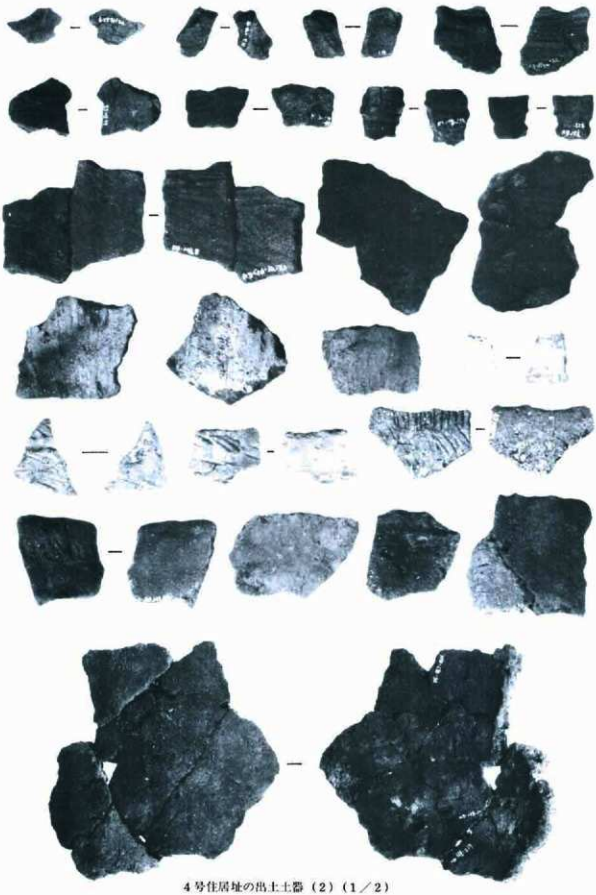
6号土坑の完掘断面

9号土坑

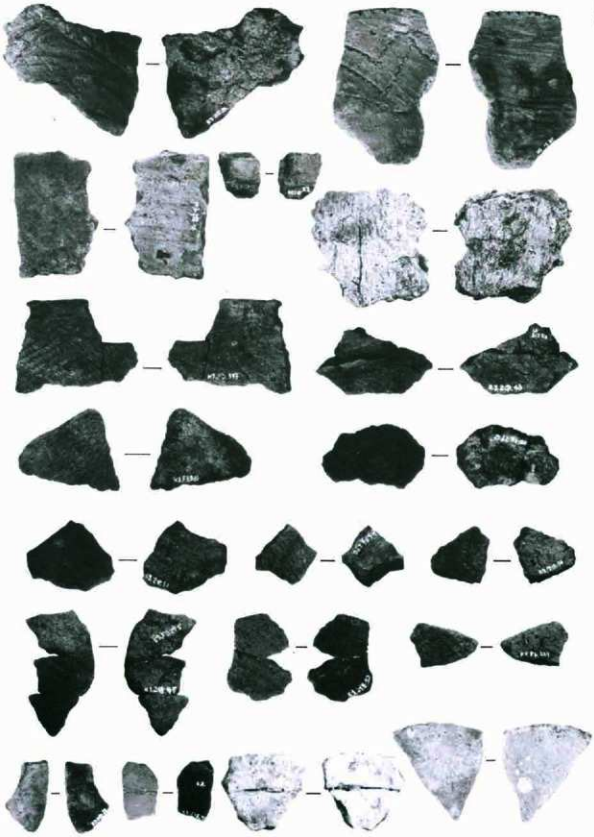
9号土坑断面



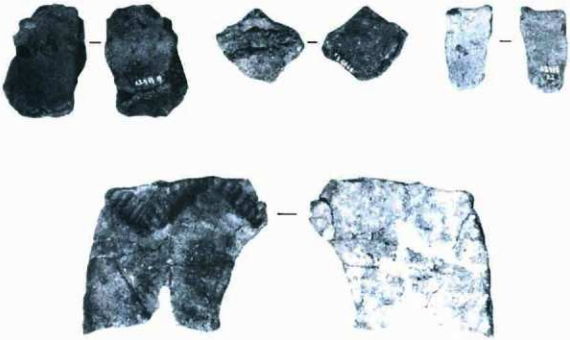
4号住居址の出土土器（1）（1／2）



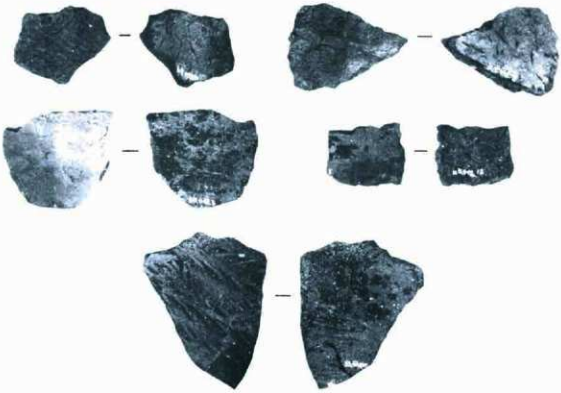
4号住居址の出土土器（2）（1／2）



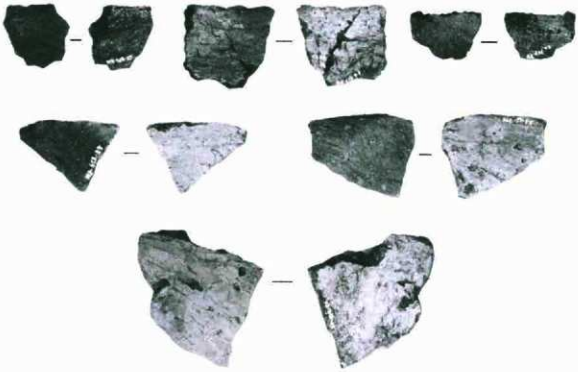
5号住居址の出土土器（1／2）



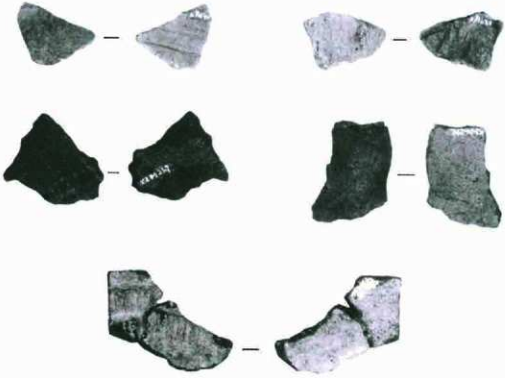
6号住居址の出土土器（1／2）



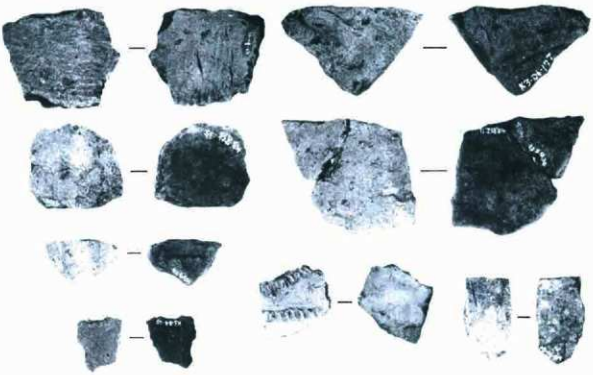
7号住居址の出土土器（1／2）



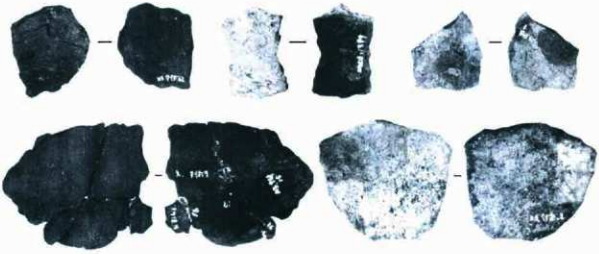
8号住居址の出土土器



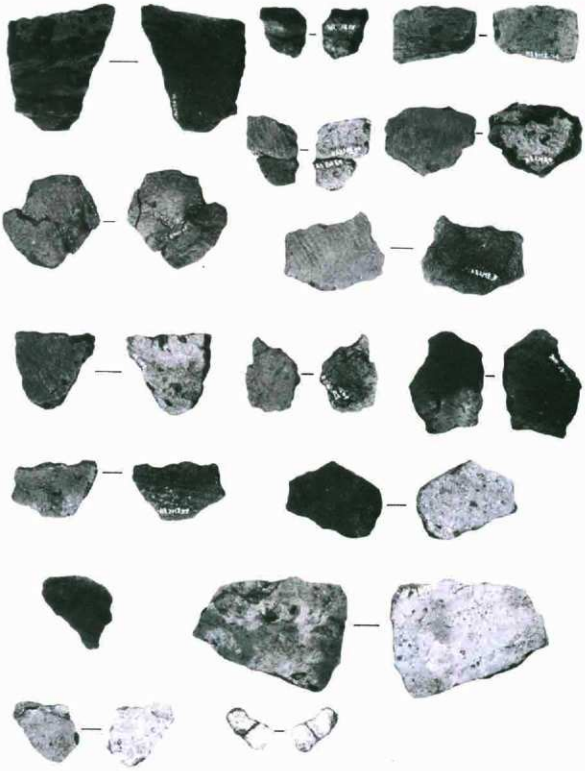
9号住居址の出土土器（1／2）



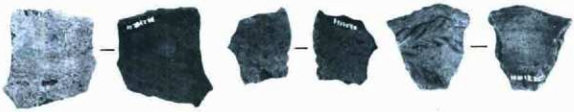
10号住居址の出土土器（1／2）



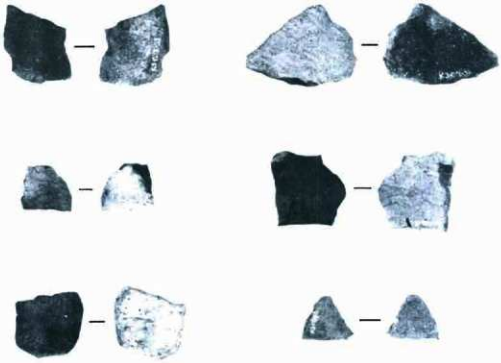
11号住居址の出土土器（1／2）



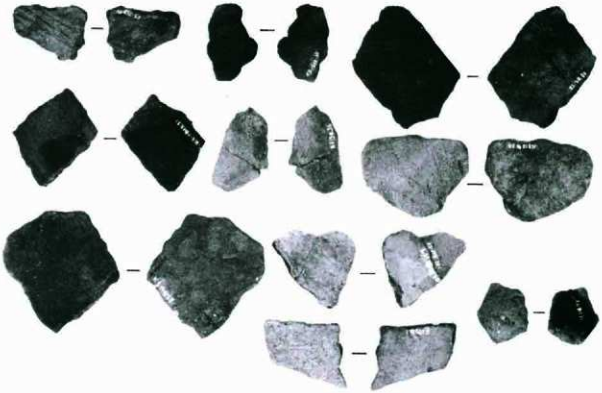
13～14号住居址の出土土器（1／2）



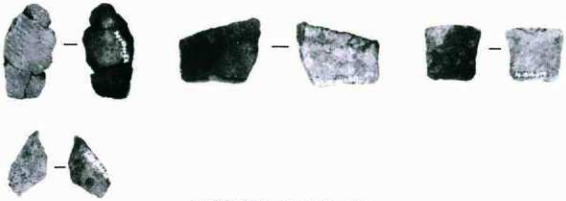
16(上)・17号住居址の出土土器（1／2）



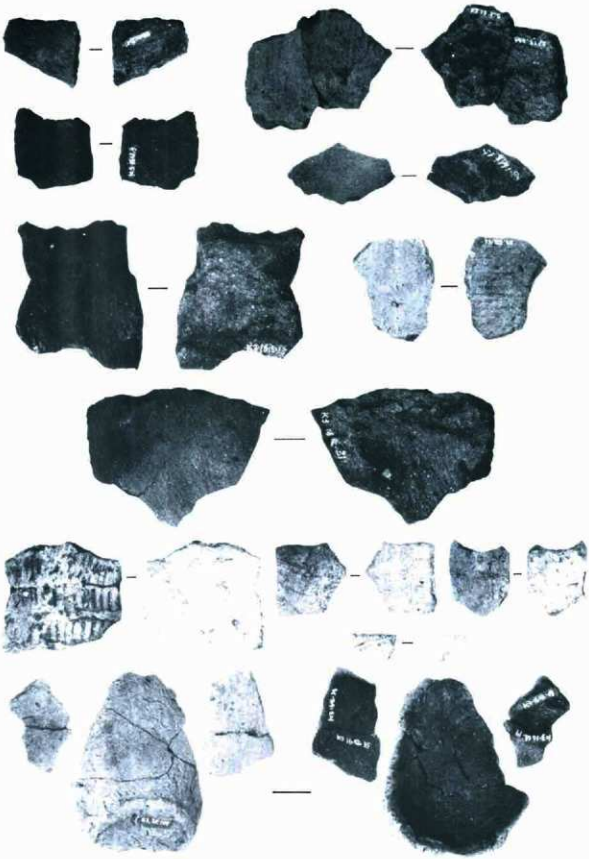
18号住居址の出土土器（1／2）



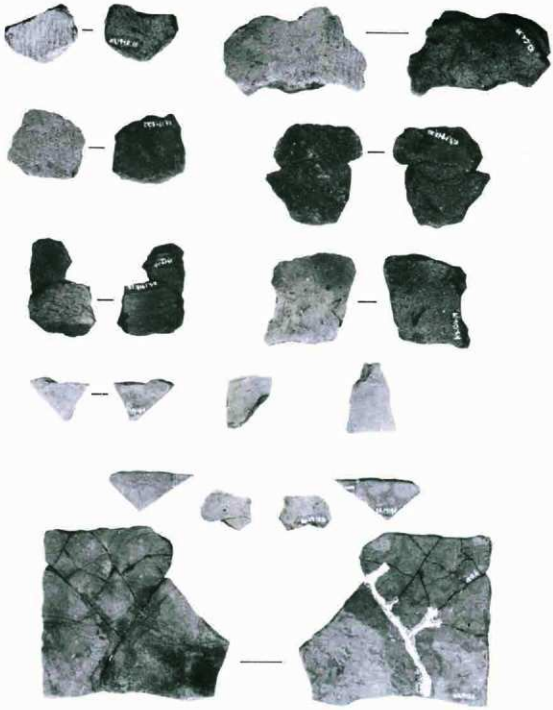
19号住居址の出土土器（1／2）



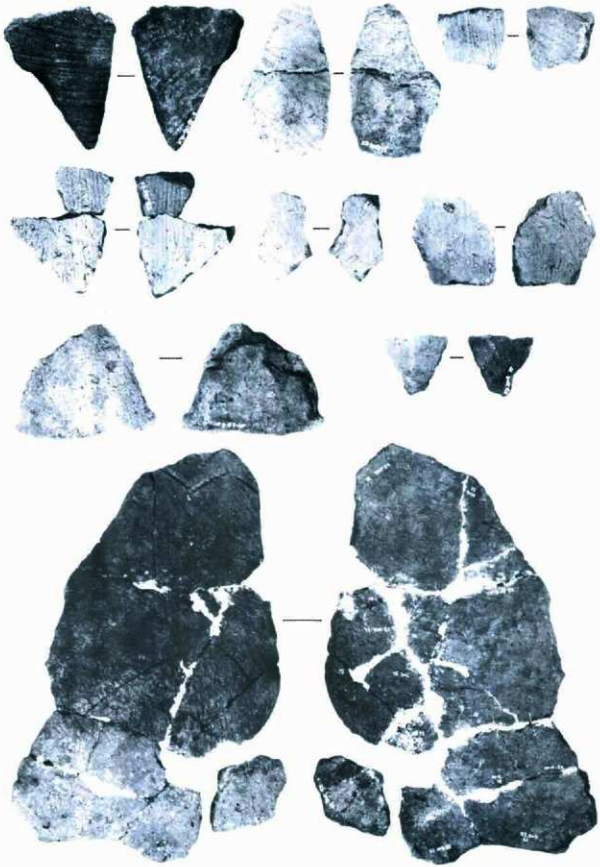
20号住居址の出土土器（1／2）



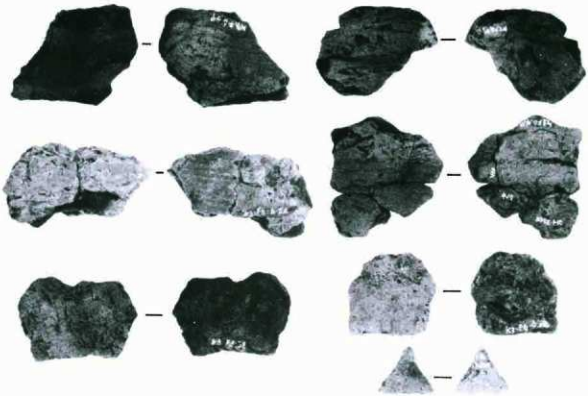
21号住居址の出土土器（1／2）



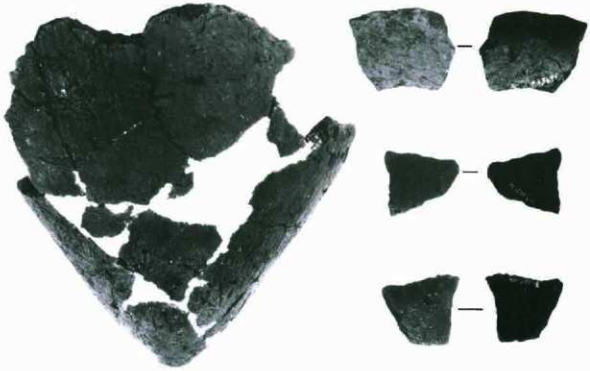
23号住居址の出土土器（1／2）



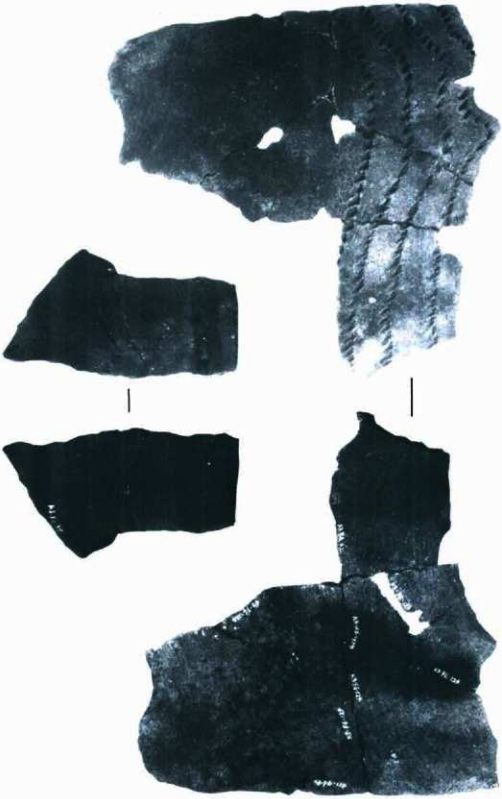
24号住居址の出土土器（1／2）



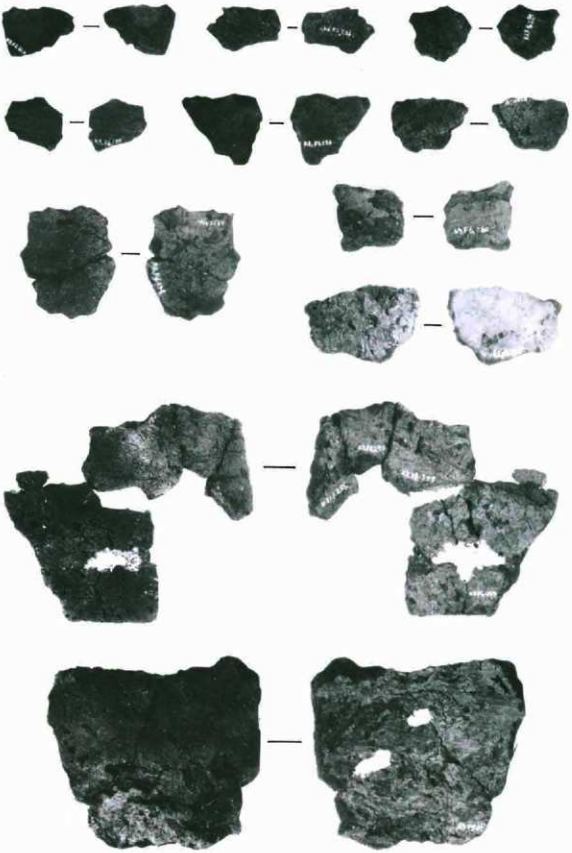
13号土坑の出土土器（1／2）



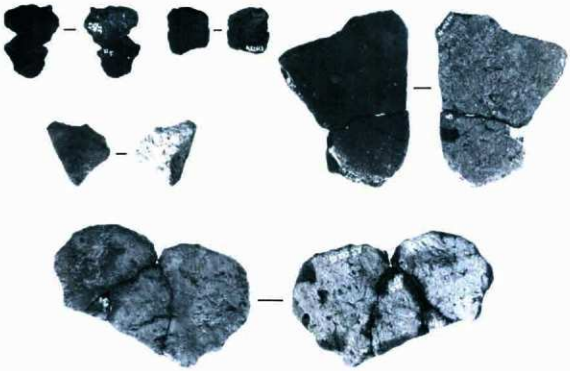
14号土坑の出土土器（1）（1／2）



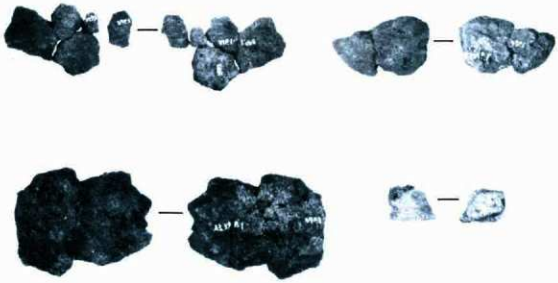
14号土坑の出土土器（2）（1／2）



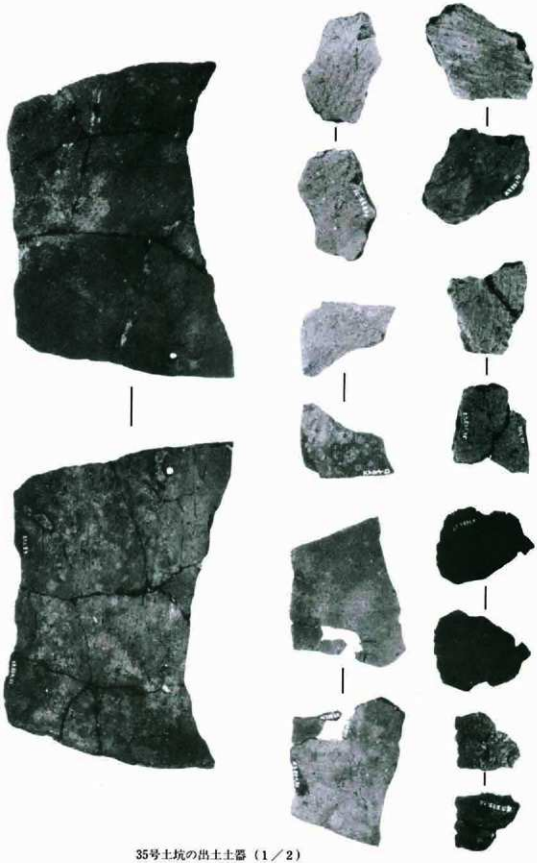
16号土坑の出土土器（1／2）



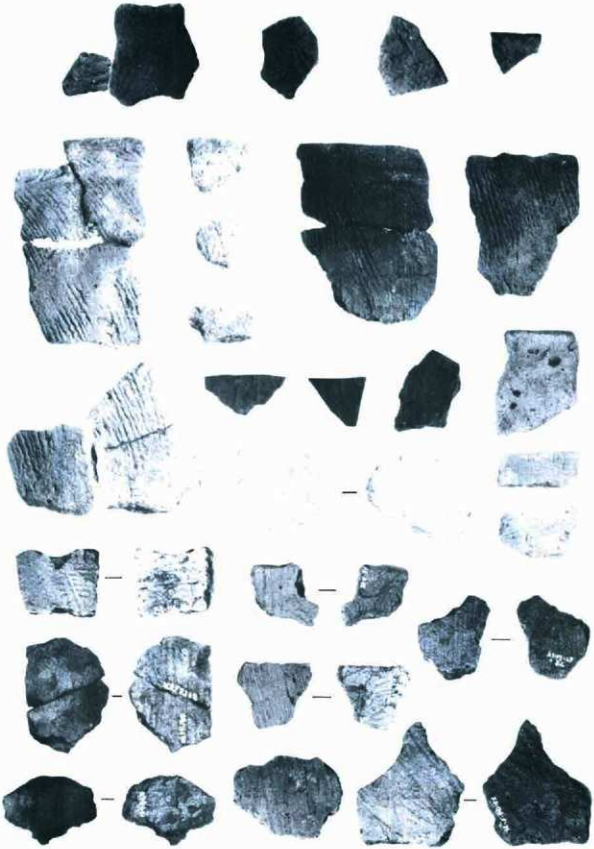
17号土坑の出土土器（1／2）



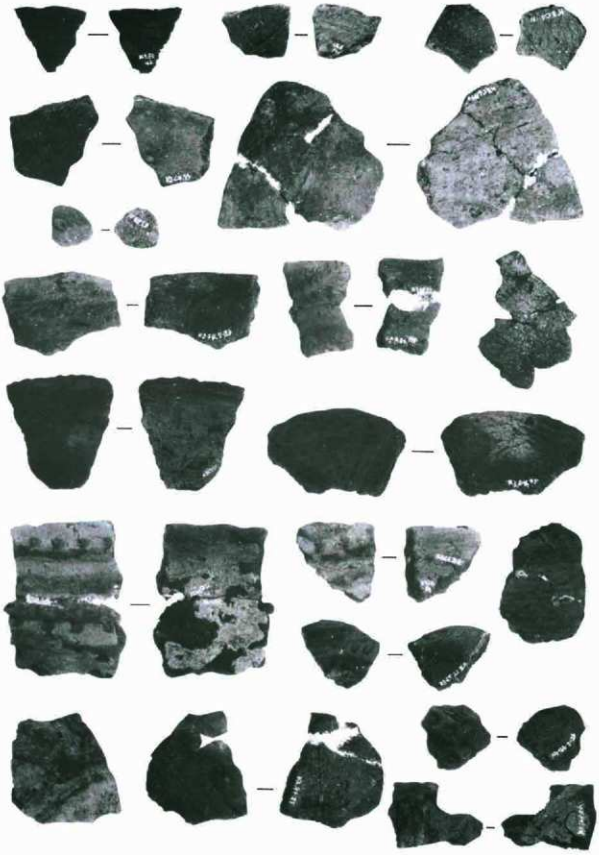
22号土坑の出土土器（1／2）



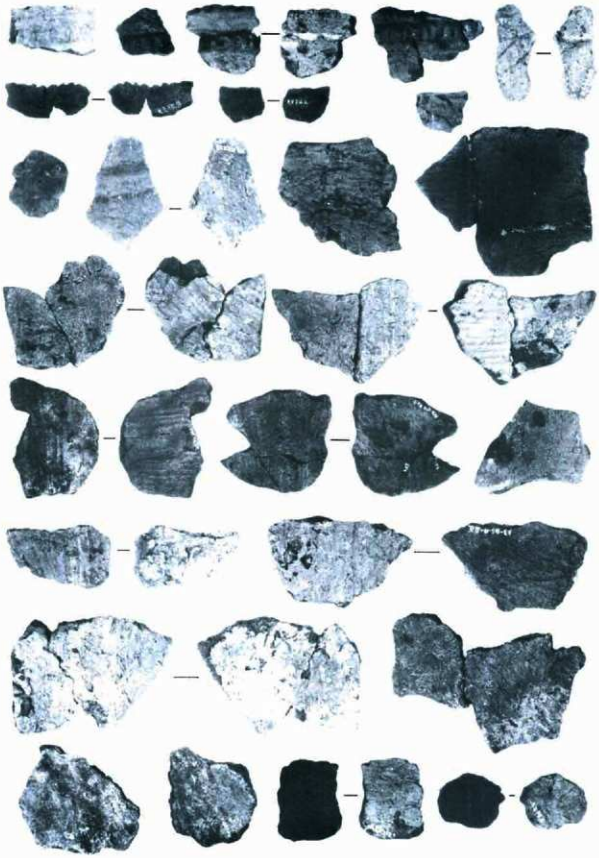
35号土坑の出土土器（1／2）



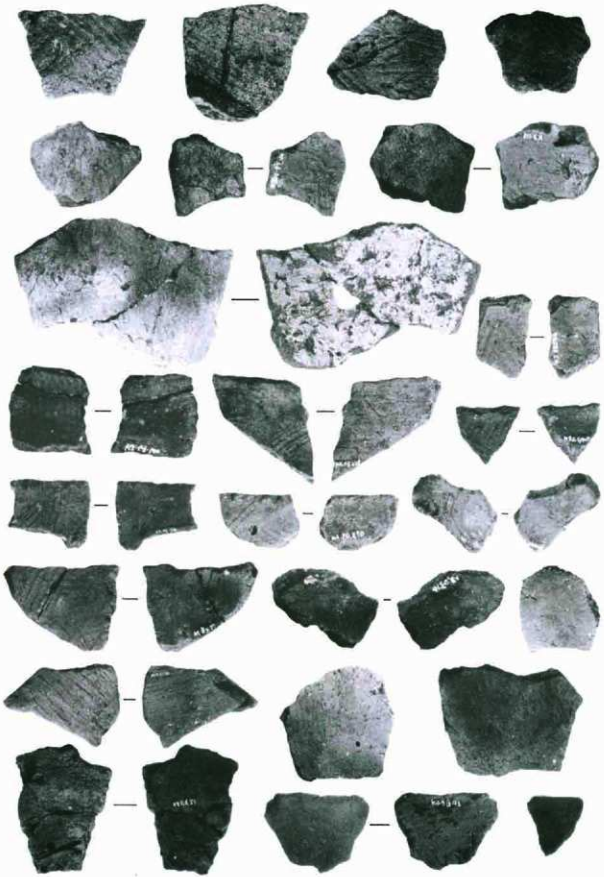
遺構外の出土土器（1）（1／2）



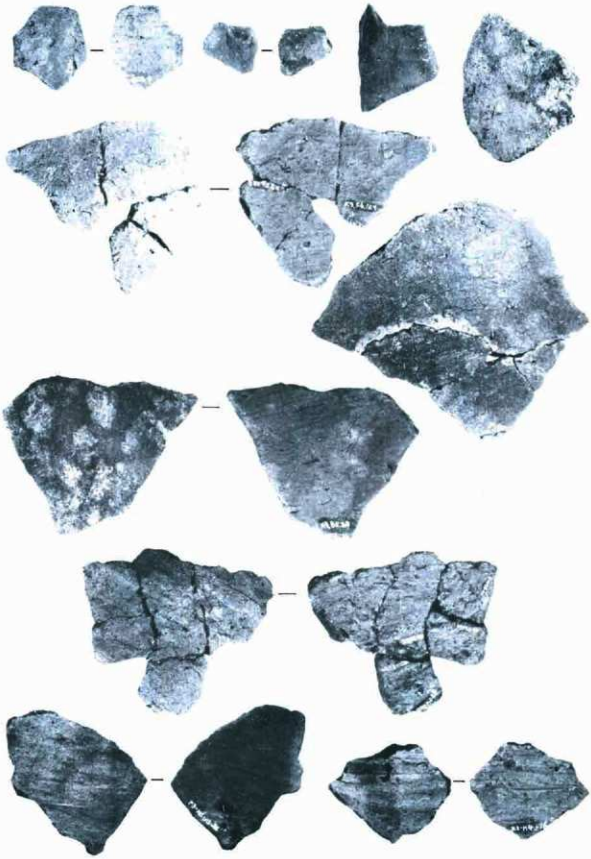
遺構外の出土土器（2）（1／2）



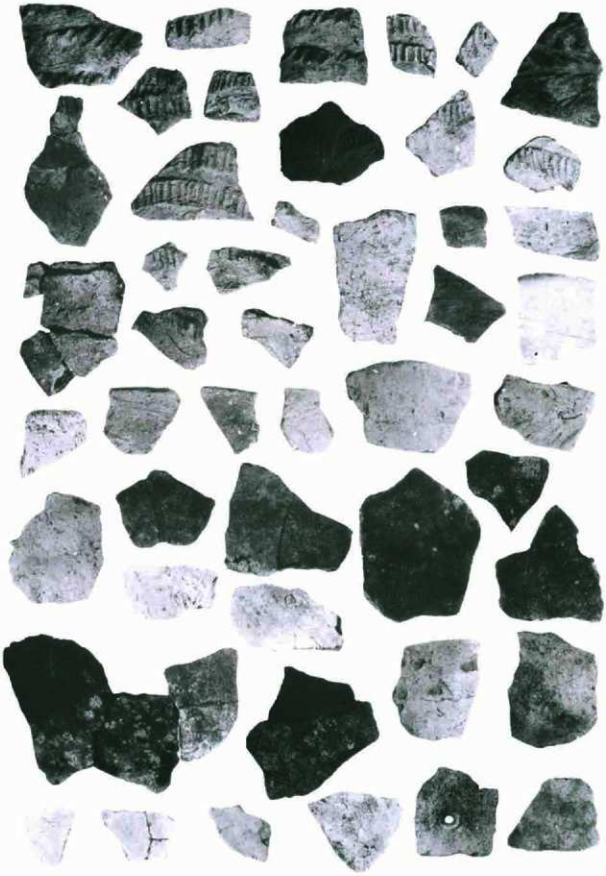
遺構外の出土土器（3）（1／2）



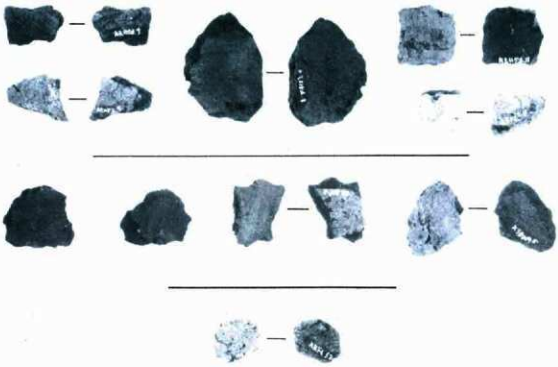
遺構外の出土土器（4）（1／2）



遺構外の出土土器（5）（1／2）

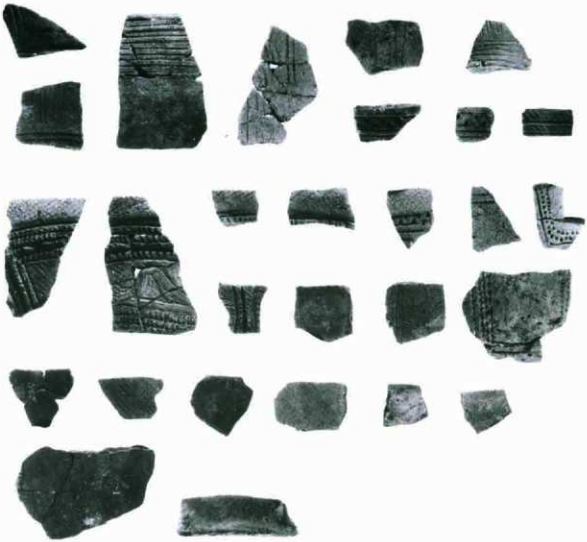


遺構外の出土土器（6）（1／2）

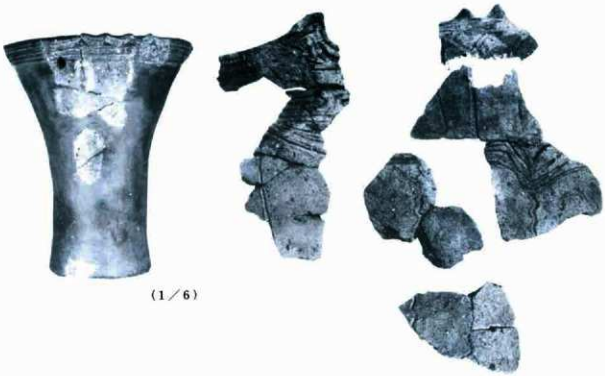


38(上)、43(中)、48(下) 号土坑の出土土器 (1／2)

1号住居址の出土土器(1) 上 (1／6)、下 (1／3)

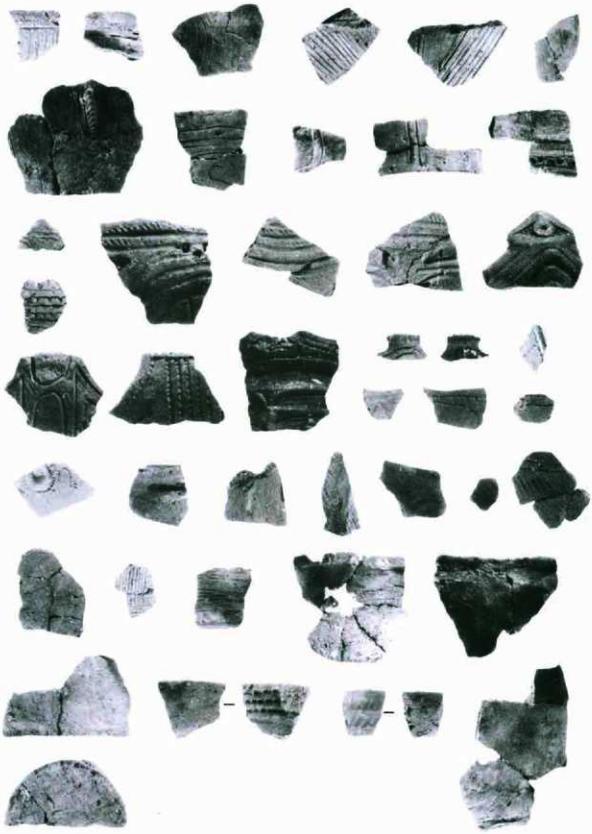


1号住居址の出土土器（1／3）

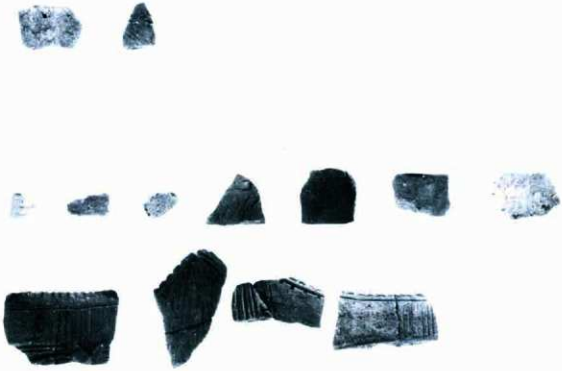


(1／6)

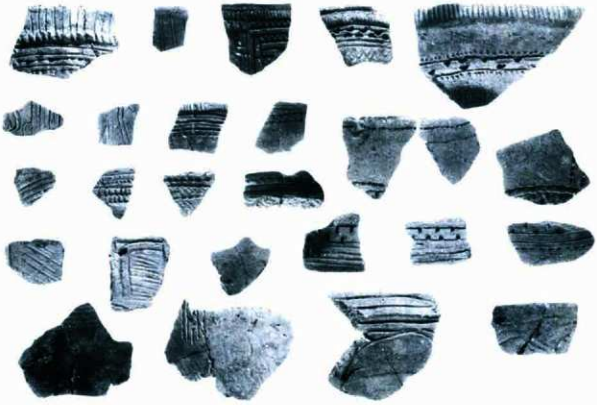
3号住居址の出土土器（1）上(1／3)、下(1／6)



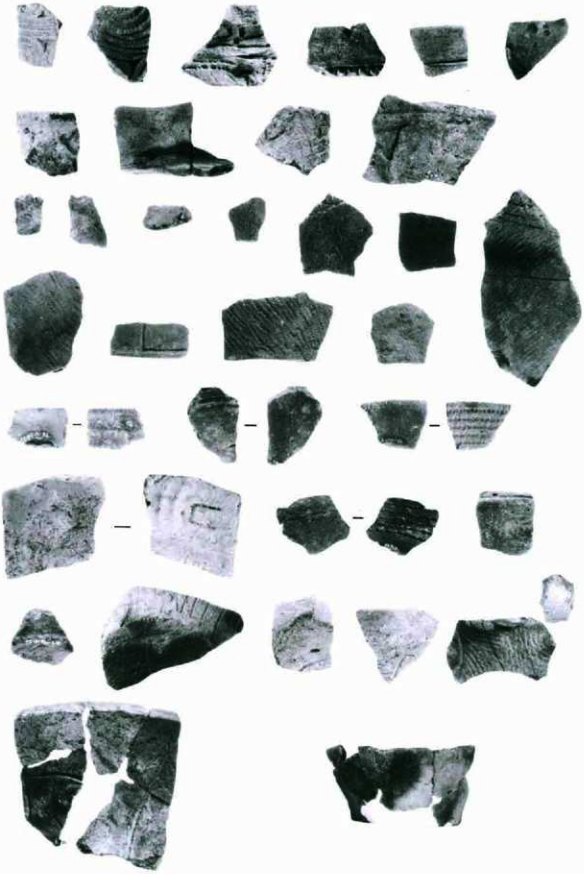
3号住居址の出土土器（2）（1／3）



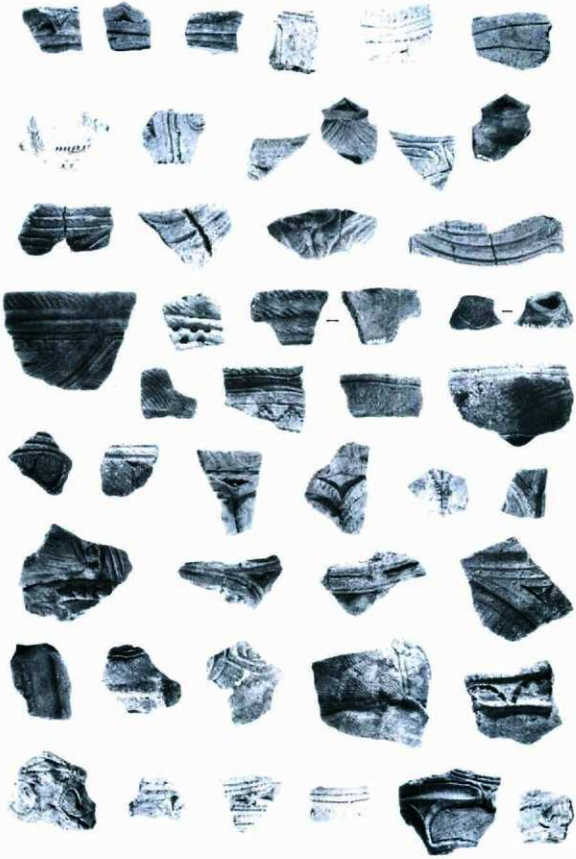
4（上）、7（下）号土坑の出土土器（1／3）



遺構外の出土土器（1）（1／3）

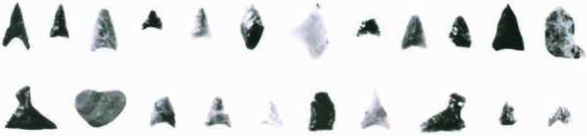


遺構外の出土土器（2）（1／3）

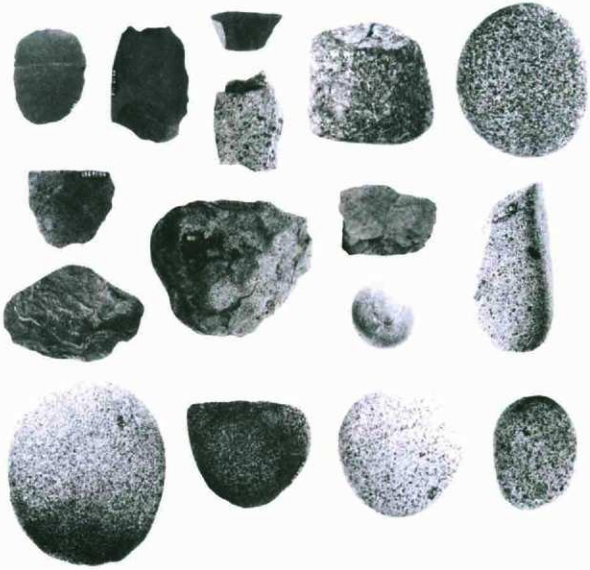


遺構外の出土土器（3）（1／3）

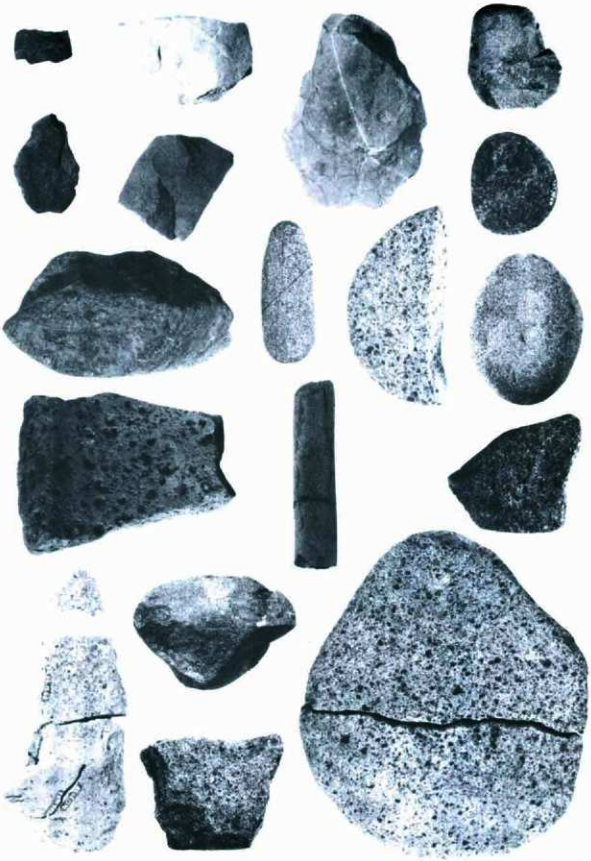
先土器時代の石器（2／3）



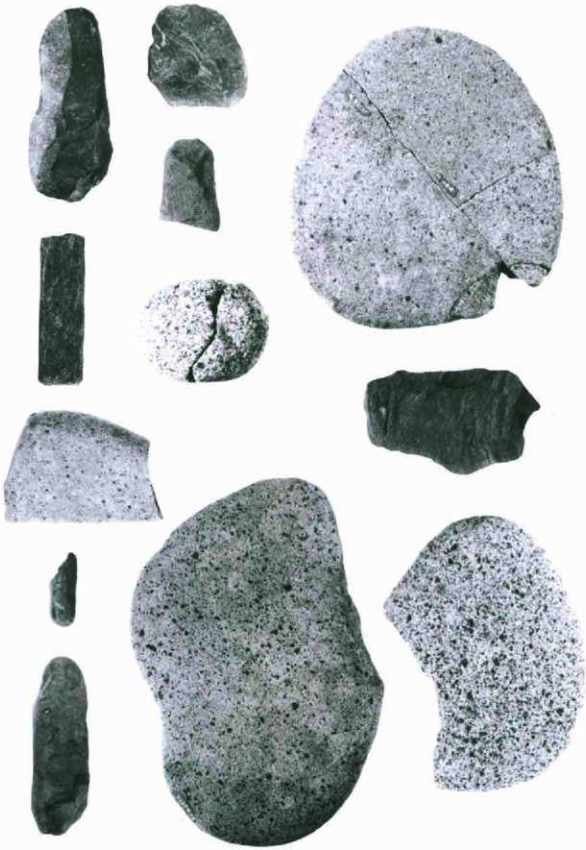
遺構内出土の小形石器（2／3）



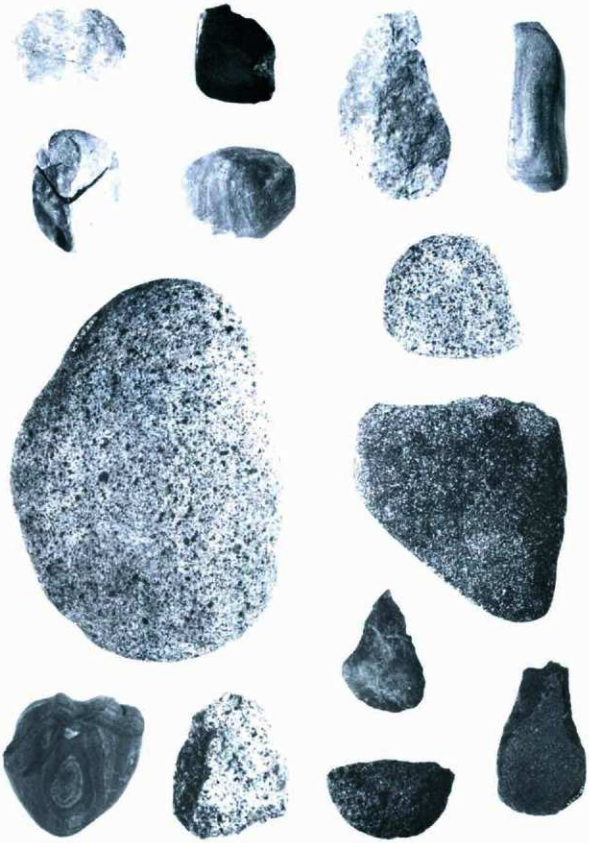
4～10号住居址の出土石器（1／3）



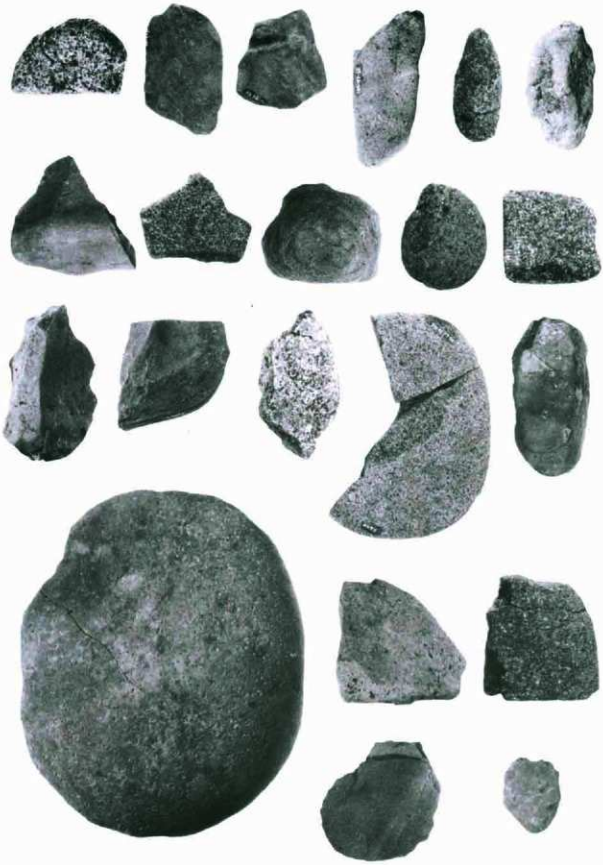
12～17号住居址の出土石器（1／3）



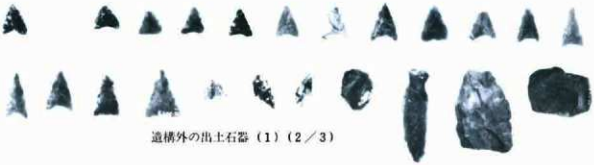
18～24号・37号土坑の出土石器（1／3）



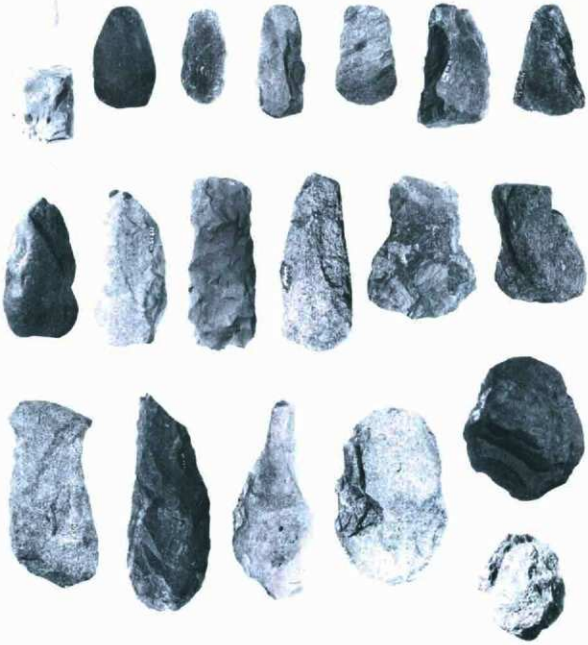
1～3号住居址の出土石器（1／3）



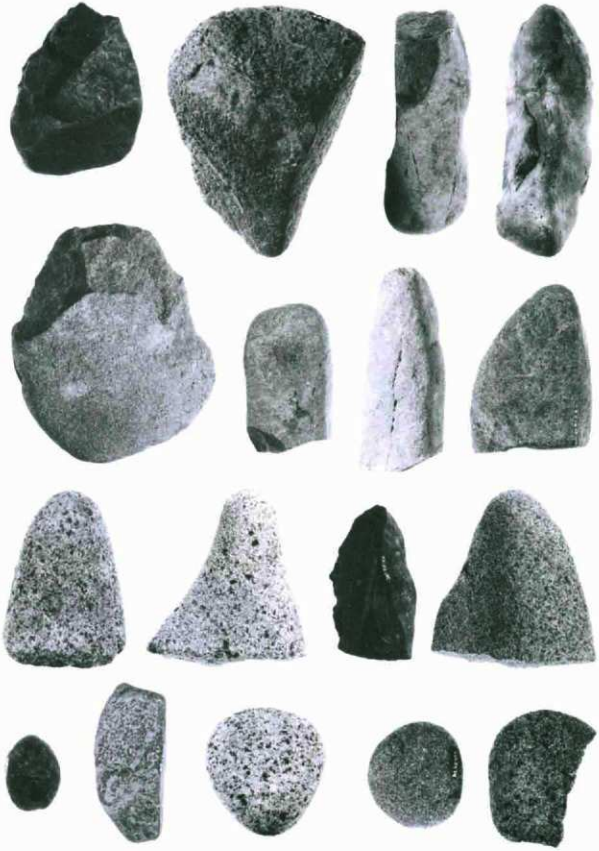
1～11号土坑の出土石器（1／3）



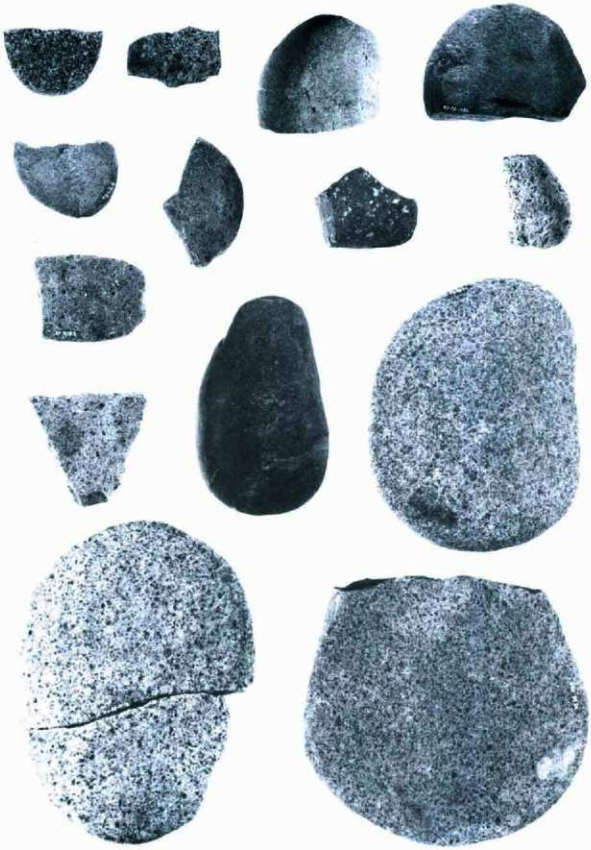
遺構外の出土石器（1）（2／3）



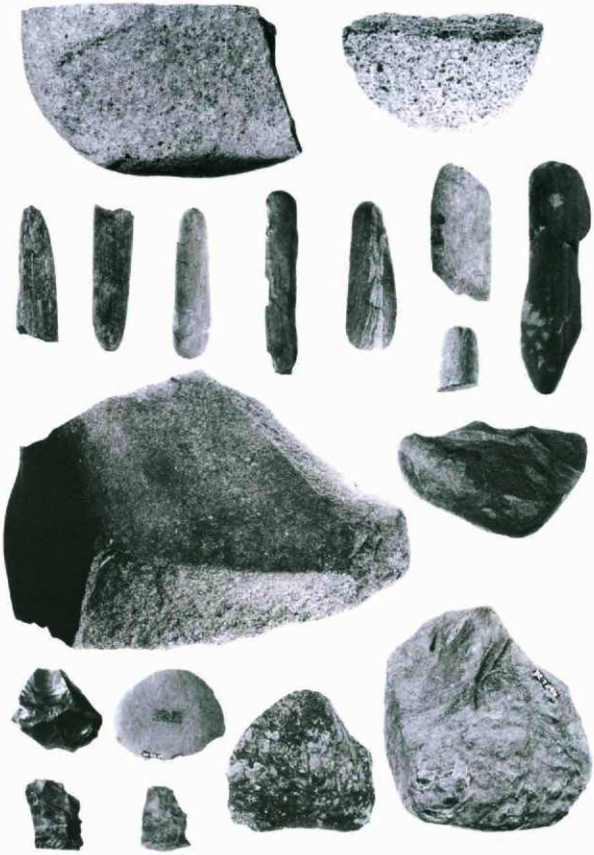
遺構外の出土石器（2）（1／3）



遺構外の出土石器（3）（1／3）



遺構外の出土石器（4）（1／3）



遺構外の出土石器（5）（1／3）

集石移築作業と断面刻ぎ取り作業

恋ヶ窪南遺跡発掘調査概報Ⅰ
都営国分寺第8都営住宅建設に伴なう調査

昭和62年3月31日
編　著　国分寺市遺跡調査団

©（団長　滝口　宏）
発　行　国分寺市遺跡調査会
印　刷　信陽堂印刷株式会社

令和4年(2022) 3月2日　デジタル版作成